

国立国語研究所学術情報リポジトリ

場面と場面意識

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001278

場面と場面意識

Socio-Linguistic Survey
on
Communication Situations

国立国語研究所 編

刊行のことば

国立国語研究所は創立以来、その活動の重要な一環として、国民の言語生活の実態を知るための社会調査を全国各地で実施してきました。これら一連の調査研究の中で「場面」の重要性は当初から意識され、さまざまな形で調査が試みられてきましたが、場面間の体系的な関係にまで踏み込んだ研究は行われていませんでした。この調査は、過去いくつかの調査で用いられた諸種の場面を取り上げ、それら言語行動場面間の類似性を明らかにしようとしたものです。

幸いに昭和 57 年度から 3 年間にわたって、「日本人の言語行動の類型」（代表者、渡辺友左）として、文部省科学研究費補助金「特定研究(1)」の交付を受けることができました。この報告は、大阪府豊中市、京都府宮津市、兵庫県豊岡市で、総計 1,800 人の市民を対象とした、渡辺班の中の江川グループにおける研究課題「言語行動場面の標準化」としての調査結果に関するものです。

この種の調査は言うまでもなく、現地の方々の熱意あるご協力がなければ成功するものではありません。とりわけ、各地の市役所の方々をはじめ、教育委員会の関係者の方々にはたいへんご協力をいただきました。また、被調査者の方々には、こちらの唐突なお願いに対して、お忙しいところを快く調査に応じていただきました。その他所外からこの調査に参加された多くの方々にも非常なお骨折りをお願いしました。これらのご厚意に支えられたこの調査の完結にあたり、関係各位に謹んでお礼を申し上げるとともに、報告書の出版が遅れたことを深くおわび申し上げます。

なお、この報告書の執筆者は目次に掲げましたとおり、江川清・米田正人・磯部よし子・尾崎喜光の 4 人の所員に加え、研究所外からの参加者として、大阪大学助教授真田信治氏、富山大学助教授鈴木敏昭氏、昭和女子大学短期大学部講師都染直也氏にも執筆をお願いしました。

また、目次の英文翻訳には国立国語研究所日本語教育研究センターの中田智子氏および同非常勤研究員の W. A. グロータース氏の協力を得ました。

平成 2 年 3 月

国立国語研究所長

野 元 菊 雄

目 次

刊行のことば

1. 調査の概要	1
1.1. 目的	江川 清 1
1.2. 調査の方法	米田正人 3
1.2.1 調査の手順	3
1.2.2 研究組織	4
1.2.3 アンケート調査と面接調査	6
1.2.4 調査対象と調査地域	7
1.3. 調査の実施状況	米田正人 14
1.3.1 調査票の回収	14
1.3.2 調査不能	24
1.4. 被調査者の属性	米田正人 25
1.4.1 被調査者の属性一覧	28
1.4.2 その他の属性	29
2. 場面一宮津・豊岡一	真田信治 37
2.1. 「どこから来たのか」	37
2.1.1 場面による類義語の選択	38
2.1.2 待遇表現形式の選択（「来たのか」）	39
2.2. 「どこへ行くのか」「京都へ行く」	43
2.2.1 場面による成分の省略	44
2.2.2 「エ」「ニ」の出現の地域差	46
2.2.3 待遇表現形式の選択 その1（「行くのか」）	50
2.2.4 待遇表現形式の選択 その2（「行く」）	52
2.2.5 場面設定における「対者」の具体的想定相手	55

2.3. 「これはあなたの傘か」「私の傘だ」	58
2.3.1 呼び掛け, 応答における「すみません」の添加	59
2.3.2 質問表現での否定的要素を含む形式の有無	60
2.3.3 待遇表現形式の選択 (「傘か」「傘だ」)	61
2.3.4 対称代名詞について	62
2.3.5 自称代名詞について	65
3. 場面接触態度	江川 清 69
3.1. 調査の方法	70
3.2. 場面ごとの結果	72
3.2.1 家庭生活場面	72
3.2.2 買物・食事場面	77
3.2.3 近隣生活場面	78
3.2.4 道聞き場面	79
3.2.5 一般場面	80
3.2.6 職場生活場面	82
3.2.7 学校生活場面	85
3.2.8 無回答率について	87
3.2.9 全場面を総合して	90
3.3. 注意を払うことばの側面	91
4. 1日の言語生活	米田正人 97
4.1. 家庭内でどんな種類の話をするか	98
4.2. 近所の人とどんな種類の話をするか	100
4.3. 一般社会でどんな話をするか	102
4.4. 職場や学校でどんな話をするか	104
4.5. いつあいさつをするか	107
4.6. 電話でどのくらい話すか	108
4.7. 何をどのくらい聞き, 読み, 書いたか	110
4.8. 場面接触頻度調査法の比較	112

5. 方言と標準語をめぐる	鈴木敏昭	115
5.1. 方言と標準語の使い分け		115
5.1.1 話しことば		115
5.1.2 書きことば		119
5.1.3 場面による標準語と方言の使い分け		121
5.2. 標準語や方言についての意見の分析		142
5.3. 自分の方言, 地域の方言		149
5.3.1 自分の方言の位置づけ		149
5.3.2 自分の方言と標準語の類似性		153
5.3.3 市内のことば		157
5.4. 最後に		161
6. ことばと社会生活意識	米田正人	165
6.1. マスコミ接触		165
6.1.1 新聞との接触		165
6.1.2 テレビとの接触		166
6.1.3 本との接触		167
6.2. 行動範囲		168
6.2.1 観光旅行		169
6.2.2 私用の旅行, 公用の旅行		169
6.2.3 旅行先		172
6.2.4 旅先で, 見知らぬ人と		173
6.3. 対人行動		175
6.4. ことばとつきあい		178
6.4.1 近所の人とのおしゃべり		178
6.4.2 集会や会議に出席		179
6.4.3 見知らぬ人に話しかけるか		180
6.4.4 自分のことばが気になるか		181
6.4.5 人前で話ができるほうか		182
6.4.6 近所とのつきあい		183

6.5. 興味や関心の方向	184
6.5.1 ラジオやテレビのニュース	184
6.5.2 主購読新聞	185
6.5.3 関心のある選挙	185
7. 語彙	189
7.1. 「イクラ」・「ナンボ」	磯部よし子 189
7.1.1 設定場面	189
7.1.2 物の数の尋ね方	191
7.1.3 物の値段の尋ね方	195
7.1.4 2項目を通じて	197
7.2. 可能表現について	江川 清 199
7.2.1 「見レル」	199
7.2.2 「起キレル」	201
7.2.3 能力可能と状況可能	203
7.3. 断定の助動詞「ダ」	江川 清 205
7.3.1 「(いい天気)ダ」	205
7.3.2 「(きれい)ダ」	207
7.4. その他の項目	江川 清 208
7.4.1 「(大根を)ニル」	208
7.4.2 「トゲ」	209
7.4.3 「チイサイ」	210
7.4.4 「借りる」	212
7.4.5 「ナオス」	213
8. アクセント	217
8.1. 宮津市のアクセント	都染直也 219
8.1.1 宮津市のアクセントの傾向	219
8.1.2 2拍名詞のアクセント	222
8.1.3 3拍語のアクセント	239

8.1.4 「鏡」のガの音声	245
8.1.5 宮津市におけるアクセントの地域差・年代差	246
8.2. 豊岡市のアクセント	尾崎喜光 252
8.2.1 調査の位置づけ・聞き取り・先行研究	252
8.2.2 2拍名詞のアクセント	254
8.2.3 3拍形容詞のアクセント	266
8.2.4 「鏡」のアクセント	269
8.2.5 「テレビ」のアクセント	271
8.2.6 まとめ	272
9. 調査票	277
10. まとめと今後の課題	江川 清 317
10.1. 場面について	317
10.2. 調査法について	319
10.3. 調査の反省	320

CONTENTS

Chapter 1. Outline of the Survey

- 1.1. Purpose1
- 1.2. Methods of the Survey3
- 1.3. Analysis of the Execution of the Survey14
- 1.4. Social Attributes of the Surveyees25

Chapter 2. Communication Situations

——Miyazu and Toyooka——

- 2.1. “Where did you come from?”37
- 2.2. “Where are you going?” “I’m going to Kyoto.” 43
- 2.3. “Is this your umbrella?” “Yes, it’s mine.”58

Chapter 3. Attitudes in Situation Contacts

- 3.1. Survey Method70
- 3.2. Results by the Situation Types72
- 3.3. Linguistic Aspects to which Informants Pay
Attention91

Chapter 4. Linguistic Activity of a Day

- 4.1. Conversation at Home98
- 4.2. Conversation with Neighbors100
- 4.3. Conversation in Society in General102

4.4. Conversation at Work and at School	104
4.5. When to Greet	107
4.6. Length of Telephone Conversation	108
4.7. Listening, Reading and Writing: Types and Amount of Activity	110
4.8. Survey Methods of Situation Contacts: a Comparison	112

Chapter 5. Dialects and Standard Japanese

5.1. Switching between Dialect and Standard Japanese	115
5.2. Analysis of Opinions concerning Standard Japanese and Dialect	142
5.3. Personal Dialect and Regional Dialect	149
5.4. Conclusion	161

Chapter 6. Language and Consciousness in Social Life

6.1. Contact with Mass Media	165
6.2. Range of Activities	168
6.3. Interpersonal Activities	175
6.4. Language and Sociality	178
6.5. Orientations of Interests: Regional or Nationwide	184

Chapter 7. Vocabulary

7.1. "Ikura" "Nambo" (how much/how many ...?)	189
---	-----

7.2. Expressions of Possibility	199
7.3. “Da” : Auxiliary Verb Expressing Conclusiveness	205
7.4. Other Items	208
Chapter 8. Accents	
8.1. Accents of Miyazu City	219
8.2. Accents of Toyooka City	252
Chapter 9. Questionnaire	
Chapter 10. Conclusion and Future Tasks	
10.1. Communication Situations	317
10.2. Survey Methods	319
10.3. Survey’s revaluation	320

1. 調査の概要

1.1. 目的

言語行動は、対人的な伝達（コミュニケーション）行動である。それは、具体的な場面において、人々がその場面を意識しつつ一定の言語記号を選択・使用することで実現される情報や意志の伝達行動、として捉えることができる。それゆえに、これを対象とする言語行動研究あるいは社会言語学研究においては、「場面」の扱いが中心課題であるといっても過言ではない。

場面をめぐる論議（場面論）は、時枝誠記の「言語過程説」に触発された形で、戦後まもなく興った言語生活研究の動きと連動した中で、1940年代の終わりから60年代初めにかけて盛んに論じられた。そこで問題にされた「場面」は、会話を構成する主体（表現者、理解者）、話題、社会的・心理的環境、文脈などを含んだ広範囲の要素を総合したものであった。また、これらを客観的な観察者の立場でとらえるか、主体的なものとして扱うかといったことも問題とされていた。

一方、実態調査を中心とする多くの言語生活研究においても、場面の重要性は当初から意識され、種々の形態での調査が実施されてきた。

しかし、場面論で志向された一般的・体系的モデルを調査の場で実現することのむずかしさもあって、調査型の言語生活研究にはほとんど反映されることはなかったといえる。ところが、1980年代初以降、言語行動研究および日本語教育研究の関心の高まりに伴って、「場面」が改めて問題となってきた。（この状況については、南不二男 1984 を参照されたい。）

言語行動の実態あるいは様式を具体的に調査の場で明らかにしようとする場合、そこでは当然ながら具体的な個別の場面を扱わざるを得ない。そのためには、言語行動場面というものをまず洗い出す作業から始めなければならない。

2 1. 調査の概要

本研究では、言語行動場面を考えるよすがとして、諸種の場面を取り上げ、各行動類型間の類似性を明らかにしようと考えた。とはいってもその場面要素は多種多様であり、すべてを網羅することは不可能である。本研究は、その一端を扱ったものに過ぎなく、課題の多くは今後に残されてしまっている。

なお、この研究は、文部省の科学研究費「特定研究 言語の標準化」の中で行った一連の調査によっている。具体的にいえば、大阪府豊中市、京都府宮津市および兵庫県豊岡市の関西3都市での市民調査と、都道府県会館の職員を対象とした方言と標準語との切り替え意識に関するアンケート調査とが含まれている。本報告書は、そのうちの、前者の市民調査の結果について記したものである。

後者の都道府県会館調査については、研究協力者の御園生保子（1983年）が詳細な論文を既に発表しているので、ここでは割愛した。ちなみに、その調査の概要は以下のようである。

調査対象者は、東京都を除く46道府県の東京事務所の職員（各道府県出身者）各5名の計230名（回収数225、回収率97.8%）であり、調査はアンケート形式で、1983年2月に実施された。（他に、都道府県会館職員10名、および参議院地方区選出議員および議員秘書8名への面接調査も行われた。）

そこでの主な結果は以下のようである。

a. 方言と標準語の選択の仕方（切り替え）は、場面（相手・状況・話題）によって異なる。方言がよく使用されるのは、家庭内や身内など内輪の人に、また親しい人とのくだけた会話場面である。反対に、方言的なことばがあまり使われないのは、公的な関係で目上の人に対するとき、同郷でない人との会話などである。

b. 話題でいえば、方言がよく使われるのは「子どものころの思い出」「知人のうわさ話」「お祭りなど地域の話」など、その人個人や地域社会に結びついたものである。一方、標準語の割合が高いのは、政治や社会問題など、情報源がマスコミに拠っていると思われるものである。

これらは従来からも指摘されていたことであるが、次の結果は注目に値するものといえる。

c. 場面による方言と標準語との切り替え意識は、被調査者が自分のことばの中の方言的なものと標準語的なものとはっきりと認識して区別できるか否かに係わっている。いうまでもなく、自分の方言が標準語とかなり似ていると思っている人の場合は、実際の場合での言語行動の姿は別として、方言と標準語とを場面に即して切り替えているという意識が乏しいといえる。

1.2. 調査の方法

1.2.1 調査の手順

この調査は前節で述べたように、大阪府豊中市、京都府宮津市、兵庫県豊岡市の関西 3 地域の市民を対象に行われた。調査は各年度 1 地点ずつ、それぞれの地域に居住する 15 歳から 69 歳の住民を対象として、以下に示す手順に従って行われた。

1. それぞれの地域をよく代表するように、ランダム・サンプリングの手法を用いて、調査対象者を決定する。
2. 各調査対象者に対し、所長名での依頼状を添えた『言語生活調査票』を郵送し、調査票への記入をお願いする。なお、豊中調査では同封の返信用封筒による返送をお願いした。
3. 後日、調査員が各調査対象者を訪問し、言語生活調査票を回収するとともに、調査対象者の都合に合わせて面接調査を実施する。言語生活調査票を回収する際に調査対象者の都合が良ければもちろんその場で面接調査に応じてもらうことにするが、そのようなケースはそう多くはなかった。なお、豊中調査では言語生活調査だけを実施し、面接調査は実施しなかった。

次に以下では、調査進行の具体的な日程を示すことにする。A は調査対象者決定までの準備段階、B はその後の調査実施日程である。豊中調査は調査の企画当初、調査票を郵送によって回収する計画を立てていたが、調査票の戻りが予想していたよりも少なかったので（回収数 301 票）、予定を変更して現地へ出向いて回収作業を行うことにした。4 月 11 日、まず、米田が豊中市役所

4 1. 調査の概要

に赴いて被調査者台帳の不備を補い（宛名不完全などで調査票が戻って来た分について）、併せて被調査者宅を訪ねて調査票回収の感触を確かめた。4月20日、未回収分672通の調査票を再発送し（第2次発送）、1週間後の4月27日から江川、米田の両名が数名のアルバイトとともに現地で直接に調査票の回収を行った。

A. 調査対象者の決定

	豊中調査	宮津調査	豊岡調査
市役所への住民票 閲覧依頼状を発送	1983年2月17日	1983年10月28日	1984年6月18日
サンプリング	2月21日 ～23日	11月30日 ～12月2日	7月1日 ～5日

B. 調査の実施

調査対象者宛に調査への 協力依頼状および「言語 生活調査票」を発送	3月12日	1984年1月5日	7月18日
面接調査実施	—	1月11日 ～17日	7月24日 ～30日
言語生活調査票の回収	4月27日 ～5月3日	同上	同上

1.2.2 研究組織

この研究は、昭和57年度から59年度の3年間にわたり、以下に示す文部省科学研究費補助金「特定研究(1)」の交付を受けて実施したものである。

研究課題名：「日本人の言語行動の類型」

研究代表者：渡辺友左（国立国語研究所言語行動研究部長）

課題番号：57115017(57年度)、58107017(58年度)、59101010(59年度)

交付金総額：20,300千円

上記研究課題は3つ（昭和59年度は4つ）のテーマから成り、この研究は、その中の1つのテーマである「言語行動場面の標準化」として行われた。本研究テーマで使用した交付金の総額は7,845千円であった。

(1) 研究分担者・研究協力者

この研究に、企画当初から参加した者は以下にあげる4名である（所属は調査当時のもの）。

研究分担者：江川 清（国立国語研究所言語行動研究部第二研究室長）

研究協力者：米田正人（国立国語研究所言語行動研究部第二研究室員）

真田信治（大阪大学文学部日本学研究室助教授）

鈴木敏昭（富山大学人文学部言語学科助教授）

なお、申請段階では研究協力者に名を連ねなかったが、礒部よし子（国立国語研究所言語行動研究部第二研究室研究補助員）が終始この研究を助けた。

(2) サンプリング

調査対象者のサンプリングに当たったのは、豊中では江川 清、米田正人および5名のアルバイトである。また、宮津では米田1人が、豊岡では米田がアルバイト1名の助けを得てサンプリング作業を実施した。なお、サンプリングに際しては、各市役所の職員の方々にたいへんご迷惑をおかけした。ここで、改めてお詫びするとともに感謝の意を表したい。

(3) 面接調査の実施

宮津および豊岡で行った個別面接調査には、以下にあげる者が研究協力者として参加した。

宮津調査

江川 清、米田正人、高田 誠、杉戸清樹（以上国立国語研究所）、真田信治（大阪大学）、鈴木敏昭（富山大学）

金沢裕之、都染直也、新田哲夫、水野義道（以上大阪大学大学院生）、吉岡泰夫（兵庫教育大学大学院生）、荒木一富、古川葉二、南 洋光（以上富山大学学生）、古川勝規、堀口良一（以上大阪外国語大学学生） 計16名

豊岡調査

江川 清、米田正人（以上国立国語研究所）、真田信治（大阪大学）、鈴木敏昭（富山大学）、新田哲夫（金沢大学）、吉岡泰夫（熊本県立南関高等学校教諭）

6 1. 調査の概要

金沢裕之，渋谷勝己，都染直也，水野義道，生越直樹（以上大阪大学大学院生），宮治弘明（大阪大学学生），荒木一富，関沢結城（以上富山大学学生） 計 14 名

(4) 調査資料の整理・集計

調査資料全般の整理・集計には主として米田正人，磯部よし子が当たり，プログラミングに関しては情報資料研究部システム開発研究室の米田純子の協力を得た。臨時の手伝いとして野田羊子，小柳真弓，太田幸代が資料の整理などに従事した。

また，アクセント資料に関しては，宮津調査については研究協力者の都染直也が，豊岡調査については当時大阪大学文学部日本学研究室助手の尾崎喜光が録音の聴取およびその整理を行った。

(5) 本書の執筆者（＊印は編集幹事）

以上に示してきたように，この研究は多くの研究者が参加して共同で行ってきたものであるが，本報告書の執筆に関しては下記の 7 名が代表して行った（所属は執筆時現在のもの）。

江川 清＊	国立国語研究所情報資料研究部長
米田正人＊	国立国語研究所情報資料研究部第二研究室長
磯部よし子＊	国立国語研究所情報資料研究部第二研究室研究補助員
尾崎喜光	国立国語研究所言語行動研究部第一研究室員
真田信治	大阪大学文学部日本学研究室助教授
鈴木敏昭	富山大学人文学部言語学科助教授
都染直也	昭和女子大学短期大学部講師

1.2.3 アンケート調査と面接調査

豊中市における調査では，言語生活調査票を用いたアンケート方式の調査が行われた。この言語生活調査票には，場面に対する接触頻度や接触態度，方言意識，マスコミ接触などに関する質問項目および属性に関する若干の質問が盛り込まれている。回収には郵送法を試みたが，残念ながら回収率は低かった。

宮津市および豊岡市での調査は，郵送留置法による言語生活調査に加えて現

地へ出向いての面接調査を行った（国立国語研究所では、昭和 47 年度に行われた岡崎市における敬語調査や昭和 49 年度から行われた大都市における言語生活の実態調査でもこの併用方式を用いている）。基本的にはアンケート調査より面接調査のほうが詳細な情報を収集できるのであるが、調査項目によっては、アンケート方式のほうが回答を得やすい場合もあり得る。アンケート方式に向いた質問、または、その方式でも十分回答可能と思われる項目は郵送留置のアンケート方式とし、被調査者に事前に記入しておいてもらうことで面接調査の時間を少なくおさえることができる。また、被調査者にとって質問の意図が理解しにくかった項目や回答もれなどをその場でチェックできるという効果も得られる。このように調査時間短縮による回収率の向上や調査精度の向上といった点でのメリットが得られるのがこの併用方式である。面接調査では、場面によることばの使い分け、語彙、アクセントなどに関する質問および属性についての詳しい質問などが行われた。なお、言語生活調査票と面接調査票の内容の詳細については、「9. 調査票」を参照されたい。

1.2.4 調査対象と調査地域

調査は、それぞれの市内に居住する 15～69 歳の住民を母集団とし、単純ランダム・サンプリングによって抽出された調査対象者に実施された。主として予算との関係から、サンプル数は豊中市では 1,000 名、宮津市、豊岡市では 400 名とした。また、年齢に関しては豊中市では 1983 年 3 月 1 日、宮津市では 1983 年 12 月 1 日、豊岡市では 1984 年 7 月 1 日を基準としてサンプリングを行った。

次に、調査地域となった豊中、宮津、豊岡の各市について概略を述べておくことにしよう。

豊中市は大阪府の西部に位置し、南の境界は大阪市と接する、面積 36.6 km²、人口 40 万人ほどの住宅、工業都市である。市政施行は昭和 11 年で、28 年、新田村の一部を、30 年、庄内町を編入し現在に至っている。「大阪大学」、「服部緑地」などの文化・厚生施設があり、また、「大阪国際空港」の一部が市北西端にある。

8 1. 調査の概要

宮津市は京都府の北部に位置し、日本海に面した、面積 169.6 km²、人口 3 万人ほどの観光都市である。昭和 26 年、宮津町と上宮津村が合併し、さらに 29 年、栗田（くんだ）、吉津（よしづ）、府中（ふちゅう）、日置（ひおき）、世屋（せや）、養老（ようろう）、日ヶ谷（ひがたに）7 村と合併して市制をしき、31 年、由良（ゆら）村を編入して現在の姿となっている。メリヤスなどの繊維工業や日本三景の一つである「天の橋立」でも有名な所である。

豊岡市は兵庫県の北東部にあつて日本海に面し、面積 162.1 km²、人口 5 万人弱の商工業都市である。昭和 25 年、豊岡町と新田（にった）、中筋（なかすじ）、五荘（ごのしょう）3 村が合併して市制をしき、30 年、奈佐（なさ）、港（みなと）2 村、32 年、神美（かみよし）村、33 年、日高町の一部と合併して現在に至っている。付近に「玄武洞」、「城崎温泉」などがあり、「柳ごうり」、「カバン」の製造などにも特色がある。

なお、人口に関しては、豊中市では増加傾向を、宮津、豊岡の両市では僅かながら減少傾向を示しているようである。

余談であるが、豊岡市でサンプリングをし、また、調査をしていて、地名の読みの難しさに驚いた記憶がある。どうしてそう読むのか調べるだけの余裕はなかったが、特筆に値すると思われるので、以下にその一部を示すことにする。「一日市」、「木内」、「大篠岡」、「百合地」、「八社宮」、「大磯」、「戸牧」、「土淵」、「日撫」といった具合である。調査を始めるにあたって、地名を覚える意味も込めて調査員に読みを当てさせたが、一つとして正しく読めた者はいなかった。帰京後、おもしろがって同僚の研究者にも尋ねてみたが、結果は惨憺たるものであった。ちなみに正しい読みは以下のようなものである。「ひといち」、「きなし」、「おおしのか」、「ゆるじ」、「はさみ」、「おおぞ」、「とべら」、「ひじうち」、「ひなど」。

次に、関西地方におけるこれら 3 調査地域の位置関係とそれぞれの市の全体図を、図 1-1～図 1-4 に示しておくので参考にしていただきたい。調査地域は、原則として市内全域を対象としたが、宮津市だけは調査効率を考慮して（調査員の数と交通の便を考慮して）、日ヶ谷、世屋、養老、日置、由良の 5 地区を調査対象地域から除外した。除外した地区の面積は 75 km²（市総面積の 44 %）

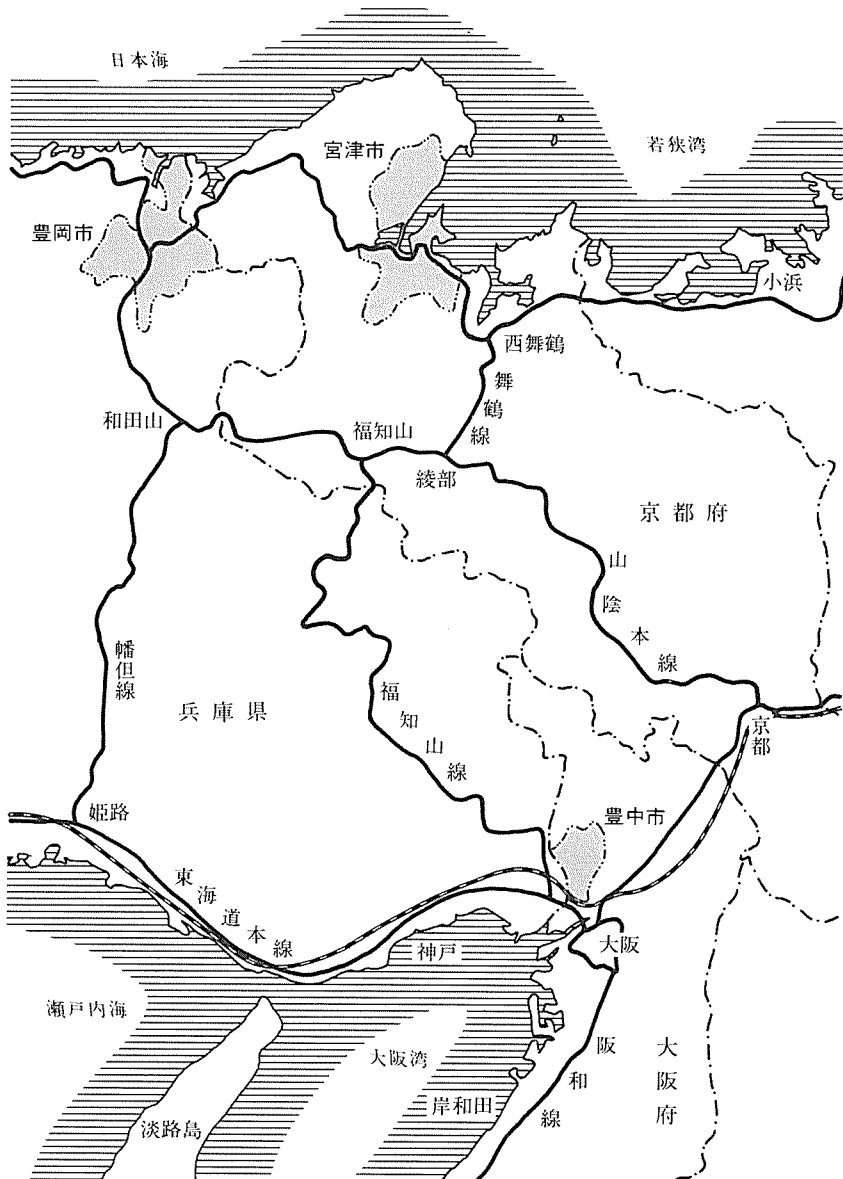


図1-1 調査地域（豊中市・宮津市・豊岡市）

10 1. 調査の概要

で、人口は5,473名（総人口の18％）であった（昭和54年4月1日の資料による）。参考までに、各調査地域における調査対象地区ごとのサンプル数を以下に示すことにしよう。（ ）内の人数は、豊中調査では言語生活調査票の回収数を、宮津調査、豊岡調査では面接調査票の回収数を示している。

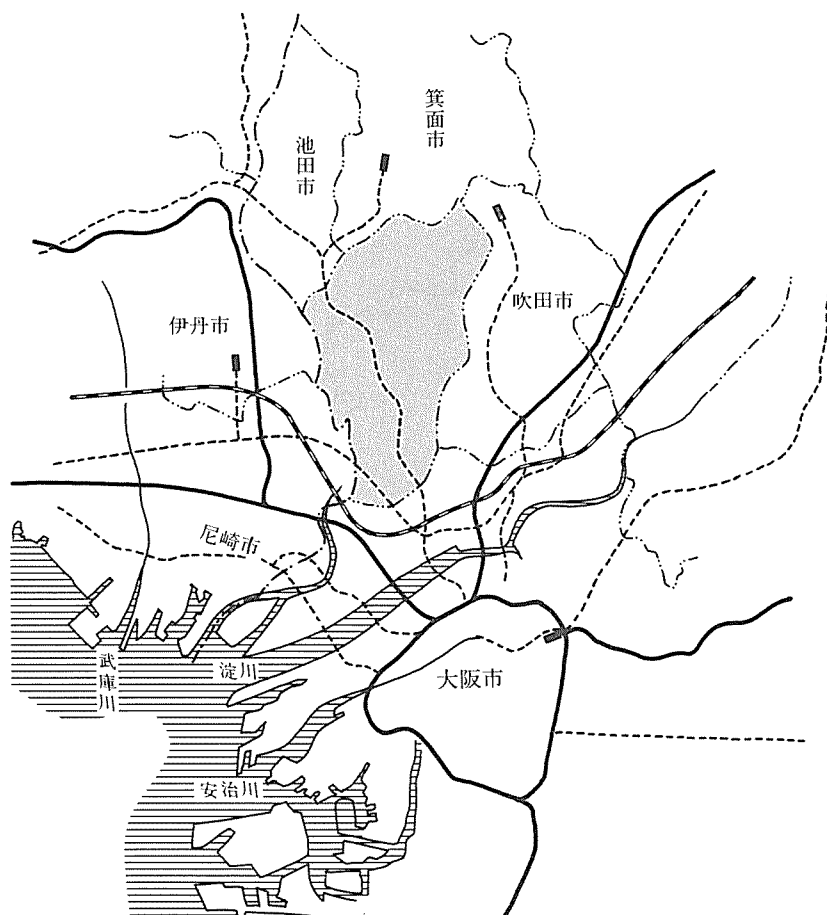


図1-2 豊中市

12 1. 調査の概要

豊中調査 本庁管内 676 (357) 人, 庄内管内 197 (80) 人,
千里管内 127 (68) 人

宮津調査 旧宮津町 239 (168) 人, 上宮津 19 (14) 人, 栗田 46 (36) 人,
吉津 51 (38) 人, 府中 45 (34) 人

豊岡調査 旧豊岡町 130 (102) 人, 八条 19 (16) 人, 田鶴野 16 (12) 人,
三江 35 (29) 人, 五荘 82 (72) 人, 新田 33 (30) 人,
中筋 20 (17) 人, 奈佐 14 (12) 人, 港 38 (30) 人,
神美 13 (12) 人

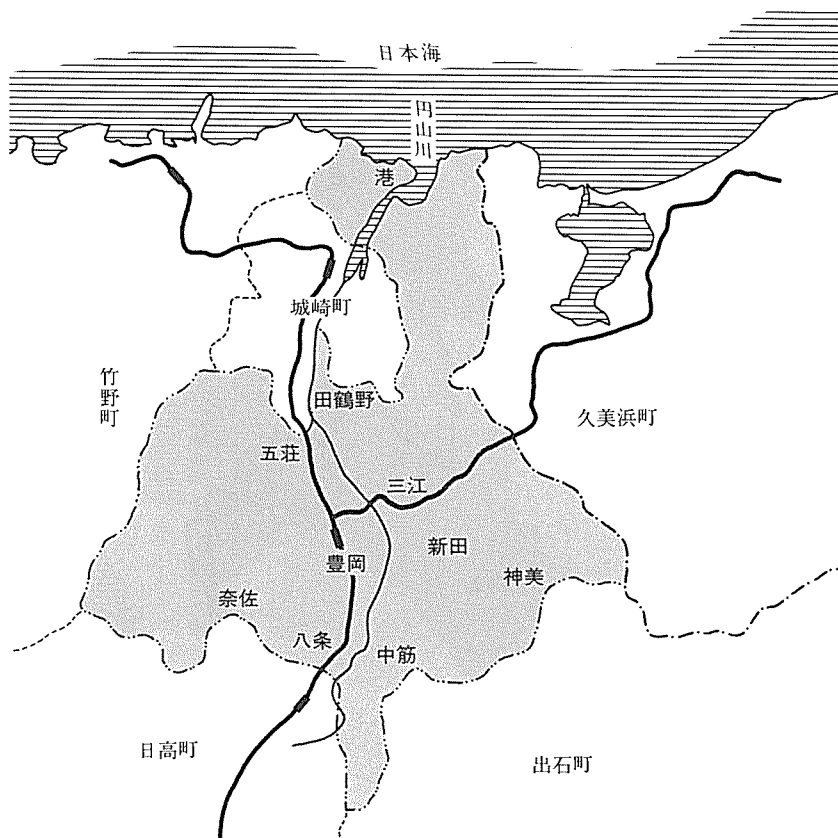


図1-4 豊岡市

表1-1 市の人口構成とサンプル構成（性・年齢別）

	豊 中 調 査			宮 津 調 査			豊 岡 調 査		
	国 勢 調 査		サンプル	国勢調査		サンプル	国勢調査		サンプル
全 体	403,174人		1000人	28,881人		400人	47,458人		400人
男	199,398	49.5	53.7%	13,355	46.2	51.5	22,772	48.0	45.3
女	203,776	50.5	46.3	15,526	53.8	48.5	24,686	52.0	54.8
14歳以下	98,007	—	—	6,111	—	—	11,691	—	—
15-19歳	29,327	10.2	8.5	1,883	9.5	9.8	3,198	9.9	7.8
20-29歳	61,660	21.4	15.7	2,976	14.9	11.5	5,570	17.3	16.5
30-39歳	78,645	27.3	29.7	3,905	19.6	23.0	7,414	23.0	21.5
40-49歳	61,823	21.4	24.4	3,949	19.8	20.5	6,518	20.2	19.8
50-59歳	36,073	12.5	14.5	4,157	20.9	19.3	5,599	17.4	19.5
60-69歳	20,776	7.2	9.0	3,038	15.3	16.0	3,907	12.1	15.0
70歳以上	15,945	—	—	2,862	—	—	3,561	—	—
不 明	918	—	—	—	—	—	—	—	—

表 1-1 はランダム・サンプリングによって抽出された調査対象者の性・年齢別構成を国勢調査の結果と対比させたものである。

国勢調査は、昭和 55 年調査の結果を示してある。また、男女のパーセントは市の総人口に対するもの、年齢についてのパーセントは 15～69 歳の総数に対するものである。豊中では、年齢不明が若干名いるが、これは国勢調査に対して回答を拒絶したものの数である。宮津、豊岡にはこのような例は報告されていない。サンプルの構成比との比較をすると、結果はあまり良いものとは言えないようである。豊中、宮津では男女比が逆転しているし、豊中の 20 歳代、40 歳代、宮津の 20 歳代、30 歳代あたりのずれが大きくなっている。豊中市の住民台帳の不備（住民の転居の届出の不徹底など）、また、宮津市で調査地域の一部を除外したことなどがずれの原因として考えられよう、また、豊中市ではサンプリング間隔が大きすぎて、サンプリング作業の緊張を持続できなかったといったようなことがあるいはあったかも知れない。サンプリングには万全を期したつもりであったが、結果はこのようなものとなった。

1.3. 調査の実施状況

1.3.1 調査票の回収

前節でも述べたように、豊中市では言語生活調査を実施し、宮津市と豊岡市では言語生活調査と面接調査の2種類の調査を同一対象者に対して実施した。以下で、それぞれの調査の実施状況を見ていくことにしよう。

(1) 回収率の比較

言語生活調査票および面接調査票の回収率を、表1-2に示す。表の中で「言語生活票回収」とあるのは、言語生活調査票だけを回収できたものの数である。「面接票回収」の中には面接調査票と言語生活調査票の両方を回収できたものと、面接調査票だけのものの両方が含まれている。()内に面接調査票だけを回収できたものの数を示しておいた。

言語生活調査票の回収(率)は、豊中調査では505票(50.5%)、宮津調査で

表1-2 調査票の回収率(性・年齢別)

	豊 中 調 査		宮 津 調 査			豊 岡 調 査		
	割当て ﾎﾝﾌﾞﾙ数	言語生活 票回収	割当て ﾎﾝﾌﾞﾙ数	言語生活 票回収	面接票 回 収	割当て ﾎﾝﾌﾞﾙ数	言語生活 票回収	面接票 回 収
全 体	1000人	505人	400人	36人	290(12)	400人	17人	333(5)人
男	537	259	206	21	145(7)	181	9	145(2)
女	463	246	194	15	145(5)	219	8	188(3)
15-19歳	85	64	39	2	33	31	1	27
20-29歳	157	79	46	4	34(3)	66	3	55
30-39歳	279	133	92	12	60(1)	86	3	69(2)
40-49歳	244	125	82	12	62(1)	79	5	64(2)
50-59歳	145	62	77	2	59(6)	78	4	65
60-69歳	90	42	64	4	42(1)	60	1	53(1)

(注) ()内の人数は面接調査票だけを回収することができたものである。

は 314 票 (78.5 %), 豊岡調査では 345 票 (86.3 %) であった。豊中調査の回収率が低いのは、他の 2 調査地域に比べて豊中市が大都市圏に位置することや調査時期の影響などが大きいとも思われるが、郵送回収法の影響も無視できない(宮津, 豊岡は郵送留置回収方式を採用した)。郵送回収法は調査への負担が少なくなるかわりに、回収率がある程度低くなることが予想される。従来どおりの臨地調査を採用するほうが無難ではあろうが、将来の調査環境が大きく変わる可能性もあり、今回は実験的にこの方法を採用してみた。図 1-5 は記入済み調査票の戻り状況を図示したものである。前節でも述べたように、豊中では最初の調査依頼(第 1 次発送)の後、現地での回収を行う前に再度調査票を発送している(第 2 次発送)。この図には、第 1 次発送分について、第 2 次発送当日までの回収数 301 通分の回収状況を示してある。最初の戻りは発送してから 4 日後の 3 月 16 日であり、1 週間後には 140 通 (47 %), 2 週間で 232 通 (77 %), 3 週間で 273 通 (91 %) の回収を完了した。なお、第 2 次発送分も含めて最終的に回収を完了したもののうち、郵送と現地での直接回収分との割合は、郵送回収が 348 通 (69 %), 直接回収が 157 通 (31 %) であった。これ以外に、無効回答(調査対象者以外が記入したもの)がともに 7 通づつあったが、それらは不能扱いとした。

豊中の回収率が低かったもう一つの理由として風土的なものもあげられよう

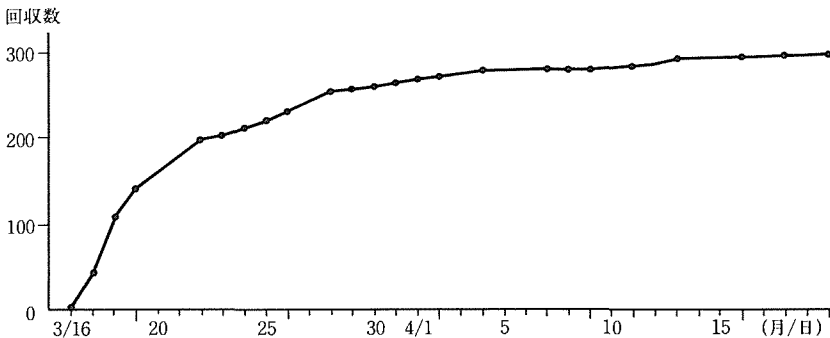


図1-5 累積回収数の推移 [第 1 次発送分] (豊中調査)

面接調査票は、宮津で290票（72.5％）、豊岡では333票（83.3％）の回収（率）であった。宮津と豊岡とでは回収率に10％以上の開きがでている。理由として調査時期も考えられようが、マスコミの力を無視することもできないであろう。豊岡市では、市の広報や新聞などで調査への協力を呼びかけてもらった。下に示すのは昭和59年7月15日付けの豊岡市の広報に掲載された記事である。

ことばの調査にご協力を

国立国語研究所

国立国語研究所では、豊岡市で、日常生活におけることばの使い方の調査をすることになりました。

この調査結果は、日本の国語政策立案や国語教育方法改善の基礎資料となるものです。

調査は、七月二十四日(火)から三十日(月)にくじ引式で選んだ四百人の方々に面接にて行われます。質問の内容は簡単に、特別の知識を必要としません。市民の皆さんのご協力をお願いします。

また新聞は、7月23日（月）神戸新聞に、24日（火）読売新聞但馬丹波版に、それぞれ調査への協力呼びかけの文章が載った。これら報道の効果は、実際に調査をしていてかなり強く感じられたものである。

さて、このようにして回収された回答（調査票）のうち、分析の対象をどの範囲にするかが問題となる。回収された調査票をすべて分析の対象とするのも一法であろうが、今回は面接調査票の回収できた分だけを用いることとした。宮津、豊岡とも、面接調査によって社会言語学的属性の情報を入手しているため、言語生活調査票だけの回収分については属性との関連分析が不可能だから

表1-3 調査実施日 [宮津調査] (性・年齢別)

	11日	12日	13日	14日	15日	16日	17日	回 収
全 体	49人	64人	59人	61人	36人	20人	1人	290人
男	23	32	28	26	25	11		145
女	26	32	31	35	11	9	1	145
15-19歳	13	8	3	4	3	2		33
20-29歳	2	3	15	9	4	1		34
30-39歳	9	11	8	17	9	6		60
40-49歳	8	17	12	13	10	2		62
50-59歳	4	14	11	12	10	7	1	59
60-69歳	13	11	10	6		2		42

表1-4 調査実施日 [豊岡調査] (性・年齢別)

	24日	25日	26日	27日	28日	29日	30日	回 収
全 体	62人	74人	63人	50人	32人	38人	14人	333人
男	18	32	27	29	15	20	4	145
女	44	42	36	21	17	18	10	188
15-19歳	9	6	5	4		3		27
20-29歳	7	9	11	9	8	9	2	55
30-39歳	11	15	12	9	7	8	7	69
40-49歳	9	21	13	8	8	8		64
50-59歳	12	12	14	10	8	6	3	65
60-69歳	14	11	11	10	1	4	2	53

18 1. 調査の概要

である。従って、最終的にこの報告書で扱った調査票の数は、豊中では 505 名分（回収率 50.5 %）、宮津では 290 名分（同 72.5 %）、そして豊岡では 333 名分（同 83.3 %）ということになる。

(2) 調査実施日・調査開始時刻ごとの回収状況

表 1-3、表 1-4 に宮津調査、豊岡調査における調査実施日ごとの性・年齢別回収状況を示してある。実際に調査に費やした日数は、宮津が 6 日間（7 日目は予約分 1 件の調査を行っただけ）、豊岡が 7 日間であるが、どちらも前半の 3 日間で半数以上の調査票を回収し終えている。性別で見ると、調査前半の回収は女性に多く、男性は比較の後半に調査されている。

表1-5 調査開始時刻（性別）

開始時刻	宮津調査			豊岡調査		
	男	女	全 体	男	女	全 体
8:00 ～	1	1	2	2		2
9:00	9	10	19	10	12	22
10:00	18	15	33	13	22	35
11:00	14	8	22	9	14	23
12:00	10	11	21	6	15	21
13:00	14	18	32	9	28	37
14:00	8	13	21	6	23	29
15:00	10	17	27	9	19	28
16:00	7	14	21	12	12	24
17:00	11	14	25	9	16	25
18:00	14	8	22	13	5	18
19:00	16	9	25	21	8	29
20:00	12	7	19	13	13	26
21:00	1		1	13	1	14

また、年齢別に見ると、10歳代および60歳代は調査前半から回収が進んでいるのに対して、他の年齢層は調査の中盤以降に回収が進むといった具合に、回収のパターンに違いが見られる。

表1-5は調査開始時刻の分布を示したものである。両調査とも、若干のずれはあるものの午後から夕方にかけては女性の回収率が高く、夕食後の時間に男性の回収率が良くなっている。先の調査日と同様に、被調査者の在宅率との関係（女性のほうが日中会える機会が多い）を反映したものであろう。

(3) 調査を行った場所

表1-6は調査の行われた場所を、被調査者の性・年齢別分布として示したものである。宮津市では8割ほどが、豊岡市では9割ほどが自宅で調査に応じている。勤務先での調査は、性別では男性に、年齢別では30歳代と40歳代に多くなっている。「その他」としたのものには、街中の喫茶店で行ったものや調査員の宿泊先に被調査者が出向いてくれて、そこで調査を行ったものなどが含まれている。変わったところでは屋外（で車を洗いながら）とか、調査員の車の

表1-6 調査場所——自宅・勤務先の別（性・年齢別）

	宮 津 調 査				豊 岡 調 査			
	自 宅	勤務先	その他	人数	自 宅	勤務先	その他	人数
全 体	81.0%	12.4%	6.6%	290	89.3%	8.3%	2.4%	327
男	78.6	18.6	2.8	145	83.8	12.0	4.2	142
女	83.4	6.2	10.3	145	93.5	5.4	1.1	185
15-19歳	93.9		6.1	33	100.0			26
20-29歳	67.6	5.9	26.5	34	85.5	10.9	3.6	55
30-39歳	75.0	20.0	5.0	60	84.8	12.1	3.0	66
40-49歳	69.4	27.4	3.2	62	87.5	12.5		64
50-59歳	94.9	3.4	1.7	59	92.2	4.7	3.1	64
60-69歳	88.1	7.1	4.8	42	92.3	3.8	3.8	52

(注) 無記入は表から除いてある。

20 1. 調査の概要

中などというものも孤例ながら報告されている。調査された場所が部屋の中か、玄関先かといった観点で集計したのが表1-7である。宮津では「部屋の中」が半数以上になっているが、豊岡では、「玄関先」が6割ほどになっている。これは地域差ということもあろうが、調査時期が大きく影響していると考えこ

表1-7 調査場所——部屋の中か玄関先か（性・年齢別）

	宮 津 調 査					豊 岡 調 査				
	部屋の中	玄関先	店 先	その他	人数	部屋の中	玄関先	店 先	その他	人数
全 体	55.9%	33.0%	6.9%	4.2%	288	30.3%	59.0%	6.1%	4.0%	327
男	65.0	25.9	6.3	2.8	143	45.8	43.0	5.6	5.6	142
女	46.9	40.0	7.6	5.5	145	19.5	71.4	6.5	2.7	185
15-19歳	57.6	39.4	3.0		33	26.9	69.2	3.8		26
20-29歳	38.2	38.2	2.9	20.6	34	32.7	52.7	9.1	5.5	55
30-39歳	49.2	37.3	10.2	3.4	59	24.2	63.6	7.6	4.5	66
40-49歳	66.1	25.8	6.5	1.6	62	31.3	57.8	7.8	3.1	64
50-59歳	61.0	30.5	5.1	3.4	59	39.1	54.7	3.1	3.1	64
60-69歳	56.1	31.7	12.2		41	28.8	61.5	3.8	5.8	52

(注) 無記入は表から除いてある。

表1-8 調査の場への同席者（性・年齢別）

	宮 津 調 査						豊 岡 調 査					
	本人のみ	配偶者	子ども	両 親	その他	人数	本人のみ	配偶者	子ども	両 親	その他	人数
全 体	75.2%	9.3%	10.0%	1.7%	4.2%	290	77.8%	4.9%	13.5%	2.2%	3.1%	325
男	80.0	8.3	6.9	1.4	6.9	145	84.4	7.1	8.5	1.4	2.1	141
女	70.3	10.3	13.1	2.1	6.9	145	72.8	3.3	17.9	2.7	3.8	184
15-19歳	87.9			3.0	9.1	33	76.9			19.2	3.8	26
20-29歳	58.8	5.9	17.6	2.9	20.6	34	80.0	3.6	16.4	1.8	1.8	55
30-39歳	63.3	10.0	23.3	3.3	5.0	60	60.6	3.0	34.8	1.5	3.0	66
40-49歳	85.5	14.5	9.7		3.2	62	89.1	3.1	3.1		4.7	64
50-59歳	78.0	15.3	1.7		5.1	59	84.1	7.9	6.3		1.6	63
60-69歳	76.2	11.9	4.8	2.4	4.8	42	76.5	9.8	13.7		3.9	51

(注) 複数回答の処理をしてあるため、宮津調査のパーセントの合計は100を超える。
また、無記入は表から除いてある。

ともできる。宮津調査が真冬であったのに対して、豊岡調査は真夏に行われたのであった。男性は部屋の中で、女性は玄関先という構図は、両調査とも変わらない。

表1-8は調査の場所にどのような人が同席していたかを示したものである。両調査とも4分の3ほどは被調査者1人だけであった。残りの4分の1には誰かしらが同席していたのであるが、子どもや配偶者のいるケースが比較的多かった。被調査者が女性の場合子どもが多く、年齢別では、20歳代、30歳代に子どもの同席者が多い。宮津では、20歳代に「その他」が多くなっているが、これは職場の同僚が中心である。

参考までに、被調査者の調査への態度を、表1-9に示しておこう。これは調査員が被調査者の態度をどう感じたのかを集計したものである。表中、「判定困難」としたものは、調査の途中で態度が大きく変わったものである。たとえば、最初は消極的であったが途中から興味を示しだし、後半では積極的に対応するようになったといった類のものである。調査に協力してくれた人たちについての印象なので、「消極的」や「拒否的」の率は当然少ない。

表1-9 調査への態度〔調査員判定〕（性・年齢別）

	宮 津 調 査					豊 岡 調 査				
	積極的	ふつう	消極的 拒否的	判 定 困 難	人数	積極的	ふつう	消極的 拒否的	判 定 困 難	人数
全 体	35.8%	55.2%	6.3%	2.8%	288	35.7%	51.7%	7.4%	5.2%	327
男	36.1	55.6	5.6	2.8	144	36.6	54.2	5.6	3.5	142
女	35.4	54.9	6.9	2.8	144	35.0	49.7	8.7	6.6	183
15-19歳	18.8	75.0	6.3		32	34.6	65.4			26
20-29歳	29.4	61.8	8.8		34	38.2	54.5	5.5	1.8	55
30-39歳	35.0	58.3	5.0	1.7	59	30.8	53.8	10.8	4.6	65
40-49歳	43.5	45.2	6.5	4.8	62	34.9	52.4	1.6	11.1	63
50-59歳	40.7	47.5	5.1	6.8	59	39.1	42.2	10.9	7.8	64
60-69歳	36.6	56.1	7.3		41	36.5	50.0	11.5	1.9	52

（注） 無記入は表から除いてある。

(4) 調査所要時間

面接調査に要した時間の分布を図1-6に、また、平均所要時間の年齢別分布を図1-7に示そう。所要時間は、宮津調査では12分から60分の間に分布し、豊岡調査では19分から64分の間に分布している。平均所要時間は、宮津が32.6分（男性33.2分、女性31.9分）であり、豊岡が33.3分（男性33.0分、女性33.5分）であった。年齢別分布を見ると、当然のことではあるが、年齢が高くなるにつれて調査時間が長くなっている。

表1-10は質問に対して、被調査者から回答が得られるまでの時間を、調査員の主観にもとづいて判定した結果を集計したものである。「長いほう」が高年齢層になるにつれて多くなり、「短いほう」が若年齢層になるにつれて多くなる傾向は、調査に共通して認められるものである。

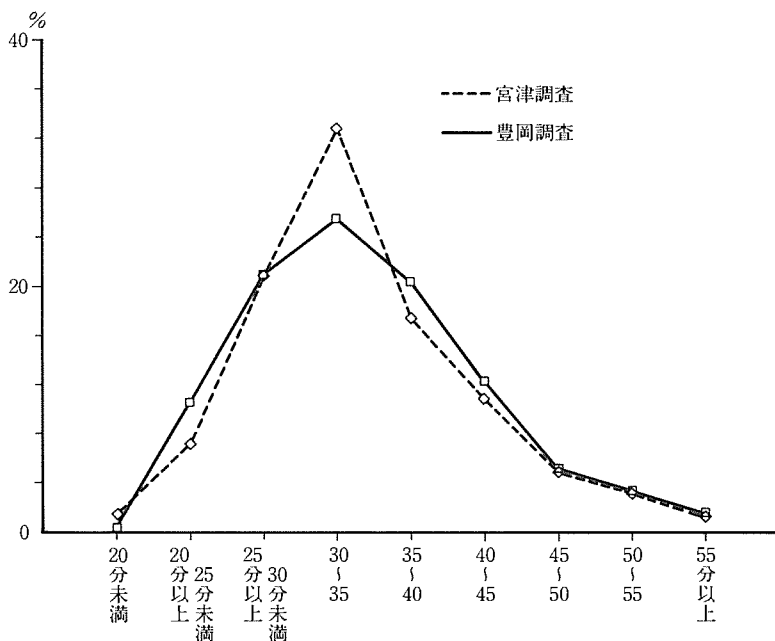


図1-6 所要時間の分布

次に、表 1-11 は、質問に対する問い返しの多寡を、前表同様、調査員判定にもとづいて集計したものである。結果は、表 1-10 とほぼ同じような傾向を示している。つまり、高齢者ほど反応時間が長くなり、それとともに聞き返しの量も増えるという傾向がうかがえる。

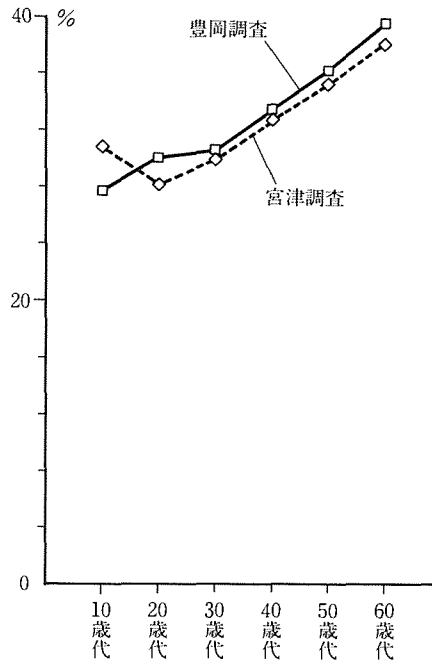


図1-7 平均所要時間の年齢別分布

表1-10 反応までの時間 (性・年齢別)

	宮 津 調 査				豊 岡 調 査			
	長いほう	普 通	短いほう	人数	長いほう	普 通	短いほう	人数
全 体	18.3%	57.9%	23.8%	290	18.5%	56.5%	25.0%	324
男	15.9	62.1	22.1	145	22.0	53.2	24.8	141
女	20.7	53.8	25.5	145	15.8	59.0	25.1	183
15-19歳	3.0	57.6	39.4	33	—	46.2	53.8	26
20-29歳	11.8	47.1	41.2	34	10.9	50.9	38.2	55
30-39歳	13.3	56.7	30.0	60	10.6	65.2	24.2	66
40-49歳	14.5	64.5	21.0	62	20.6	58.7	20.6	63
50-59歳	27.3	62.7	10.2	59	28.6	54.0	17.5	63
60-69歳	35.7	52.4	11.9	42	31.4	56.9	11.8	51

(注) 無記入は表から除いてある。

表1-11 質問に対する問い返し（性・年齢別）

	宮 津 調 査				豊 岡 調 査			
	多いほう	普 通	少いほう	人数	多いほう	普 通	少いほう	人数
全 体	7.3%	63.3%	29.4%	289	10.2%	65.8%	23.9%	322
男	10.4	64.6	25.0	144	12.9	63.6	23.6	140
女	4.1	62.1	33.8	145	8.2	67.6	24.2	182
15-19歳	—	48.5	51.5	33	—	46.2	53.8	26
20-29歳	2.9	58.8	38.2	34	7.4	61.1	31.5	54
30-39歳	1.7	60.0	38.3	60	7.7	61.5	30.8	65
40-49歳	6.5	64.5	29.0	62	14.3	69.8	15.8	63
50-59歳	12.1	74.1	13.8	58	14.3	68.3	17.5	63
60-69歳	19.0	66.7	14.3	42	11.8	78.4	9.8	51

（注） 無記入は表から除いてある。

1.3.2 調査不能

全調査対象者のうちで、調査に応じてもらえなかった人の数は、表 1-12 に示すとおりである。宮津、豊岡の両調査では、言語生活調査には応じてもらえたが、面接調査には応じてもらえなかった人を含んでいる。言語生活調査にだけは協力してもらえた人を含めて、ここでは「調査不能（者）」と呼ぶことにする。男性の不能率が女性のそれをどの調査でも共通して上回っている。豊中調査の不能率の高さは、「調査票の回収」の項ですで見えてきたとおりである。

1 回だけの訪問で調査が終了する場合がある一方で、何回訪問しても不在の家がある。やっと本人に会えたと思えば、今度は強硬な「拒否」というようなことはしばしば経験することである。このような調査終了まで（不能を含む）の記録として、訪問状況や調査票回収状況などを細かに記述できるような記録用紙を用意した（「9. 調査票」の中の「調査員記録簿」を参照）。この記録簿にもとづいて、ここでは回収不能の側面をとらえてみよう。

次に、調査不能の理由を性・年齢別に示したのが、表 1-13 から表 1-15 の 3 枚の表である。

表中、「転居・転出」には、住民票はそこにあるが本人は住んでいないといったものや、夜逃げなどもここに含めた。「不在」とは、出張や旅行などで長期間留守の者の他、調査期間中 1 度も対象者に会えなかった者を含んでいる。中には、調査員の来訪を察知して、わざと帰宅を遅らせていると思われる者もいた。申し訳ないことをしたものである。「拒否」の中には、はっきりと調査を拒絶した者のほか、多忙を理由にやんわりと断る者も多数含まれている。本当に多忙の場合もあり得るが、それを口実にしての拒否と取れるのは調査員として未熟さ故のひがみであろうか。今のところ、これに対抗する方策を持ち合わせていない。「その他」の多くは、どうしても家が見つからないとか、該当する住所に住んでいないとか、言語生活調査票に調査対象者以外が回答したようなものであり、「不明」の多くは、不能理由の報告がないものである。両者を合わせて「その他・不明」とした。豊岡調査ではこの項に該当するものは皆無であった。

豊中調査の「不在」の率が高いのは、先にも述べたように、急拠回収作業を実施したため、多くの回数訪問するだけの日程的な余裕が無かったことが最大の原因と思われる。

1.4. 被調査者の属性

先にも述べたように、ランダム・サンプリングによって調査対象者となった人々の中で、言語生活調査にだけ回答してもらえた人のデータは除外し、面接調査票の回収が完了した人の分だけを、以降の質問項目に関する種々の分析のために用いることとした。本節では、分析に用いられたこれらの被調査者（豊中 505 名、宮津 290 名、豊岡 333 名）の社会言語学的属性を概観することにした。

26 1. 調査の概要

表1-12 面接調査回収不能数（性・年齢別）

	豊 中 調 査			宮 津 調 査			豊 岡 調 査		
	割当数	不能数	不能率	割当数	不能数	不能率	割当数	不能数	不能率
全 体	1000	495	49.5	400	110(36)	27.5	400	67(17)	16.8
男	537	278	51.8	206	61(21)	29.6	181	36(9)	19.9
女	463	217	46.9	194	49(15)	25.3	219	31(8)	14.2
15-19歳	85	21	24.7	39	6(2)	15.4	31	5(1)	16.1
20-29歳	157	78	49.7	46	12(4)	26.1	66	11(3)	16.7
30-39歳	279	146	52.3	92	32(12)	34.8	86	17(3)	19.8
40-49歳	244	119	47.8	82	20(12)	24.4	79	15(5)	19.0
50-59歳	145	83	57.2	77	18(2)	23.4	78	13(4)	16.7
60-69歳	90	48	53.3	64	22(4)	34.4	60	7(1)	11.7

(注) 不能数の後の()内の数字は、言語生活調査票だけが回収されたものの数。
この数は不能数に含まれている。

表1-13 調査不能理由〔豊中調査〕（性・年齢別）

	転居・転出	不在	拒否	病気・障害	その他・不明	合 計
全 体	38	163	244	10	40	495
男	24	90	134	3	27	278
女	14	73	110	7	13	217
15-19歳	3	7	9	-	2	21
20-29歳	9	28	33	1	7	78
30-39歳	9	55	68	2	12	146
40-49歳	9	36	63	1	10	119
50-59歳	7	25	41	3	7	83
60-69歳	1	12	30	3	2	48

表1-14 調査不能理由〔宮津調査〕（性・年齢別）

	転居・転出	不在	拒否	病気・障害	その他・不明	合計
全 体	6	14	33	14	7	74
男	5	7	18	6	4	40
女	1	7	15	8	3	34
15-19歳	2	1	1	-	-	4
20-29歳	1	4	2	-	1	8
30-39歳	2	5	8	2	3	20
40-49歳	-	-	5	2	1	8
50-59歳	1	3	8	2	2	16
60-69歳	-	1	9	8	-	18

表1-15 調査不能理由〔豊岡調査〕（性・年齢別）

	転居・転出	不在	拒否	病気・障害	合計
全 体	4	10	27	9	50
男	2	6	14	5	27
女	2	4	13	4	23
15-19歳	1	1	1	-	3
20-29歳	1	4	3	-	8
30-39歳	1	5	7	1	14
40-49歳	-	-	8	2	10
50-59歳	-	-	6	3	9
60-69歳	1	-	2	3	6

1.4.1 被調査者の属性一覧

各調査で共通して尋ねられたフェイスシート項目としては、性、年齢、学歴があげられる。これら3項目の基本属性を一覧できる形にしたのが、表1-16である。性別の分布を見ると、豊岡の女性の比率の高さが目につく。豊中、宮津とも、サンプリングの段階では男性が多かったのであるが、豊岡だけは割当てサンプルに占める女性の比率がもともと高かったところへ、女性の回収率の高さが輪をかけた格好になってこの割合の差はさらに大きくなっている。年齢構成では、豊中の高齢者の比率が他の2地点のそれと比べてかなり低くなっているのが目立つ。ちなみに被調査者の平均年齢は、豊中38.0歳（男性37.2歳、女性39.0歳）、宮津41.5歳（男性41.9歳、女性41.1歳）、豊岡42.0歳（男性42.6歳、女性41.7歳）となっており、豊中は他より3歳以上若くなってい

表1-16 被調査者の属性一覧（性・年齢・学歴別）

		豊中調査		宮津調査		豊岡調査	
全 体		505人	100.0%	290人	100.0%	333人	100.0%
性	男	259	51.3	145	50.0	145	43.5
	女	246	48.7	145	50.0	188	56.5
年 齢	15-19 歳	64	12.7	33	11.4	27	8.1
	20-29 歳	79	15.6	34	11.7	55	16.5
	30-39 歳	133	26.3	60	20.1	69	20.7
	40-49 歳	125	24.8	62	21.4	64	19.2
	50-59 歳	62	12.3	59	20.3	65	19.5
	60-69 歳	18	3.6	42	14.5	53	15.9
学 歴	低学歴	79	15.6	111	38.3	120	36.0
	中学歴	241	47.7	148	51.0	159	47.7
	高学歴	167	33.1	31	10.7	54	16.2
	不 明	18	3.6	—	—	—	—

る。学歴については、宮津、豊岡が比較的似た傾向を示しているのに対して、豊中の高学歴が目立つ。大都市圏という地域的なもののほかに、アンケートという調査法の違いも影響しているであろう。宮津、豊岡では面接調査で行った質問項目である。ここで「低学歴」とは義務教育終了程度（新制中学，高等小学校など），「中学歴」とは新制高校卒業程度（旧制中学校を含む），「高学歴」とは短大，高専，旧制高校卒業以上の程度を意味する。なお，中退，在学中は卒業と同等の扱いをした。豊中には，アンケートの性格上どうしても避けられない「無記入」が若干名いた。表では「不明」としておいた。

以上に示した基本属性について，以下でそれぞれの関連具合を見ていくことにしよう。まず，表 1-17 は，性と年齢のクロス集計を示したものである。三者三様の様相を呈していて，これといった傾向は見あたらないように思える。

表 1-18 から表 1-20 までの 3 枚の表は，それぞれの地域の被調査者の学歴を性および年齢別の構成として表したものである。性別で見ると，豊岡では中学歴の男性が多い点など，他とは少し分布を異にしているのが分かる。

1.4.2 その他の属性

上記基本属性以外にも何項目かの属性が調査されている。以下でそれらを概観することにしよう。

(1) 被調査者の出身地

表 1-21 から表 1-23 は，それぞれの地域の被調査者の出身地を性，年齢別に示したものである。豊中は都道府県のレベルまで，そして宮津と豊岡は市郡のレベルまでが調査されている。そこで，両者の間にはまとめ方に若干の違いが生じている。以下で，それぞれの地域のまとめ方を示すことにする。

豊中調査：都道府県のレベルで，次のような 5 つのカテゴリーに分けた。

「大阪」：豊中市を含むすべての大阪府

「近畿」：大阪府を除く近畿地方 1 府 5 県

「中国・四国」：中国・四国地方の各県

「九州・沖縄」：九州地方の各県と沖縄県

「その他」：外国，地域不明など

表1-17 性と年齢の関連

	豊中調査		宮津調査		豊岡調査	
	男	女	男	女	男	女
15-19 歳	37 57.8	27 42.2	18 54.5	15 45.5	10 37.0	17 63.0
20-29 歳	42 53.2	37 46.8	10 29.4	24 70.6	24 43.6	31 56.4
30-39 歳	69 51.9	64 48.1	31 51.7	29 48.3	27 39.1	42 60.9
40-49 歳	62 49.6	63 50.4	36 58.1	26 41.9	35 54.7	29 45.3
50-59 歳	31 50.0	31 50.0	34 57.6	25 42.4	29 44.6	36 55.4
60-69 歳	18 42.9	24 57.1	16 38.1	26 61.9	20 37.7	33 62.3

表1-18 学歴〔豊中調査〕（性・年齢別）

	低学歴		中学歴		高学歴		不 明	
全 体	79	15.6	241	47.7	167	33.1	18	3.6
男	40	15.4	103	39.8	107	41.3	9	3.5
女	39	15.9	138	56.1	60	24.4	9	3.7
15-19 歳	16	25.0	37	57.8	10	15.6	1	1.6
20-29 歳	5	6.3	31	39.2	41	51.9	2	2.5
30-39 歳	10	7.5	59	44.4	60	45.1	4	3.0
40-49 歳	21	16.8	69	55.2	29	23.2	6	4.8
50-59 歳	13	21.0	28	45.2	18	29.0	3	4.8
60-69 歳	14	33.3	17	40.5	9	21.4	2	4.8

表1-19 学歴 [宮津調査] (性・年齢別)

	低学歴		中学歴		高学歴	
全 体	111	38.3	148	51.0	31	10.7
男	53	36.6	72	49.7	20	13.8
女	58	40.0	76	52.4	11	7.6
15-19 歳	6	18.2	27	81.8	—	—
20-29 歳	2	5.9	23	67.6	9	26.5
30-39 歳	15	25.0	36	60.0	9	15.0
40-49 歳	26	41.9	28	45.2	8	12.9
50-59 歳	37	62.7	19	32.2	3	5.1
60-69 歳	25	59.5	15	35.7	2	4.8

ZHC0219-20

表1-20 学歴 [豊岡調査] (性・年齢別)

	低学歴		中学歴		高学歴	
全 体	120	36.0	159	47.7	54	16.2
男	45	31.0	76	52.4	24	16.6
女	75	39.9	83	44.1	30	16.0
15-19 歳	6	22.2	19	70.4	2	7.4
20-29 歳	2	3.6	32	58.2	21	38.2
30-39 歳	14	20.3	38	55.1	17	24.6
40-49 歳	20	31.3	37	57.8	7	10.9
50-59 歳	38	58.5	21	32.3	6	9.2
60-69 歳	40	75.5	12	22.6	1	1.9

表1-21 出身地 [豊中調査] (性・年齢別)

	大阪府		近 畿		中国・四国		九州・沖縄		その他	
全 体	244	48.3	70	13.9	64	12.7	62	12.3	64	12.7
男	135	52.1	31	12.0	33	12.7	31	12.0	29	11.2
女	109	44.3	39	15.9	31	12.6	31	12.6	36	14.6
15-19 歳	59	92.2	2	3.1	1	1.6	—	—	2	3.1
20-29 歳	43	54.4	6	7.6	7	8.9	10	12.7	13	16.5
30-39 歳	50	37.6	25	18.8	15	11.3	22	16.5	21	15.8
40-49 歳	46	36.8	24	19.2	27	21.6	15	12.0	13	10.4
50-59 歳	31	50.0	7	11.3	7	11.3	11	17.7	6	9.7
60-69 歳	15	35.7	6	14.3	7	16.7	4	9.5	10	23.8

表1-22 出身地 [宮津調査] (性・年齢別)

	宮 津		丹 後		近 畿		その他	
全 体	171	59.0	69	23.8	23	7.9	27	9.3
男	102	70.3	26	17.9	8	5.5	9	6.2
女	69	47.6	43	29.7	15	10.3	18	12.4
15-19 歳	32	97.0	—	—	1	3.0	—	—
20-29 歳	17	50.0	3	8.8	3	8.8	11	32.4
30-39 歳	35	58.3	12	20.0	5	8.3	8	13.3
40-49 歳	30	48.4	25	40.3	5	8.1	2	3.2
50-59 歳	34	57.6	19	32.2	4	6.8	2	3.4
60-69 歳	23	54.8	10	23.8	5	11.9	4	9.5

表1-23 出身地〔豊岡調査〕（性・年齢別）

	豊 岡		但 馬		近 畿		その他	
全 体	214	64.3	66	19.8	35	10.5	18	5.4
男	112	77.2	15	10.3	11	7.6	7	4.8
女	102	54.3	51	27.1	24	12.8	11	5.9
15-19 歳	26	96.3	—	—	1	3.7	—	—
20-29 歳	37	67.3	9	16.4	7	12.7	2	3.6
30-39 歳	39	56.5	17	24.6	10	14.5	3	4.3
40-49 歳	41	64.1	13	20.3	8	12.5	2	3.1
50-59 歳	39	60.0	15	23.1	7	10.8	4	6.2
60-69 歳	32	60.4	12	22.6	2	3.8	7	13.2

宮津調査：市郡を考慮し、以下の4つのカテゴリーに分けた。

「宮津」：宮津市全域

「丹後」：舞鶴市、与謝郡（伊根町、加悦町、野田川町、岩滝町、その他）、
中郡（大宮町、峰山町）、熊野郡（久美浜町）、加佐郡（大江町）、
竹野郡（網野町、丹後町、弥栄町）など宮津市周辺の地域

「近畿」：宮津市、丹後以外の近畿地方

「その他」：上記以外のすべての地域、地域不明など

豊岡調査：宮津同様、市郡を考慮して以下の4つのカテゴリーに分類した。

「豊岡」：豊岡市全域

「但馬」：出石郡、城崎郡、朝来郡、養父郡、美方郡など豊岡市の周辺地域

「近畿」：豊岡市、但馬以外の近畿地方

「その他」：上記以外のすべての地域、地域不明など

宮津調査、豊岡調査では丹後、但馬といった周辺の土地まで含めると、8割以上がその地域の出身者である。これに対して、豊中調査の場合は、近畿地方にまで広げてもその地域の出身者は6割程度にすぎない。両者の土地柄の違い

34 1. 調査の概要

が明白になっている。また、どの地域においても男性のはえぬきが女性を凌いでいるのが目にとまる。

ところで、ここで「出身地」とっているのは、いわゆる言語形成期とされている5歳から15歳までの居住地のことである。この年齢の範囲の間に移動がある場合は、この間で一番長く過ごした地域をコーディングすることにした。出身地は出生地とよく混同されるが、この調査では両者の定義を明確に示したので、その点の心配はしなくてすむ。参考までに出生地と出身地のクロス集計を示しておくことにする（表1-24、表1-25）。両者の一致率は、宮津で91.4％、豊岡では92.2％となる。

表1-24 出生地と出身地〔宮津調査〕

出身地 出生地	宮 津	丹 後	近 畿	そ の 他	合 計
宮津市	154	-	-	-	154
丹 後	9	65	-	-	74
近 畿	8	3	20	1	32
その他	-	1	3	26	30
合 計	171	69	23	27	290

表1-25 出生地と出身地〔豊岡調査〕

出身地 出生地	豊 岡	但 馬	近 畿	そ の 他	合 計
豊 岡	194	-	1	1	154
但 馬	6	66	3	-	75
近 畿	9	-	31	1	41
その他	5	-	-	16	21
合 計	214	66	35	18	333

(2) 被調査者の父母、祖父母、配偶者の出身地

表1-26、表1-27では、本人のことばに影響を与えるであろう父母、祖父母、配偶者について、その出身地を性、年齢別に集計したものである。父にははえぬきが多く、母には周辺の地域の出身者が多く見られる。また同様に、祖母よりは祖父に、母方の祖父母よりは父方の祖父母にはえぬきが多くなっている点も共通している。さらに、祖父よりも祖母の出身地を知らない人の率がかなり多い点も興味深いことである。

(3) 被調査者の職業

産業分類に従って、被調査者の職業の分布を示したのが表1-28と表1-29である。「その他」は表に掲げたもの以外の職業を表している。宮津で「製造業」、

表1-26 被調査者の父母, 祖父母, 配偶者の出身地 [宮津調査]

	宮津市	丹 後	近 畿	その他	不 明	未 婚
父	45.5	28.3	8.6	14.1	3.4	
母	38.6	34.1	12.8	12.8	1.7	
父方の祖父	36.2	28.3	8.3	14.8	12.4	
母方の祖父	30.3	30.3	12.1	13.8	13.4	
父方の祖母	34.1	22.1	7.6	10.7	25.5	
母方の祖母	24.5	27.6	12.4	11.4	24.1	
配偶者	44.8	20.7	4.8	6.2	2.4	21.1

表1-27 被調査者の父母, 祖父母, 配偶者の出身地 [豊岡調査]

	豊岡市	但 馬	近 畿	その他	不 明	未 婚
父	49.2	30.3	11.1	9.3	—	
母	42.6	34.2	15.3	7.5	0.3	
父方の祖父	42.3	28.2	10.8	9.3	9.3	
母方の祖父	35.1	29.7	12.3	6.9	15.9	
父方の祖母	31.2	25.2	9.6	6.6	27.3	
母方の祖母	27.9	28.2	12.9	5.7	25.2	
配偶者	48.0	21.0	6.0	3.0	2.4	19.5

「公務」の率が高くなっているのが目立つ。また、豊岡の「不明」の数が多いのが目につくが、すべて女性なので、多くは主婦または無職だと考えることもできようが、そう言いきるためには、今少し他の項目とのクロス集計を進めてみる必要がありそうである。

表1-28 職業〔宮津調査〕（性別）

	農 林 漁 業	建 設 業	製 造 業	卸 売 小 売	サ ー ビ ス	公 務	そ の 他	無 職	主 婦	学 生	不 明	合 計
全体	20	23	44	32	38	30	16	17	35	31	4	290
%	6.9	7.9	15.2	11.0	13.1	10.3	5.5	5.9	12.6	10.7	1.4	
男	10	20	15	17	21	24	11	7		18	2	145
女	10	3	29	15	17	6	5	10	35	13	2	145

表1-29 職業〔豊岡調査〕（性別）

	農 林 漁 業	建 設 業	製 造 業	卸 売 小 売	サ ー ビ ス	公 務	そ の 他	無 職	主 婦	学 生	不 明	合 計
全体	26	16	52	40	47	8	33	23	37	25	26	333
%	7.8	4.8	15.6	12.0	14.1	2.4	9.9	6.9	11.1	7.5	7.8	
男	14	15	29	21	19	6	27	5		9		145
女	12	1	23	19	28	2	6	18	37	16	26	188

【参考文献】

国立国語研究所 1981 「大都市の言語生活（分析編）」 三省堂

国立国語研究所 1983 「敬語と敬語意識—岡崎市における20年前との比較」
三省堂

御園生保子 1983 「方言と標準語との場面による切りかえ」（『言語生活』
No. 377）

南不二男 1984 「『場面論』の問題点」（パン，F. C. ほか編『言語のダイナ
ミックス』 文化評論出版）

2. 場 面 —宮津・豊岡—

2.1. 「どこから来たのか」

宮津・面接調査票 401～404 および豊岡・面接調査票 403～404 の項目は、状況を一定にして、対者との関係をさまざまに変換し、その間に見られる表現形式のバリエーションを把握するために設定したものである。表現形式の運用を規制する要因として、対者の属性のうちの何がいちばんきいているのか、そして、そこには話者（インフォーマント）側の年齢差や性差なども関与するところがあるのかどうかを分析、検討することをめざした。

なお、宮津の場合と豊岡の場合とでは設定した状況および対者が若干異なるので、まず、それぞれの設定項目について説明し、対応する項目（内容）に関しては、それぞれの考察の過程で対照的な分析を試みることにしたい。

考察の都合上、まず宮津 402（1～6）の項目について見ていくことにする。

場面設定は、次のようである。

「あなたが天の橋立を散歩していたところ偶然観光客と親しくなったとします。相手の人があなたとは□□□□の場合、その人に『どこから来たのか』と尋ねるとしたらどう言いますか。」

そして、この状況で□□□□に代入される相手は、次の属性を持つ 6 者である。（ただし、これは調査における質問の順とは異なる。）

1. 10 歳くらい年下の同性
2. 10 歳くらい年下の異性
3. 同じ年頃の同性
4. 同じ年頃の異性
5. 10 歳くらい年上の同性
6. 10 歳くらい年上の異性

なお、これらの対者はいずれも“親疎”の関係における“疎”に当たる人物として設定されていることに留意したい。

2.1.1 場面による類義語の選択

最初に類義語の選択という点についてみておこう。同義・類義語としてセットを構成している要素のどれを使うかという、その選択行動は待遇表現ともかわっている。このような観点からの検討の対象にまずなるのは、上掲コンテキスト「どこから来たのか」における「どこ」の部分であろう。この部分に対応する語形としては、

ドコ ドチラ

の2語が代表的である。この2語の場面による出現の様相を示したものが、表2-1である。

表2-1 「どこから来たのか」
[宮津<疎>]

	年下	同年	年上
同 性	$\frac{80}{194}$	$\frac{82}{200}$	$\frac{114}{167}$
異 性	$\frac{90}{184}$	$\frac{104}{172}$	$\frac{119}{160}$

$\frac{\text{ドチラ}}{\text{ドコ}}$ (数字は出現実数)

表2-1では、ドコとドチラの出現実数を掲げている。合計数がインフォーマント数の290に対応しないのは、その他の語形（ドッチなど）をはぶいているからである。なお、ここでのドコのなかには、ドッ（カラ）のような形でのドッも含まれていることをことわっておきたい。

さて、ドチラの現れ方に焦点を当てて、対者の属性との相関を見よう。まず、対者が「年上」の場合にその出現度をもっとも高い。そして「年上」では対者の性差はほとんど問題にならないようである。ただし、「同年」の場合には性差がかなりかかわっている。すなわちドチラは「異性」の方に特に顕著に現れてくるのである。この「同年」の「異性」における出現度は上の「年上」の場合に近い。一方、「同年」の「同性」における出現度は「年下」の場合とあまりかわるところがない。対者が「年下」の場合にはドチラの出現度のもっとも低い。そして「年下」でも対者の性差に関しては、「異性」の方に若干高く

現れる傾向はあるが、有意な差ではない。

以上をまとめると、ドチラの運用には、対者の年齢差がもっともきいており、また、同年齢の場合に顕著に見られるように二次的には性差がきいていることがわかる。

2.1.2 待遇表現形式の選択（「来たのか」）

次に、待遇表現形式の運用について検討しよう。具体的には、上掲コンテキスト「どこから来たのか」における「来たのか」の部分に焦点を当てる。

さまざまな表現形式が採集されたが、ここでは各形式を個々に取り上げることとはせず、それぞれについて、敬語上の段階づけをし、段階点でもって対者の扱い方の様相を見ることにした。

表現形式（敬語）の段階づけは、次のような手順でおこなった。

敬語上の段階づけの仕方

段階は、表現要素を重視して、全体を0～3の4区分とした。

0は、尊敬語並びに丁寧語（デス・マス）が付加していないものである。ただし、文末の助詞はここでは検討の対象外とする。以下の段階についても同様。

具体形式は、次のようなものである。

キタノン キタン キタンヤ キタンカネ

1は、尊敬語はないが、丁寧語（デス・マス）の付加しているものである。

具体形式は、次のようなものである。

キタノデスカ キタンデスカ キマシタカ

2は、尊敬語のみがあるもので、丁寧語（デス・マス）のないものである。なお、ここで尊敬語とするのは、尊敬の助動詞（ナル、ハル、ラレルなど）の付加したもの、および敬語動詞（ミエル、イラッシャル、オイデニナルなど）である。

具体形式は、次のようなものである。

キナッタン キハッタン コラレタノ ミエタノ

3は、尊敬語とともに丁寧語（デス・マス）が付加しているものである。豊

富なバラエティーがある。

具体形式は、次のようなものである。

キナッタンデスカ キハッタンデスカ コラレマシタカ ミエマシタカ
イラッシャイマシタカ オイデニナリマシタカ

さて、表 2-2 は、それぞれの形式（段階）の対者ごとの出現比率を示したものである。なお、「NA」は無回答のものである。

注目されるのは、段階 3 と段階 0 の現れ方であろう。段階 3（尊敬語＋丁寧語）は、対者が「年下・同性」の場合に最も少なく、「年上・異性」の場合に最も多い。その出現比率は、まずは、

年下 < 同年 < 年上

の順で、また、それぞれの中では（「同年」の場合を除いて）、

同性 < 異性

である。そして、これは段階 0（敬語なし）の現れ方とほぼ反比例の関係をなす。すなわち、段階 0 は、対者が「年下・同性」の場合に最も多く、「年上・異性」の場合に最も少なく現れているのである。

ここで、この段階 3 と段階 0 にしぼって、それぞれの使用に関する話者（インフォーマント）側の分析をしてみたい。

表2-2 「来たのか」 段階ごとの出現比率
[宮津] %

		疎					
		年 下		同 年		年 上	
		同性	異性	同性	異性	同性	異性
段 階	0	38.3	33.1	18.6	16.6	3.8	3.1
	1	5.5	5.2	9.7	11.7	12.4	11.4
	2	9.0	9.7	7.6	8.3	3.8	3.8
	3	44.8	49.3	62.4	61.0	77.9	79.3
NA		2.4	2.8	1.7	2.4	2.1	2.4

図2-1は、話者の性別によるそれぞれの出現の様相を示したものである。段階3は、場面とともに上昇のカーブを描き、段階0は逆に下降のカーブを描いていることがはっきり見える。そして、女性と男性とでは、この上昇、下降の角度はほぼパラレルである。すなわち、どの場面においても段階3の出現比率は女性の方に一定の割合で高く現れ、一方、段階0は男性の方に一定の割合で高く現れていることがわかる。したがって、ここには、女性の方が全体的に高い段階の敬語で対者を待遇するということが明らかに認められるのである。なお、男性の場合、段階3と段階0の出現比率は「年下・同性」と「年下・異性」の間で逆転（カーブが交差）していることが注目されよう。

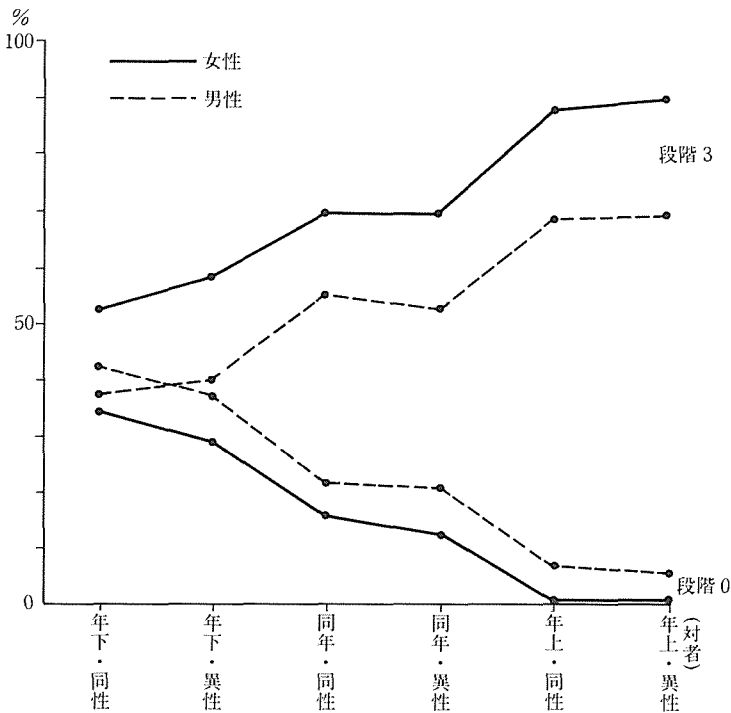


図2-1 段階3と段階0の使用率の男女差

また、図2-2は、段階3の出現についての話者の年層別の様相を示したものである。場面とともに上昇のカーブを描くことは一律であるが、その実態は年層によって明らかに相違している。はっきり指摘できることは、話者の年層が高くなる（したがって、対者の年層も高くなる）につれて、段階3の高い敬語の使用が多くなるという傾向である。この点は特に対者が「年下」である場合に顕著である。ただし、「年上」に対する場合には、10代の話者を除いていずれも高い敬語の使用度が極端に多いので、線が一点に収斂し、年層間の差はめだたなくなる。

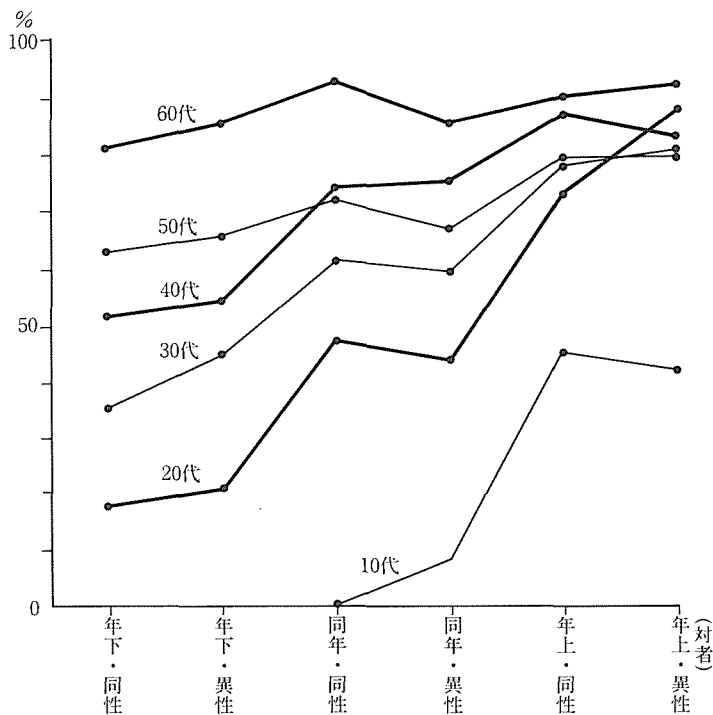


図2-2 段階3の使用率の年層差

2.2. 「どこへ行くのか」「京都へ行く」

次に、宮津 403（1～7）の項目（豊岡 404 の一部に対応する）について見ておこう。場面設定は、次のようである。

「駅の待合室で列車を待っていると、あなたとは[]の友人と偶然出会いました。そこで、その人に『どこへ行くのか』と尋ねるとしたらどのように言いますか。」

そして、この状況で[]に代入される相手は、次の属性をもつ 7 者である。

1. 年下の同性
2. 年下の異性
3. 同じ年頃の同性
4. 同じ年頃の異性
5. 年上の同性
6. 年上の異性
7. あまり親しくない年上の異性

なお、これらの対者は 7 を除いて、“親疎”の関係における“親”に当たる人物として設定されているわけである。ただし、7 については“疎”に当たる人物としての設定であることに留意したい。

また、宮津 404（1～7）の項目における場面設定は、次のようである。

「では逆に、あなたとは[]の人から『どこへ行くのか』と尋ねられて、『京都へ行く』と答えるとしたらどう言いますか。」

そして、この状況で[]に代入される相手は、次の属性をもつ 7 者である。これらの対者は、1 を除いて“親疎”の関係における“疎”に当たる人物として設定されている。

1. 同じ年頃の同性で親しい人
2. あまり親しくない年下の同性
3. あまり親しくない年下の異性

4. あまり親しくない同じ年頃の同性
5. あまり親しくない同じ年頃の異性
6. あまり親しくない年上の同性
7. あまり親しくない年上の異性

なお、この項目は豊岡 404 (1～7) の項目に対応する。ただし、対者の設定については次のように相違がある。

1. 年下の同性で親しい人
2. 年下の異性で親しい人
3. 同じ年頃の同性で親しい人
4. 同じ年頃の異性で親しい人
5. 年上の同性で親しい人
6. 年上の異性で親しい人
7. あまり親しくない年上の異性

2.2.1 場面による成分の省略

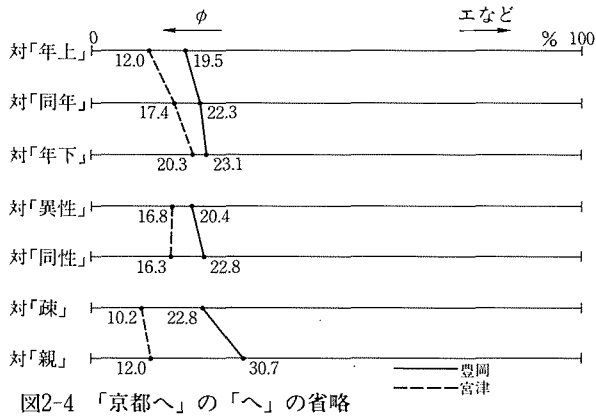
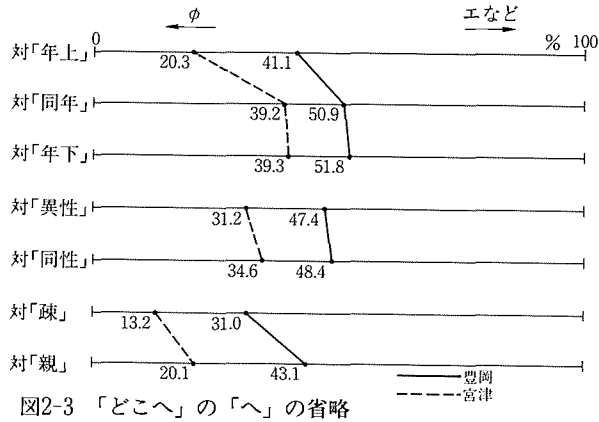
成分を省略した文を使うか、成分を省略しない（きちんとした形の）文を使うか、前者は、例えば、互いによく知っている者どうしの間の会話によく出てくると予想されるし、一方、後者は互いにあまりよく知っていない者や改まった場合に現れることが多いのではないかと予想される。

ここでは、今回のデータを成分の省略といった観点から検討してみたい。具体的な対象は上掲項目における「どこへ行くのか」および「京都へ行く」の傍線部での格助詞の省略である。

まず、「どこへ」における格助詞部分を取り上げよう。

図 2-3 はその実態である。ここでは省略の少ない順にそれぞれの項をならべている（年齢・性については「親」のなかでの数値。親疎については「年上・異性」の場合に限定しての数値である）。

対者の年齢に関していえば、「年上」、「同年」、「年下」の順で省略が多くなっていることがわかる。ただし、「同年」と「年下」との差は微妙である。次に、性差に関しては、「同性」に対する方が「異性」に対する場合よりも省略



がやや多い傾向が認められる。また、親疎に関しては、「親」の関係の場合が「疎」の関係よりも省略が多いことがはっきりと認められる。成分の省略と場面の緊張度といったものに関して立てた予想はほぼ当たっているといえよう。

なお、以上の点については、宮津、豊岡ともにほぼ同じ傾向を示していることに注目したい。ただし、省略の度合いには、宮津と豊岡との間で歴然とした差異が存在することが指摘される。今、図2-3におけるそれぞれの項での省略率を総合して宮津と豊岡の平均省略率を計数すると、

宮津 45.5 豊岡 30.1

となり、明らかに宮津での省略率が高いことがわかるのである。

次に、「京都へ」における格助詞部分を取り上げる。図 2-4 はその実態である。なお、このコンテキストの場面設定は宮津と豊岡とで異なる（上掲）ことに注意。したがって、年齢、性については、宮津の場合「疎」のなかでの数値、豊岡の場合「親」のなかでの数値である。また、親疎については、宮津の場合「同年・同性」に限定しての数値、豊岡の場合「年上・異性」に限定しての数値である。

図 2-3 と図 2-4 とを対照すると、図 2-4 における省略率が全体として低くなっていることがわかる。これは、「どこへ行くのか」というコンテキストにくらべて「京都へ行く」が具体的な場所、目的地を明示するといったコンテキストである点の相違であろう。ただし、「年上」、「同年」、「年下」の順で省略が多くなること、また、「親」の関係の場合が「疎」の関係の場合よりも省略が多いことなどは、図 2-3 と図 2-4 とでほぼ同様の結果が出ている。

なお、図 2-4 においても、省略の度合いには宮津と豊岡との間で明らかな差異が存在する。今、それぞれの項での省略率を総合して、宮津と豊岡の平均省略率を計算すると、

宮津	22.9	豊岡	15.6
----	------	----	------

となる。宮津での場面設定は「疎」である。にもかかわらず、その省略率が相対的に豊岡よりも高く出ていることに注目したいと思う。

2.2.2 「エ」「ニ」の出現の地域差

さて、表 2-3 と表 2-4 は、当該助詞部分のバリエントを掲げたものである。なお、格助詞ではないが、「マデ」という形式がどの場面においても現れている。この形式の出現率には対者による差はあまり認められない（ただし、若干「疎」の場面にかたよる傾向はある）が、コンテキストによる差が著しい。「どこへ」の場合（表 2-3）では 5.3 %（宮津 4.3 %・豊岡 6.3 %）の平均出現率であるのに対し、「京都へ」の場合（表 2-4）では 29.6 %（宮津 32.6 %・豊岡 26.6 %）の平均出現率である。しかし、これは「マデ」の表すニュアンスを考えればある程度納得のいくところであろう。また、「その他」としたのは

表2-3 「どこへ行くのか」 [宮津] %

	親						疎
	年 下		同 年		年 上		年上
	同性	異性	同性	異性	同性	異性	異性
φ	54.5	49.0	51.7	50.0	39.0	43.1	31.0
エ	32.4	31.7	36.9	33.4	45.2	36.6	44.5
イ	0.3	1.4	1.0	0.7	0.7	1.0	0.3
ニ	4.5	5.2	4.5	5.5	7.6	7.2	7.6
マデ	3.1	5.2	1.7	3.4	3.8	6.2	6.6
その他	5.1	7.5	4.1	6.9	3.8	5.9	10.0

[豊岡] %

	親						疎
	年 下		同 年		年 上		年上
	同性	異性	同性	異性	同性	異性	異性
φ	39.0	39.6	44.4	33.9	20.4	20.1	13.2
エ	15.9	17.4	17.7	18.3	25.5	23.7	25.8
イ	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0
(ドケ)ー	0.6	0.3	0.9	0.3	0.6	0.6	0.3
ニ	31.5	30.0	29.7	35.1	39.3	40.2	37.2
マデ	3.9	6.3	1.2	3.9	8.1	10.5	10.2
その他	9.0	6.3	5.7	8.4	6.0	4.8	13.2

「ドコイキデスカ」「キョートイキデス」のような形で、対応すべき助詞部分が存在しないものなどである。

ところで、「エ」と「ニ」はほとんど場面に左右されることなく現れているが、注目すべきことは、宮津と豊岡とで両形の出現比率が完全に逆転していることである。そこで、次に「エ」と「ニ」に焦点を当て、「京都へ行く」(対者、親・同年・同性)の場合について、その現れ方の地域差を見ることにはしたい(図2-5)。なお、「イ」の形が宮津にかたよって現れている。「エ」の変化形と考えられるが、その出現数は極端に少ないので、ここでは考察の圏外におく。

表2-4 「京都へ行く」

[宮津] %

	親	疎					
	同年	年 下		同 年		年 上	
	同性	同性	異性	同性	異性	同性	異性
φ	30.7	25.2	21.0	22.8	21.7	20.3	18.6
エ	32.8	25.9	25.9	27.2	25.5	28.6	30.7
イ	1.0	1.7	0.7	1.4	1.4	1.0	1.0
ニ	5.5	5.5	9.0	7.9	7.2	7.6	8.6
マデ	25.5	35.2	34.1	32.1	35.5	33.8	31.7
その他	4.5	6.6	9.3	8.6	8.7	8.6	9.4

[豊岡] %

	親						疎
	年 下		同 年		年 上		年上
	同性	異性	同性	異性	同性	異性	異性
φ	19.8	20.7	17.1	17.7	12.0	12.0	10.2
エ	16.5	16.8	17.7	15.6	20.4	20.7	19.2
イ	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
ニ	33.0	30.0	40.2	39.0	37.5	37.2	31.8
マデ	26.4	28.5	20.1	24.0	27.0	27.0	33.3
その他	3.9	3.9	4.8	3.6	3.0	3.0	5.4

なお、室町時代には、この両助詞の地域（京都・九州・関東）による違いに関して、

「京エ筑紫ニ坂東サ」

ということわざがあった。ロドリゲスの『日本大文典』（1604～08）にもこのことわざが載せられており、地方では、

「移動を示すエの代わりにニ、ノヨーニ、ノゴトク、サマエ、サナなどを使う。」

と説明している。

このことわざに照らして、京都に近い宮津の方に「エ」が多用されていることが興味深い。なお、最近の言語地理学的調査による結果も図2-5に示した。コンテキストが若干異なるが、宮津を含む地域では、主として「エ」が、そして豊岡を含む地域では、主として「ニ」が分布していることに注目したい。（これは老年層を対象としたものである。）そして、今回の調査はこの「エ」「ニ」の出現の地域差を計量的な立場から検証することになったわけである。

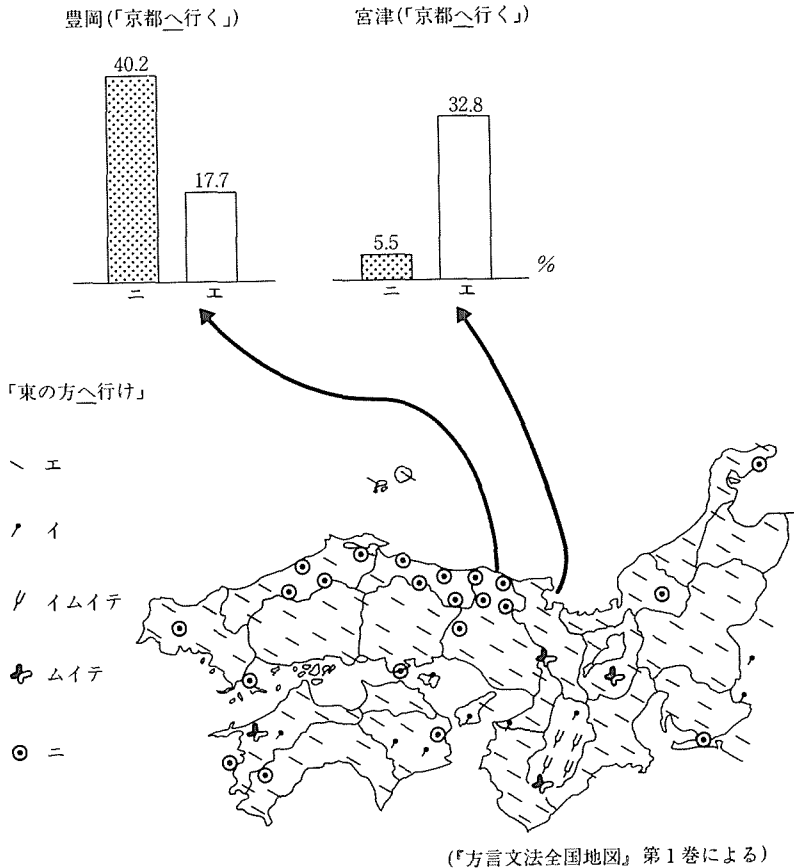


図2-5 格助詞の地域差

2.2.3 待遇表現形式の選択 その1 (「行くのか」)

ここでは、上掲コンテキストの「どこへ行くのか」における「行くのか」の部分に焦点を当てよう。さまざまな表現形式が採集されたが、ここでも各形式を個々に取り上げることはせず、先の2.1.2「来たのか」におけると同様、それぞれについて、敬語上の段階づけをし、段階点でもって対者の扱い方の様相を見ることにした。

敬語上の段階づけの仕方

先の「来たのか」の場合と同じく、表現要素を重視して、全体を0～3の4区分とした。

0は、尊敬語並びに丁寧語(デス・マス)が付加していないものである。ただし、文末の助詞はここでの検討の対象とはしない。この点は以下についても同様である。

具体形式は、次のようなものである。

イクノ イクン イクンヤ イクンダ

1は、尊敬語はないが、丁寧語(デス・マス)の付加しているものである。

具体形式は、次のようなものである。

イクンデスカ イキマスカ

2は、尊敬語のみがあるもので、丁寧語(デス・マス)のないものである。なお、ここで尊敬語とするものは、尊敬の助動詞(ナル、ンサル、ハル、レルなど)の付加したもの、敬語動詞(イラッシャル、オイデニナルなど)、そして助詞テの付加したものである。

具体形式は、次のようなものである。

イキナルン イキンサルン イカハルノ イラッシャルノ イッチヤ

なお、このうち、イキナルンは宮津的な語形であり、イキンサルンは豊岡で集中的に現れるものであることを指摘しておきたい。

3は、尊敬語とともに丁寧語(デス・マス)が付加しているものである。バラエティーが多い。

具体形式は、次のようなものである。

イキナルンデスカ イキンサルンデスカ イカハリマスカ イカレルンデ
スカ イカレマスカ オイデニナリマスカ イッテデスカ

表2-5は、それぞれの形式（段階）の対者ごとの出現比率を示したものである。なお、この項目は宮津調査と豊岡調査で場面設定が共通しているので、両地のデータを一括して掲げることにした。

一見して、宮津と豊岡とではほぼ同様の現れ方になっていることがわかる。そして、やはり注目されるのは段階3と段階0の現れ方であろう。

段階3（尊敬語＋丁寧語）は、対者の年齢に関しては、

年下	<	同年	<	年上	
9.7		17.4		57.3	（宮津）
8.7		15.8		61.9	（豊岡）

の順に多くなり、対者の性差に関しては、

同性	<	異性	
21.4		34.8	（宮津）
23.2		34.3	（豊岡）

表2-5 「行くのか」 段階ごとの出現比率

宮津
豊岡 %

		親						疎
		年 下		同 年		年 上		年 上
		同 性	異 性	同 性	異 性	同 性	異 性	異 性
段 階	0	79.3	64.8	83.4	49.3	15.5	11.4	4.5
		80.5	66.4	79.0	50.2	13.8	12.3	4.2
	1	3.4	6.6	2.8	5.9	14.8	15.9	11.0
		4.2	4.8	2.4	8.1	12.6	14.1	12.0
	2	10.3	11.0	8.6	11.7	13.4	11.4	3.1
		10.5	15.6	12.0	16.8	15.0	8.4	2.7
	3	5.2	14.1	3.8	31.0	55.2	59.3	74.8
		4.5	12.9	6.6	24.9	58.6	65.2	76.3
NA		1.7	3.4	1.4	2.1	1.0	2.1	6.6
		0.3	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	4.8

である。また、対者の親疎に関しては（「年上・異性」の場合に限定して）、

親 < 疎

59.3 74.8 (宮津)

65.2 76.3 (豊岡)

である。そして、これらは、段階 0（敬語なし）の現れ方とまさに反比例の関係をなしている。すなわち、段階 0 は、対者の年齢に関しては、

年下 > 同年 > 年上

72.1 66.4 13.5 (宮津)

73.5 64.6 13.1 (豊岡)

の順に少なくなり、対者の性差に関しては、

同性 > 異性

59.4 41.8 (宮津)

57.8 43.0 (豊岡)

であり、対者の親疎に関しては（「年上・異性」の場合に限定して）、

親 > 疎

11.4 4.5 (宮津)

12.3 4.2 (豊岡)

である。

2.2.4 待遇表現形式の選択 その 2（「行く」）

次に、上掲コンテキストの「京都へ行く」における「行く」の部分に焦点を当てる。なお、ここでもそれぞれの形式を個々に取り上げることはせず、各形式について、敬語上の段階づけをし、段階点でもって対者の扱い方の様相を見ることにする。

敬語上の段階づけの仕方

基本的には先の「来たのか」および「行くのか」の場合と同様に、段階を 0～3 の 4 つに区分した。

0 は、謙譲語（マイル）並びに丁寧語（デス・マス）が付加していないもの

である。ただし、文末の助詞はここでの検討の対象とはしない。この点は以下についても同様である。

具体形式は、次のようなものである。

イクンヨ イクネン イクンヤ イクンダ イッテクルワ

1は、謙譲語（マイル）はないが、丁寧語（デス・マス）の付加しているものである。

具体形式は、次のようなものである。

イクンデス イキマス イッテキマス

2は、上の「行くのか」の段階に対応させて、謙譲語（マイル）のみがあるもので、丁寧語（デス・マス）のないものとして設定したものである。しかし、この段階での出現形は今回のデータの中には皆無であった。

3は、謙譲語（マイル）とともに丁寧語（マス）が付加しているものである。

具体形式は、次のようなものである。

マイリマス イッテマイリマス

表2-6は、豊岡の場合についての、それぞれの形式（段階）の対者ごとの出現比率を示したものである。

段階2は、上述したように出現は皆無であった。段階3は、「同年・異性」ではじめて現れる。その比率は場面が改まるにつれ上昇しているが、微々たる

表2-6 「行く」の段階ごとの出現比率 [豊岡] %

		親						疎
		年 下		同 年		年 上		年上
		同性	異性	同性	異性	同性	異性	異性
段 階	0	86.5	79.6	89.2	66.7	25.8	21.9	17.1
	1	12.6	19.8	10.8	32.4	72.7	75.7	79.0
	2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	3	0.0	0.0	0.0	0.6	1.2	2.1	2.7
	NA	0.9	0.6	0.0	0.3	0.3	0.3	1.2

ものである。

注目されるのは、段階1と段階0の現れ方であろう。段階1, すなわち丁寧語のみの付加しているものの出現比率は、対者の年齢に関しては、

年下 < 同年 < 年上

の順に上昇している。また、それぞれの中では、

同性 < 異性

である。さらに、対者の親疎に関しては、

親 < 疎

である。そして、これらは、段階0（敬語なし）の現れ方とちょうど逆、すなわち反比例の関係をなしている。

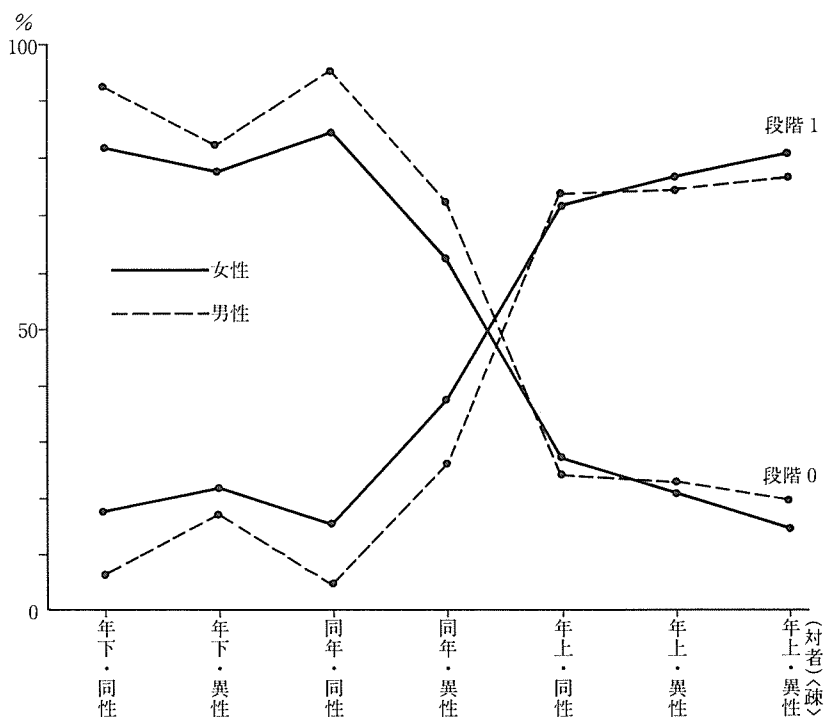


図2-6 段階1と段階0の使用率の男女差

ここで、この段階1と段階0にしぼって、それぞれの使用に関する話者（インフォーマント）側の分析をしてみよう。

図2-6は、話者の性別によるそれぞれの出現の様相を示したものである。段階1は上昇のカーブを描いている（ただし、「同年・同性」のケースにおける使用度がもっとも少ない）。そして、段階0はそれに応じて下降のカーブを描いている。女性と男性とでは、この上昇、下降の角度はほぼ平行である。「年上・同性」のケースを除くすべての場面で、段階1の出現比率は女性の方に一定の割合で高く現れ、一方、段階0は男性の方に一定の割合で高く現れていることがわかる。したがって、ここには、女性の方が全体的に丁寧な表現で対者を待遇するという点が認められるのである。なお、段階1と段階0の出現比率は、男性、女性ともに「同年・異性」と「年上・同性」の間で逆転（カーブが交差）している。

さて、図2-7は、「同年」に対する場合での段階1の出現にしぼって、話者の年層別、学歴別、職業別の様相を示したものである。

まず指摘されることは、話者の年層が高くなる（したがって、対者の年層も高くなる）につれて、丁寧語の使用が順次多くなるという明らかな傾向である。10代では使用率ゼロであるが、60代では「同性」に対して30.2%、「異性」に対して52.8%の使用率となっている。学歴に関しては、

高 < 中 < 低

の順に丁寧語の使用が上昇している。また、職業に関しては、

学生 < 勤労者 < 無職

の順である。ただし、ここでの学歴と職業については話者の年層に置換して考えるべきかもしれない。「低学歴」は年層の高いところに集中しているし、また、「学生」はいうまでもなく年層の低いところに集中しているわけで、互いの相関が著しいからである。

2.2.5 場面設定における「対者」の具体的想定相手

なお、豊岡調査では、対者「年下の同性で親しい人」「年下の異性で親しい人」「同じ年頃の同性で親しい人」「同じ年頃の異性で親しい人」「年上の同性

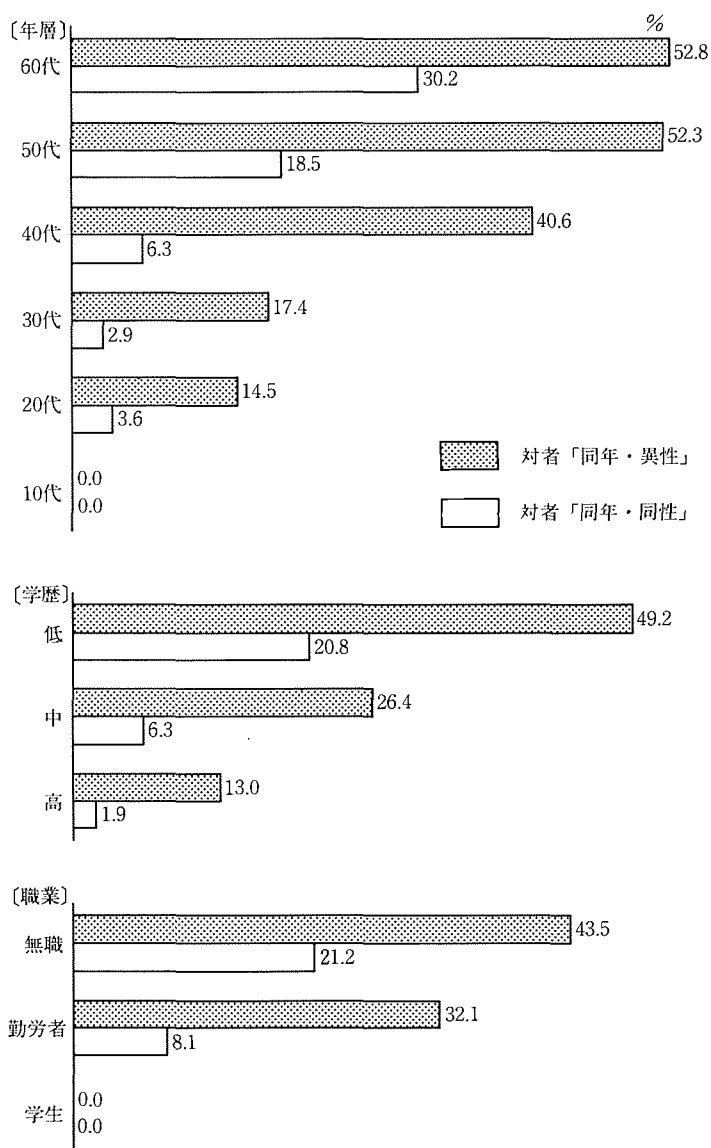


図2-7 段階1の使用率の年層差・学歴差・職業差

で親しい人」「年上の異性で親しい人」について、話者が具体的に想定した相手をたずねているので、その結果を示しておこう（表2-7）。

ただし、表2-7では、さまざまな具体的想定相手のうち、それぞれの項での第1位にランクされるもののみを掲げている。

全体的に“近所の人”という回答が多い。

「年下」の場合、30代に“会社の後輩”が、10代に“学校の後輩”が出ている。また、「年上」の場合、30代に“会社の先輩”が、10代に“学校の先輩”

表2-7 「対者」の具体的想定相手（第1位）

	想 定 し た 相 手					
	年下・同性	年下・異性	同年・同性	同年・異性	年上・同性	年上・異性
〔年層〕						
60代	近所の人	近所の人	友だち	近所の人	近所の人	近所の人
50代	近所の人	近所の人	同級生	近所の人	近所の人	近所の人
40代	近所の人	近所の人	近所の人	同級生	近所の人	近所の人
30代	近所の人 会社の後輩	近所の人	同級生	同級生	会社の先輩	近所の人 会社の先輩
20代	近所の人	近所の人	同級生	同級生	近所の人	近所の人
10代	学校の後輩	学校の後輩	同級生	同級生	学校の先輩	学校の先輩
〔学歴〕						
低	近所の人	近所の人	近所の人 同級生	近所の人	近所の人	近所の人
中	近所の人	近所の人	同級生	同級生	近所の人	近所の人
高	会社の後輩	近所の人	同級生	同級生	会社の先輩	会社の先輩
〔職業〕						
無職	近所の人	近所の人	近所の人	近所の人	近所の人	近所の人
勤労者	近所の人	近所の人	同級生	同級生	近所の人	近所の人
学生	学校の後輩	学校の後輩	同級生	同級生	学校の先輩	学校の先輩

が出ている。なお、「同年」の場合、50代以下に“同級生”が出ている。この点は、先に「同年・同性」において丁寧度がもっとも低く現れていると述べたことと関連しよう。

学歴に関しては、高学歴の場合に“会社の後輩”“会社の先輩”が出ているが、これは学歴と職業との相関を示すものであろう。

職業に関しては、無職の場合がすべて“近所の人”であるのに対し、学生の場合はすべて学校関係の人物である。学生については、年層における10代にそのまま対応するものと認められる。

2.3. 「これはあなたの傘か」「私の傘だ」

宮津 401 (1~4, 1'~4') の項目 (豊岡 403 に対応する) の場面設定は、次のようである。

まず、1~4 については、

「バスの停留所に一本の傘が置いてありました。そこで、そばに居た に、その傘を指して『これはあなたの傘か』と尋ねるとします。その場合はどのように言いますか。」

という状況である。 に代入する相手は、親疎関係を中心的な軸とした、比較的具体的な人物が設定されている。次の4者である。

1. 見知らぬ紳士
2. 小学校の校長先生
3. 親しくしている友人
4. 自分の父親

そして、1'~4' については1~4 と照応した状況の設定がなされている。次のようである。対者は同じである。

「では反対に、 から『これはあなたの傘か』と尋ねられて、『私の傘だ』と答えるとします。その場合はどのように言いますか。」

2.3.1 呼び掛け、応答における「スママセン」の添加

上掲項目「これはあなたの傘か」(呼び掛け)および「私の傘だ」(応答)に対するインフォーマントからの回答形において、まず検討しておきたいことは、「スママセン」で代表されるような、相手との交渉をもつときの、あるいは礼をいうときの表現の有無についてである。

呼び掛けの場合に現れているのは、具体的には、

スママセン チョットスイマセン チョットオタンネシマスケド
シツレイデスガ オソレイリマスガ

のような形式である。また、応答の場合に現れているのは、具体的には、

スマン スママセン ドーモスイマセン スンマセンデシタ オーキニ
のような形式である。

いま、これらの形式の添加の有無についてみると、呼び掛けの場合(表2-8)も応答の場合(表2-9)も全体的には出現率が低いが、宮津、豊岡ともに「紳士」と「校長」、なかでも「紳士」に比較的多く現れていることがわかる。出現率の高い順に並べると、

紳士 > 校長 > 友人 > 父親

となる。ただし、「父親」では皆無である。

このような表現形式の添加は、文の長さといったことにかかわりをもっている。一般的には、長い発話ほど待遇度が高いと考えられている。その点で、「友人」「父親」に比しての「紳士」「校長」に対する相対的な待遇度の高さを

表2-8 呼び掛けにおける「スママセン」表2-9 応答における「スママセン」

宮津 豊岡 %					宮津 豊岡 %				
	紳士	校長	友人	父親		紳士	校長	友人	父親
有	$\frac{9.9}{10.3}$	$\frac{6.6}{4.8}$	$\frac{0.0}{0.3}$	$\frac{0.0}{0.0}$	有	$\frac{7.9}{9.0}$	$\frac{6.2}{9.3}$	$\frac{1.0}{2.1}$	$\frac{0.0}{0.0}$
無	$\frac{88.3}{87.2}$	$\frac{93.4}{93.8}$	$\frac{99.4}{98.7}$	$\frac{98.5}{96.2}$	無	$\frac{89.7}{90.4}$	$\frac{91.7}{90.7}$	$\frac{97.6}{97.9}$	$\frac{100.0}{100.0}$
NA	$\frac{1.8}{2.4}$	$\frac{0.0}{1.4}$	$\frac{0.6}{1.0}$	$\frac{1.5}{3.8}$	NA	$\frac{2.4}{0.6}$	$\frac{2.1}{0.0}$	$\frac{1.4}{0.0}$	$\frac{0.0}{0.0}$

指摘することができよう。

なお、表 2-10 は、「紳士」と「校長」に対する応答場面での「スママセン」の使用度を、話者（インフォーマント）の属性ごとに示したものである。男性に比べて女性の使用度が高く、また、年層が高くなるにつれて使用度が高くなる傾向がほぼみてとれる。ただし、宮津での「校長」の場合など、この傾向に反する事例もないわけではない。

表2-10 応答における「スママセン」の使用率 宮津
豊岡 %

	男性	女性	10代	20代	30代	40代	50代	60代
対「紳士」	$\frac{6.2}{4.8}$	$\frac{9.7}{12.2}$	$\frac{0.0}{3.7}$	$\frac{2.9}{3.6}$	$\frac{10.0}{5.8}$	$\frac{8.1}{10.9}$	$\frac{11.9}{12.3}$	$\frac{9.5}{15.1}$
対「校長」	$\frac{6.9}{6.9}$	$\frac{5.5}{11.2}$	$\frac{0.0}{0.0}$	$\frac{2.9}{1.8}$	$\frac{6.7}{8.7}$	$\frac{4.8}{10.9}$	$\frac{15.3}{9.2}$	$\frac{2.4}{20.8}$

2.3.2 質問表現での否定的要素を含む形式の有無

ところで、否定的要素を含む表現形式は発話全体として否定的要素を含まない表現形式よりも待遇度が高いと言われることがある。ここで、この点からデータをみてみよう。

対象となるのは、「これはあなたの傘か」における「傘か」の部分に対応する、カサデアリマセンカ、カサジャナイデスカ、カサジャナイノ、カサヤニンカなどの否定的要素を含む形式と、カサデスカ、カサトチガイマスカ、カサカイ、カサトチャウカなどの否定的要素を含まない形式との場面による選択行動の様相である。

表 2-11 は、この否定的要素を含む形式の有無についての状況である。

否定的要素を含む形式の出現率は全体的に低いことが指摘できる。そして、その出現率は宮津と豊岡とでほぼ同様であることが注目されよう。いずれにおいても「友人」「父親」にくらべて「紳士」と「校長」に対する場面で比較的多く現れており、そこに有意差が認められる。すなわち、改まりの強い場面にな否定的要素を含む形式が多用されているということである。

表2-11 否定的要素を含む形式の有無

	宮津		豊岡	
	紳士		校長	
	友人		父親	
	%			
有	15.2 14.4	16.6 17.4	6.6 3.3	5.5 3.9
無	82.4 83.8	82.1 82.6	92.4 96.1	90.7 94.6
NA	2.4 1.8	1.4 0.0	1.0 0.6	3.8 1.5

上掲のコンテキストに限定した上でのことではあるが、「否定的要素を含む表現形式は否定的要素を含まない形式より待遇が高い」という命題は、ここに具体的に立証されたわけである。

2.3.3 待遇表現形式の選択（「傘か」「傘だ」）

ここでは、上掲コンテキストの「傘か」「傘だ」における文末部の表現に焦点を当てよう。さまざまな形式があるが、ここではスタイルを重視して、特に丁寧語の有無と種類によって、次の4つに分類した。

φ 類 …… 丁寧語を含まないもの

デス類 …… 丁寧語としてのデス、マスを含むもの

デアリマス類 …… 丁寧語としてのデアリマスを含むもの

デゴザイマス類 …… 丁寧語としてのデゴザイマスを含むもの

表2-12と表2-13は、それぞれの類の対者による出現比率を示したものである。

まず、宮津と豊岡とで、ほぼ同様の現れ方になっていることが指摘される。デアリマス類とデゴザイマス類の出現数は極度に少なく、分析にたえうる量ではないのでここでは両類についての考察は保留せざるをえない。検討に値するのは、デス類とφ類の現れ方である。この両類の出現比率は、「紳士」「校長」の場合と「友人」「父親」の場合とで相補的に分布している。すなわち、デス類は「紳士」と「校長」に対する場面では圧倒的に用いられるが、一方、「友人」と「父親」に対する場面ではφ類が圧倒的で、デス類はまったくの少数派なのである。そしてこの傾向は「傘か」「傘だ」といったコンテキストの違いにもほとんどかわりなく同様に認められる点が注目されるのである。

表2-12 「傘か」のスタイルごとの出現比率

宮津
豊岡 %

	紳 士	校 長	友 人	父 親
φ 類	$\frac{0.7}{0.3}$	$\frac{1.4}{1.8}$	$\frac{88.3}{84.4}$	$\frac{83.8}{82.6}$
デス類	$\frac{96.2}{97.6}$	$\frac{95.2}{94.3}$	$\frac{10.7}{15.0}$	$\frac{12.4}{15.6}$
デアリマス類	$\frac{0.0}{0.0}$	$\frac{0.0}{0.0}$	$\frac{0.0}{0.0}$	$\frac{0.0}{0.0}$
デゴザイマス類	$\frac{0.7}{0.3}$	$\frac{2.1}{3.9}$	$\frac{0.0}{0.0}$	$\frac{0.0}{0.0}$
N A	$\frac{2.4}{1.8}$	$\frac{1.4}{0.0}$	$\frac{1.0}{0.6}$	$\frac{3.8}{1.8}$

表2-13 「傘だ」のスタイルごとの出現比率

宮津
豊岡 %

	紳 士	校 長	友 人	父 親
φ 類	$\frac{4.5}{4.8}$	$\frac{3.8}{3.9}$	$\frac{86.2}{81.4}$	$\frac{87.9}{80.8}$
デス類	$\frac{92.8}{93.4}$	$\frac{93.8}{92.2}$	$\frac{11.7}{18.6}$	$\frac{8.6}{17.7}$
デアリマス類	$\frac{0.3}{0.0}$	$\frac{0.0}{0.0}$	$\frac{0.7}{0.0}$	$\frac{0.0}{0.0}$
デゴザイマス類	$\frac{0.3}{1.2}$	$\frac{0.7}{3.9}$	$\frac{0.0}{0.0}$	$\frac{0.3}{0.0}$
N A	$\frac{2.1}{0.6}$	$\frac{1.7}{0.0}$	$\frac{1.4}{0.0}$	$\frac{3.1}{1.5}$

2.3.4 対称代名詞について

次に、上掲コンテキストの「あなたの傘か」における「あなた」の部分に焦点を当てて、いわゆる対称詞のバリエーションについて検討しよう。なお、ここでは、対者を「親しくしている友人」の場合に限定して、話者（インフォーマント）の属性による対称代名詞の運用の状況を分析することにした。

表 2-14 は、宮津および豊岡での実態である。大局的には、ほぼ同様の様相

を示していることがわかる。

宮津での出現形式と、それぞれの全体における比率は、次のようである。

アンタ	40.3 %
アナタ	10.3 %
オマエ	20.3 %
キミ	12.4 %
ジブン	6.6 %
オタク (サン)	1.0 %
名前	6.9 %
NA	2.1 %

表2-14 対称詞 (対「友人」)

[宮津] %

	全体	男性	女性	10代	20代	30代	40代	50代	60代
アンタ	40.3	13.8	66.9	24.2	32.4	33.3	38.7	45.8	64.3
アナタ	10.3	5.5	15.2	0.0	11.8	11.7	9.7	8.5	19.0
オマエ	20.3	40.0	0.7	48.5	20.6	20.0	16.1	20.3	4.8
キミ	12.4	24.8	0.0	0.0	0.0	10.0	21.0	22.0	9.5
ジブン	6.6	8.3	4.8	6.1	20.6	10.0	6.5	0.0	0.0
オタク(サン)	1.0	0.7	1.4	0.0	0.0	0.0	3.2	0.0	2.4
名前	6.9	4.8	9.0	18.2	14.7	10.0	1.6	3.4	0.0
NA	2.1	2.1	2.1	3.0	0.0	5.0	3.2	0.0	0.0

[豊岡] %

	全体	男性	女性	10代	20代	30代	40代	50代	60代
アンタ	43.5	23.4	59.0	29.6	16.4	34.8	43.8	61.5	67.9
アナタ	11.1	3.4	17.0	18.5	9.1	11.6	12.5	9.2	9.4
オマエ	21.3	48.9	0.0	33.3	20.0	23.2	28.1	16.9	11.4
キミ	4.2	9.7	0.0	0.0	1.8	1.4	7.8	6.2	5.7
ジブン	7.2	9.0	5.9	0.0	30.9	10.1	0.0	0.0	0.0
オタク(サン)	2.4	0.7	3.7	0.0	1.8	2.9	3.1	3.0	1.9
名前	8.1	2.1	12.8	18.5	18.2	13.0	3.1	0.0	1.9
NA	2.1	2.8	1.6	0.0	1.8	2.9	1.6	3.1	1.9

このうち、「名前」については、話者が想定した対者の具体的な名前が回答されたケースをまとめたものである。対称詞ではあるが、対称代名詞ではない。このケースは女性の話者に比較的多いことが指摘される。そして、年齢的には、若い層になるほど多いことが認められる。また、「オタク」(0.7%)と「オタクサン」(0.3%)については、ともに少数なので、まとめて示した。なお、「NA」としたのは、無回答のもの、および回答形のなかに対称詞を含まないものである。数は少ない。

使用度数のもっとも多いのは「アンタ」である。ただし、この形式の使用は女性に圧倒的で、男性の使用は少ない。年齢的には、高年層になるほど使用が多くなっていることがはっきりと見える。なお、以上の傾向は「アナタ」についてもほぼ同様に認められる。

一方、「オマエ」は男性に圧倒的に使われるもので、女性の使用は1例(0.7%)にすぎない。年齢的には、若い層ほど多用していることがわかる。「キミ」も男性専用であるが、これは若い層には使われない。

「ジブン」は関西方言的な形式である。その点で高年層には皆無であることが注目される。使用度が特に高いのは20・30代であり、かつ、やや男性よりの用語としての傾向が認められる。

豊岡での出現形式と、それぞれの全体における比率は、次のようである。

アンタ	43.5 %	
アナタ	11.1 %	(アータ 0.3 % を含む)
オマエ	21.3 %	(オミャー, オメーを含む)
キミ	4.2 %	
ジブン	7.2 %	
オタク (サン)	2.4 %	(オウチ 0.3 % を含む)
名前	8.1 %	
NA	2.1 %	

ここでも、「オタク」(1.8%)と「オタクサン」(0.3%)については、少数なのでまとめて示した。先の宮津では見られなかったものに「オウチ」がある。しかしこれは1例(0.3%)にすぎない。

「アンタ」「オマエ」、そして「ジブン」などの、各属性ごとの出現比率は宮津の場合とほぼ同様である。ただし、「キミ」に関しては、宮津より全体における使用率のランクは下がっており、ここに宮津との若干の差異が認められる。

2.3.5 自称代名詞について

最後に、上掲コンテキストの「私の傘だ」における「私」の部分に焦点を当てて、自称代名詞のバリエーションについて検討する。ここでも、対称代名詞の場合と同様に、「親しくしている友人」に対する場面に限定して、話者（インフォーマント）の属性による自称代名詞の運用の様相を分析する。

表 2-15 は、宮津および豊岡での実態である。やはり、大局的には両地ではほぼ同様の状況になっていることがわかる。

まず、宮津での出現形式と、それぞれの全体における比率は、次のようである。

ワタシ	36.2 %
アタシ	2.1 %
ワシ	14.1 %
ワイ	0.3 %
ボク	20.7 %
オレ	4.1 %
ウチ	4.8 %
ジブン	1.4 %
NA	16.2 %

「NA」は、無回答のもの、および回答形のなかに自称詞を含まないもの（例えば、「ソーデス、スミマセン」のような形のみの回答）である。

使用度数のもっとも多いのは「ワタシ」である。ただし、この形式の使用は女性に圧倒的で、男性の使用は少ない。年齢的には、高い年層、特に 60 代において多用される傾向が認められる。「アタシ」は女性専用のものであるが数は少ない。この形式は逆に若年層、特に 10 代において比較的多く用いられている。

表2-15 自称詞（対「友人」）

[宮津] %

	全体	男性	女性	10代	20代	30代	40代	50代	60代
ワタシ	36.2	6.2	66.2	24.2	35.3	33.3	30.6	30.5	66.7
アタシ	2.1	0.0	4.1	12.1	2.9	1.7	0.0	0.0	0.0
ワシ	14.1	28.3	0.0	15.2	5.9	13.3	12.9	22.0	11.9
ワイ	0.3	0.7	0.0	0.0	2.9	0.0	0.0	0.0	0.0
ボク	20.7	41.4	0.0	24.2	5.9	28.3	32.3	18.6	4.8
オレ	4.1	8.3	0.0	9.1	5.9	5.0	0.0	5.1	2.4
ウチ	4.8	0.0	9.7	3.0	11.8	6.7	1.6	5.1	2.4
ジブン	1.4	2.8	0.0	3.0	0.0	0.0	1.6	0.0	4.8
NA	16.2	12.4	20.0	9.1	29.4	11.7	21.0	18.6	7.1

[豊岡] %

	全体	男性	女性	10代	20代	30代	40代	50代	60代
ワタクシ	0.6	0.7	0.5	0.0	0.0	1.4	1.6	0.0	0.0
ワタシ	42.0	4.8	70.7	25.9	30.9	44.9	35.9	49.2	56.6
アタシ	1.2	0.0	2.1	3.7	1.8	0.0	0.0	0.0	3.8
ワシ	15.9	35.9	0.5	3.7	9.1	17.4	20.3	20.0	17.0
ボク	7.5	17.2	0.0	0.0	7.3	10.1	12.5	6.2	3.8
オレ	3.9	9.0	0.0	3.7	7.3	2.9	4.7	3.1	1.9
ウチ	2.4	0.0	4.3	3.7	3.6	1.4	3.1	1.5	1.9
ジブン	1.5	3.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.1	5.7
NA	24.9	28.9	21.8	59.3	40.0	21.7	21.9	16.9	9.4

「ワシ」は男性に圧倒的に使われるものである。年齢的な特徴はあまり認められない。「ワイ」も同様のものであるが、使用は男性の1例（20代）にすぎない。

「ボク」と「オレ」は、男性専用のものである。一方、「ウチ」は女性がい用のものである。しかし、「オレ」と「ウチ」の数は少ない。

なお、「ジブン」は対称代名詞としても出てきた形式であるが、このコンテ

クスト, すなわち, 自称代名詞としては男性専用のものである。ただし, 数は少ない。

豊岡での出現形式と, それぞれの全体における比率は, 次のようである。

ワタクシ	0.6 %
ワタシ	42.0 %
アタシ	1.2 %
ワシ	15.9 %
ボク	7.5 %
オレ	3.9 %
ウチ	2.4 %
ジブン	1.5 %
NA	24.9 %

先の宮津では見られなかったものとして「ワタクシ」があるが, 男女各1例のみである。一方, 宮津で見られた関西方言的な「ワイ」は豊岡では認められない。

「ワタシ」「アタシ」「ワシ」「ウチ」などの出現比率, および各属性ごとの様相は宮津の場合とほぼ同一のパターンである。ただし, 「ワタシ」の比率はやや高く出ているし, 「ウチ」の比率はやや低く出ていることが指摘される。

注目したいのは, 「ボク」の使用率についてである。宮津での 20.7 % と比較して, 豊岡では 7.5 % でかなり低くなっている。これは, 表 2-14 で見た対称代名詞における「キミ」の, 両地での使用率の差にまさに対応するものである。その点が興味深いのである。なお, 「NA」は若い層になるほど多く出現する。そして 10 代においては「NA」が全体の過半数を超えるようにまでなっていることに留意したい。

3. 場面接触態度

社会言語学あるいは言語行動研究においては、「場面」の問題が重要となっている。重要というよりは、この問題を離れてはこれらの領域が成立しないともいえる。

従来から、広い意味での場面差を扱った研究が数多く行われている。そこでは、「これこれしかじかの相手にどう言いますか」とか「かくかくの状況では方言で話しますか、それとも共通語で話しますか」といったような設問が用いられることが多い。

つまり、相手とか状況といった場面での言語行動を問う形式のものである。この設定で得られた回答（多くは言語形式）をもとに、たとえば丁寧度などを探ろうとするわけである。

これは極めて有効な方法である。しかし、そのペースになる「場面」について、回答者がどのように認識しているのか、また場面間の差異をどのようにみているのか、といったことは必ずしも明確ではない。乱暴な表現をあえてすると、単なる思いつきで構成された場面もないではない。もちろん、このような場合においても、得られたデータから場面間の関係を探ることが可能な場合もあることは確かである。

ここでは、言語形式などの問題から離れて、場面そのものを取り上げて、場面間の関係および場面認識の基底となっている事柄への探りを入れることとする。

そのためのひとつの手立てとして、特定の場面（相手や状況）を提示し、それぞれの場面において人々が自分のことばづかいにどの程度の気配りを行っているかの意識（以下、これを「場面接触態度」と呼ぶ）調査を行った。

3.1. 調査の方法

この調査では、言語行動の生じるいろいろの場面を、場所や状況を特定した若干の大場面にまず区分し、次いでその各大場面ごとにいくつかの小場面を設け、それぞれの場面对する被調査者の態度を尋ねるという方法が取られている。なお、この調査は自記式アンケート調査の形式で実施されている。

(1) 設問形式と選択肢

場面接触態度を問う具体的な設問文は、

ふだん話をするとき、ざっくばらんに話せる相手がいる一方、ことばづかいに注意をはらう相手もいるかと思います。次にあげる相手や場面では、どの程度ことばづかいに注意しますか。その程度を下の選択肢から選んで（ ）内にA～Eの記号を記入して下さい。

となっている。また、A～Eの選択肢は、

- A：非常に気をつけて話す B：かなり気をつけて話す
C：ある程度気をつけて話す D：あまり気にせずに話す
E：全然気にせずに話す

であった。

(2) 調査対象場面

上記の設問の対象となる具体的な場面の区分と小場面の数は、豊中調査の場合と宮津・豊岡調査とでは異なっている。

多くの場面を扱った豊中調査では、設定された大場面は、

- a. 家庭の中で b. 店で買い物や食事をするとき c. 近所の人と
d. 道などを尋ねるとき e. 一般に f. 職場で g. 学校で

の7区分（種類）であり、各区分に属する小場面の総数は72であった。

一方の宮津・豊岡の両調査では、上記のうち、

- a. 家庭の中で b. 店で買い物や食事をするとき e. 一般に

の3場面、計37場面が対象となっている。

なお、各調査地域における小場面の具体的な内容は、本章の後段の記述また

は「9. 調査票」の項を参照されたい。

(3) 集計の方法

各場面のそれぞれにおいて、被調査者は場面に対する自己のことばづかいの配慮の程度を上記 A～E のいずれかのレベルで回答している。

そこで、小場面ごとの回答分布表が得られる。たとえば、豊中調査における大場面 a の「家庭の中で」に含まれている各小場面の回答結果は、表 3-1 のようである。ただし、この表は豊中調査の全回答者をまとめた結果であり、表中の数値は各回答カテゴリーに属する人数である。なお、小場面の配列は調査票での提示順によっている。

この回答分布表をもとに、この章の主目的である、場面ごとの接触態度（丁寧度意識）を比較検討することができる。しかし、この調査で取り上げられた場面の数は非常に多く、この種の表をいちいち示すのは繁雑であり实际的でない。

そこで、ここでは、接触態度の選択肢 A～E のそれぞれに、5～1 の点数を

表3-1 回答分布と丁寧度指標（豊中調査「家庭生活場面」）

小 場 面	A	B	C	D	E	無答	丁寧度	中央値
目上の家族	6	56	179	125	58	61	2.70	2.72
同年輩の家族	2	29	121	170	110	73	2.17	2.12
目下の家族	3	13	115	171	144	59	2.01	1.96
配偶者	0	3	67	154	144	137	1.81	1.76
目上の親戚	44	29	255	37	12	28	3.33	3.24
同年輩の親戚	6	45	219	157	41	37	2.61	2.66
目下の親戚	6	23	202	176	65	33	2.43	2.47
親戚の子ども	0	14	132	196	124	39	2.08	2.06
御用聞き	6	30	186	169	82	32	2.38	2.41
セールスマン	10	38	193	151	88	25	2.44	2.51
その他の訪問者	23	62	221	122	35	42	2.82	2.84

与え、その平均値を算出し、その値を場面に対する「接触態度の丁寧度」指標とすることとした。したがって、この指標は数値の高いほどより丁寧なことを表す（満点は5点、最低は1点）。なお、「無答」はこの数値算出の対象外とした。

場面ごとに、この丁寧度指標を算出した結果が、上表3-1の右から二つ目に掲げた「丁寧度」の欄である。

この種のデータは表に示されているように、正規分布性を保証しにくい性格を有している。それゆえに、ここで求めた算術平均よりは、中央値ないしは最頻値を代表値として採用すべきだといえよう。しかし、表3-1の最右端に参考的に示した中央値と、ここで取り上げた算術平均値との間にはさほどの違いは認められない。そこで、以下では数値計算の簡単な算術平均をもって各場面の丁寧度を表現することとした。

以下の記述では、ここで求めた「接触態度の丁寧度」を単に「丁寧度」と略することとする。また、場面ごとの丁寧度の比較検討を行う場合には、丁寧度の高い場面を「上位場面」、その逆のものを「下位場面」と称することがある。なお、言うまでもないことであるが、この章で用いる「丁寧度」は、言語形式など言語行動の表面に現れた形でのそれではなく、あくまで相手に対してどの程度の気配りをすべきだと思っているかの規範意識レベルのものである。

3.2. 場面ごとの結果

先述のように豊中調査と宮津・豊岡調査とでは場面の種類と数が大きく異なっている。ここでは、対象場面数が最大であった豊中調査を中心として、その調査票に記された場面区分の順に結果をみていくこととする。

3.2.1 家庭生活場面

これは、上記の表3-1で取り上げたものであるが、ここでは豊中市の全体を基準に丁寧度の高い順に（つまり、上位場面から）並べ直し、さらに宮津・豊

岡両調査の結果を加えたものを、表 3-2 として示す。

家庭生活場面においてみると、どの地域においても、「目上の親戚」に対して最も丁寧であり、逆に最も気のおけない相手は「配偶者」とあるという点で一致をみている。また、3都市における丁寧度の数値や順位は、細部では若干異なるもののよく似た姿となっている。参考のために相関係数を示すと、スピアマンの相関は、豊中・宮津で .961, 豊中・豊岡で .987, 宮津・豊岡で .984 であり、またケンドールの順位相関は、それぞれ .945, .982, .964 となっている。いずれも非常に高い相関関係が得られている。

次に、このデータをもう少し細かくみてみよう。

表 3-2 には、家族・親族関係の相手と、それ以外の訪問者相手の場面が混在している。

表3-2 家庭生活場面への接触態度（全市）

場 面	豊 中	宮 津	豊 岡
1 目上の親戚	3.33	3.14 (1)	2.43 (1)
2 その他の訪問者	2.82	2.85 (2)	2.97 (2)
3 目上の家族	2.70	2.47 (5)	2.74 (3)
4 同年輩の親戚	2.61	2.51 (4)	2.62 (5)
5 セールスマン	2.44	2.55 (3)	2.65 (4)
6 目下の親戚	2.43	2.28 (7)	2.44 (7)
7 御用聞き	2.38	2.46 (6)	2.57 (6)
8 同年輩の家族	2.17	2.17 (8)	2.18 (8)
9 親戚の子ども	2.08	1.89 (10)	2.10 (9)
10 目下の家族	2.01	1.99 (9)	1.98 (10)
11 配偶者	1.81	1.71 (11)	1.77 (11)
全場面の平均	2.4	2.36	2.49

(注) 宮津・豊岡の括弧内の数字は、それぞれの丁寧度の順位。

まず、後者の相手だけを取り出してみる。各都市ともに、丁寧度は「その他の訪問者」「セールスマン」「御用聞き」の順となっている。

これは、各都市の回答者全体、つまり地域社会全体の結果である。しかし、家庭の中でこれらの人々とふだん接触する度合いは、一様ではなく、回答者の属性によって異なる面がある。

そこで、性別との関連でまとめてみると、表3-3のようになっており、やはり、性別の影響がみて取れる。すなわち、女性では「セールスマン」と「御用聞き」との間に差が認められるのに対して、男性回答者では両者の数値はほぼ一致している。「御用聞き」は、家計を預かる主婦に代表される女性には顔なじみであるが、多くの男性では必ずしもそうではないからであろう。

次に家族・親族における目上・目下等の上下関係についてみてみよう。

表3-2から、相手が家族であるか、あるいは親族であるかということが相手への丁寧度を規定する第一の要因となっていることがわかる。

そこで、これを基準軸として、相手との上下関係による丁寧度の違いをより明確に表現するために整理してみたものが、図3-1である。

この図は、各場面（相手）に対する都市間の丁寧度の変動幅を表している。つまり、図中の線あるいはブロックは、各都市の場面ごとの丁寧度を比較して、その最大値と最小値とを結んで描いたものである。なお、図の中央の縦線は丁寧度の大小の目盛り線であるが、これは相手との関係（親族と家族）を左右に分ける区分線ともなっている。

表3-3 訪問者への接触態度（全市、性別）

訪 問 者	豊 中		宮 津		豊 岡	
	男	女	男	女	男	女
その他の訪問者	2.76	2.88	2.75	2.95	2.88	3.03
セールスマン	2.29	2.60	2.42	2.69	2.53	2.74
御用聞き	2.30	2.48	2.40	2.52	2.52	2.61

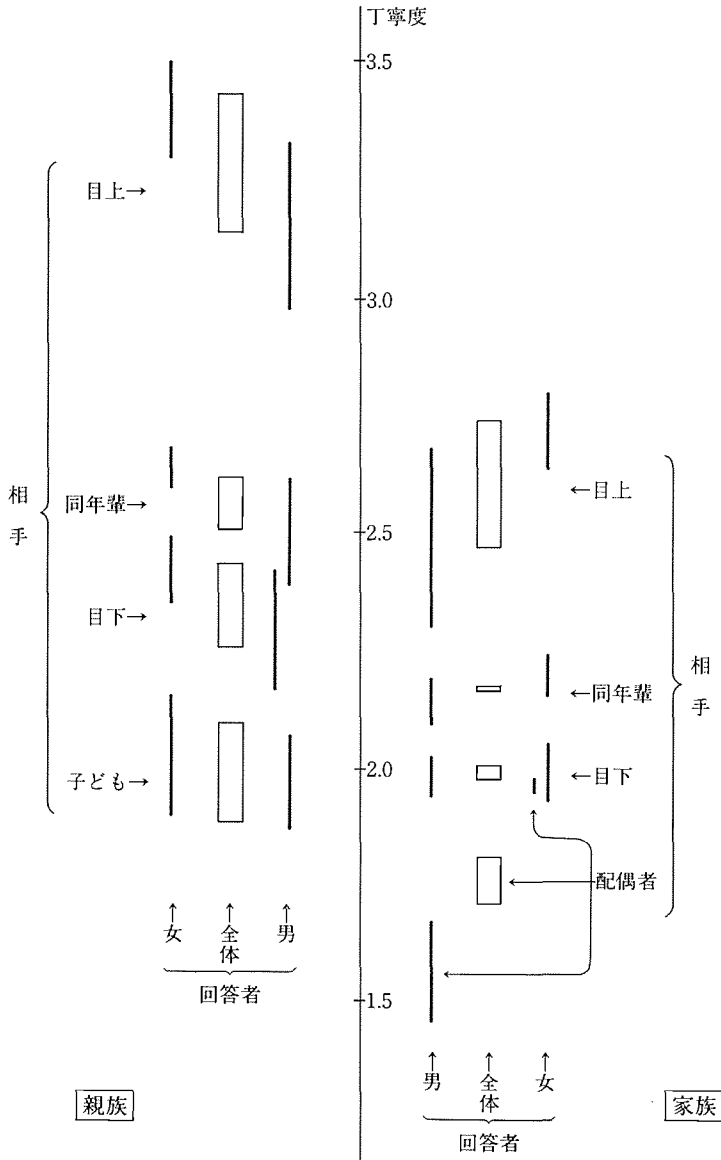


図3-1 家族・親族への丁寧度の拡がり

まず、回答者全体の結果を示すブロックの部分のみてみよう。

区分線の左側の親族関係の相手をみると、図の上方から、「目上」「同年輩」「目下」「子ども」と、相手との年齢関係に従って順に並んでいる。また、右側の家族関係においても、「配偶者」を除いては、同様の関係が維持されている。

これは、親族・家族という関係が一定している場合の丁寧さの基準は、常識通り、年齢的上下関係に従うということを意味している。ただし、それぞれの差を比べると、最上位の「目上」と2位の「同年輩」との間に大きな断層があることがわかる。つまり、一口に上下関係に従うといっても、自分より上位者へはより丁寧になるが、下位者へはそれほどぞんざいにはならないということであろう。

次に、左右のブロックを対比してみると、同じく目上といっても、右側に図示されている家族における「目上」の位置（丁寧度の高さ）は、左側の親族の「同年輩」にほぼ相当する位置に布置していることがわかる。また、他の関係をもても大略同様になっている。したがって、家族間での上下関係による丁寧度は、親族へのそれよりは1段階程度低く待遇されるということになる。

なお、「家族の目上」に対する丁寧度は、地域社会の成員全体の平均値ではかなり高くなってはいるが、回答者の年齢差が大きい。たとえば、豊中調査での年齢別の丁寧度は、

10代 2.11 20代 2.37 30・40代 2.86 50代以上 3.12

と、年齢の上昇につれて高くなっている。高齢層の回答者にとっては、自分が他に対してそのように待遇するというよりは、そう扱ってもらいたいという期待が込められた回答結果であるかも知れない。（「目上の親戚」の場合は年齢差はあまりみられない。）

以上は、回答者全体についてみた結果である。性別にみてみよう。

ブロック部分を挟んだ2つの直線を比べてみると、図の上方に記された線間では、女性（中央線から遠い線）のほうが男性（中央線よりの線）よりも上に位置しており、しかも重なりが少ないことがわかる。一方、図の下に描かれているものほど両者の差が小さくなり、重なりが大きくなっている。

このことは、より丁寧に待遇すべき相手の場合には、女性のほうがそれをよ

り強く意識しているが、低く待遇してもかまわない相手に対しては男女による待遇意識にはさほどの差異が認められないことを意味している。（言語形式に現れる丁寧さとは別の話である。）

なお、「配偶者」への丁寧度は、男性の回答者においては一番下に示されているのに対して、女性の場合は1段階上の「目下」と重なる位置（左側の短い線）に存在している。配偶者への丁寧度意識には男女の隔たりが相当大きいのである。

3.2.2 買物・食事場面

次に示すものは、人々が買い物や食事をするときに、店の形式や店員の別によってどの程度ことばづかいの配慮を意識しているかを調べたものである。

結果は、表3-4に掲げるとおりである。

店の形式でみると、都市別、性別の如何を問わず、「高級レストラン」が格段に高い数値を得ている。これから相当離れて「デパート」が続き、以下「スーパー」「大衆食堂」と予想通りの順となっている。なお、この4種の店の中では、「高級レストラン」において、若年層（特に10代）が他に比べて際立って高い数値を与えていることを付言しておく。（たとえば、豊中の結果では、

表3-4 買物・食事場面への接触態度（全市）

場 面	豊 中			宮 津 豊 岡	
	全体	男	女	全体	全体
1 高級レストラン	3.01	2.93	3.11	3.19	3.19
2 顔見知りでない店員	2.68	2.64	2.71	2.78	2.77
3 デパート	2.53	2.48	2.58	2.57	2.55
4 顔くらいは知っている店員	2.48	2.44	2.53	2.53	2.53
5 行きつけの店の人	2.40	2.33	2.47	2.42	2.30
6 スーパー	2.34	2.31	2.39	2.40	2.40
7 大衆食堂	2.30	2.24	2.37	2.34	2.35

78 3. 場面接触態度

10代は3.59, 20代は3.10であるのに対して、それ以上の年代はいずれも2.88程度である。)

また、相手の店員に対しては、顔見知りであるか否か、つまり親疎の度合いに応じて丁寧度が異なるという傾向が認められる。

なお、買物・食事場面に含まれる全7小場面の丁寧度の平均値を都市別・性別に計算すると、

	全体	男	女
宮津市	2.60	2.55	2.66
豊岡市	2.58	2.52	2.63
豊中市	2.53	2.48	2.59

のようになっており、性別ではいずれの都市においても女性のほうが丁寧である。また、都市別では大都市豊中がわずかながら他の都市よりも数値が低くなっている。

3.2.3 近隣生活場面

つきあいの程度ごとに区分した 近所の人への接触態度を尋ねた結果が、表3-5である。

ここでも、つきあいの程度の薄い相手（親疎の疎の相手）ほど丁寧に話をするという意識を反映した結果が得られている。

表3-5 近隣生活場面への接触態度（豊中）

場 面	全体	男	女
1 顔を知っている程度の人	2.99	2.95	3.03
2 あいさつを交わす程度の人	2.98	2.94	3.03
3 世間話をする程度の人	2.77	2.75	2.80
4 親しくつき合っている人	2.50	2.53	2.47
全場面の平均	2.81	2.79	2.83

これはごく当然の結果といえるが、丁寧度の範囲を性別にみてみると、

男性 2.95～2.53 女性 3.03～2.47

と、女性のほうが広がっている。相手や状況における敬語の使い分けの幅は一般に、男性に比べ女性のほうが狭いといわれているが、このデータにみる限りにおいて、少なくとも近所づきあいに関しては女性のほうが相手に応じて接触態度を変えているといえる。これは、一般に女性のほうが近所づきあいをよくしていることの反映だと目される。

なお、宮津・豊岡両調査にも、一般場面の中に表現は若干異なるが、近所づきあいに関する項目が一部含まれている。その結果を参考までに示すと次のようになっている。(数値は全体の結果。)

	宮津	豊岡
近所のあまり親しくない人	2.76	2.88
近所の親しい人	2.36	2.33

3.2.4 道聞き場面

前項とは異なって、見知らぬ人に道を尋ねる場面であり、ここでは、道を尋ねる相手の職業・年齢などの属性と丁寧度との関係をみようとしている。

結果は表3-6に示すとおりである。相手の職業の別でみると、丁寧度は、「警官」「駅員」「店員」の順となっている。また、相手が通行人の場合は、同性・異性では異性に、年齢関係では年長者に対して丁寧な物言いをする意識されている。

なお、「近所の子ども」は、他の相手に比べて著しく低い値となっている。これと、先の家庭場面での「親戚の子ども」に対する丁寧度の数値（いずれも豊中市での結果）を比較して掲げると、次のようになる。

	全体	男	女
近所の子ども（道聞き場面）	2.15	2.17	2.12
親戚の子ども（家庭場面）	2.08	2.07	2.08

また、宮津調査の「近所の子ども」一般と「親戚の子ども」との間では、以下のようになっている。

	全体	男	女
近所の子ども（一般場面）	1.81	1.82	1.81
親戚の子ども（家庭場面）	1.89	1.87	1.90

いずれの場合も、さほど変わらない値となっている。一般に何かを依頼したり尋ねたりする場合には、同じ相手に対しても丁寧になる傾向がある。しかし、相手が子どもの場合はそのような要因はほとんど関与せず、相手が子どもであるということが大きな要因となるのであろう。

表3-6 道聞き場面への接触態度（豊中）

場 面	全体	男	女
1 通行中の年上の人	3.29	3.33	3.25
2 通行中の異性	3.09	3.15	3.02
3 交番の警官	3.06	3.05	3.08
4 通行中の同性	2.90	2.96	2.83
5 駅 員	2.90	2.90	2.91
6 通行中の年下の人	2.78	2.79	2.78
7 タバコ屋などの店員	2.68	2.67	2.68
8 近所の子ども	2.15	2.17	2.12
全場面の平均	2.86	2.88	2.83

3.2.5 一般場面

これは、調査票では、「一般に」という枠でまとめられているものであり、前項までの区分とはいささか異なる。この枠には、特定の場所や状況から離れた一般的な言語行動をみようとするものが主に含まれている。また、他の枠には含まれない「その他」とすべき諸場面も一部存在している。

そのような意味での一般場面に関する項目は、今までみてきたものとは違って、豊中調査よりも宮津・豊岡両調査のほうが範囲は広いが、まずは豊中調査に含まれている共通の場面を取り上げることにする。

その結果が、表 3-7 である。

この表には、いろいろの場面が掲げられているが、全般的によく似た結果となっている。スピーアマンの相関係数を算出してみると、豊中・宮津は .981, 豊中・豊岡は .990, そして宮津・豊岡が .963, といずれもほぼ完全な相関が得られており、地域による変動はほとんど認められないことがわかる。(なお、順位相関は、それぞれ、.934, .967, .978。)

表中の 13 のそれぞれの場面をみてみると、各市とも上位 3 位までは、「結婚式などのスピーチ」「テレビやラジオに出演するとき」「会合などで発言するとき」で一致している。これらは、いずれも、他とは違って、公の席で多数の人

表3-7 一般場面接触態度（全市共通項目）

場 面	豊 中	宮 津	豊 岡
1 結婚式などのスピーチ	4.35	4.31 (1)	4.40 (1)
2 テレビやラジオに出演するとき	4.04	4.15 (2)	4.31 (2)
3 会合などで発言するとき	3.99	3.78 (3)	3.91 (3)
4 学生時代の恩師	3.69	3.41 (5)	3.66 (4)
5 初 対 面 の 人	3.53	3.53 (4)	3.64 (5)
6 医 者	3.42	3.33 (6)	3.50 (6)
7 心安くない人	3.21	3.11 (8)	3.19 (8)
8 役所で書類をもらうとき	3.14	3.09 (10)	3.18 (9)
9 看 護 婦	3.11	2.97 (11)	3.12 (10)
10 乗り物で隣り合わせた人	3.10	3.16 (7)	3.20 (7)
11 待合室で隣り合わせた人	3.06	3.10 (9)	3.10 (11)
12 食堂や酒場で隣り合わせた人	2.92	2.88 (12)	2.88 (12)
13 心 安 い 人	2.21	2.02 (13)	2.10 (13)
全場面の平均	3.37	3.29	3.40

(注) 宮津・豊岡の()内の数字は、それぞれの丁寧度の順位。

を意識して話す場面であり、過度の緊張を強いられる状況である。したがって、これらの場面が最上位に位しているのであろう。

4位以下の場面は、相手がひとりか少数の場合である。その中で上位に位置しているものを眺めると、「学生時代の恩師」にみられる目上の人、あるいは「初対面の人」などのようなケースである。一方、下位に属するものには、「～で隣り合わせた人」や「心安い人」などが上がっている。これらは、今までみてきた丁寧度を規定する基準と一致しているといえる。

なお、宮津・豊岡調査のみに存在する項目の結果を、表3-8に掲げておく。ここでも、上下関係や親疎関係の軸が働いていることがわかる。

表3-8 一般場面接触態度（宮津・豊岡のみの項目）

場 面	宮津調査			豊岡調査		
	全体	男	女	全体	男	女
目 上	3.58	3.40	3.74	3.62	3.57	3.66
観 光 客	3.05	2.94	3.17	3.15	3.01	3.27
近所のあまり親しくない人	2.76	2.76	2.76	2.88	2.85	2.91
目 下	2.47	2.39	2.56	2.56	2.45	2.64
近所の親しい人	2.36	2.42	2.30	2.33	2.35	2.31
近所の子ども	1.81	1.82	1.81	1.98	1.99	1.97

3.2.6 職場生活場面

職場は、次項の学校生活場面同様、現代社会では家庭に次いで生活時間の重要な部分を占める生活空間となっている。したがって、そこでの人々の場面接触態度をみておく必要がある。

ただし、「職場場面」は有職者のみを、「学校場面」は学生のみを対象としているので、両場面ともに、当然のことながら有回答率が他の場面に比べて極端に少なくなっている。たとえば、他の場面での平均有回答率が9割から9割5分程度あるのに対して、職場場面のそれは、回答者全体で約半数、性別では男

性が7割，女性はわずか3割強に過ぎない。また，学校場面では，全体，男女ともに10数パーセントの有回答率を数えているにとどまっている。（詳しくは3.2.8を参照されたい。）

この点に留意してデータをみていただきたい。

「職場で」の場面接触態度は表3-9のようになっているが，ここでは，以下のような姿がみてとれる。

表3-9 職場生活場面への接触態度（豊中）

場 面	全体	男	女
1 公的な会議	3.94	3.90	4.01
2 公的な相談・打合せ	3.82	3.78	3.92
3 得意先の客	3.66	3.66	3.66
4 所属の異なる上司	3.66	3.58	3.82
5 初対面の訪問者	3.65	3.60	3.76
6 直属の上司	3.48	3.42	3.62
7 私的な相談・打合せ	2.90	2.87	2.99
8 出入りの業者	2.89	2.86	2.95
9 異性の親しくない同僚	2.81	2.74	2.96
10 異性の親しくない部下	2.66	2.61	2.77
11 同性の親しくない同僚	2.64	2.60	2.74
12 同性の親しくない部下	2.54	2.50	2.64
13 異性の親しい同僚	2.41	2.39	2.46
14 異性の親しい部下	2.40	2.38	2.46
15 同性の親しい部下	2.23	2.18	2.34
16 同性の親しい同僚	2.20	2.19	2.22
17 雑 談	1.99	1.98	2.01
全場面の平均	2.93	2.90	3.02

まず、用件でみると、丁寧度は、

	全体	男	女
公的な会議	3.94	3.90	4.01
公的な相談・打合せ	3.82	3.78	3.92
私的な相談・打合せ	2.90	2.87	2.99
雑談	1.99	1.98	2.01

の順になっており、職場では公私の要因が強く働いていることがわかる。

また、用件に係わるこの4場面を除いた、相手関係をみてみると、「得意先の客」が最も高く、以下「所属の異なる上司」、「初対面の訪問者」、「直属の上司」、「出入りの業者」の順で続き、職場の同僚・部下はいずれも下位場面に位置している。このことから、職場での話し相手への基準には、まず最初にミウチか否かを区別する意識が関わっているといえよう。

なお、上司への接触態度は、

	20代以下	30代	40代	50代以上
直属の上司	3.81	3.41	3.27	3.53
所属外の上司	4.09	3.70	3.43	3.48

と、回答者の年齢によって変化している。

次に、ミウチとして遇される同僚・部下についてみてみよう。

そこで、表3-9の該当部分を、図3-2のように整理し直してみた。

この図は、まず各相手ごとの丁寧度の順序・距離関係を基準とし、性別・親疎・上下関係の三つの軸（要因）の間の関係を示したものである。

これから、職場でのミウチ関係において、丁寧度を支える第一の要因は「親

疎関係」であり、「性別関係」がこれに続いていることがわかる。

また、この図をみる限り、「上下関係」の占める位置は小さくなっている。ただし、こ

親疎関係	異 性		同 性	
	同 僚	部 下	同 僚	部 下
親しくない	2.81	>2.66	2.64	>2.54
親しい	>2.41	2.40	>2.20	2.23

(注) >印は丁寧度の間に差があることをしめす。

図3-2 接触態度に及ぼす性別・親疎・上下3軸の関係

これは、先の分析で「上司」をミウチの外に置いて取り上げたことによっている。これをミウチに含めて扱えば、当然ながら「上下関係」が最も大きな要因となつてこよう。

なお、女性回答者にとっては、男性とは異なって、「同性の親しい部下」と「同性の親しい同僚」との間に丁寧度に若干の差がみられていることを付言しておく。

3.2.7 学校生活場面

学校場面における結果は、表 3-10 に示すとおりである。

ここでは、「校長・学長」への待遇が最も高く、次いで「初対面の訪問者」「担任以外の先生」「担任の先生」の順となっている。

表3-10 学校生活場面への接触態度（豊中）

場 面	全体	男	女
1 校長・学長	4.33	4.34	4.32
2 初対面の訪問者	3.80	3.79	3.81
3 担任以外の先生	3.45	3.56	3.31
4 担任の先生	3.36	3.49	3.19
5 異性の上級生	3.12	3.25	2.94
6 同性の上級生	3.04	3.11	2.94
7 異性の級友	2.16	2.33	1.90
8 異性の下級生	1.92	1.95	1.87
9 異性の親友	1.88	2.00	1.71
10 同性の下級生	1.80	1.73	1.90
11 同性の級友	1.68	1.71	1.63
12 同性の親友	1.36	1.40	1.31
全場面の平均	2.66	2.72	2.57

これらは、先にみた職場場面同様、学生・生徒にとっては、やはりソトの
関係にあるからだといえよう。ただし、「担任の先生」は数値の関係からみて、
ミウチとソトとの間に位置している存在だとも考えられる。

なお、職場場面と共通する「初対面の訪問者」について、両者の数値を比較
してみると、

	全体	男	女
学校生活場面	3.80	3.79	3.81
職場生活場面	3.65	3.60	3.76

と、全体・性別ともに、学校場面のほうが丁寧度が高くなっている。学校場面
の被調査者の学生に対して、職場場面の被調査者の年齢幅は広い。このことが、
同じく「初対面の訪問者」とする相手に対する待遇値の差となったとみられる。
そこで、職場場面の数値を年齢別にみると、

10代	4.29	20代	3.96	30代	3.69	40代以上	3.48
-----	------	-----	------	-----	------	-------	------

と、予想通り、回答者の年齢が低いほど相手への丁寧度は高くなっている！

次に、学生・生徒同士の関係をみてみよう。先の職場でのものと違って、こ
こでは回答者の性別によって若干の差異がみられる。

男子学生における丁寧意識要因は、性別・上下関係を軸として模式的に図
示すると図3-3として描くことができる。また、女子学生の場合は、同様に図
3-4のようになる。

これらの図は、丁寧度からみて似かよった要因は同じ箱に納めるように構成

	異 性				同 性			
上級生	① 3.25				② 3.11			
同級生	④ 2.00	親 友	級 友	③ 2.33	⑦ 1.71	級 友	親 友	⑧ 1.40
下級生	⑤ 1.95				⑥ 1.73			

されている。(ちなみに、表中の数値は丁寧度、また○囲みの数字は丁寧度の順位である。)

両図から、以下のこ
とがわかる。

まず第一に、回答者
の性別を問わず、相手

図3-3 男子学生における丁寧度規定要因図

が「上級生」の場合、他に比べて格段に丁寧な表現をすべきだということによって一致していることがわかる。なお、相手が「上級生」の場合、男子では相手の性別によってさらに丁寧度に差異がみられてい

	異 性		同 性	
上級生	① 2.94		① 2.94	
同級生	③ 級 1.90 友	親 ⑥ 友 1.71	⑦ 級 1.63 友	親 ⑧ 友 1.31
下級生	⑤ 1.87		③ 1.90	

図3-4 女子学生における丁寧度規定要因図

るが、女子の場合は相手の性別は丁寧度においては特別の意味をもっていないことが注目される。

一方、ことばづかいに最も気を使わない相手は、予想通り、「同性の親友」となっている。

ここまでは、男女双方で一致しているが、同級・下級の年齢軸と相手の性別の軸の扱いにおいて考え方の差異がうかがわれる。

男子学生の場合、年齢軸よりも相手の性別のほうが重要な要因となっている。つまり、他が同じ条件であるなら、同性よりも異性に対して常に丁寧に対処すると意識している。

これに対して女子学生の場合、「異性の親友」を「同性の級友」と近い位置に置いていることなどからみて、性別の要因というよりは、親しさの関係が重んじられているように思われる。

3.2.8 無回答率について

以上、各場面における丁寧度についてみてきたが、場面によっては「無回答」の占める割合の高いものも少なくない。

豊中調査の場合について、大場面ごとの無回答率を示したのが、表 3-11 である。(単位は%。表中の括弧内の数値は中央値。)

この表をみると、職場生活場面と学校生活場面において無回答率が著しく高くなっている。その理由は先にも述べたように、この両場面がそれぞれ有職者

表3-11 大場面ごとの平均無回答率（豊中）

大場面	全 体	男	女
a 家庭生活場面	10.2 (7.7)	7.8 (5.4)	12.7 (9.8)
b 買物・食事場面	5.8 (5.5)	4.3 (4.3)	7.5 (6.9)
c 近隣生活場面	5.3 (5.4)	5.4 (5.6)	5.2 (5.1)
d 道聞き場面	6.2 (6.1)	4.7 (5.0)	7.8 (7.5)
e 一般場面	8.8 (6.9)	6.9 (5.0)	10.8 (8.9)
f 職場生活場面	48.2 (47.9)	29.7 (29.0)	67.7 (67.5)
g 学校生活場面	84.9 (84.8)	82.7 (82.6)	87.2 (87.4)
a～e場面の平均	7.9 (6.5)	6.2 (5.0)	9.7 (8.1)

（注）（ ）内の数値は中央値。

および学生のみを対象としているためである。

なお、宮津・豊岡両調査では、家庭生活場面、買物・食事場面および一般場面に関する調査が実施されているが、それぞれにおける平均無回答率をみると、次のようになっている。（括弧内は中央値。）

	宮 津	豊 岡
家庭生活場面	21.2 (20.0)	20.0 (18.0)
買物・食事場面	23.1 (21.7)	18.9 (17.7)
一般場面	20.3 (17.6)	17.7 (15.3)
【場面全体】	21.1 (18.6)	18.6 (17.4)

両調査とも、豊中に比べて、無回答率が著しく高くなっている。この理由は定かではないが、豊中調査の場合はアンケート調査のみであったのに対して、宮津・豊岡調査ではこれに加えて面接調査をも行ったということが関係しているかも知れない。

大場面における無回答の状況は以上のようなものである。次に、個々の小場面について、無回答の割合が高い項目を抽出してみよう。

項目抽出の基準はむずかしいが、ここでは、無回答率の高い宮津・豊岡調査

でのその平均的な値である 20 % を上回るものを選択することとした。

そこで、3 市のうち、いずれか 1 市以上で無回答率が 20 % を超える項目（場面）を抽出してみる。

表 3-12 は、そのうちの、場所や状況に係わる場面である。

表3-12 無回答率20%以上の「場所・状況場面」

場 面	宮津	豊岡	豊中
テレビ出演	45.9	41.1	29.3
結婚式のスピーチ	33.1	24.3	14.1
高級レストラン	32.1	25.5	8.1
デパート	28.6	21.3	5.4
食堂・酒場	25.5	20.7	8.5
大衆食堂	24.1	18.9	6.5
スーパー	21.7	17.7	5.2

表に上げられた場面をながめると、どの地域社会でも上位に、「テレビ出演」や「結婚式のスピーチ」などがきている。これらは、一般には経験することの少ない場面であるということからみて、当然のことといえよう。

一方、「高級レストラン」以下の場面（店）をみると、無回答率は、大都市豊中とそれ以外の地域とに大きな断層があり、宮津市で最大になっている。このことは、宮津・豊岡での無回答率が全般に高いという事情を考慮したとしても、都市の規模や状況によって明らかな地域差がみられることを意味しているといえよう。

次に、無回答率の高い相手場面（対者場面）についてみてみよう。表 3-13 がそのリストである。

これによると、「同年輩の家族」など家族関係にある相手が上位を占めていることがまず目につく。しかし、これは当然のことであって、年齢の高い被調査者にあつては、自分よりも「目上の家族」のある人は少なく、また「同年輩

表3-13 無回答率20%以上の「相手場面」

場 面	宮津	豊岡	豊中
同年輩の家族	30.7	27.3	14.5
配 偶 者	30.3	29.1	27.1
目上の家族	27.9	22.8	12.1
目下の家族	22.4	19.8	8.9
御用聞き	22.4	20.7	6.3
見知らぬ店員	21.0	17.4	5.9
心安くない人	20.7	18.6	8.3
待合室で隣合わせた人	20.3	17.7	6.9
乗物で隣合わせた人	20.3	16.2	6.9
セールスマン	20.0	17.4	5.0

の家族」さえも少ない。一方、若い世代では、「目下の家族」および「配偶者」をもっている比率は小さい。このような事情に加えて、日本社会の核家族化の影響があつて、このような数値となつたのであろう。

「御用聞き」以下の相手については、無回答の比率が都市ごとにほぼ一定していることを考慮すると、やはり、日常、これらの相手と接触する機会の多少が関与しているとみなされよう。

3.2.9 全場面を総合して

以上、各場面を個々にみてきたが、ごく簡単に全場面のまとめを行うこととしよう。

各場面に対する丁寧度には、地域差のみられるものもあつたが、全体としてよく似た傾向を示しているという印象を得ている。

そのことを確かめるために、豊中・宮津・豊岡の3市に共通する全場面の丁寧度の相関を求めてみた。その結果、

豊中－宮津 0.979 豊中－豊岡 0.989 宮津－豊岡 0.979

と、いずれも1に近い相関が得られている。このことは、多少の地域的事情により差異はあるとしても、丁寧に待遇すべき相手や状況への認識は意外に一致していることを物語っている。場面差に着目する研究に対して、一定の保証を与えるものといえよう。

そこで、全場面の関係を一望するために、全場面を一つの図で表現することを試みてみた。

作図の対象とするデータは、前項までに中心的にみてきた豊中調査の結果を用いることとする。ただし、職場生活場面と学校生活場面とは、回答者が一定の範囲に偏っているので、除外し、残りの場面を扱うことにする。

図を作成するに当たって、今まで検討を加えてきた結果を考慮して、場面をまず、「場所・状況」に関する場面と、「相手」に関する場面とに二分し、後者をさらに「身内」(家族と親族とに区分)と「非身内」(親疎の関係を考慮する)とに細分することとした。

そして、この場面区分にしたがって、それぞれの場面を丁寧度の値との関係でプロットしたものが、図3-5である。

図をみると、大局的には、左下がりの様相となっているといえる。しかし、「デパート」や「スーパー」などの全体の布置から逸脱しているような場面もいくつかみられる。縦軸を、「改まりーくだけ」の軸だといえやすむことではあろうが、さらに今後の検討が必要であろう。

3.3. 注意を払うことばの側面

以上でみてきた場面接触態度に関する調査は、ことばづかいにどの程度注意をはらうかを尋ねたものである。しかし、ことばづかいと一口に言っても、その内容にはさまざまなものが含まれている。この調査では、その内容を規定せずに行われており、また被調査者がどのような側面に留意して回答したかをも尋ねていない。

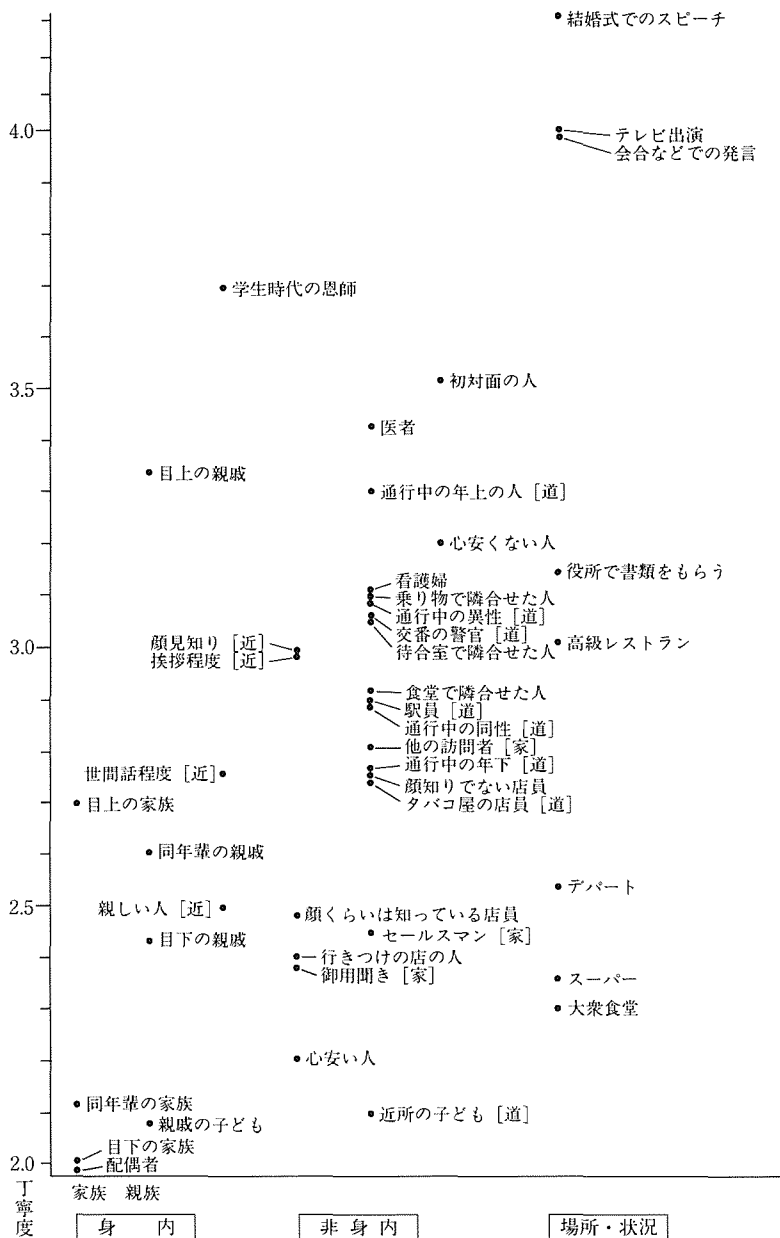


図3-5 全場面の総合図 [豊中]

そこで、この章を終えるに当たって、ことばづかいに注意する場合、ことばのどの側面に気をつけるかを尋ねた調査の結果をごく簡単に記しておこう。これは、豊岡の調査（面接調査）だけで実施されたもので、設問文は、

「あなたは、ことばづかいに注意をはらう場合、どんな点に注意しますか」というものである。

この質問は、原則として、自由回答を求めるものであるが、被調査者の側から回答が出ない場合には、「方言」「敬語」などが記されたリストを提示することになっている。

結果は、表 3-14 に掲げるとおりである。

表3-14 ことばづかいに注意する点（豊岡。複数回答有）

		注意 しない	方言	敬語	アクセ ント	発音	その他
全 体		12.6	24.6	53.8	3.6	11.1	7.8
性 別	男	11.0	24.1	57.2	4.1	13.8	11.0
	女	13.8	25.0	51.1	3.2	9.0	5.3
年 齢	10代	7.4	7.4	70.4	0.0	14.8	7.4
	20代	7.3	25.5	69.1	9.1	18.2	7.3
	30代	15.9	20.3	60.9	5.8	10.1	8.7
	40代	7.8	23.4	54.7	0.0	10.9	7.8
	50代	21.5	26.2	38.5	4.6	7.7	9.2
	60代	11.3	37.7	37.7	0.0	7.5	5.7
学 歴	低	20.0	27.5	35.0	3.3	5.8	7.5
	中	8.2	25.8	62.9	2.5	13.8	8.2
	高	9.3	14.8	68.5	7.4	14.8	7.4

まず、ことばづかいに「注意しない」という回答についてみよう。

この回答は、被調査者全体の1割強を占めている。この数値は、ことばづかいに無頓着な人が意外に少ないとみるか、いや「どの点に注意するか」という

問への答えであるので実際はもっと多いとみるべきか、いろいろな見方がある。それはともあれ、「注意しない」とする回答を属性別にみると、高年齢層、また低学歴層に多くなっていることがわかる。

次に、「注意する」という人の場合をみてみよう。この項目では、注意することばの側面はいくつ答えてもいいことになっている。つまり、複数回答を許しているわけで、回答率の合計は100%を超えるようになっている。

注意する点で最も多い回答は、「敬語」に関するものであり、これは全体の過半数を得ている。(注意するという人を母数とすると、61.5%に及ぶ。)

属性別にみると、この回答は、「注意しない」の裏返しに近い状況を呈している。つまり、年齢では若い人ほど多く、また学歴では中同学歴が低学歴層に比べてはるかに高率になっている。

この背景には、高年齢層の場合、話し相手との関係は自分のほうが年長であり、ことばづかいに注意を払う必要のないケースが多いという事情があろう。また、現在の日本社会では、年齢と学歴との間に一定の関係があり、高齢者の学歴は相対的に低い位置にある。このことが、低学歴層の数値に反映しているといえよう。

第2位にあがっているのは、「方言」であり、全体の4分の1を占めている。これは、年齢の高いものに、また学歴の低い者に多くなっている。「敬語」の場合と違って、若い人(相対的学歴も高い)はあまり方言で苦勞しなくなっているのに対して、高齢者においてはそうではないからだろう。

「発音(の明瞭さ)」を上げるものは全体の1割程度であり、若い世代と中同学歴層に比較的多くなっている。また、「アクセント」はごく少数の者が上げたに過ぎないが、30代と高学歴者とにおいて、これを上げる者が多いことが目立つ。「発音」や「アクセント」を取り立てて指摘するには一定の知識を必要とする面がある。通常は、あまり意識にのぼらない事項であろう。

なお、「その他」(26人。これも複数回答あり)には、

相手を傷つけない	20人	相手によって	13人
わかりやすく	8	きれいに	5
文末表現	4	乱暴なことば	2

とする回答が得られている。

以上でみてきたように、人々がことばづかいに注意を払う場合、最も多いのは「敬語」ということに含まれる現象であって、これに次ぐのが「方言」の問題ということになる。

社会言語学の中心課題は、この二つに「外来語」を加えたものだという意見があるが、一面の真理をついているということもできようか。

4. 1日の言語生活

我々は日常、話す・聞く・書く・読むという4種類のタイプの言語行動を行って生活している。これらの言語行動は日常のさまざまな場面で具現化し、我々の言語生活を形づくっている。ここでは、「相談」、「さしずする」などの具体的な各種言語行動との接触頻度を、言い換えれば日常どのくらいの頻度で各種言語行動に接しているのかを、アンケート調査の結果によって見ていくことにする。

調査の方法としては、次にあげるような2種類のものが考えられよう。

一つは、「きのう」という1日の行動に限定してたずねる方法である。通常、「あなたは、きのうどんなことをしましたか。」といった質問文で、該当する選択肢にチェックしてもらう方法をとる。この方法を便宜的に「前日行動チェック方式」と呼ぶことにしよう。

もう一つの方法は、ある単位期間に平均何回くらいその場面を経験するのかをたずねるものである。今回の調査では、「平均すると1週間にどのくらい次の場面を経験しますか。」といった質問文を用いた。この方法を「平均頻度回答方式」と呼ぶことにする。豊中、宮津の両調査では平均頻度回答方式を採用し、豊岡調査では前日行動チェック方式で調査を実施した。

なお、調査票の具体的イメージおよび選択肢については、「9. 調査票」の項を参照されたい。また、取りあげた言語行動場面は、比較のことも考慮して各調査地域でできるだけ同じになるように設定したが、いくぶん異なるものも含まれている。そこで各調査ごとの設定場面の概略と場面数を以下に示すことにする。

豊岡調査では職場と学校との場面の区別をせずに、まとめて質問したのであるが、属性を参照することによって勤労者と学生とに分けて集計してある。*印の箇所がその部分である。

	豊中調査	宮津調査	豊岡調査
a. 家庭の中で話す	14 場面	17 場面	18 場面
b. 近所の親しい人と話す	12	15	15
c. 近所のあまり親しくない人と話す	12	12	12
d. 職場で話す	16	20	18 *
e. 学校で話す	13	16	18 *
f. 喫茶店やレストランで話す	6	9	9
g. 電車やバスの中で話す	—	6	6
h. その他の場所で話す	8	10	12
i. 聞く、書く、読む	—	—	31
合 計	81	105	121

なお、他章での宮津調査と豊岡調査に関しては、言語生活調査に協力してもらえなかった被調査者の資料も集計の対象としたが、この章では面接調査だけへの回答者の分は除外することにした。従って、豊中の被調査者数は従来どおり 505 名（男 259 名，女 246 名）であるが，宮津，豊岡で集計の対象となった被調査者は，宮津で 278 名（男 138 名，女 140 名），豊岡で 328 名（男 143 名，女 185 名）となり，面接調査項目の被調査者の数とは若干異なっている。

以下で各行動場面ごとの接触頻度について，性，年齢などを考慮しながら概観していくことにしよう。この章で示す表中の数字は，とくに断らないかぎり豊中，宮津では 1 週間当たりの平均回数，豊岡では「した」と答えた人のパーセントを示している。その母数は上述したとおりである。また，表中の配列は原則として豊岡調査の順位によっている。

4.1. 家庭内でどんな種類の話をするか

表 4-1 は家庭内の談話行動のうち雑談を除いて性別に集計したものである。まず，家庭内で話をする場合でいちばん頻度の高かったものは「用事の話」で

あり、これはどの地域でも共通している。豊岡では比較的順位の低かった「注意やごごと」が、豊中、宮津では2位になっている。週平均で8回前後ということは毎日のように注意やごごとを言っていることになる。特に、女性の数値の高さが目につく。「さしずした」と「さしずされた」とでは、「さしずした」のほうが平均回数や比率が大きくなっている。比較的男女差は少ないが、豊中では女性の平均が大きくなっている。年齢別に見ると、「客と応対」は年齢が高くなるにつれて頻度が高くなるのであるが、とくに、宮津でこの傾向が顕著である。豊岡では、これらの項目に加えて、「セールスマン等と応対」という場面をたずねている。表には示さなかったが、全体で19.5%（男14.7%，女23.2%）であった。

表4-1 家庭での話（性別）

	豊中調査			宮津調査			豊岡調査		
	男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体
用事の話	9.3	13.6	11.4	12.1	13.5	12.8	49.0	45.4	47.0
客と応対	5.1	6.6	5.8	8.5	8.1	8.3	27.3	38.4	33.5
さしずした	4.9	6.8	5.8	5.0	5.0	5.0	29.4	28.6	29.0
相談	2.9	3.1	3.0	3.0	3.2	3.1	25.2	21.1	22.9
家人に注意やごごと	5.7	10.2	7.9	7.6	9.8	8.7	14.7	28.1	22.3
さしずされた	2.9	3.8	3.3	2.9	3.1	3.0	5.6	20.5	14.0
言い争い	1.7	2.3	2.0	2.0	1.9	1.9	2.8	4.3	3.7

次に家庭内での雑談を見てみよう（表4-2）。宮津、豊岡では「夕食どきの雑談」が圧倒的に多くなっているが、豊中では「食事どき以外の雑談」がいはん多く、僅差で「夕食どきの雑談」が続いている。楽しい夕げの語らいのシーンを彷彿とさせるものがある。雑談全体を見渡してみると、例外なく女性が男性を圧倒している。やはり、どの地でも女性のほうがおしゃべりなのであろう。

次に、雑談の相手を見てみよう。「子供との雑談」や「配偶者との雑談」は

表4-2 家庭内での雑談（性別）

	豊中調査			宮津調査			豊岡調査		
	男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体
夕食どきの雑談	7.0	8.7	7.9	8.7	10.1	9.4	59.4	76.2	68.9
朝食どきの雑談	4.8	6.8	5.8	5.0	6.7	5.8	30.1	50.3	41.5
食事どき以外の雑談	7.0	9.5	8.3	6.2	8.7	7.5	30.8	49.2	41.2
昼食どきの雑談	2.7	4.4	3.5	3.3	6.4	4.9	23.1	47.6	36.9
夕食後の雑談	6.6	7.2	6.9	6.8	8.8	7.8	34.3	37.3	36.0

子供との雑談	5.9	9.4	7.7	39.9	55.1	48.5
配偶者との雑談	8.7	6.9	7.8	51.7	44.3	47.6
親との雑談	3.5	4.1	3.8	28.0	28.1	28.0

かなりの頻度を獲得しているが、「親との雑談」はそれほどでもない。「子供との雑談」には女性が、また「配偶者との雑談」には男性のほうがやや多く接している。年齢別分布を見ると、「親との雑談」は若年層に多く、「子供との雑談」と「配偶者との雑談」は30～40歳代の中間的年齢層が多くなっている。

4.2. 近所の人とどんな種類の話をするか

はじめに近所の親しい人の場合を見てみよう（表4-3）。家庭での話と比べ、かなり数値が少なくなっている。その少ない中で、「雑談」だけがかなりの頻度を示している。豊岡で4割くらいの人が前日に雑談を経験し、豊中、宮津では2日に1回くらいの割合で雑談を経験していることがわかる。近所の親しい人との間で、雑談以外の話をするのはあまり多くないようである。また、話をする場所としては、「路上」が圧倒的である。自分の家、相手の家を問わず、家にまで上がり込んで話をするケースはそう多くないのであろう。また、如何に親しい近所の人であっても、物の貸し借りはそうはしないのが普通のようなだ。

表4-3 近所の親しい人と（性別）

	豊中調査			宮津調査			豊岡調査		
	男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体
雑談	1.9	4.8	3.3	3.0	3.4	3.2	32.2	47.0	40.5
私事の相談・打合せ	0.8	1.4	1.1	0.7	0.9	0.8	7.0	11.4	9.5
町内会などの連絡	0.3	1.0	0.6	0.7	0.5	0.6	9.8	8.6	9.1
知人などのうわさ話	0.7	1.6	1.1	1.2	1.8	1.5	6.3	7.0	6.7
交渉・話合い	0.6	0.7	0.6	0.7	0.3	0.5	7.0	5.4	6.1
物を貸す	0.4	0.4	0.4	0.4	0.3	0.3	2.1	3.8	3.0
物を借りる	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	2.1	2.2	2.1

路上その他で話す	1.8	3.0	2.4	37.1	40.5	39.0
自分の家で話す	0.9	1.5	1.2	7.0	24.9	17.1
相手の家で話す	0.8	0.8	0.8	16.8	14.1	15.2

表4-4 近所のあまり親しくない人と（性別）

	豊中調査			宮津調査			豊岡調査		
	男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体
雑談	0.2	0.4	0.3	0.4	0.4	0.4	6.3	11.4	9.1
町内会などの連絡	0.2	0.3	0.2	0.4	0.2	0.3	4.9	5.9	5.5
交渉・話合い	0.1	0.1	0.1	0.0	0.1	0.1	3.5	0.5	1.8
知人などのうわさ話	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.7	1.6	1.2
私事の相談・打合せ	0.0	0.1	0.0	0.0	0.1	0.1	1.4	1.1	1.2
物を貸す	0.1	0.1	0.1	0.1	0.0	0.1	0.7	0.5	0.6
物を借りる	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.7	0.0	0.3

近所のあまり親しくない人との間では、日常の言語生活は非常に乏しいものとなる。表4-4のとおりとなり、頻度を語るうえでほとんど意味をなさない程度の数値であろう。ここでは、結果だけを示すにとどめる。

4.3. 一般社会でどんな話をするか

街中でどのような場面と接触する機会が多いのだろうか。すべての場面を洗い出すことは到底不可能であるので、その中のいくつかの場面を選んでたずねてみた。「レストラン・喫茶店で」と「電車やバスの中で」の2つについては、どのような人と同席するケースが多いのかを見たものである。表4-5と表4-6に結果を示しておく。ただ、あまり頻度が多くないので、この結果から何らかの傾向を読みとるのは難しそうである。

以前、国立国語研究所が行った「大都市における言語生活の実態調査」の、大阪市での結果を見ると、「レストラン・喫茶店で」の比率は22.3%（男

表4-5 レストラン・喫茶店で（性別）

	豊中調査			宮津調査			豊岡調査		
	男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体
親しい人と	1.7	1.2	1.4	0.8	0.4	0.6	14.7	9.7	11.9
職場の人と				1.0	0.3	0.6	16.8	4.9	10.1
同年輩の人と	2.3	1.5	1.9	1.0	0.4	0.7	10.5	6.5	8.2
目上の人と	1.4	0.9	1.1	0.6	0.2	0.4	8.4	5.4	6.7
家族と	0.5	0.8	0.6	0.4	0.2	0.3	2.8	6.5	4.9
目下の人と	1.8	0.8	1.3	0.6	0.2	0.4	7.0	2.2	4.3
あまり親しくない人	0.4	0.2	0.3	0.2	0.0	0.1	2.1	2.7	2.4
近所の人と				0.1	0.1	0.1	2.8	2.7	2.7
サークルの友人と				0.3	0.1	0.2	2.8	1.6	2.1

33.5%, 女9.1%)となっていた。今回の結果と比べると、全体の比率はともかく、男性が多く接するという男女差の面で共通性がある。これに対して、表4-7に示すように「買い物で店の人と」や「立ち話」などは女性に特徴があ

表4-6 電車やバスの中で（性別）

	豊中調査			宮津調査			豊岡調査		
	男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体
親しい人と	0.8	1.1	1.0	0.3	0.2	0.3	4.2	7.0	5.8
同年輩の人と	1.2	1.4	1.3	0.6	0.2	0.4	0.7	6.5	4.0
家族と	0.3	0.9	0.6	0.1	0.1	0.1	2.8	3.8	3.4
あまり親しくない人	0.2	0.3	0.2	0.1	0.1	0.1	1.4	3.2	2.4
目上の人と	0.5	0.5	0.5	0.2	0.1	0.1	1.4	1.6	1.5
目下の人と	0.8	0.5	0.6	0.2	0.1	0.2	1.4	1.1	1.2

表4-7 その他の場所で（性別）

	豊中調査			宮津調査			豊岡調査		
	男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体
買い物で店の人と	1.8	6.3	4.0	1.8	3.2	2.5	12.4	44.7	31.1
連れと歩きながら	2.7	3.7	3.2	2.2	1.6	1.9	10.3	18.1	14.9
立ち話	1.4	2.4	1.9	1.0	1.6	1.3	8.3	17.6	13.7
受付や窓口で	1.6	2.3	2.0	1.2	0.9	1.1	9.0	10.1	9.8
医者や看護婦と	0.8	2.5	1.6	1.0	1.3	1.2	2.1	10.1	6.7
道などを教えた	0.6	0.9	0.8	0.6	0.3	0.5	6.9	6.4	6.7
人の家を訪ねて	1.1	1.3	1.2	2.0	0.6	1.3	4.8	5.3	5.2
酒を飲みながら				0.8	0.2	0.5	6.2	1.6	3.7
観光客と				0.5	0.2	0.4	2.1	3.2	2.7
道などを聞いた	0.4	0.7	0.5	0.2	0.1	0.2	1.4	0.0	0.6

る言語行動場面ということができよう。年齢との関係に着目すると、「買い物で店の人と」は高年齢になるにつれて頻度がふえている。これに対して「連れと歩きながら」は年齢が低くなるにつれて多くなり、特に10歳代の頻度の高さが目立っている。

4.4. 職場や学校でどんな話をするか

ここで集計の対象とした被調査者は、これまでのものとは異なり、職場での項目に関しては勤労者を、学校での項目に関しては学生を対象として集計した。集計対象の被調査者数は次のとおりである。

豊 中 勤労者 281人(男 197人, 女 84人), 学生 70人(男 42人, 女 28人)

宮 津 〃 200人(男 118人, 女 82人), 〃 31人(男 18人, 女 13人)

豊 岡 〃 221人(男 130人, 女 91人), 〃 25人(男 9人, 女 16人)

学生数が少ない点が気になる点であるが、調査全体の規模から見て仕方ないところであろう。ここでの項目も他と同様、「どのような人と」という観点と「どのような内容の」という2つの視点が含まれている。個々の結果について以下で見ていくことにしよう。

(1) 職場で

まず、職場でだれと話したのかを、表4-8で見よう。すべての地域で一番というわけではないが、「友達・同僚」はどの地域でも回答が集中している。また、「上役」、「部下」なども比較的高い頻度を示しているが、「友達・同僚」とはいくぶん差が出ている。職業上の必要からか、「客」も各地域共通して頻度が高いものとなっているが、豊中だけこの「客」の頻度が極端に多くなっているのはどうしてだろう。接客を業としているものが多かったのだろうか。残念なことに豊中調査では職業をたずねていないので、この辺の事情をうかがい知ることはできない。「初めての人」、「心安くない人」と話す頻度が少ないのは当然であろうが、豊中の週平均4回以上は意外と多いように思われる。各項目を性別に見ても、傾向だった特徴は見いだせないようである。

表4-8 職場で（だれと話したか）（性別）

	豊中調査			宮津調査			豊岡調査		
	男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体
友達・同僚	10.7	14.0	11.6	8.7	9.0	8.8	40.5	35.2	38.2
客	13.5	22.7	16.2	8.5	8.2	8.4	30.5	23.1	27.5
上役	7.4	8.2	7.7	4.6	3.8	4.3	24.4	31.9	27.5
部下	11.0	5.0	9.2	8.8	2.0	6.0	17.6	9.9	14.4
初めての人	3.5	5.9	4.2	1.8	0.7	1.4	11.5	9.9	10.8
心安くない人	3.6	5.6	4.2	1.4	1.1	1.3	10.7	3.3	8.6
サークルの人				0.4	0.2	0.3	6.4	1.1	4.5

次に、どんな内容の話をしたのかを見てみよう（表4-9）。「雑談」や「仕事上の相談」が上位に位置している。また、「さしずした」は「さしずされた」よりかなり多くなっている。年齢別に見ると、「さしずした」は30歳代から50歳代に多く、「さしずされた」は20歳代に多くなっている。「交渉・話し合

表4-9 職場で（どんな内容の話をしたか）（性別）

	豊中調査			宮津調査			豊岡調査		
	男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体
雑談	12.7	15.7	13.6	15.9	11.1	13.9	26.0	23.1	24.8
仕事上の相談	12.6	10.6	12.0	6.7	6.3	6.5	22.9	14.3	19.4
さしずした	11.3	7.0	10.0	6.8	5.5	6.3	20.6	5.5	14.4
さしずされた	4.6	4.9	4.7	2.2	4.6	3.2	14.5	7.7	11.7
交渉・話し合い	9.2	4.9	7.9	3.5	1.8	2.8	14.5	5.5	10.8
会議	1.8	1.1	1.6	0.9	0.4	0.7	12.2	3.3	8.6
質問	6.7	6.4	6.6	3.5	4.6	4.0	9.9	3.3	7.2
私事の相談・打合せ	4.2	2.8	3.8	2.0	3.5	2.6	5.3	6.6	5.9

い」は、豊中で比較的高い頻度を示しているが、他ではそうでもない。「会議」、
「私事の相談・打合せ」なども意外と少なく思える。

(2) 学校で

学校での場面における集計結果は、表4-10、表4-11のとおりである。

表4-10 学校で（だれと話したか）（性別）

	豊中調査			宮津調査			豊岡調査		
	男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体
友達・同級生	19.5	23.0	20.9	18.9	19.3	19.1	77.8	62.5	68.0
先生	6.1	4.3	5.3	5.9	10.5	7.8	66.7	56.3	60.0
下級生	2.4	2.4	2.4	1.1	3.2	1.9	22.2	50.0	40.0
クラブの人と				8.6	5.7	7.4	33.3	37.5	36.0
上級生	3.1	3.0	3.1	1.4	1.3	1.4	22.2	6.3	12.0
初めての人	1.3	1.0	1.2	0.7	0.5	0.6	11.1	12.5	12.0
心安くない人	1.2	1.2	1.2	0.6	2.3	1.3	0.0	0.0	0.0

表4-11 学校で（どんな内容の話をしたか）（性別）

	豊中調査			宮津調査			豊岡調査		
	男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体
雑談	18.2	19.1	18.6	26.9	20.0	24.0	55.6	50.0	52.0
私事の相談・打合せ	4.6	4.5	4.6	4.3	3.4	3.9	11.1	31.3	24.0
質問	4.7	2.0	3.6	3.3	3.2	3.2	22.2	25.0	24.0
勉強のための相談	3.8	3.0	3.5	3.1	4.4	3.7	11.1	18.8	16.0
交渉・話合い	3.6	3.2	3.4	3.4	2.2	2.9	11.1	6.3	8.0
さしずした	5.6	3.4	4.7	3.6	2.0	2.9	11.1	6.3	8.0
さしずされた	4.1	1.9	3.2	1.8	2.4	2.1	11.1	6.3	8.0

まず、だれと話したかといった観点では、「友達・同級生」が圧倒的に多くなっている。また、話の内容では「雑談」が断然多いといった面から見ても、職場と共通した傾向が現れている。

大都市での調査や豊岡調査では、「職場や学校で話をしましたか」という具合に、社会人と学生に対して同じ設問でたずねているが、(1)、(2)の結果から見て、理にかなった方法といって差し支えないようである。

4.5. いつあいさつをするか

近所の人とのあいさつ行動は、1日の言語生活の中でもウェイトの高いものであろう。ここでは、朝、昼、夕方の3つの時間帯について、「近所の親しい人と」と、「近所のあまり親しくない人と」のそれぞれで、どれくらいの頻度であいさつをするのかたずねた。結果は表4-12のとおりである。「朝のあいさつ」の比重がきわめて高く、次いで「夕方」、「昼」の順になっている。すべての場面、すべての地域で、差の大小はあるものの、女性の頻度が男性のそれより高くなっている。その中では、「昼のあいさつ」の男女差が一番大きい。職

表4-12 あいさつ（性別）

		豊中調査			宮津調査			豊岡調査		
		男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体
近所の 親しい人と	朝	4.5	7.7	6.0	7.7	8.9	8.3	64.3	71.9	68.6
	昼	2.4	4.4	3.4	3.2	5.8	4.5	25.2	45.9	36.9
	夕方	2.7	5.4	4.0	4.2	4.6	4.4	39.2	55.1	48.2
近所のあまり 親しくない人と	朝	1.9	3.5	2.7	3.0	3.6	3.3	39.9	46.5	43.6
	昼	0.7	2.3	1.5	1.4	1.9	1.7	13.3	24.3	19.5
	夕方	1.3	2.6	1.9	2.0	2.4	2.2	24.5	33.0	29.3

業を持っている人達は昼家にいることは希であり、その勤労者の多くは男性であるから当然このような結果となることは予想できる。また、個々人の朝の生活開始時間のばらつきは、夕方または夜の帰宅時間のばらつきに比べて少ないであろうから、朝近所の人と会う可能性は夕方より相当高いと思われる。朝と夕方の差はこのようなところに由来しているのではないだろうか。

親しい人に対するあいさつが親しくない人とのものに比べ多くなるのは当然として、親しくない人に対するあいさつの頻度が結構高いものになっている。あまり親しくない人に対しても、日常のあいさつだけは行うというのが近所づきあいにおけるあいさつ行動の基本なのであろう。

豊中と宮津の平均接触回数を比較すると、総じて豊中のほうの回数が少なくなっている。大都市の言語生活と地域社会の言語生活の違いの一面がここにも現れている。

4.6. 電話でどのくらい話すか

電話での話については、家庭で「受けた」あるいは「かけた」という場合の頻度、近所の親しい人との場合のもの、近所のあまり親しくない人とのもの、職場でのものというように、大きく4つに分けてたずねた。表4-13にその結果を示すことにする。

共通して言えることは、どのような場面でも「電話を受けた」という回答が「かけた」という回答より多くなっている点である。これは前出の大都市での調査でも同様の結果となっている。大都市の報告書を引用すると、『電話は1対1のコミュニケーションであるから、日本中を調べれば、かけた人と受けた人の数は等しくなるはず』とある。この種の調査結果が一様に「受けた」ほうの回数が多くなるということは、発信源が特定の所に集中しているということなのだろうか。セールスなどの商業的な内容を目的とした電話が数多く含まれ

ている可能性があり、そのあたりに原因があるのかも知れない。

表4-13 電話で（性別）

		豊中調査			宮津調査			豊岡調査		
		男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体
家庭で	受ける	5.5	10.3	7.9	7.5	9.3	8.4	48.3	66.5	58.5
	かける	3.9	5.9	4.9	5.1	5.3	5.2	39.2	47.0	43.6
近所の親しい人と	受ける	1.4	1.9	1.6	1.3	2.5	1.9	15.4	26.5	21.6
	かける	0.9	1.5	1.2	0.8	1.8	1.3	15.4	21.6	18.9
近所の親しくない人と	受ける	0.2	0.4	0.3	0.5	0.3	0.4	9.8	8.6	9.1
	かける	0.1	0.2	0.2	0.1	0.2	0.2	4.9	4.3	4.6
職場で	受ける	25.9	22.1	24.7	15.4	9.9	13.1	39.2	28.4	34.7
	かける	22.2	15.6	20.3	13.5	7.3	11.0	36.0	17.0	28.2

家庭では、「受けた」、「かけた」とも女性のほうが多くなっている。在宅率との関連が高いのであろう。近所の人とは電話というメディアを使ったコミュニケーションはあまり行われていないようである。近所ということで、行けば用が足りるということでもあろう。近所のあまり親しくない人に対するより、親しい人に対する頻度のほうが多くなっているのは当然のことである。

職場での電話は、これまでとは逆に「受けた」も「かけた」も男性のほうが多くなっている。職業を持っている人についての集計であることを考慮すると、職場での対外的な部分は、まだ男性に依存している部分が大きいということなのであろうか。

年齢別の分布を見ると、「受けた」、「かけた」とも、30歳代以上のいわゆる“働き盛り”の頻度が、20歳代以下の頻度の倍以上になっているのが目立っている。

4.7. 何をどのくらい聞き、読み、書いたか

言語行動は、大きく分けて「話す」、「聞く」、「書く」、「読む」という4つから成り立っている。前節までで、「話す」に関して細かく見てきた。ここでは残りの3つの行動を見ていくことにしたい。これらに関しては豊岡市だけで調査が行われたので、比較の対象として、1975年に大阪市で行われた調査の結果を併せて示すことにしたい。

(1) 何をどのくらい聞いたか

表4-14は、「聞きましたか」という問に対する結果である。「駅などの案内」が豊岡では8位なのに大阪では4位である点以外は、順位がすべて一致している。マスコミ媒体への接触としては「テレビ」が「ラジオ」の倍以上となっている。9割近くもの人がテレビに接していることに驚くより、1割の人がテレビを見なかったことに注目すべきかも知れない。それほどテレビは我々の言語生活に密着したものということが言えよう。「駅などの案内」の比率の違いは、

表4-14 聞きましたか (性別)

	大 阪 '75				豊 岡 調 査		
	全体	男	女	順	全体	男	女
テレビ	91.4	90.2	92.7	①	88.1	87.4	88.6
放送のニュース	50.1	51.0	49.1	②	40.2	45.5	36.2
ラジオ	46.5	55.2	36.4	③	38.1	39.9	36.8
宣伝カーの放送	7.2	5.7	9.1	⑤	21.0	17.5	23.8
他の街頭放送	3.9	2.1	6.1	⑥	6.4	8.4	4.9
講義・訓話など	3.3	3.6	3.0	⑦	4.3	5.6	3.2
駅などの案内	8.9	8.2	9.7	④	3.7	4.9	2.7
外国語	3.1	2.6	3.6	⑧	3.0	2.1	3.8

鉄道の状況からして当然のことかも知れない。豊岡では、人々の日常の近距離交通手段としては、鉄道よりバスのほうが便利であり、よく利用されているようである。

(2) 何をどのくらい書いたか

「書きましたか」という問では、表4-15のように6項目を示した。結果は大阪市のものと良く似ている。「帳簿」は男性が、「家計簿」は女性が多くつけ、「届け・申込み」は男性が多く行っているといった面は両調査とも共通であるが、残りの項目については男女差がまちまちである。

表4-15 書きましたか（性別）

	大 阪 '75				豊 岡 調 査		
	全体	男	女	順	全体	男	女
帳 簿	15.3	16.5	13.9	①	13.7	18.2	10.3
家計簿	13.6	2.6	26.7	②	11.9	2.8	18.9
日 記	7.2	8.8	5.5	④	11.6	9.1	13.5
届け・申込み	9.5	11.9	6.7	③	9.5	13.3	6.5
はがき	5.6	4.1	7.3	⑤	7.6	7.7	7.6
手 紙	5.3	4.6	6.1	⑥	6.4	6.3	6.5

(3) 何をどのくらい読んだか

「読みましたか」という質問に対しては、表4-16のような回答を得た。「新聞」が圧倒的に多く、ほぼ9割に近い比率を示している。先に見た「テレビ」への接触とほぼ同じ割合であるが、男女差の面ではだいぶ様子が異なっているのがわかる。大阪市での調査でも豊岡と同様に、比率で上位3位までに入った「新聞」、「雑誌」、「週刊誌」のいずれにおいても、男性の比率が女性を上回っている。また、大阪市では、「小説」を読むのは女性に多かったが、豊岡ではあまり男女差は見られなくなっている。

表4-16 読みましたか (性別)

	大 阪 '75				豊 岡 調 査		
	全体	男	女	順	全体	男	女
新 聞	90.3	95.9	83.0	①	87.8	94.4	82.7
雑 誌	17.5	20.1	14.5	③	21.0	25.9	17.3
週刊誌	26.7	28.9	24.2	②	18.6	29.4	10.3
他の本	9.5	10.3	8.5	⑦	13.1	12.6	13.5
小 説	11.7	7.2	17.0	④	9.1	8.4	9.7
漫 画	8.9	12.4	4.8	⑧	9.1	11.9	7.0
教科書・参考書	11.4	14.4	7.9	⑤	8.5	11.2	6.5
辞 書	11.1	12.4	9.7	⑥	6.4	9.1	4.4
外国語	4.2	5.2	3.0	⑨	1.5	2.1	1.0

4.8. 場面接触頻度調査法の比較

本章の始めでも述べたように、場面接触頻度については、豊中および宮津では「平均頻度回答方式」で調査が行われ、豊岡では「大都市における言語生活の実態調査」と同様、「前日行動チェック方式」で調査が行われた。個々の結果はこれまでに見てきたとおりであるが、ここでは2つの調査法の比較を行ってみたい。

図4-1が両者の関係を示したものである。縦軸は宮津調査の結果で、1週間平均の接触回数を表し、横軸は豊岡調査の結果で、前日の接触場面に対する割合を表している。図の中に盛り込んだ項目は、「家庭で」および「近所の親しい人と」のうち両調査に共通して用いられたものである。図からもわかるように、両調査結果はゆるやかな相関傾向を示している（相関係数は0.793）。

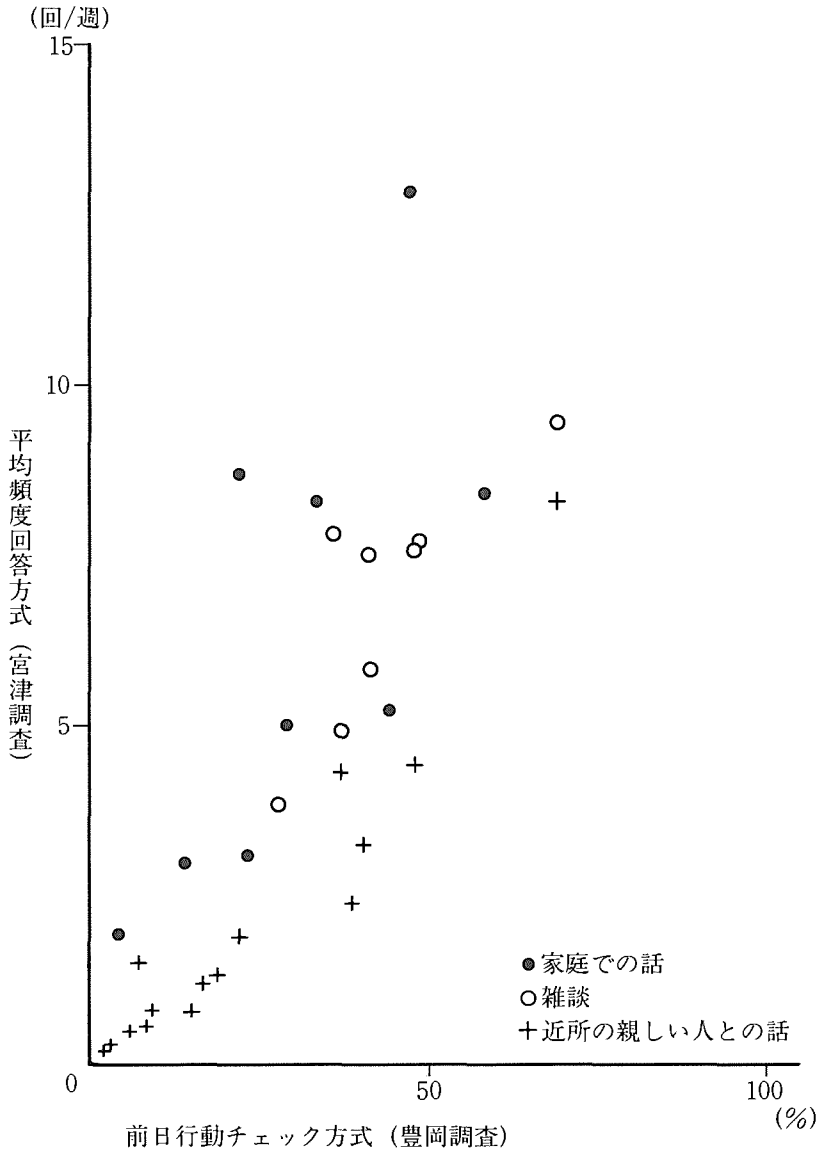


図4-1 場面接触頻度調査法の比較

このような傾向は大阪市（75年の調査）の結果（前日行動チェック方式）と豊中市の結果を比べた場合にも見られるもので、一般的な傾向とすることができよう。

「平均頻度回答方式」には、被調査者が過去の自分の行動を正確に思い出すことができるのかといった不安や、回答のバラツキが大きかったり、集計がやや面倒などといった弱点があるように思われる。一方、「前日行動チェック方式」は回答に対する被調査者の負担が少ないといった利点も考えられる。ある程度回答者数が見込める場合には「前日行動チェック方式」のほうが調査法として優れているようにも思えるが、結論を下すにはもう少し資料の検討をする必要があろう。

【参考文献】

国立国語研究所 1981 『大都市の言語生活』 三省堂

林四郎 1966 言語行動のタイプ（日本文体論協会編『文体論入門』 三省堂）

5. 方言と標準語をめぐる

本章では、方言と標準語をめぐるいくつかの問題を考察する。取り上げる問題は大きく3つに分けることができる。1つは、方言と標準語の使い分けの問題であり、2つめは方言と標準語についてのいくつかの意見の分析であり、最後は、自分のことばや市内のことばの方言的な位置づけの問題である。ここで取り扱う問題はいずれも、実際のことばの使用ではなく、ことばについての意識を直接の対象としているところに共通点がある。第1と第3の問題も、被調査者の話したことばを直接の資料としているのではなく、被調査者の反省ないし判断を基にして考察を進めている。

5.1. 方言と標準語の使い分け

5.1.1 話しことば

豊中、宮津、豊岡の言語生活調査のなかには、ふだんの話しことばにおける方言と標準語の使い分けに関する質問が含まれている。その質問文と回答の選択肢は以下の通りである。

質問Ⅰ. ふだん話をするときのことばですが、あなたはどの程度標準語で話しますか。

- (1) いつも標準語で話す
- (2) いつも方言で話す
- (3) 標準語と方言の混ざった言葉で話す
- (4) 相手や場合によって、標準語で話したり方言で話したりする

無答を除いて回答の内訳を示したものが表 5-1 である。表の数字は回答者数で、括弧内の数字は百分率である〔注 1〕。表 5-1 において、豊中、宮津、豊岡の 3 地域に共通する傾向としては、「標準語」あるいは「方言」を専用する人の数は少なく、「混ざる」あるいは「使い分ける」人が 8 割を超えている、ということが挙げられる。地域差としては、豊岡で、「標準語」の専用者がいなくて、その分「混ざる」と回答した人がやや多くなっている点が目につくが、全体としてはそれほど大きな違いはないといってよいであろう。

表5-1 話しことばの中の方言と標準語

	豊 中	宮 津	豊 岡
(1)いつも標準語	42 (9.0)	18 (6.8)	0 (0.0)
(2)いつも方言	32 (6.8)	25 (9.4)	24 (8.0)
(3)混ざる	194 (41.5)	117 (44.0)	156 (52.2)
(4)使い分ける	200 (42.7)	106 (39.8)	119 (39.8)
合 計	468(100.0)	266(100.0)	299(100.0)

質問 I に対する回答に、性、年齢、学歴などの社会言語学的な属性による違いが見られるかどうかを調べた。その結果は以下の通りである。

<男女差> 「使い分け」のカテゴリーについては、3 地域に共通したかなりはっきりした男女差がみられた。「使い分ける」と回答した人の割合は、豊中では（回答のあった）男性全体の中の 40 % を占めるのに対して女性では 46 % となる。また、宮津では男性 36 % に対し女性 44 %，豊岡では男性 33 % に対し女性 45 % である。女性の方が標準語と方言の使い分けをよりはっきり意識しているといえる。

男性と女性のどちらが標準語的（方言的）か、ということについては、「標準語」専用グループ、「方言」専用グループの人数が少ないこともあって、はっきりしたことは言えない。ただ、「方言」専用グループに対する「標準語」専用グループの比率をみると、豊中では男性 1.47 に対し女性 1.08，宮津では男性 0.85 に対し女性 0.58 で、いずれも男性の方がやや女性を上回っている

(豊岡では「標準語」専用者はゼロである)。この点では男性の方が標準語的だといえるであろう。

<年齢差> 被調査者を10代、20代、30代、40代、50代、60代以上の6つの年齢層に分けて、各年齢層別の回答の内訳を調べてみると、「使い分け」の категорияと「方言」の categoriaに次のような特徴的な傾向がみられた。図5-1、図5-2、図5-3は、3地域における、「使い分け」グループ、および「方言」グループの年齢層別の割合を示したものである。これを見ると20代が使い分けのピークとなる傾向が現れている。また、いつも方言で話すと答えた人が比較的10代に多いという特徴(豊岡では60代以上の方が多いが)も見て取れる。この、10代に方言を専用する人が多いという点については次のような理由が考えられる。一つには、若い世代は一般に高年齢層よりも標準語を使いこなす力が高いと考えられるが、その分、逆に、自分のことばのなかの方言的な特徴をより強く意識するということがあるのであろう。また、10代では日常生活が家庭や学校などごく狭い範囲に限られており、ふだん標準語を使わなければならない場面がほかの年齢層よりも少ないということもあげられる。20代が方言と標準語の使い分けのピークになるという点もこのことと関わっていると考えられる。すなわち、20代になると、就職などにより、さまざまな社会的背景をもつ人と接触する機会が10代の時に比べ急激に増えるため、ことばの使い分けを最も強く意識させられるということになるのであろう。

<学歴差> 被調査者を短大卒・大学卒以上の高学歴層、高卒の中学歴層、中卒の低学歴層というように3つに分ける。こうした分け方で調べてみると、年齢の要因と同じく、「使い分け」の categoriaと「方言」の categoriaにおいて学歴による差が見られた。表5-2を見ると、宮津・豊岡では、学歴が高くなるにつれ「使い分け」の比率が増加するというはっきりした傾向が現れている(豊中ではほとんど差がない)〈注2〉。先に述べた、20代が使い分けのピークであるという特徴はこの学歴の要因ともつながりがありそうである。というのは、豊中、宮津、豊岡のどの地域でも、20代が一番高学歴層の比率の高い世代だからである。とすれば、20代で使い分けの多い理由としては、学校教育の面と生活環境の面の両方を考えねばならないということになる。

学歴別に分けた時にみられるもう一つの傾向は、3地域を通じて、「方言」を専用する人の比率が、学歴が低くなるにつれて増加していくということである。学歴の低い方が方言的であるという一般的な特徴がここにも現れているといえる。

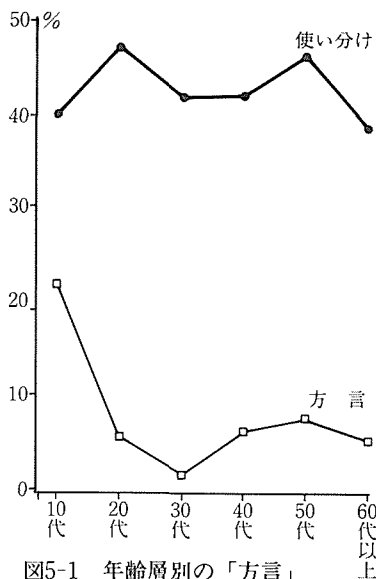


図5-1 年齢層別の「方言」
「使い分け」の比率 [豊中]

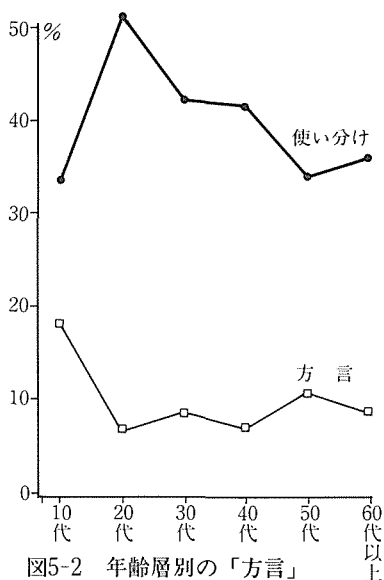


図5-2 年齢層別の「方言」
「使い分け」の比率 [宮津]

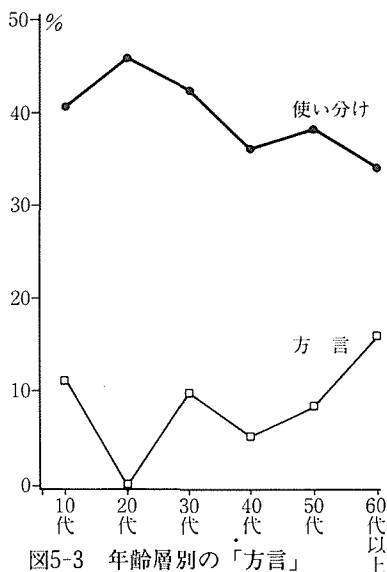


図5-3 年齢層別の「方言」
「使い分け」の比率 [豊岡]

表5-2 話しことばの中の「方言」と「使い分け」(学歴別)

	豊 中 方 言 使い分け		宮 津 方 言 使い分け		豊 岡 方 言 使い分け	
低学歴層	6 (8.7)	30 (43.5)	12 (12.2)	34 (34.7)	12 (11.5)	37 (35.6)
中学歴層	16 (7.1)	100 (44.4)	11 (8.0)	56 (40.6)	11 (7.6)	58 (40.0)
高学歴層	9 (5.7)	64 (40.3)	2 (6.7)	16 (53.3)	1 (2.0)	24 (47.1)

(注) ()内は各学歴層全体の中での「方言」と「使い分け」の比率

5.1.2 書きことば

宮津と豊岡の言語生活調査の中には、くだけた場面での書きことばについて、方言と標準語がどのように使われているのかを尋ねる次のような質問が含まれている。

質問II. 友人に出す手紙とか日記とかを書くときに、方言が混ざることがありますか

- (1) ほとんど方言で書くことが多い
- (2) 方言がかなり混ざることがある
- (3) 方言と標準語がほぼ半々のことがある
- (4) 方言がすこしは混ざることがある
- (5) 方言が混ざることとはまったくない

その結果を示したものが表5-3である。これを見ると、宮津と豊岡との差はほとんどないといってよい。

では、前節の話しことばの結果と比べた場合どのような特徴が見られるであろうか。質問Iと質問IIでは回答選択肢の設定が異なっているが、標準語を専用するという意味で質問Iの(1)と質問IIの(5)を比べることができる。その結果は、宮津でも豊岡でも後者の値が大きく、標準語だけを使う率は書きことばのほうが高いことがわかる。一方、方言を専用するという意味の選択肢は質問II

表5-3 書きことばの中に方言が混ざるか

	宮 津	豊 岡
(1)ほとんど方言	3 (1.3)	4 (1.3)
(2)かなり方言	25 (10.5)	31 (10.3)
(3)半 々	38 (16.0)	43 (14.2)
(4)少し混ざる	111 (46.6)	157 (52.0)
(5)混ざらない	61 (25.6)	67 (22.2)
合 計	238(100.0)	302(100.0)

の方にはないが、それに近い内容を持つ(1)と質問Ⅰの(2)とを比較すると、質問Ⅰの方が値が大きい。書きことばで方言だけを使う人の比率は質問Ⅱの(1)よりは小さいと推測されるので、方言だけをを使う率は話しことばの方が高いと考えられる。結果として、やはり、書きことばでは標準語的な色合いが強くなるということができる。

話しことばの時と同様に、書きことばについても、性、年齢、学歴などの属性による差について調べてみた。

<男女差> 属性による差を調べるにあたっては、質問Ⅱの(1)と(2)を「方言」使用としてまとめ、(4)と(5)を「標準語」使用としてまとめた。表5-4をみると、「標準語」使用は両地域とも男性のほうが女性を上回り、「方言」使用は女性が男性を上回るか(宮津)、同程度(豊岡)である。男性の方が標準語に

表5-4 書きことばの中に方言が混ざるか(男女別)

	宮 津		豊 岡	
	男 性	女 性	男 性	女 性
(1)(2)方 言	11 (9.5)	17 (13.9)	15 (11.5)	20 (11.6)
(3) 半 々	18 (15.5)	20 (16.4)	10 (7.7)	33 (19.2)
(4)(5)標準語	87 (75.0)	85 (69.7)	105 (80.8)	119 (69.2)
合 計	116(100.0)	122(100.0)	130(100.0)	172(100.0)

傾いている傾向があると言える。これは、話しことばについて見られた傾向と同じものである。

<年齢差> 全般的に見て、各年齢層の間に大きな差はなく、また、年齢とともに変化するような一定傾向も見あたらなかった。ただ、話しことばとの関係で注目したいのは、10代の層が比較的方言的な色彩が濃いという点である。10代全体の中で(1)と(2)の方言をよく使う人が占める割合を出してみると、宮津ではその割合は25.0%で、回答者全体の中の(1)(2)の比率(11.8%)を大きく上回っている。豊岡ではその値は14.8%で、宮津ほどの差ではないが、やはり全体の値(11.6%)よりは高くなっている。この特徴は、さきに話しことばの年齢差のところで認められた傾向と同じもので、10代の若者が自分のことばの方言性を強く意識していることを示している。

<学歴差> 表5-5は、<男女差>の時と同様に、かたや(1)と(2)、かたや(4)と(5)を融合して学歴による差を見ようとしたものである。これを見ると、学歴が高くなるに連れ「標準語」の割合が比較的高くなっていく傾向が現れている。これは、話しことばの時と同様の傾向で、一般に、学歴による違いがあらわれる場合には、高学歴層ほど標準語的で低学歴層ほど方言的であるといっていようであろう。

表5-5 書きことばの中の「方言」と「標準語」(学歴別)

	宮 津		豊 岡	
	方 言	標 準 語	方 言	標 準 語
低学歴層	9 (11.3)	55 (68.8)	15 (14.9)	73 (72.3)
中学歴層	15 (11.7)	93 (72.7)	16 (10.7)	109 (73.2)
高学歴層	4 (13.3)	24 (80.0)	4 (7.7)	42 (80.8)

(注) ()内は各学歴層全体の中での「方言」と「標準語」の比率

5.1.3 場面による標準語と方言の使い分け

質問Ⅰは、ふだんの話しことばでどの程度標準語や方言を使うかという一般

的な質問だったのだが、この質問に対し少しでも方言を使うと答えた人（つまり、(2)か(3)か(4)を選んだ人）については、さらに、いろいろな場面での方言と標準語の使い分けに関する質問を行っている。質問の方法と内容は豊中、宮津、豊岡の3調査でやや異なっている。

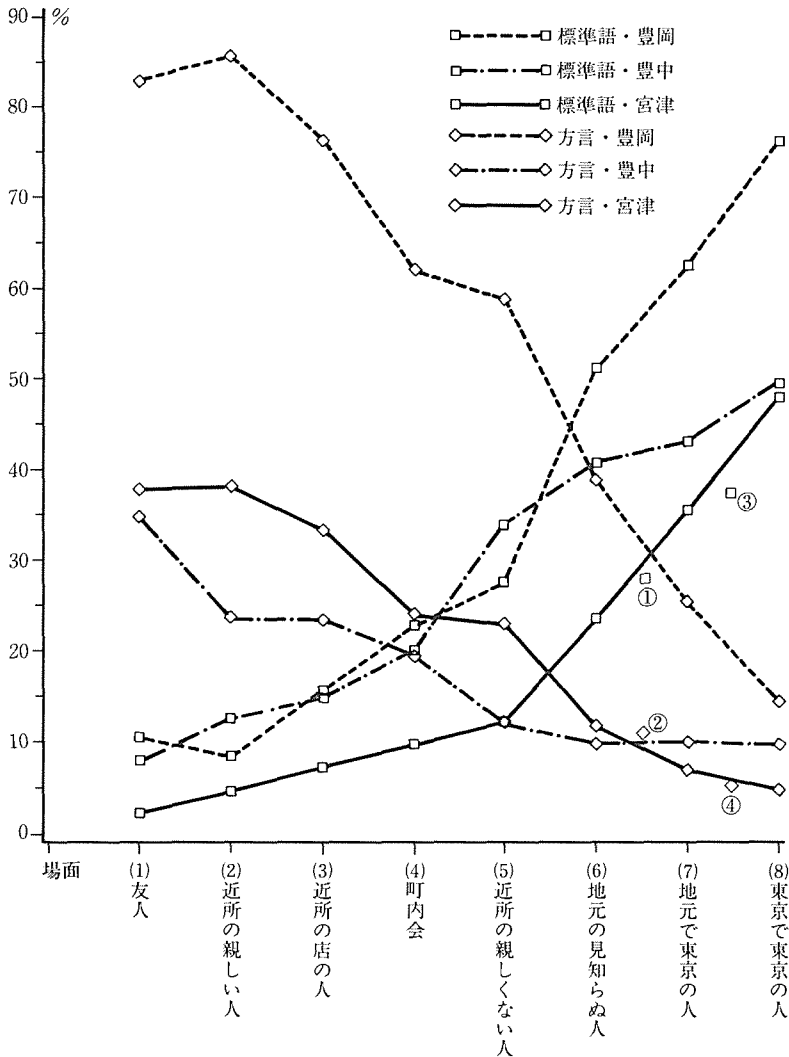
豊中調査では留置法を用い、以下のような9種類の場面を含んだ質問Ⅲに対し、「標準語」・「方言」・「標準語と方言が混ざる」という選択肢の中から該当するものを選んでもらっている〈注3〉。

質問Ⅲ. 次にあげる相手や場面では、どの程度方言を使いますか。

- (1) 久しぶりに会った中学時代の友人と
- (2) 近所の親しい人と
- (3) 近所で店の人と
- (4) 町内会などで
- (5) 近所のあまり親しくない人と
- (6) 豊中市の見知らぬ人と
- (7) 豊中市で東京の人と
- (8) 東京で東京の人と
- (9) 家族同士で

宮津調査では豊中の9場面に、「宮津市で京都の人と」、「京都市の見知らぬ人と」という2場面を加え、計11場面について、豊中調査と同じやり方で調査を行っている（(6) (7)の「豊中市」は「宮津市」となる）。豊岡調査では使い分けの質問が面接調査の中に入っている点が他の2地域と異なっている。質問の仕方でもやや異なっており、豊中調査の(9)の「家族同士で」を除いた8場面について、「豊岡弁で話しますか。それとも標準語で話しますか。」というかたちで回答を求めている（(6) (7)の「豊中市」は「豊岡市」となる）。

図5-4に、豊中、宮津、豊岡の3調査に共通する(1)から(8)までの各場面で、「標準語を使う」と答えた人の比率と、「方言を使う」と答えた人の比率を示す。図に示されていない残りの回答者は「標準語と方言が混ざる」と答えた人たち



(注) ①～④は、宮津調査における次のような値を示す。

- ①地元で京都市の人と標準語で話す人の割合。
- ②地元で京都市の人と方言で話す人の割合。
- ③京都市で京都の人と標準語で話す人の割合。
- ④京都市で京都の人と方言で話す人の割合。

図5-4 場面による標準語と方言の使い分け

ということになる。図の場面(6) (7)では、豊中、宮津、豊岡という調査地名の代わりに「地元」という表現を使った。

図5-4をみると、(2)の場面から(8)の場面に移るにつれて標準語を使うとする人の比率が次第に増加し、逆に、方言を使うとする人の比率が次第に減少している。この順序は、話す相手や場面との社会的な距離、あるいは、別の言い方をすれば、相手や場面の《よそ性》の度合の順序として考えることができるように思われる。この社会的距離の中には親しさの度合ということが含まれるが、(2)から(5)までは主としてこの親しさの順序とのかかわりが深い。「近所の親しい人」は日常のさまざまなおつきあいの相手であり、親しさの尺度では一番自分に近いところに位置する。しばしば親しい口も交わす「近所の店の人」はそれよりは遠くなるが、親しい人も顔見知り程度の人とも混じる「町内会」の場面よりは近くにくる。「近所の親しくない人」とはおそらく、せいぜいお辞儀程度の挨拶をする間柄であり、距離はさらに遠くなり、「よそ」の人と感じられる度合もいっそう強まる。

ここで問題となるのは(1)の「中学時代の友人」と(2)の「近所の親しい人」の間の順序づけである。図5-4を見ると、豊中では「友人」に対し方言を使う人の比率が「近所の親しい人」よりも高くなっているが、宮津・豊岡では、逆に「近所の親しい人」のほうが若干高くなっている。こうした違いの背景には、大都市と地方都市での近所づきあいの違いがあるのかもしれない。大都市では人口移動の激しさとかアパート居住者が多いなどの理由で、近所づきあいが概して地方都市ほど濃密でなく、近所の人よりも友人をより親しく感じる人が多くなるのであろう。また、後でも触れることになるが、若年層は「友人」に方言を使うことが特に多いが、豊中では宮津・豊岡に比べて若年層がより多いということとも関係があると思われる。

社会的な距離の中には、親しさということと並んで、空間的距離、およびそれに対応した社会経済的な交わりの度合という属性も含まれるであろう。(6)の「地元の見知らぬ人と」、(7)の「地元で東京の人と」、および(8)の「東京で東京の人と」は、(1)から(5)までの場面に対して、知らない人という意味での「よそ」の人を相手にした時ということを共通点として持つ。その一方、お互い同

士の間では、主として、地元からどれほど離れているかという空間的距離の点で違いがあり、その距離の近い順序に並んでいるといいであろう。(6)と(7)は同じ地元での場面であるが、話し相手の属性としての空間的距離が異なっていると考えることができる。この点で興味深いのは、宮津調査のなかに含まれていた「宮津市で京都の人」を相手にする場面と「京都市で京都の人」を相手にする場面がどのような位置を占めるかということである。図5-4の①～④に示した調査結果をみると、標準語使用者の割合からいっても、方言使用者の割合からいっても、「宮津市で京都の人」は(6)と(7)の間の値を示し、「京都市で京都の人」は(7)と(8)の間の値を示す。空間的距離、生活上の結び付き、ことばの類似性のどれをとっても京都は東京よりも近い位置にある。調査の結果はこのことによく対応する傾向を示していることになる。

社会的距離の順序といっても、ひとりひとりを取ってみれば個人差はあるだろうし、「近所の親しい人」について見られたように地域差を考慮に入れなくてはならない場合もあるのだが、全体としては、ある一般的な社会的距離の尺度があって、その尺度によって標準語と方言の使い分けがなされているといえることができるであろう。

ところで、これまでは場面間の順序性だけを問題にしてきたが、それだけでなくさらに、場面間の差の大きさについても注意を向けると、豊中と、宮津・豊岡の2地域とで違いがあることが注目される。図5-4で標準語あるいは方言の使用率が大きく変化するところをみると、宮津・豊岡では(5)の「近所の親しくない人」と(6)の「地元の見知らぬ人」との差が比較的大きく、標準語使用者の割合と方言使用者の割合がはっきりと逆転するものこの両場面を境にしていることである。一方、豊中ではこのような境目は(4)の「町内会」の場面にあり、その両隣の(3)「店の人」と(5)「近所の親しくない人」とで、標準語使用者の割合と方言使用者の割合が大きく逆転する。このように、宮津や豊岡に比べて、標準語使用者が方言使用者を上回る場面が相対的に多い分、豊中のほうがより標準語的であるといえることができるであろう。また、その境目の性質を考えてみると、豊中では相手と親しいか親しくないかが重要な決め手となり、宮津・豊岡では相手を知っているか否かが重要な決め手となっており、標準語・方言

の使い分けの基準が双方で異なっているという捉え方をすることもできるであろう。

なお、3調査のなかで、豊岡の値（特に方言使用者の割合を示す値）が他の調査の値よりも高くなっている。これは、豊岡調査では「標準語と方言が混ざる」という選択肢が用意されていないという調査法の違いによるものと考えられる。

質問Ⅰとの関連

「ふだんの話をする時どの程度標準語で話しますか」という質問Ⅰと質問Ⅲはともに、話しことばの中で標準語と方言をどのように使っているかについて尋ねている点では共通しているのだから、その回答にもなんらかの共通の特徴が現れることが十分予想される。この点を調べるためには、質問Ⅰの回答グループ別に分けて質問Ⅲの回答内訳を見ればよい。図5-5、図5-6、図5-7、それぞれ豊中、宮津、豊岡における「方言」「混ざる」「使い分け」の3グループ別の場面的な使い分けを示す（注4）。

この3つの図を見てまず第1に指摘できるのは、質問Ⅰでいつも方言を使うと答えた「方言」グループではその答えの通り、近所の人や近所の店などふだんよく接する相手に対してはほぼ80%以上の人が方言を使っているということである。そして、「混ざる」グループや「使い分け」グループと比較すると、すべての場面を通じて方言使用率がいちばん高く、逆に、標準語使用率はいちばん低い。この方言専用のグループは数の上ではさほど多くはないが（全回答者の10%以下）、その土地の方言使用の中核をなしているということが出来る。

次に、「混ざる」グループと「使い分け」グループとに目を向けると、豊中・宮津と豊岡では異なった傾向が現れている。図5-5の豊中と図5-6の宮津の結果を見ると、おおむねどの場面でも、方言使用率、標準語使用率ともに、「使い分け」グループが「混ざる」グループを上回っている。しかも、その差は標準語使用率では「そと」の場面ほど大きく、方言使用率では「うち」の場面ほど大きい。つまり、「使い分け」ると答えた人の場合、ある一つの場面を

とってみれば、「混ざる」という答えは採らず、方言か標準語かのどちらかを選ぶ傾向が強い。そして、「うち」の場面から「そと」の場面に移っていく時に方言から標準語へ切り替えていく人が多いということがうかがえるのである。これに対し、図5-7の豊岡の結果を見ると、標準語使用率では「使い分け」グ

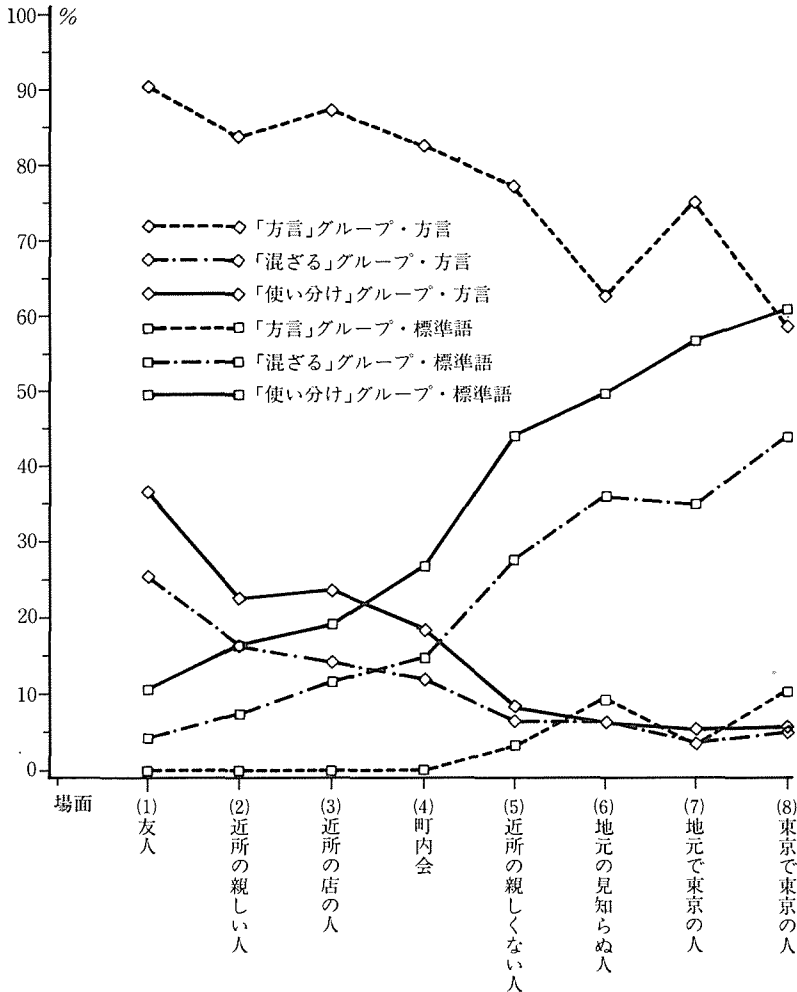


図5-5 質問Iと質問IIIの関連 [豊中]

グループが「混ざる」グループを上回っているが、方言使用率では反対に下回っている。つまり、豊岡では「使い分け」グループと「混ざる」グループの違いは、場面による切り替えの差というよりは、前者がより標準語的で、後者がよ

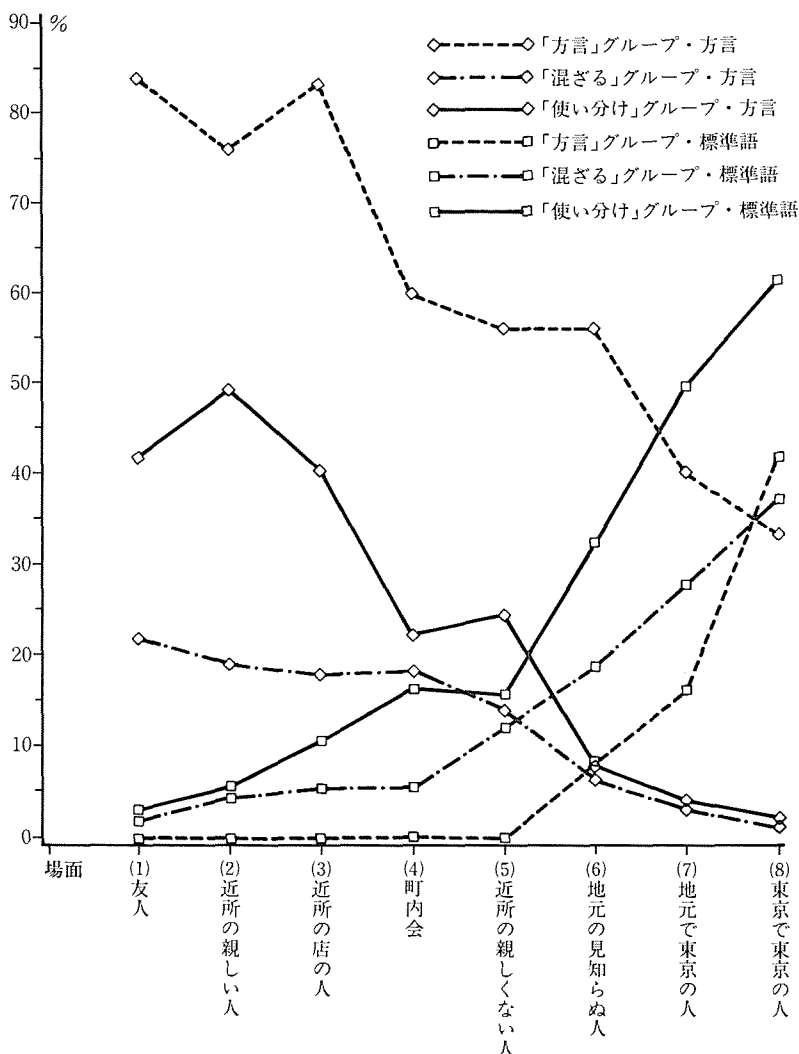


図5-6 質問Ⅰと質問Ⅲの関連 [宮津]

り方言的だという差として現れているのである。

豊中・宮津と豊岡との間にみられるこのような差異は一つには調査法の違いによるところが大きいと考えられる。というのは、豊中・宮津では質問Ⅰと質問Ⅲは同じ言語生活調査のなかでほとんど隣合ったところに位置しているのに

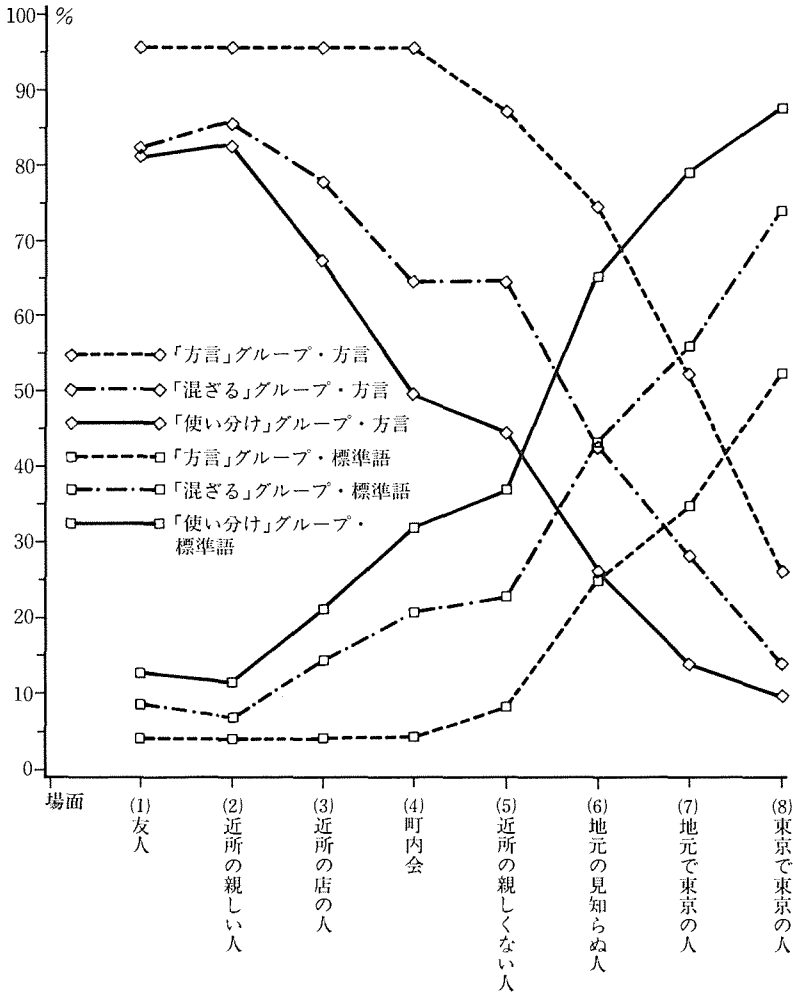


図5-7 質問Ⅰと質問Ⅲの関連 [豊岡]

対し、豊岡では質問Ⅲは面接調査の中に含まれており、しかも「混ざる」という選択肢は最初から設けられていない。豊中・宮津で、質問Ⅰと質問Ⅲがよく対応する結果を示したことにこうした調査方法上の原因が全くかかわっていないことは考えにくい。問題はこうした違った調査法によって描き出された姿の後ろにどのような実像があるかということである。一つの可能性としては3地域でほとんど違いがないということもありうる。というのも、標準語に精通している（と意識している）人は、当然、方言よりも標準語を使うことが多くなると同時に、標準語と方言の違いにも敏感で、場面によって明確な切り替え

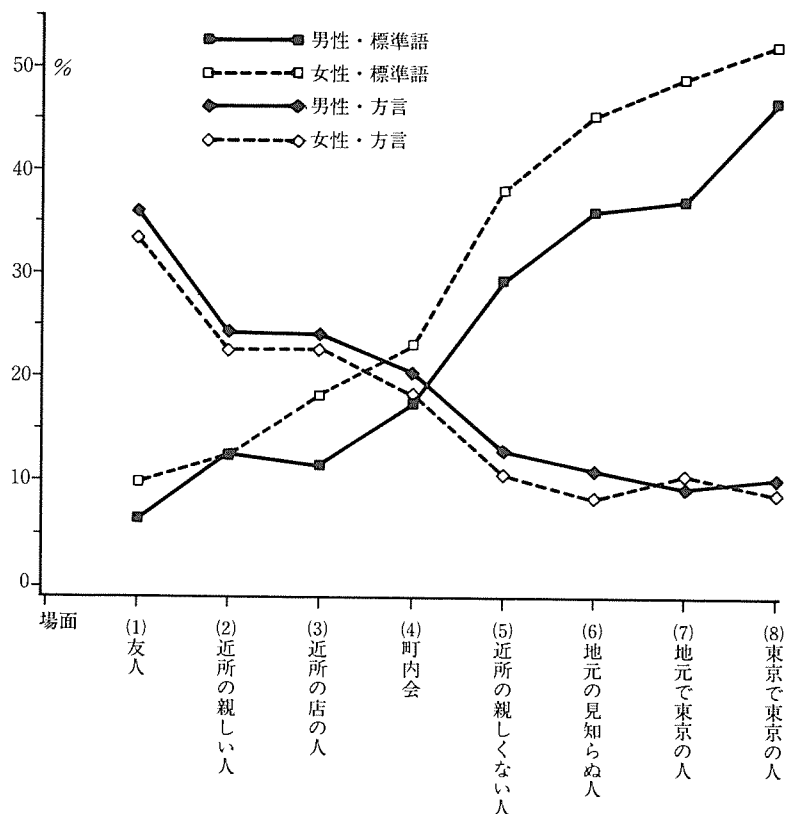


図5-8 場面による標準語と方言の使い分け [豊中] (男女別)

を行う，というように想像されるからである。あるいは，豊中・宮津と豊岡の差はやはり事実として存在するのも知れない。現段階では結論を下すことは困難である。

属性による使い分けの差

<男女差> 図 5-8, 図 5-9, 図 5-10 はそれぞれ，豊中，宮津，豊岡における男女別の方言と標準語の使い分けを示したものである。地域による差があり，豊中と豊岡では，相手との社会的距離が大きい「よそ」の場面における女性の

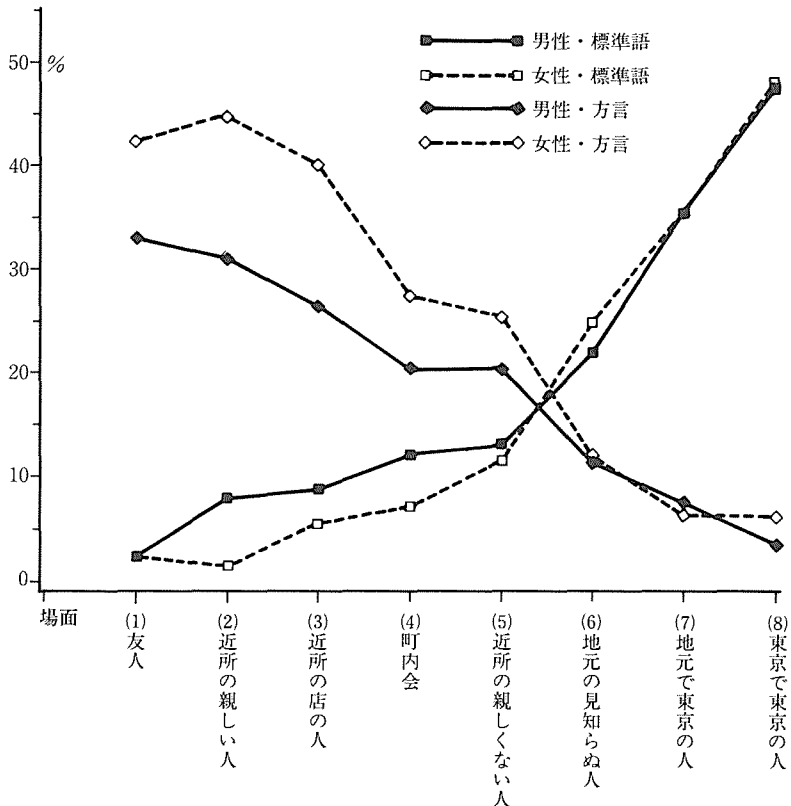


図5-9 場面による標準語と方言の使い分け [宮津] (男女別)

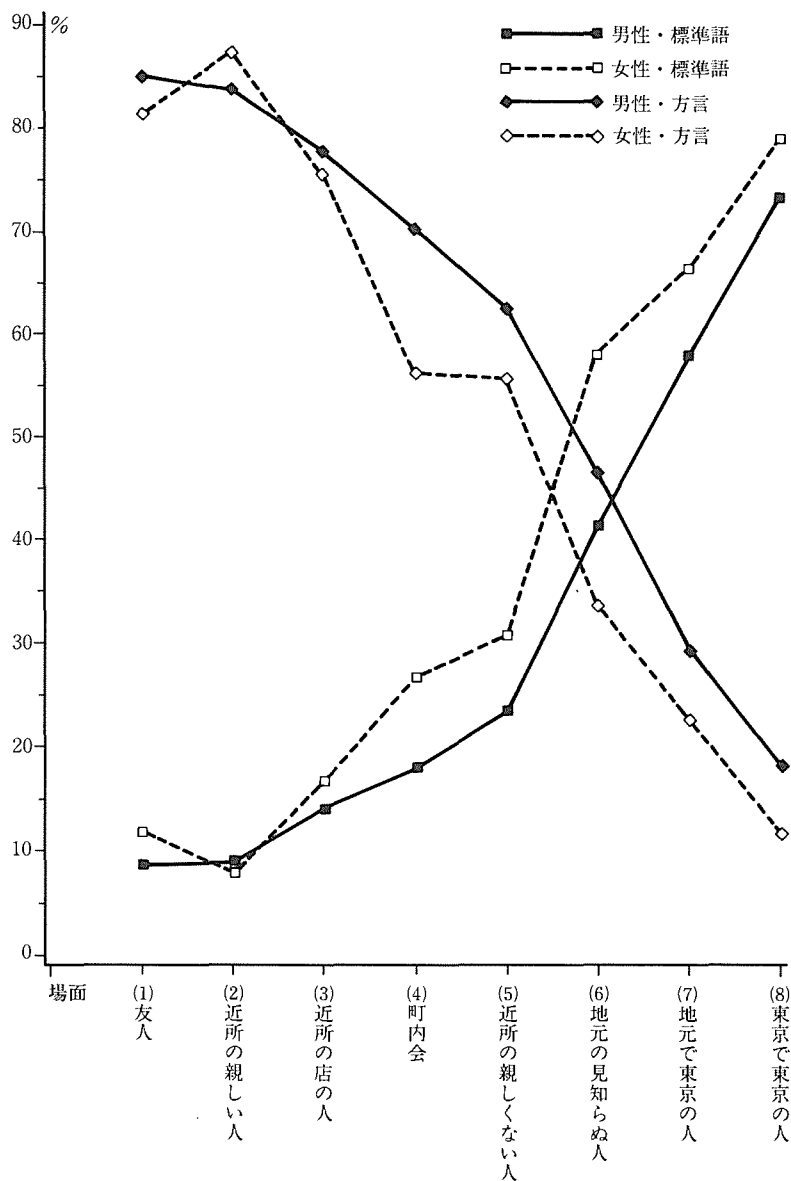


図5-10 場面による標準語と方言の使い分け [豊岡] (男女別)

標準語使用率の高さが目につく。宮津では、より親しい相手と話す場面での女性の方言使用者の比率が高くなっている。豊中・豊岡と宮津では現れ方に違いがあるが、いずれも、質問Ⅰで明らかになった女性の使い分け意識の高さと相通ずる傾向である。

<年齢差> 豊中における年代別の、標準語と方言の使い分けを示したのが図5-11と図5-12である。図5-11は標準語使用者の比率を示し、図5-12は方言使用者の比率を示す。図5-13と図5-14は宮津、図5-15と図5-16は豊岡について、同じやりかたで年代別の使い分けを表したものである。これらを見る

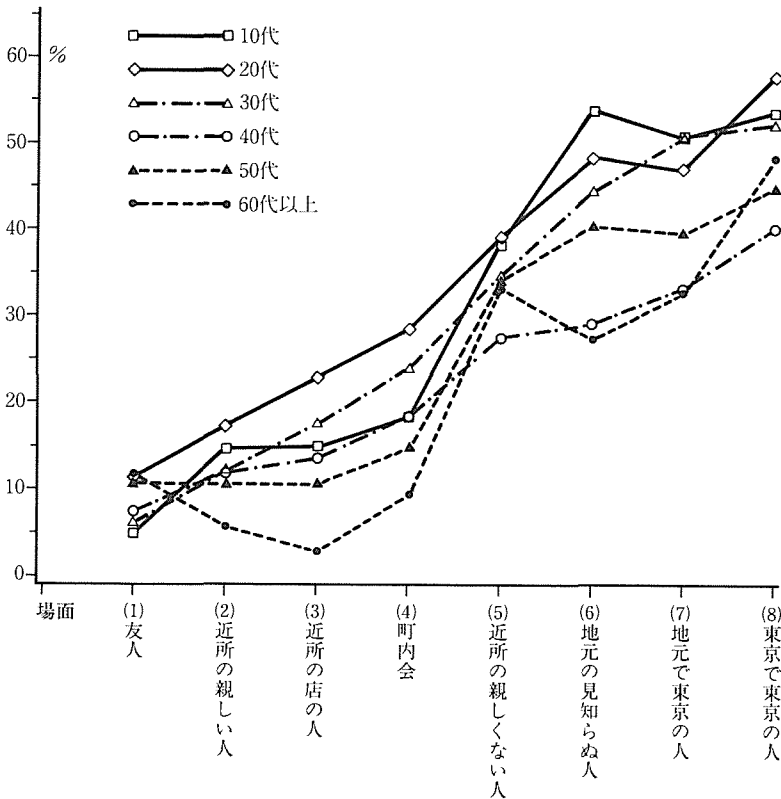


図5-11 場面による標準語使用率の推移 [豊中] (年齢別)

と、3 調査を通じて、一般に、30 代以下の若い年齢層で標準語使用者の比率が大きいということが言える。この傾向は、友人や近所の親しい人など、よく知っている相手と話す場面ではあまりはっきりしないが、店の人や町内会や親しくない人など相手との社会的距離が遠くなるにつれてかなり明瞭になり、(6)(7)(8)の知らない人相手の場面では、30 代までの層の標準語使用率が 40 代以上の層のそれをはっきりと上回る。つまり、言いかえるならば、若い年齢層では、社会的距離の増大に応じて標準語に切り替えていく人が多いのに対して、高齢層にあつては、この切り替えがあまり行われないうことになる。この

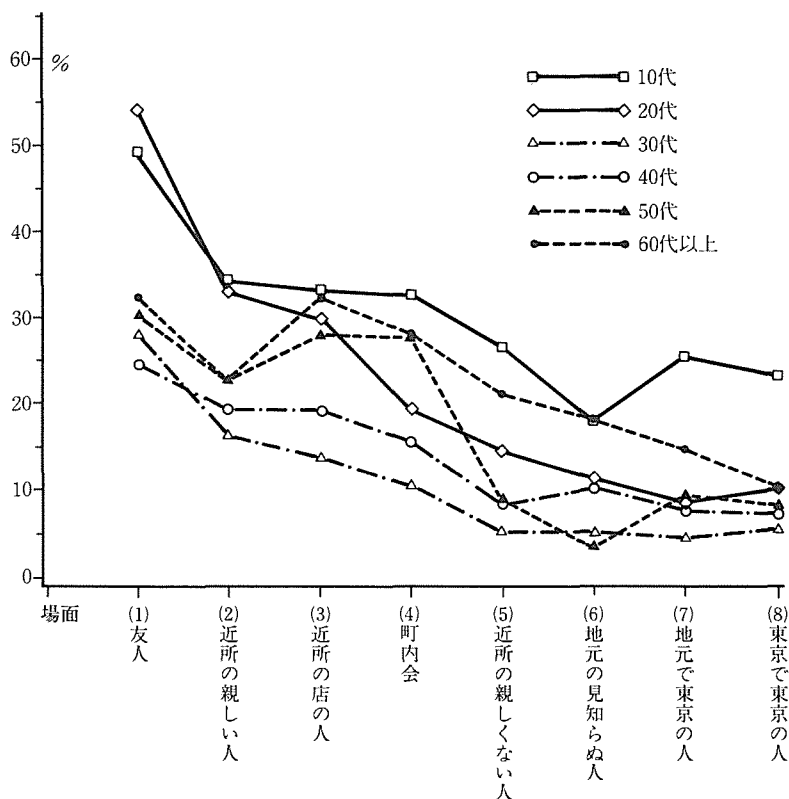


図5-12 場面による方言使用率の推移 [豊中] (年齢別)

ことは、高年齢層では、自分が標準語を使いこなせると考える人が少ないということ、あるいは、場面によることばの使い分けの必要性を認める人が少ないということを示すものであろう。

一方、方言使用者の比率を調べてみると、標準語使用者の比率の場合とは違って、3地域に共通する一定の傾向というようなものはみられない。豊岡では標準語とは裏返しのパターンで、高年齢層の方言使用率が高いということがい

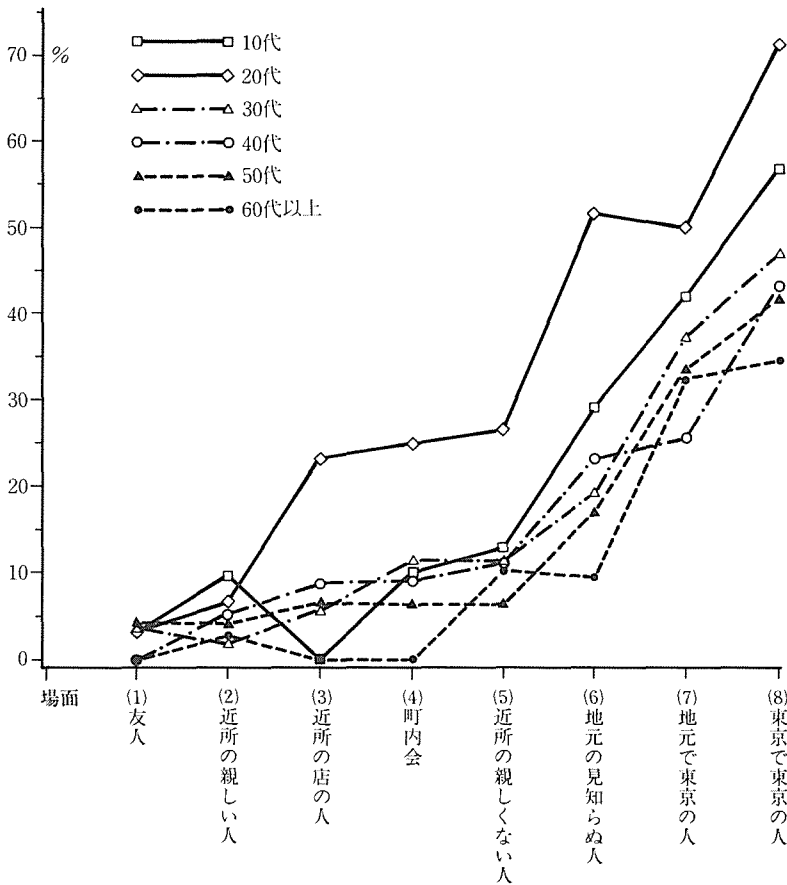


図5-13 場面による標準語使用率の推移 [宮津] (年齢別)

えそうであるが、豊中、宮津では、若い年齢層でもかなり高い方言使用率を示すことがあり、年齢層に応じたはっきりしたパターンは現れていない。ただ、質問ⅠやⅡとの関連で注目したいのは、親しい人、特に「中学時代の友人」に対する場面で10代の方言使用率が他の年齢層よりも高くなっている点である。これは、ひとつには、他の年齢層よりも中学卒業後の経過年数が短いということによるとも考えられる。しかし、図には示していないが、豊中、宮津調査に入っていた家族相手の場面でも10代の方言使用率が高いことからして、10代は身近な人に対しては特によく方言を使う（と意識している）と言ってよいであろう。これは質問ⅠやⅡで現れたのと同じの傾向である。

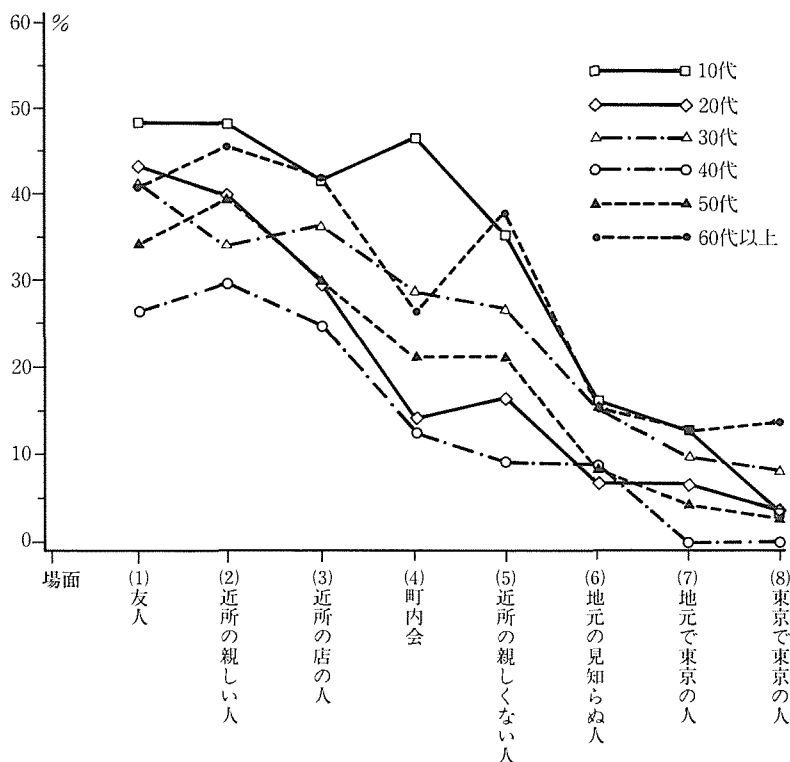


図5-14 場面による方言使用率の推移 [宮津] (年齢別)

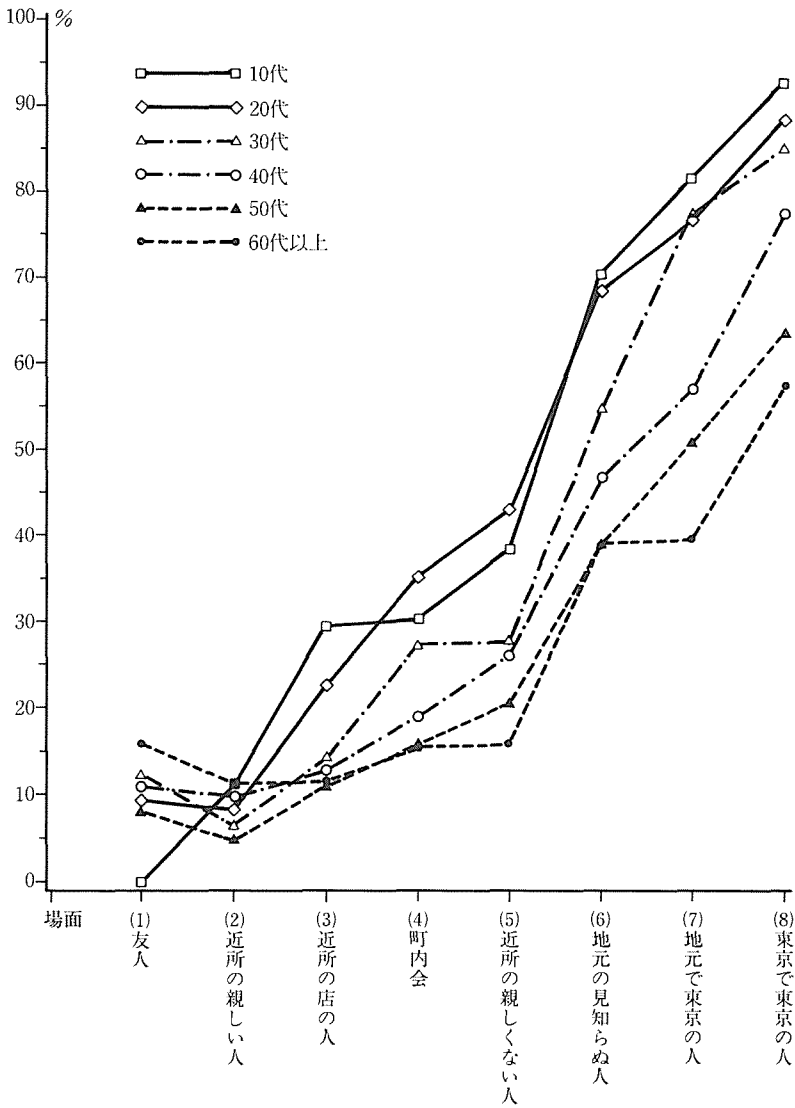


図5-15 場面による標準語使用率の推移 [豊岡] (年齢別)

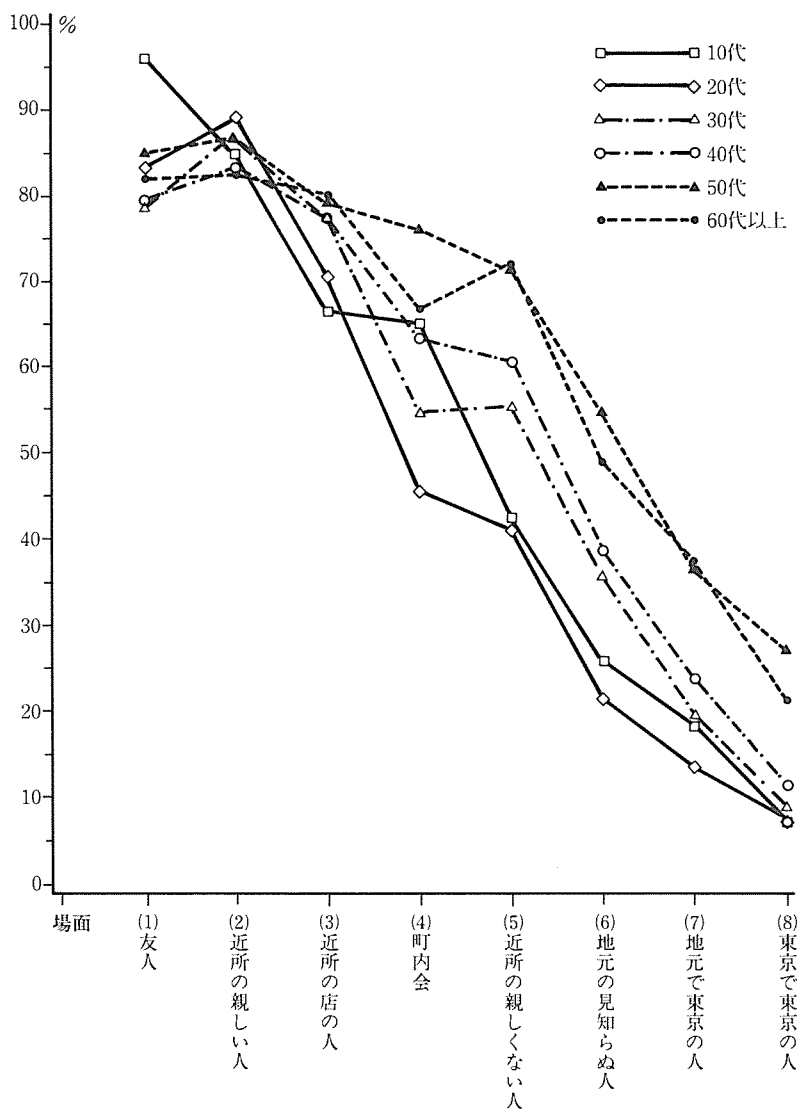


図5-16 場面による方言使用率の推移 [豊岡] (年齢別)

<学歴差> 図5-17、図5-18、図5-19で標準語使用率の点での高学歴層と低学歴層の違いに着目すると、3地域を通じて、相手との社会的距離の大きい「よそ」の場面になると、高学歴層の標準語使用率が低学歴層のそれを上回っている。友人や近所の親しい人を相手に話す「うち」の場面ではそうした差はほとんどない。中学歴層は両者の中間の値を示したり、どちらかの層と同じような値になったりする。一方、方言使用率の方を見ると、豊中、豊岡ではどの

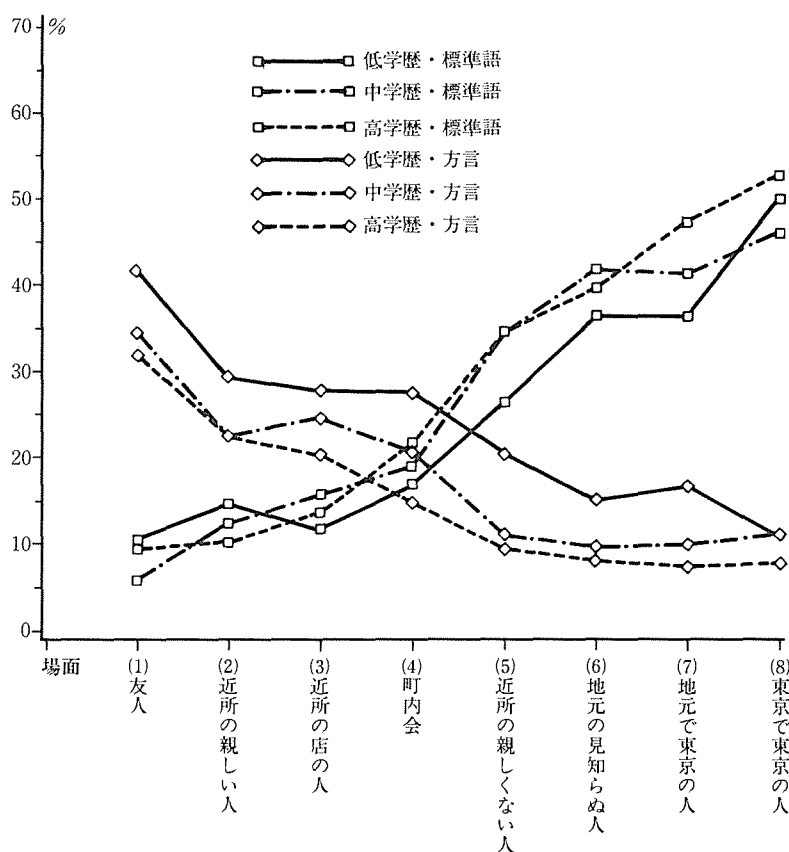


図5-17 場面による標準語と方言の使い分け [豊中] (学歴別)

場面でも低学歴層の方言使用率が他の層のそれを上回っている。宮津ではそれほどはっきりしたパターンはみられないが、高学歴層の方言使用率が「うち」の場面で高く「よそ」の場面で低くなる傾向が注目される。これらのことから、高学歴層では標準語と方言のはっきりした切り替えをする人が多く（特に宮津）、低学歴層では方言への志向性が高い（宮津でははっきりしない）ということが言えよう。

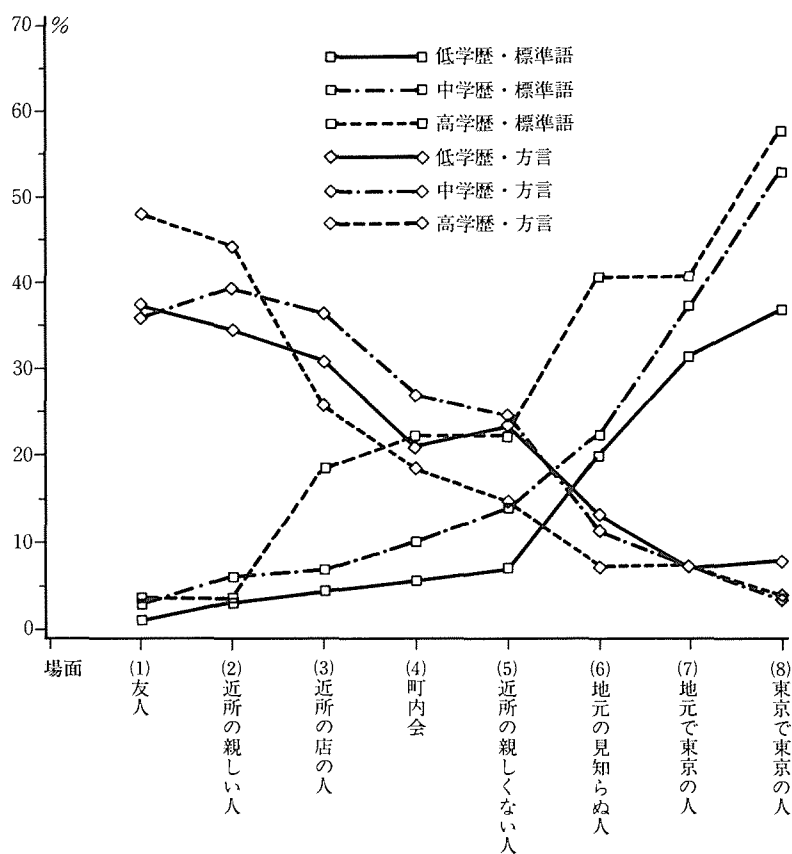


図5-18 場面による標準語と方言の使い分け [宮津] (学歴別)

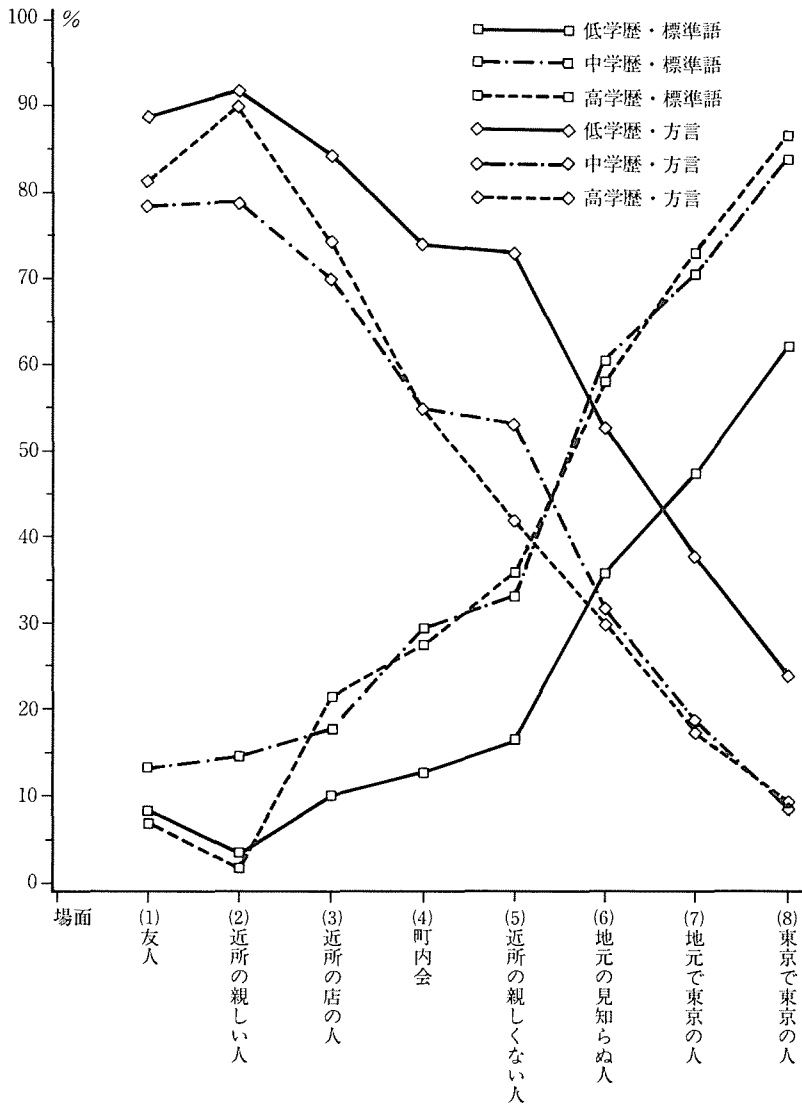


図5-19 場面による標準語と方言の使い分け [豊岡] (学歴別)

5.2. 標準語や方言についての意見の分析

この節では、被調査者が標準語や方言に対して持っている見解を引き出そうとする質問を取り上げる。取り上げる質問は以下の3つであるが、いずれもある意見を提示して、その意見に賛成か反対かを問うかたちをとっている。

質問IV. 「標準語で話すと真実味が少ない」という人がいます。あなたはこの意見に賛成ですか。

- (1) 全く賛成 (2) どちらかといえば賛成
(3) どちらかといえば反対 (4) 全く反対

質問V. 「方言まるだしでも話が通じればよい」という人がいます。あなたはこの意見に賛成ですか。

- (1) 全く賛成 (2) どちらかといえば賛成
(3) どちらかといえば反対 (4) 全く反対

質問VI. 「小中学校で、方言のよさを見直す教育をすべきだ」という人がいます。あなたはこの意見に賛成ですか。

- (1) 全く賛成 (2) どちらかといえば賛成
(3) どちらかといえば反対 (4) 全く反対

質問IVから質問VIまでの回答の内訳を表5-6、表5-7、表5-8に示す。質問IVから質問VIまでの回答を賛成((1)(2))か反対((1)(4))かにまとめた上で、互いの関連について調べてみると、この3つの質問への回答は互いに独立ではなく、一つの意見に賛成する人はほかの意見にも賛成していることがどの地域についてもいえる(χ^2 検定による)。言い替えれば、IVからVIまでの質問はいずれも、方言に肯定的(標準語に否定的)か、標準語に肯定的(方言に否定的)かを示す同じ指標として捉えることができる。ただし、これは独立か否かとい

う観点から全体的に分析したときに言えることで、別の観点からもっと詳しく検討するとまた違った面が現れてくる。以下では、先ず、最初の2つの質問についてまとめて検討を行い、質問VIはその後で単独に取り上げることとする。

質問IVと質問Vは、1974年に国立国語研究所のメンバーが中心となって行

表5-6 「標準語で話すときと実味が少ない」という意見への賛否

	豊 中	宮 津	豊 岡
(1)全く賛成	34 (8.4)	23 (10.0)	13 (4.3)
(2)どちらかといえば賛成	204 (50.6)	107 (46.7)	139 (46.2)
(3)どちらかといえば反対	122 (30.3)	73 (31.9)	123 (40.9)
(4)全く反対	43 (10.7)	26 (11.4)	26 (8.6)
合 計	403(100.0)	229(100.0)	301(100.0)

表5-7 「方言まるだしでも話が通じればよい」という意見への賛否

	豊 中	宮 津	豊 岡
(1)全く賛成	100 (24.2)	44 (18.1)	57 (18.3)
(2)どちらかといえば賛成	196 (47.3)	109 (44.9)	149 (47.9)
(3)どちらかといえば反対	104 (25.1)	81 (33.3)	95 (30.5)
(4)全く反対	14 (3.4)	9 (3.7)	10 (3.2)
合 計	414(100.0)	243(100.0)	311(100.0)

表5-8 「方言のよさを見直す教育をすべきだ」という意見への賛否

	宮 津	豊 岡
(1)全く賛成	23 (9.7)	36 (11.8)
(2)どちらかといえば賛成	120 (50.6)	156 (51.3)
(3)どちらかといえば反対	83 (35.0)	99 (32.6)
(4)全く反対	11 (4.6)	13 (4.3)
合 計	237(100.0)	304(100.0)

った東京調査と大阪調査における言語生活調査票の中の項目をそのまま踏襲したものである。その東京調査と大阪調査の分析結果は『大都市の言語生活 分析編』（1981年）に報告されているので、豊中、宮津、豊岡の結果とそのまま比較することが可能である。図5-20は、東京、大阪、豊中、宮津、豊岡の5調査の結果から、無答・「どちらでもない」・「その他」を除いた残りの回答（つまり、(1)(2)(3)(4)の回答）の中で、(1)(2)を一緒にした賛成意見が何%を占めるかを示したものである。

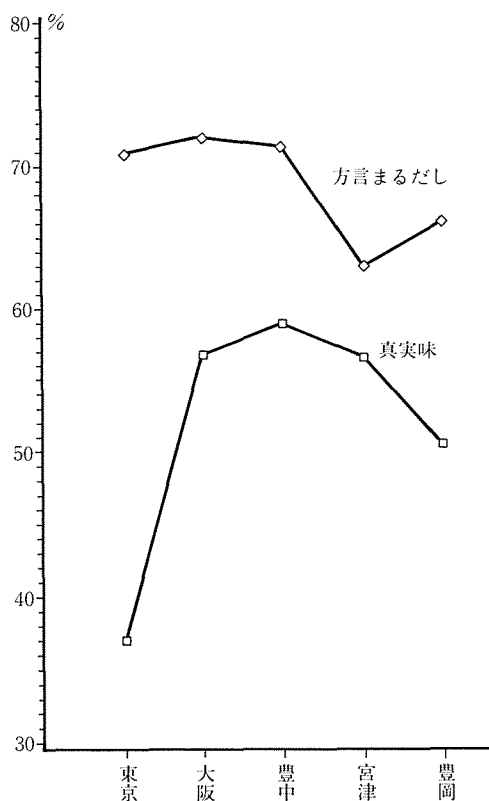


図5-20 「標準語で話すと真実味が少ない」
および「方言まるだしでも話が通じ
ればよい」という意見への賛成率

図 5-20 において、「標準語で話す」と真実味が少ない」という意見への賛成率を見ると、東京とその他の 4 地区との間に大きなへだたりがある。これは標準語意識の強い地域と方言地域という区分に対応するものであろう。一方、「方言まるだしでも話を通じればよい」という意見への賛成率を見ると、東京、大阪、豊中の大都市で賛成が多く、宮津、豊岡ではそれよりも賛成がやや少なくなっている。その理由については推測というかたちしか述べることができないが、次のようなことではないであろうか。ともに方言地域である大阪・豊中と宮津・豊岡との差についていえば、その地域の方言の有力性の違いとして考えることが可能である。つまり、大阪弁は文化的にも社会的にも優勢であるためその使用に肯定的な人が多く、それに対し、豊岡弁や宮津弁ではそれほど自信を持って「方言まるだし」に賛意を表明することができないのであろう。東京の場合には、東京弁が有力な方言だから、ということも全くないわけではないだろうが、標準語の話し手（厳密に言えば、標準語を話す意識している人。これには、東京出身者だけでなく地方の出身者も含み得る）が自分のことではなく、ほかの方言の話し手のこととして判断した可能性をむしろ考慮しなければならないと思われる。

ところで、5.1.で考察した方言と標準語の使い分けの違いは 質問Ⅳと質問Ⅴの回答に大きな関連を持っている。図 5-21 は、質問Ⅲの中の「近所の親しくない人」に対して、「方言」を使うと回答したグループ、「混ざる」と回答したグループ、「標準語」を使うと回答したグループのそれぞれで、質問Ⅳへの賛成がどれだけの比率を占めるかを表したものである。この図には、どの地域をとってみても、「方言」グループ、「混ざる」グループ、「標準語」グループ、の順に標準語に対して否定的である傾向がはっきり出ている。これと同じ明瞭な傾向は質問Ⅴとの関連を調べてみても確認することができた。これは当然と言えば当然の結果であるが、ことばの使用意識の面とことばに対するメタ言語的な意識の面とがよく対応する結果を示したことは指摘しておくに足るだけの事実であるといっていいただろう。

質問Ⅳと質問Ⅴに対する、回答者の属性の要因の関わりについて述べることにする。性と年齢の要因では、全体的に言って豊中・宮津・豊岡のどの地域で

も、どちらの回答においても大きな差や一貫した傾向が見られなかった。唯一の例外は質問Ⅴにおける豊中での年齢の要因で、若い年齢層に賛成派の多いという特徴が見られた。豊中の若年層特に10代が大変方言的であることはこれまでも指摘してきたことである。しかし、これまでは実際の言語使用と関連して出てきた傾向であったのが、質問Ⅴの回答からすれば、その方言使用がいわば信念に裏打ちされたものであることが示唆されている。

性や年齢の要因に比べて、学歴の要因は質問Ⅳと質問Ⅴの回答に対しかなり強い関わりを持っている。図5-22は、質問Ⅴに対する学歴別の賛成率を示したものであるが、おおむね、学歴が高くな

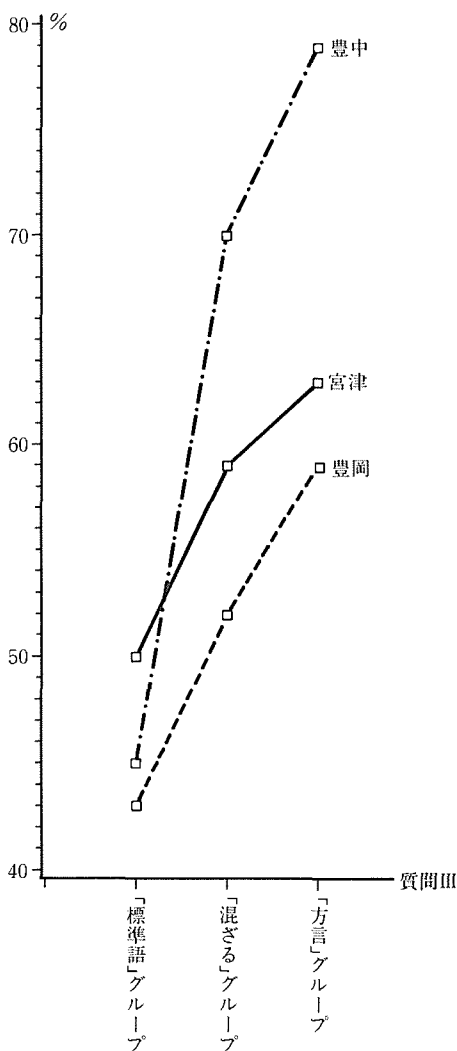


図5-21 質問Ⅲの3グループにおける「標準語で話すときと真実味が少ない」への賛成率

ると賛成が少なくなると言ってもよいであろう。質問Ⅳにおいても同様の傾向が見られた。低学歴層が方言的であるということは、東京調査と大阪調査でも見いだされた結果であるし（『大都市の言語生活 分析編』pp.108-109）、また、質問Ⅰから質問Ⅲで明らかになった特徴と同じものでもある。

ここで質問Ⅵへの回答について考察を行う。先に述べたように、質問Ⅵの「方言のよさを見直す教育」への賛成者は、全体的に見れば、「標準語で話すと真実味が少ない」や「方言まるだし」への賛成者と重なり合っていると言えるのだが、その賛成者の内訳を細かく調べてみると、いろいろと違った性質を持っていることが明らかとなる。まず第一に、質問Ⅵに賛成するか反対するかということは、その人のことばが標準語的か方言的かということとは無関係である、という点が質問Ⅳ、Ⅴとは大きく異なる。質問ⅠやⅡやⅢとのクロスをとって分析するとすべての場合で、宮津でも豊岡でも、互いに独立であるとの結果が出てくるのであ

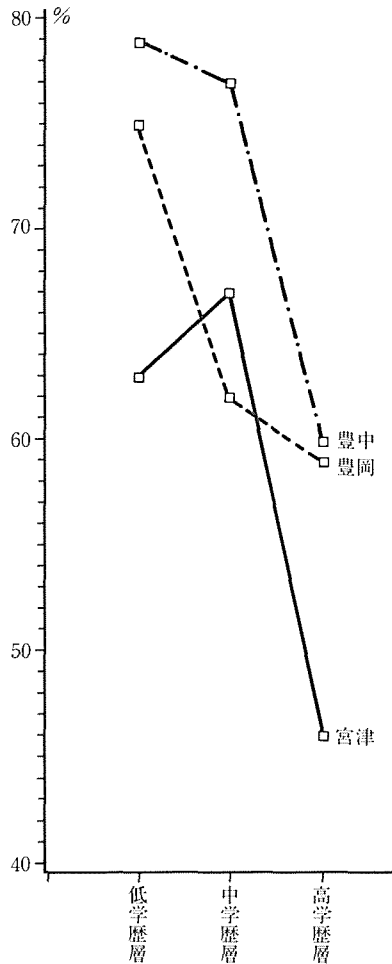


図5-22 「方言まるだしでも話が通じればよい」への学歴別の賛成率

る。これは、質問の中身と関係があろう。質問IVやVでは標準語や方言の使用が問題になっていたのに対し、質問VIではことばの使用ではなく教育が問われている。だから、もっぱら方言を話す人が方言教育に賛成するのとはまた違った観点から、もっぱら標準語を話す人が方言教育に賛成することも十分有り得るのである。

回答者の属性の要因との関連を調べてみても、前2つの質問とは違った特徴が現れてくる。まず、男女差の要因であるが、「方言のよさを見直す教育」への賛成者は、宮津で男性が51.8%女性が68.0%、豊岡で男性が59.1%女性が66.3%であり、女性の方に賛成者の多い傾向がかなりはっきりと現れている。また、表5-9は賛成者の学歴別の内訳を示したもののだが、低学歴層よりは高学歴層のほうに賛成が多いという特徴が現れている。

表5-9 「方言のよさを見直す教育をすべきだ」
という意見への賛成率（学歴別）

	宮 津	豊 岡
低学歴層	44 (48.4)	65 (64.4)
中学歴層	83 (70.3)	86 (57.3)
高学歴層	16 (57.1)	41 (77.4)

ところで、この質問VIはNHKが1979年に行った「ことばに関する意識」の全国的な調査の中の1項目とつながりがある。NHKのその調査の中に「ことばの教育」に関する項目があり、「方言のよさを見直す教育をすべき」という意見と「標準語の教育に力を入れるべき」という意見のどちらに近いかを尋ねている（『大都市の言語生活 分析編』、『日本人と話ことば』）。質問の内容が異なっているので絶対的な数字の比較はできないが、男女差や学歴差のような属性要因のかかわり方の比較は可能である。そうした比較を行ってみると、NHK調査でもやはり女性や高学歴者のほうに賛成が多くみられ、これはかなり一般的な傾向であるとする見方ができる。また、年齢の要因に関しては、NHK調査では若年層に賛成が多いという結果が示されている。一方、宮津、豊岡はどうかというと、宮津では若年齢層、中年年齢層、高年齢層の順に賛成が

減少するはっきりした傾向が見られたが、豊岡では、20代の賛成は高いものの、年齢と相関する傾向は現れていない。

年齢の要因は男女差や学歴差の要因ほど深く方言教育への態度とかかわっていないようである。

5.3. 自分の方言・地域の方言

この節では、被調査者が自分の話す方言や市内で話されている方言についてどのように感じているかを考察する。つまり、最初に述べたように、方言に対する被調査者の捉え方や意識を取り上げるのであり、方言の実態を明らかにするために、実際の言語使用の分析と補い合う面を持つ。

5.3.1 自分の方言の位置づけ

調査では、Iの質問(5.1.1)で(2)(3)(4)を選んだ人、つまり、どのようなかたちであれ方言を使う人に対しては、さらに、その方言をどこの方言と考えるのかということと、その方言と標準語との類似性について尋ねている。前者の、自分の方言の位置づけに関する質問と選択肢は以下の通りである。選択肢のほうは豊中・宮津・豊岡で異なった内容になっている。

質問Ⅶ. あなたの話す方言は次のうちどれですか。

【豊中】 (1)豊中弁 (2)大阪弁 (3)関西弁 (4)その他

【宮津】 (1)宮津弁 (2)京都弁 (3)関西弁 (4)その他

【豊岡】 (1)豊岡弁 (2)但馬弁 (3)関西弁 (4)その他

質問Ⅶに対する回答を見ると、宮津における京都弁・関西弁、豊岡における関西弁の回答は少数だったので、分析にあたってはすべて「その他」の категорияに含ませることにした。

また、2個以上の選択肢を選んだ複数回答が各地域で約10ないし15%程度

あったがこれも「その他」に入れることにした。このような整理を行った後の回答内訳を示したものが表5-10、表5-11、表5-12である。これらの表には、回答者が5歳から15歳までの間で最も長期間住んでいた土地をその人の生育

表5-10 どこの方言を話すか [豊中]

	大阪出身者	他地方出身者	合 計
豊中弁	24 (11.3)	4 (1.9)	28 (6.5)
大阪弁	120 (56.3)	50 (23.3)	170 (39.7)
関西弁	50 (23.5)	90 (41.8)	140 (32.7)
その他	19 (8.9)	71 (33.0)	90 (21.0)
合 計	213(100.0)	215(100.0)	428(100.0)

(注) ()内は列度数の百分率を示す。

表5-11 どこの方言を話すか [宮津]

	宮津出身者	丹後出身者	他地方出身者	合 計
宮津弁	122 (84.1)	35 (60.3)	11 (26.8)	168 (84.1)
その他	23 (15.9)	23 (39.7)	30 (73.2)	76 (15.9)
合 計	145(100.0)	58(100.0)	41(100.0)	244(100.0)

(注) ()内は列度数の百分率を示す。

表5-12 どこの方言を話すか [豊岡]

	豊岡出身者	但馬出身者	他地方出身者	合 計
豊岡弁	125 (65.1)	18 (28.6)	13 (32.5)	156 (52.9)
但馬弁	32 (16.7)	31 (49.2)	2 (5.0)	65 (22.0)
その他	35 (18.2)	14 (22.2)	25 (62.5)	74 (25.1)
合 計	192(100.0)	63(100.0)	40(100.0)	295(100.0)

(注) ()内は列度数の百分率を示す。

地として、その生育地別の内訳も示した。その理由は、回答者がどんな方言を話すかということは、その人がどの地方の出身であるかということによって大きな影響を受けると当然予想されるからである。5歳から15歳までの期間を重視したのは、この時期がだいたい言語形成期に該当すると一般に考えられているという理由によるものである。

表5-10から表5-12に共通して現れているように、予想通り、生育地の違いがどのような方言を話すかをいう点に大きな影響を及ぼしている。たとえば、表5-10を見ると、自分のことばを豊中弁ないし大阪弁だとする人は、大阪出身者の67.6%を占めるのに対し、他の地方の出身者では25.1%を占めるに過ぎない。同じようなことは宮津調査や豊岡調査についてもあてはまる。

説明を要するのは、大阪出身者の中で自分のことばを豊中弁・大阪弁としなかった人が32.4%おり、他地方の出身なのに豊中弁・大阪弁を話すとした人が25.1%もいるというように、方言と生育地の間に食い違いが見られる点である。この点については少なくとも2つの理由を考えなくてはならないであろう。その1つは、出身地という要因に加えて移住歴という要因も考慮に入れなくてはならないということに関わっている。もしも15歳以降ほかの土地に出て長く地元に戻ってこなかったとすれば、ほかの土地のことばに変わってしまう（と意識する）こともありうるし、逆に、他の地方の出身者であってもその土地に長く在住していれば、その土地のことばを話す（と考える）ようになることもありうるのである。実際、後で見るようにこのことを示唆するようなデータが存在する。

方言と生育地のずれを生み出すもう一つの理由は自分の方言の帰属意識と関わっている。たとえば、豊中のことばは、豊中弁であると同時に、広く捉えるならば、大阪弁ともいえるし関西弁ということもできる。実際の回答を見るとこうした複数回答をした人は少なく、多くの人はどれか一つのレベルで捉えた回答を行っている。回答者はいったいどのような理由に基づいてどのような捉え方をしているのであろうか。

表5-10、表5-11、表5-12の右端の合計欄に注目すると、豊中と宮津・豊岡ではこうした自分の方言の帰属意識で大きな違いが現れている。豊中では自分

の方言を豊中弁と捉える人はごく小数で、多くは大阪弁ないし関西弁と捉えているのに対し、宮津、豊岡では宮津弁、豊岡弁と捉える人がかなり多くを占める。これは、豊中においては、豊中を取り巻く同水準の地域、たとえば、吹田や池田などとの間でことばの違いがほとんど感じられないため、それらをまとめた上位の区分である大阪弁や関西弁として捉えることになるのであろう。これに対し、宮津と豊岡は、ことばを含めた文化や行政の面で一つのまとまりをなす地域であり、自分のことばを、他とは区別されたアイデンティティをもつものとして、その名を冠して呼ぶことになると考えられるのである。

一方、宮津と豊岡の間にもまた別の違いがある。それは、宮津では、豊岡の但馬弁に相当する丹後弁という回答が少ないという点である（「その他」の中で丹後弁という名をあげた人は全回答者の6.1%）。この原因としては回答選択肢の中に丹後弁というカテゴリーのなかったことが大きいであろうが、両者の間には地理的文化的にも異なる点がある。というのは、豊岡は但馬地方でただ一つの市であり、但馬の中心と言っても間違いのないであろうが、丹後には宮津と並んで舞鶴というもう一つの中心があり、宮津が丹後の中心であると簡単に言いにくいのである。こうした地理的文化的違いと平行して、ことばの面でも後で述べるような理由で丹後は但馬ほど等質的ではないという点もある。宮津弁を丹後弁といいにくいこと、あるいは宮津以外の奥丹後地方の出身者でも自分のことばを宮津弁だとすることが多いのは、このこととも関係している可能性がある。

回答者の属性の要因について調べてみると、性差、学歴差はほとんどなく、比較的大きな影響を及ぼしているのは年齢の要因であった。表5-13は、回答者を出身地別（宮津の丹後出身者と豊岡の但馬出身者は他地方出身者の中に含ませる）・年齢別（10-20代、30-40代、50代以上に分ける）の6個の下位グループに分けた上で、その下位グループのなかで自分のことばを地元のことば（豊中であれば大阪弁、宮津であれば宮津弁、豊岡であれば豊岡弁）だと考えている人の人数と割合を示したものである。

表5-13を見ると、豊中と宮津・豊岡では異なった傾向が現れている。宮津・豊岡では他地方出身者のなかで高年齢層ほど、自分のことばを地元ことば

表5-13 自分のことばを地元ことばと捉える人

	豊 中		宮 津		豊 岡	
	大阪出身者	他地方出身者	宮津出身者	他地方出身者	豊岡出身者	他地方出身者
10-20代	61 (70.1)	11 (33.3)	33 (75.0)	2 (14.3)	33 (54.1)	3 (17.6)
30-40代	57 (65.5)	30 (22.6)	51 (89.5)	23 (46.0)	51 (72.9)	10 (21.7)
50代以上	26 (66.7)	13 (26.5)	38 (86.4)	21 (60.0)	41 (67.2)	18 (45.0)

(注1) ()内の数字は各出身地の各年齢層の中での比率。

(注2) 地元ことばとは豊中では豊中弁と大阪弁、宮津では宮津弁、豊岡では豊岡弁を指す。

と捉える人が多くなる。これは、地元での居住歴の長さに応じてことばの同化が進んで行くことを反映したものと考えてよいであろう。これに対し、豊中ではそのような傾向が出ていない。その理由についてははっきりしたことを言えないが、あるいは、比較的高齢になってから豊中に移住してきた人が多いせいなのかも知れない。

一方、地元出身者について見ると、宮津・豊岡では、10-20代の若い年齢層で、自分のことばを地元ことばと捉える人の比率が他の年齢層に比べて低い傾向が目につく。これに対し、豊中では、わずかであるが逆に他の年齢層よりも高い数字になっている。こうした違いにはその方言の優位性の差異ということに関わっている可能性がある。つまり、若い世代は方言の優位性ということに敏感で、大阪弁のような非常に有力な方言では、その方言への帰属意識が高くなり、逆に、近くにより有力な方言がある場合には、その有力な方言を含んだより大きな方言区分で捉える（たとえば関西弁として）傾向が大きくなる、ということがあるのかもしれない。

5.3.2 自分の方言と標準語の類似性

言語生活のアンケートでは、自分の方言の位置づけを尋ねる質問に続けて、その方言と標準語との類似性についての質問を行っている。それが以下の質問Ⅷである。

質問Ⅷ. あなたの話す方言は、標準語と違うと思いますか、似てると思いますか。

- (1) ほとんど違いがない (2) 少し違う
(3) かなり違う (4) 非常に違っている

この類似性の判断には、その方言と標準語との言語学上の類似性とか、標準語への習熟度とか、標準語に対する好悪感とか、あるいは、そもそも何を標準語と考えるのかなど、いろいろな要因が働いているものと想定される。そのうち先ず考えなくてはならないのは、方言と標準語との言語学的な類似性の要因である。方言分類によれば、大阪弁は近畿方言に属し、豊岡弁は中国方言に属すとされる（樺垣実 1962 年）。宮津弁については、宮津市のあたりを重要な方言境界線が走っているため事情が複雑であるが、中心部を含めた市東南部は中国方言に近い近畿方言、市西北部は豊岡弁にかなり近い方言であるとされる（奥村三雄 1962）。豊岡弁は、特にアクセントの点で標準語に近く、語法の上でも助動詞「だ」の使用など標準語との共通点をいくつか持つ。標準語との類似性の正確な度合を出すことは難しいが、おおむね、豊岡弁が最も標準語との類似性が高く、大阪弁が最も類似性が低く、その間の豊岡弁よりも宮津弁が位置するといつてよいであろう。

表 5-14 は、質問Ⅷへの回答の内訳を示したものである。この結果を見ると、宮津と豊岡の間にはほとんど差がないということ、また、豊中では、宮津・豊

表5-14 自分の方言は標準語とどれほど違うか

	豊 中	宮 津	豊 岡
(1) ほとんど違わない	55 (12.5)	43 (17.3)	58 (19.5)
(2) 少し違う	242 (54.9)	150 (60.2)	180 (60.4)
(3) かなり違う	119 (27.0)	53 (21.3)	56 (18.8)
(4) 非常に違う	25 (5.7)	3 (1.2)	4 (1.3)
合 計	441(100.0)	249(100.0)	298(100.0)

表5-15 自分の方言は標準語と違うか（地元ことばの話し手）

	豊 中	宮 津	豊 岡
(1) ほとんど違わない	20 (10.3)	33 (20.4)	31 (22.0)
(2) 少し違う	109 (55.8)	100 (61.7)	88 (62.4)
(3)(4)かなり・非常に違う	66 (33.9)	29 (17.9)	22 (15.6)
合 計	195(100.0)	162(100.0)	141(100.0)

（注） 地元ことばとは豊中では豊中弁と大阪弁、宮津では宮津弁、豊岡では豊岡弁を指す。

岡に比べて、標準語との違いを認める回答 ((3), (4)) が多くなっていることが目立つ。また、表 5-15 は、質問Ⅶの「どこの方言を話すか」に対して地元ことばを話すと回答した人だけについて類似性判断の内訳を示したものである。この表では表 5-14 と同じ傾向が現れているが、豊中で「かなり・非常に違う」とする人がやや増えて「ほとんど違わない」とする人がやや減っているのに対し、宮津・豊岡では逆の傾向になっている。つまり、大阪弁の話し手と宮津弁・豊岡弁の話し手では類似性判断の違いが一層拡大されることが分かる。こうした結果は、豊中、豊岡については、各方言と標準語との言語学的な類似性に基づく予測とだいたい一致すると言っていいであろう。一方、宮津の結果については検討の余地がある。類似性の判断において統計的には豊岡との差が認められないのであるから、その説明がさらに必要になるであろう。宮津市東南部の方言は、近畿方言の一部とは言っても、アクセントなどの中に東京方言に近い部分も持っている。宮津弁の話し手は、隣接する関西弁との対照からそうした部分を強く意識したのかもしれない。あるいは、宮津弁の話し手の中に中国方言的な奥丹後のことばの話し手が多く含まれているということかもしれない。この点については現実の言語資料の分析結果との比較が必要である。

それでは、標準語への習熟度の違いはこの類似性の判断にどう関わっているのであろうか。一般に、よく標準語を使う人は、そうでない人に比べて標準語により習熟しているとみてよいであろう。そこで、質問Ⅰや質問Ⅱや質問Ⅲの回答とのクロスをとって両者の関連を調べてみた。その結果、3 調査に共通し

て見られるはっきりとした傾向は、もっぱら方言を使う人は自分の方言を標準語とは違うと考えがちだということである。たとえば、質問Ⅰに対し「いつも方言で話す」と答えた人のうち、豊中では65.6%が、宮津では31.3%が、豊岡では39.1%が、「かなり違う」あるいは「非常に違う」と答えており全体の平均（豊中32.7%、宮津22.5%、豊岡20.1%）をかなり上回っている。しかし、それとは逆の、標準語をよく使う人が自分の方言と標準語が似てると考える傾向があるかどうかということになると、豊中ではその傾向がはっきり現れているものの、宮津・豊岡でははっきりした傾向が見られない。一つの考え方としては、標準語に慣れた人のほうが自分のことばと標準語の違いに気が付きやすく、差を感じる度合いが高いという考え方もありうるが、実際の結果はそれとは一致しない。むしろ、標準語を話さない人がほかの人の標準語を聞いて自分のことばと標準語との違いを意識させられる、ということを示すような結果になっている。

標準語との類似性の判断に対して、性、年齢、学歴など被調査者の属性の要因がどう関わっているかを調べてみたが、性や年齢による差はほとんどなく、学歴によってだけ差が見られた。表5-16は、地域別・学歴別に、自分の方言と標準語が「かなり違う」「非常に違う」と答えた人の比率を示したものである。この表には、学歴の高い層ほど自分の方言が標準語と違うと考える傾向があるということが明瞭に現れている。ところで、先ほど述べたように、標準語と違うとする人は方言を専用する人に多いが、その方言専用者には低学歴層が多い（5.1.1 参照）。つまり、差異を感じずる人に2つグループがあるというこ

表5-16 「自分の方言が標準語とかなり・
非常に違う」とした人の比率

	豊 中	宮 津	豊 岡
低学歴層	17 (25.0)	17 (18.3)	18 (17.1)
中学歴層	65 (30.8)	30 (22.9)	29 (20.3)
高学歴層	59 (40.4)	9 (36.0)	13 (26.0)

(注) ()内は各地域の各学歴層の中に占める割合。

となる。一方はもっぱら方言を使う人で、もう一方は高学歴層である。

この、高学歴層に標準語との違いを感じる人が多いということから、一見すると矛盾が生ずるように見える。というのは、5.1. で見たように高学歴層は一般に標準語をよく使うが、標準語使用者はどちらかと言うと標準語との類似性を感じている人が多いか（豊中）、一定の傾向を示さなかった（宮津、豊岡）。このことの説明としては、一つには、高学歴層と標準語使用層とが完全には一致していないということがある。もう一つは、ことばを実際に使うことと、ことばに対して感じたり判断したりすることの区別と関わっている。高学歴層は単に標準語をより多く使うというだけでなく、多分、言語的な差異そのものにより敏感であるということなのであろう。とすれば、標準語への習熟度という要因については、標準語の使用能力という面と標準語に対するメタ言語的な判断能力という面に分けて考える必要があると考えられる。そして、調査結果からすると、標準語との違いを感じとるという点について前者は直接のかかわりをもたない、ということが言える。

5.3.3 市内のことば

市内のことばの違いについて尋ねる質問は豊中調査にはない。宮津調査、豊岡調査で、この質問は面接調査の中に含まれている。その質問は以下の通りである。

質問IX.

【宮津】「宮津市の中でも、宮津、由良、半島部ではことばがちがうと言う人がいますが、あなたはどのように感じておられますか。」

- (1) 全く違う (2) 少し違う (3) ほとんど同じ
- (4) 全く同じ (5) 分からない

【豊岡】「豊岡市の中でも、場所によってことばが違うと言う人がいますが、あなたはどのように感じておられますか。」

- (1) 違う (2) 少し違う (3) ほとんど同じ
- (4) 分からない

質問IXに対して「違う」と答えた人には、さらに、宮津では表5-18、豊岡では表5-19の左端の列に挙げた地区名を出してその地区のことばと違うかどうかを聞いた。表5-18と表5-19の土地名は、現在の宮津市、豊岡市を構成している旧村名で、宮津町、豊岡町が明治22年に発足して以来合併されてきたその年代の古い順に並んでいる。したがって、この順番はおおむね宮津、豊岡の中心部からの距離に対応していると考えてよい（地図〈図1-3、図1-4〉参照）。

表5-17に回答の内訳を示す。表5-17では、無答者および「分からない」を

表5-17 市内のことばの違い

	宮 津	豊 岡
（全く）違う	48 (17.8)	115 (38.4)
少し違う	176 (65.5)	107 (35.8)
ほとんど同じ	45 (16.7)	77 (25.8)
合 計	269(100.0)	299(100.0)

表5-18 どこのことばが*違うか

[宮津] (居住地別)

対象地名	居 住 地				
	宮津	上宮津	栗田	吉津	府中
宮 津	1	36	39	24	65
上宮津	8	0	22	85	0
栗 田	29	43	25	18	53
吉 津	27	29	28	5	21
府 中	43	43	36	26	0
日 置	44	43	39	18	26
世 屋	45	50	44	24	24
日 谷	46	43	42	37	24
養 老	50	50	42	29	32
由 良	42	57	67	37	41

(注) 表の数字は各居住地区の被調査者全体に占める割合。

表5-19 どの地区のことばが違うか〔豊岡〕（居住地別）

対象地名	居 住 地									
	豊岡	八条	田鶴野	三江	五荘	新田	中筋	奈佐	港	神美
豊岡	0	13	0	0	6	0	29	0	26	33
八条	12	0	0	0	0	3	0	0	6	0
田鶴野	16	6	0	3	6	0	0	8	10	0
三江	15	6	0	3	4	7	0	8	6	0
五荘	13	0	0	3	0	7	0	0	6	0
新田	11	13	8	0	3	7	0	0	13	0
中筋	18	6	8	17	13	10	6	17	19	0
奈佐	20	13	8	14	17	7	12	8	13	8
港	49	38	58	38	38	40	41	33	48	42
神美	19	25	8	3	8	13	0	8	10	0

（注）表の数字は各居住地区の被調査者全体に占める割合。

除いてある。また、宮津調査で「全く同じ」とした人はごく少数（3名）のため(3)の「ほとんど同じ」に融合させている。

質問IXの最初の選択肢(1)は、宮津では「全く違う」で、一方、豊岡では「違う」となっている。表5-17の「(全く) 違う」の数字に大きな違いがあるのはこの影響だと思われる。そこで、「(全く) 違う」と「少し違う」を一緒にして、「同じ」か「違う」かということで表5-17を見るならば、宮津のほうが、市内のことばを違うと考える人が多いと言える（後で説明する表5-18からもこのことが言える）。これは、宮津市内と豊岡市内の方言分布の違いに対応しているものと思われる。前にも触れたように、宮津市内には重要な方言境界線が走っているとされており、たとえば、奥村三雄（1962, p. 260）では、旧宮津町・栗田は甲種（京阪式）アクセント地帯に入るのに対し、上宮津を含めた市内北西部は乙種（東京式）アクセント地帯に属するという指摘がなされている。一方、豊岡市内には少なくともこれに匹敵するほどの方言境界線が走っているとの見方はないようである。

それでは、実際、宮津市や豊岡市において、どの地区とどの地区が違っていると感じられているのであろうか。表5-18は、宮津の被調査者を居住地（現

住所) 別のグループに分け(宮津 156 人, 上宮津 13 人, 栗田 33 人, 吉津 35 人, 府中 32 人), 各グループの中で何 % の人が, ことばの異なる地区として, 表の左端の地名を挙げたかを示したものである。この表の数字にはいろいろな要因が作用しており, 正確な解釈を行うことはかなり難しい。特に, ことばの異なる地区として名前が挙げられなかった時, それが, ことばが似ているということなのか, あるいは, その地区のことばを聞いたことがなくて判断できないということなのか区別が不可能だ, ということが解釈の妨げとなる。というわけで, 細かな傾向まで読み取ることができないが, 全体として見た時に, 距離の遠さに対応してその土地のことばが違うとする人が増加する, ということは言うてよいであろう。この傾向に反する数字が現れている場合, その理由の一つとして, 大きな方言境界の存在の可能性を考えることができる。そこで, 先に触れた, 宮津・栗田と上宮津以西以北の間にありとされる方言境界が表 5-18 の中に現れているかどうかということであるが, 結果としては, 必ずしも明瞭な差が見られない, と言わねばならないであろう。たとえば, 宮津地区の人たちの判断を見ると, 市の西端にある由良と奥丹後半島部にある府中や日置とが同じような数字となっている。宮津地区と由良の間にある栗田ではもっと極端な数字を示しており, ことばが違う地区として由良が筆頭に登っている。実際, この表 5-18 から引き出される最も明瞭な境界線は由良とそれ以外の地区を分けるものである。しかし, このようにその地域の住人の意識として捉えられた地域差と言語学的な方言境界線を簡単に結び付けるわけにはいかないであろう。その前にいくつかの疑問点に答えを出す必要がある。特に, あることばが自分のことばと違うとを感じる時, その判断にことばのどんな要素が重要な役割を果たすのか(アクセントなのか, イントネーションなのか, 語彙なのか等々)について検討を加えなければならないであろう。言語学的に見たときに重要な特徴と, 人のことばが自分のとは違うと感じるときの特徴が一致している保証はどこにもないからである。

表 5-19 は, 豊岡の被調査者を居住地別に分け(豊岡 102 人, 八条 16 人, 田鶴野 12 人, 三江 29 人, 五荘 72 人, 新田 30 人, 中筋 17 人, 奈佐 12 人, 港 31 人, 神美 12 人), 宮津の場合と同様の操作を行って作成したものである。

表5-18の宮津の結果と比べると、この表に現れた数字は総じて低く、豊岡市内でのことばの差が宮津ほど大きくないことがうかがわれる。表5-19ではっきり目立つ傾向は、港地区のことばが違うとする人の比率が際立って高いことである。他の地区の人がそう考えるだけでなく、港地区でも同じような数字を示しており、港のことばが異なっていることは自他ともに認め合っている。港地区は豊岡市の中心部からは最も隔たっている。だから、そのことばが方言的に見て最も異質であるということも十分考えられる。それと同時に、社会的な条件でも港地区は他と違っている。他の地区はすべて内陸部にあるのに対し、港地区は津居山港をかかえた漁師町である。このことがことばの異同の判断に影響を及ぼしていた可能性も考慮しなくてはならないであろう。

なお、市内のことばに違いがあると感じるかどうかの回答（質問IX）に対して、性、年齢、学歴、生育地などの社会言語学的な属性による差があるかどうかについて調べたが、結果としては、どの要因についてもほとんど差がみられなかった。影響の見られたのは居住地の要因だけであった。たとえば、豊岡の港地区では、市内のことばが同じだとする人は1人（3.6%）にすぎず、他の地区を大きく下回っている。

5.4. 最後に

この章では、標準語と方言の使い分け、標準語や方言に対する意見・態度、自分や周囲の方言についての捉え方などの問題について分析と考察を行った。最後に、補足の意味で、個々の調査項目を越える一般的な次の2つのことについて簡単に触れておくことにする。

これまでの分析はどちらかというとき、豊中、宮津、豊岡の3調査に共通する特徴や傾向を探り出すことに重点があったが、それでも、重要だと思われる地域差がいくつか見いだされた。そうした地域差の多くは豊中と宮津・豊岡とを分かつものであった。豊中と宮津・豊岡とで異なった結果が現れる場合、その背景には主として、豊中の大都市性と大阪弁の有力性ないし優位性があると想定

された。一方、宮津と豊岡とで異なった傾向が見られる場合は数としてはかなり少なかったが、その原因については、方言状況との関わりを別にしてほとんど検討することができなかった。

この章での議論のかかなりの部分は、ある地域、ある層、あるグループが標準語的か方言的かというかたちで進められた。このような議論で注意する必要があるのは、「標準語的」「方言的」といってもその中身は一樣ではなく、言語使用や言語意識のどの面についてそう言うのか、はっきりさせなくてはならないということである。たとえば、男性と女性のどちらが標準語的なのかという点で、時に相反するような結果が出てくるような場合、問題としている対象が異なっているということがありうる。たとえば、質問ⅠやⅡでは男性の方が標準語的であるが、質問Ⅲの結果を見ると豊中、豊岡では女性の方が概して標準語的である。また、質問Ⅵの「方言のよさを見直す教育」に対してははっきりと男性の方が標準語的である。このような食い違いも、質問の中身を見れば、質問Ⅰ、Ⅱでは質問がふだんのことばに関するもので、しかも、標準語を専用するかどうか問われているのに対し、質問Ⅲでは主に「よそ」の場面での標準語使用で男女の差が大きい、というようにことばの違った面に焦点をあてているせいであることが分かる。さらに、質問Ⅵでは言語使用ではなく言語教育というまた別の面が問題になっているわけである。

〈注1〉 本章では、特に断りのない限り、回答の内訳には無答を含めないものとする。また、これも断りのない限り、括弧の外の数字は回答者の人数を示し、括弧の中の数字は全体に占める百分率を示すものとする。

〈注2〉 豊中の方言グループの総計は31名、使い分けグループの総計は194名となって、表5-1の数字よりも少なくなっているが、これは学歴不明者を除いてあるためである。以下でも学歴別の分析では同じような数字の食い違いが出てくる。

〈注3〉 実際の調査票における9場面の提示順序はこれと異なる（実際の提示順序は「9. 調査票」参照）。ここでは、後に示す分析結果との対応づ

けがしやすいように並べかえてある。

〈注4〉「標準語」グループは豊岡調査では0で、比較ができないので図に示さなかった。

【参考文献】

榎垣実 1962 「西日本の方言」『方言学概説』 武蔵野書院 pp. 75-102

NHK ことば調査グループ編 1980 『日本人と話ことば』 日本放送出版協会

奥村三雄 1962 「京都府方言」『近畿方言の総合的研究』 三省堂 pp. 253-300

国立国語研究所 1981 『大都市の言語生活 分析編』（報告 70-1） 三省堂

6. ことばと社会生活意識

6.1. マスコミ接触

ここでは、1日の中でマスコミとどのくらい接触しているのか、新聞とテレビについて見てみたい。どちらも言語生活調査票（アンケート方式）で質問された項目である。

6.1.1 新聞との接触

用意された質問文は、「毎日平均してどのくらい新聞をよみますか。」というものである。「全く読まない」、「10分未満」、「10～20分」、「20～30分」、「30～60分」、「1時間以上」の6選択肢が準備され、被調査者はその中から1つを選んで回答することになる。結果は表6-1のとおりとなった。表の中では、「全く読まない」と「10分未満」は足し込んで示してある。同様にして、

表6-1 新聞との接触時間（性別）

	豊 中 調 査			宮 津 調 査			豊 岡 調 査		
	男	女	全 体	男	女	全 体	男	女	全 体
10分未満	9.3	20.7	75(14.9)	15.2	30.7	64(23.0)	14.7	25.9	69(21.0)
10分以上 20分未満	24.7	30.5	139(27.5)	15.9	30.7	65(23.4)	32.9	37.8	117(35.7)
20分以上 30分未満	30.1	25.6	141(27.5)	37.0	24.3	85(30.6)	28.0	26.5	89(27.1)
30分以上	34.4	22.0	143(28.3)	30.4	14.3	62(22.3)	23.8	8.1	49(14.9)
無記入	1.5	1.2	7(1.4)	1.4	-	2(0.7)	0.7	1.6	9(1.2)
合 計	259	246	505	138	140	278	143	185	328

「30～60分」と「1時間以上」もまとめて示した。地域的には、豊中の人たちが新聞を一番よく読むようであるが、どの地域でも共通して、読む時間が長くなるのに連れて男性の比率が増しているのが分かる。

さらに、豊中調査を例にとって年齢との関連で見てみると、図6-1に示すように、年齢の高い方が新聞をよく読むという傾向がうかがえる。図には示さなかったが、他の2地域でもほぼ同様の傾向を示している。

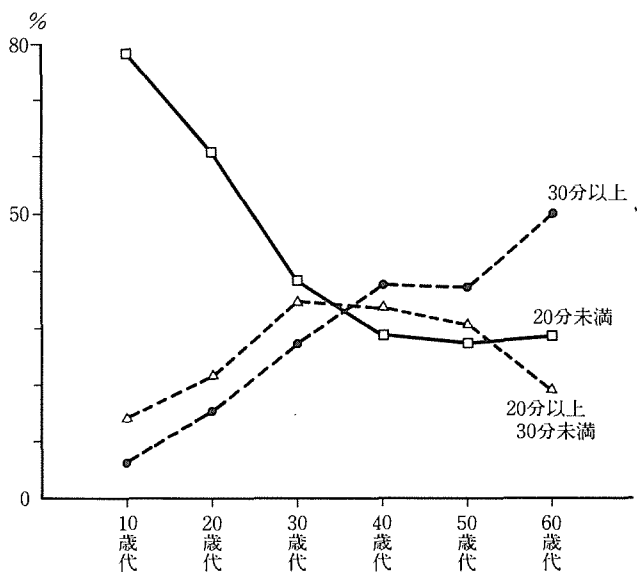


図6-1 新聞をどのくらい読むか〔豊中調査〕（年齢別）

6.1.2 テレビとの接触

前問の「新聞」を「テレビ」に置き換えた質問である。選択肢として用意されたものは、「全く見ない」、「30分未満」、「30～60分」、「1～2時間」、……、「5時間以上」の8つであった。前問同様、選択肢のまとめを行った後の結果を表6-2に示す。どの地域でも顕著な男女差は見られないが、強いて言えば、豊中調査で女性の視聴時間が僅かばかり長いようである。

次に、「新聞」と「テレビ」のクロス集計の結果を見てみよう。表6-3は、それぞれの枠内の上段（左上）が男性，下段（右下）が女性の人数を表している。表に見られるように、どの地域でも、新聞との接触時間が少なくかつテレビ視聴時間の長いグループは女性の比率が大幅に高くなっている。逆に、新聞との接触が多くテレビ視聴時間の短いグループでは男性の方が多くなっているが、豊岡にはこの現象は見られない。

表6-2 テレビとの接触時間（性別）

	豊 中 調 査			宮 津 調 査			豊 岡 調 査		
	男	女	全 体	男	女	全 体	男	女	全 体
1 時間未満	23.2	18.3	105(20.8)	13.8	17.1	43(15.5)	20.3	23.2	72(22.0)
1 時間以上 2 時間未満	36.7	33.3	177(35.0)	31.9	26.4	81(29.1)	30.8	30.8	101(30.8)
2 時間以上 3 時間未満	22.8	22.4	114(22.6)	24.6	30.0	76(27.3)	30.8	27.6	95(29.0)
3 時間以上 4 時間未満	9.7	12.6	56(11.1)	18.8	15.0	47(16.9)	13.3	11.4	40(12.2)
4 時間以上	5.4	11.8	43(8.5)	10.1	11.4	30(10.8)	4.2	6.5	18(5.5)
無記入	2.3	1.6	10(2.0)	0.7	-	13(0.4)	0.7	0.5	2(0.6)
合 計	259	246	505	138	140	278	143	185	328

表6-3 新聞とテレビへの接触時間（クロス集計）

豊中調査				宮津調査				豊岡調査			
テ 新	2時間 未 満	2時間 以 上	計	テ 新	2時間 未 満	2時間 以 上	計	テ 新	2時間 未 満	2時間 以 上	計
20分 未満	100 96	65 92	165 188	20 34	23 52	43 86	20分 未満	41 65	27 53	68 118	
20分 以上	55 31	33 23	88 54	43 27	50 27	93 54	20分 以上	32 34	42 30	74 64	
計	155 127	98 115	253 242	計	63 61	73 79	136 140	計	73 99	69 83	142 182

6.1.3 本との接触

出版ブームで、世の中にはありとあらゆる本が氾濫しているように思われる。

このような世の中で、人はどのくらい本と接触しているのでしょうか。次の質問で、その実態を探ろうとした。

「この1カ月間に本（教科書を除く）や雑誌は何冊読みましたか。」

ここでは「単行本」、「月刊誌」、「週刊誌」の3つのジャンルに分けて質問した。ただし、豊岡ではこの質問を実施していない。結果は次のようなものであった。数値は人数と（ ）内のパーセントを示したものである。

		1冊	2冊	3冊	4冊以上	無記入
単行本	豊中	91(18.0)	79(15.6)	38(7.5)	65(12.9)	232(45.9)
	宮津	36(12.9)	14(5.0)	10(3.6)	19(6.8)	199(71.6)
月刊誌	豊中	108(21.4)	67(13.3)	30(5.9)	33(6.5)	267(52.9)
	宮津	45(16.2)	35(12.6)	16(5.8)	9(3.2)	173(62.2)
週刊誌	豊中	58(11.5)	54(10.7)	48(9.5)	88(17.4)	257(50.9)
	宮津	33(11.9)	26(9.4)	12(4.3)	38(13.7)	169(60.8)

まず単行本の平均は、豊中1.5冊、宮津0.8冊であった。読んだ人だけについての平均では両者3冊弱となる。読まない人は全然読まないが、読む人は月平均3冊くらい読むとも考えられる。月刊誌の平均は、豊中1.0冊、宮津0.8冊、また週刊誌の平均は豊中2.0冊、宮津1.2冊であった。各ジャンルごとに、4冊以上読むグループの属性を見てみると、単行本では10歳代・20歳代の若者の比率が高く、また、週刊誌では圧倒的に男性の比率が高くなっている。

6.2. 行動範囲

どのくらいの頻度でよその土地と接触しているのかを尋ねた。ここでは調査票の順に、その交流状況を見ていくことにする。この設問もアンケート方式によるものである。

6.2.1 観光旅行

「観光などで旅行に出かけるのは好きですか」という質問に対して、「好き（嫌い）」、「どちらかといえば好き（嫌い）」という4つの選択肢を用意して尋ねた。結果は次のようなものであった。人数と、（ ）内にパーセントを示してある。

	豊中調査	宮津調査	豊岡調査
好 き	233(46.1)	135(48.6)	145(44.2)
どちらかといえば好き	197(39.0)	103(37.1)	140(42.7)
どちらかといえば嫌い	48(9.5)	23(8.3)	30(9.1)
嫌 い	14(2.8)	5(1.8)	3(0.9)
無記入	13(2.6)	12(4.3)	10(3.0)
合 計	505 人	278 人	328 人

「好き」と「どちらかといえば好き」の2つを加えると、どの調査地域でも8割以上となり、旅行が嫌いな人はあまりいないのがわかる（10％程度）。

6.2.2 私用の旅行、公用の旅行

次に、1年間にどのくらい旅行に行くのかを見てみよう。最初に私用の旅行についての分布を示すことにする。

	豊中調査	宮津調査	豊岡調査
1 回	165(32.7)	94(33.8)	120(36.6)
2 回	156(30.9)	49(17.6)	76(23.2)
3 回以上	103(20.4)	65(23.4)	34(10.4)
0 回または無記入	81(16.0)	70(25.2)	98(29.9)
合 計	505 人	278 人	328 人

平均を計算すると、豊中が1.9回、宮津が1.7回、豊岡が1.3回という値になる。旅行に行かない人および無記入を除外して平均を出すと、それぞれ2.3

回、2.2回、1.8回となり、行く人はほぼ年に2回くらい行くということになるだろうか。では、誰と旅行するケースが多いのであろうか。宮津と豊岡では「誰と行きますか」という質問を加えてあるので、その結果を表6-4、表6-5に示すことにする。複数回答の処理をしてあるので、パーセントの合計は100にはならない。また、旅行回数が0のものあるいは無記入は省いて示してあるので、人数はいくぶん少な目になっている。

性別の項を見ると、友人との旅行は、宮津、豊岡とも男性の比率の高さが目立っている。印象では女性のほうが多そうであるが、若い女性に限ったことかもしれない。豊岡では家族との旅行に女性が多く、宮津では団体旅行に男性が多くなっている。風土的な差なのであろうか。家族との旅行を年齢別に比較してみると、両地域とも、10歳代および30、40歳代が多くなっている。同じ家族と言っても、前者は両親と、後者は子供たちとの旅行を意味するのであろう。

次に、公用の旅行について見てみよう。学生と無職の数人に、回数の記述が見られたが、ここでは職業を持っている人だけについて集計し、その分布を示すことにする。分布からもわかるように、宮津、豊岡では公用の旅行をした人は4割程度であった。一方、豊中では6割ほどの人が公用の旅行を行っている。この差は、各市の置かれた地域的なものと大いに関係があろう。私用の旅行と同様に平均旅行回数を求めると、豊中3.5回（男4.5回、女1.3回）、宮津2.5回（男3.9回、女0.6回）、豊岡1.6回（男2.2回、女0.7回）となる。地域差もさることながら、男女差の大きい項目である。

	豊中調査	宮津調査	豊岡調査
1 回	59(21.0)	24(13.3)	35(16.4)
2 回	45(16.0)	11(6.1)	22(10.3)
3 回以上	62(22.1)	23(12.7)	28(13.1)
0 回または無記入	115(40.9)	123(68.0)	128(60.1)
合 計	281 人	181 人	213 人

表6-4 旅行の相手 [宮津調査] (性・年齢別)

	ひとりで	家族と	友人と	団体旅行	その他	人数
全 体	11 (4.8)	79(34.3)	74(32.2)	49(21.3)	24(10.4)	230
男	5 (5.0)	37(36.6)	37(36.6)	31(30.7)	16(15.8)	101
女	6 (4.7)	42(32.6)	37(28.7)	18(14.0)	8 (6.2)	129
15-19 歳	-	13(65.0)	11(55.0)	2(10.0)	1 (5.0)	20
20-29 歳	2 (5.3)	6(15.8)	16(42.1)	1 (2.6)	2 (5.3)	38
30-39 歳	3 (6.3)	24(50.0)	4 (8.3)	11(22.9)	6(12.5)	48
40-49 歳	-	17(39.5)	20(46.5)	13(30.2)	9(20.9)	43
50-59 歳	1 (2.3)	12(27.2)	13(29.5)	16(36.4)	2 (4.5)	44
60-69 歳	5(13.5)	7(18.9)	10(27.0)	6(16.2)	4(10.8)	37

(注) 複数回答項目, 旅行回数が0 および無記入のものは表から省いてある。

表6-5 旅行の相手 [豊岡調査] (性・年齢別)

	ひとりで	家族と	友人と	団体旅行	その他	人数
全 体	9 (3.9)	106(46.1)	72(31.3)	72(31.3)	10 (4.3)	208
男	6 (5.9)	37(36.6)	37(36.6)	30(29.7)	4 (4.0)	111
女	3 (2.3)	69(53.5)	35(27.1)	42(32.6)	6 (4.7)	97
15-19 歳	1 (5.0)	12(60.0)	3(15.0)	5(25.0)	1 (5.0)	24
20-29 歳	2 (5.3)	16(42.1)	14(36.8)	6(15.8)	1 (2.6)	26
30-39 歳	3 (6.3)	32(66.7)	12(25.0)	13(27.1)	2 (4.2)	41
40-49 歳	1 (2.3)	20(46.5)	19(44.2)	15(34.9)	2 (4.7)	49
50-59 歳	-	13(29.5)	15(34.1)	19(43.2)	1 (2.3)	38
60-69 歳	2 (5.4)	13(35.1)	9(24.3)	14(37.8)	3 (8.1)	30

(注) 複数回答項目, 旅行回数が0 および無記入のものは表から省いてある。

6.2.3 旅行先

関西あるいは関東の主要都市へどのくらいの頻度で出かけるのかを尋ねた。調査地域によって尋ねた場所は異なるが、東京だけは共通に質問されている。そこで、まず東京から見ていくことにしよう。前項同様、1年間に何回かを尋ねたものである。

	豊中調査	宮津調査	豊岡調査
1 回	74(14.7)	21(7.6)	22(6.7)
2 回	32(6.3)	1(0.4)	6(1.8)
3回以上	52(10.3)	4(1.4)	2(0.6)
0 回または無記入	347(68.7)	252(90.6)	298(90.9)
合 計	505 人	278 人	328 人

豊中でも3割ほどの人しか東京へは行っていない。宮津、豊岡に至っては、1割にも満たない数である。特に宮津、豊岡の人たちにとっては、東京は行動範囲の外にある地域といって良さそうである。その東京に親戚はあるのだろうか。「ある」、「ない」の二者択一の質問形式で尋ねた結果が次のようなものである。豊中が、他の2地域に比べて親戚のある比率が高くなっている。この点からも、豊中に比べ、宮津、豊岡両地域の東京との接触の少なさを指摘できるであろう。

	豊中調査	宮津調査	豊岡調査
東京に親戚がある	227(45.0)	79(28.4)	81(24.7)
〃 ない	267(6.3)	186(66.9)	218(66.5)
無記入	11(8.7)	13(4.7)	29(8.8)
合 計	505 人	278 人	328 人

年齢別分布を見てみると、年齢が高くなるにつれて「親戚がある」の比率が上がっている。歳をとるにつれて、親族の婚姻等で親戚の範囲も広がっていくのであろうか。なお、表6-6は、親戚の有無と東京への旅行の有無との関係を表したものである。

表6-6 東京の親戚と上京の有無（クロス集計）

豊中調査				宮津調査				豊岡調査			
	行った	行かなかった	計		行った	行かなかった	計		行った	行かなかった	計
あり	104	123	227	あり	18	61	79	あり	17	64	81
なし	54	213	267	なし	8	178	186	なし	13	205	218
計	158	336	494	計	26	239	265	計	30	269	299

次に、東京以外の土地との接触状況を見てみよう。宮津調査では「京都」を、豊岡調査では「京都」と「姫路」について調べた。以下に、結果だけを示すにとどめる。質問文に続き、回答の分布と男女別の平均旅行回数を示したものである。

〔宮津〕京都市へは、年何回くらい行きますか。

1回 50人 (32.7%)、2回 36人 (18.0%)、
3回 38人 (12.9%)、4回以上 75人 (27.0%)、
0回または無記入 91人 (32.7%)

平均：1.2回（男1.6回，女0.8回）

〔豊岡〕京都市へは、年何回くらい行きますか。

1回 70人 (21.3%)、2回 25人 (7.6%)、
3回以上 22人 (6.7%)、0回または無記入 216人 (65.9%)

平均：0.6回（男0.9回，女0.5回）

姫路市へは、年何回くらい行きますか。

1回 54人 (16.5%)、2回 38人 (11.6%)、
3回以上 54人 (16.5%)、0回または無記入 187人 (57.0%)

平均：1.3回（男1.9回，女0.9回）

6.2.4 旅先で、見知らぬ人と

旅に出ると、何らかの事情で、見知らぬ人と会話を交わす必要に迫られることがある。話しかける場合もあれば、話しかけられる場合もある。ここでは、まず最初に、話しかける場合を見てみよう。質問文は次のようなものである。

「旅先で、あなたは見知らぬ人に気軽に話しかけるほうですか。」

回答には、「はい」か「いいえ」の二者択一が要求されている。

	豊中調査	宮津調査	豊岡調査
「は い」	199(39.4)	81(29.1)	91(27.7)
「いいえ」	295(58.4)	189(68.0)	227(69.2)
無記入	11(2.2)	8(2.9)	10(3.0)
合 計	505 人	278 人	328 人

ここでも、豊中と宮津、豊岡の間に、10 % ほどの差が生じている。宮津、豊岡のほうが、口の重い人が多いのであろうか。その宮津、豊岡では、これとは逆に、話しかけられた場合の設問が実施された（豊中調査にはその質問はない）。

「旅先で、あなたは見知らぬ人に話しかけられたら気軽に応ずるほうですか。」

この質問に対する回答の分布は、先の話しかける場合とのクロス集計として見てみよう（表 6-7、表 6-8）。

表6-7 話しかけるか／応じるか

[宮津調査]		話しかけに応じるか			
		は い	いいえ	無記入	計
話 し か け る か	は い	78	3	-	81 29.1
	いいえ	143	45	1	189 68.0
	無記入	2	-	6	8 2.9
	計 %	223 80.2	48 17.3	7 2.5	278 100.0

表6-8 話しかけるか／応じるか

[豊岡調査]		話しかけに応じるか			
		は い	いいえ	無記入	計
話 し か け る か	は い	89	2	-	91 27.7
	いいえ	148	78	1	227 69.2
	無記入	2	1	7	10 3.0
	計 %	239 72.9	81 24.7	8 2.4	328 100.0

話しかける場合とは逆に、宮津で 80 %，豊岡で 73 % の人が、話しかけられれば気軽に応ずると回答している。また、話しかけるのはいやだが、話しかけられれば気軽に応ずるという人が、宮津で 143 人（51.4 %），豊岡で 148 人

(45.1%) もいる。話しかけるのも、話しかけられるのもいやだという人は宮津 45 人 (16.2%)、豊岡 78 人 (23.8%) であった。いずれにしても、控えめな態度が描き出されているように思える。

6.3. 対人行動

話しの相手をどのように認識するかによって、話題の選定やことばづかいなどが左右されることは周知の事実である。ここでの質問は、見知らぬ人に話しかけられた場合、相手のどのようなことが気になるかを尋ねたものである。質問文および質問のために提示した選択肢は以下のようなものである。

「旅行中、列車の中で隣の人が話しかけてきました。話の内容は、どこまで行くのかとか気候の話題といった範囲のことで、特にむずかしいことではなさそうです。

-1 ところで、その人があなたと同じ年かっこの同性のとき、その相手について、まずどんなことが気になりますか。リストから選んで答えて下さい。

-2 同じ状況で、相手が同じ年かっこの異性の場合はどうですか。」

提示リスト中の選択肢：年齢、職業、地位、身なり、経済、家族、人柄、出身地、趣味、その他

これらの設問は、大阪大学の徳川宗賢氏が、ことばづかいの地域差を調べる際に用いたものの一部である。氏の調査は高校生を対象に、アンケート形式で実施されたものであるが、本調査では、その質問をそのままの形で利用させてもらうこととした。宮津と豊岡での比較を目的に、面接調査の中で実施された。結果は図に示すようなものであるが、相手が同性でも異性でも、気になる項目としてあげられたのは、「年齢」、「職業」、「身なり」、「人柄」、「出身地」の 5 つであった。残りは僅かなパーセントしか獲得していないので、ここではこの 5 つについてだけ図示することにする。

(1) 同じ年かっこの同性のとき

話しかけてきた相手が同性の場合の全体の結果は、次のようなものである。
豊岡の右の数は順位を表している。

	宮津調査	豊岡調査
出身地	105(36.2%)	92(27.6%)③
職業	102(35.2%)	99(29.7%)①
年齢	90(31.0%)	93(27.9%)②
人柄	83(28.6%)	92(27.6%)③
身なり	76(26.2%)	72(21.6%)⑤

順位に関する相関はあまり良いものではない。次に、性差を見ることにしよう。

図6-2に示したとおりで、左が宮津、右が豊岡の結果を表し、図中の実線は男性、破線は女性の結果を示している。両地域とも男女比の差が大きいものが多くなっている。男性は同性の職業と出身地に興味を持ち、女性は同性の年齢と身なりについての関心が高くなっている。

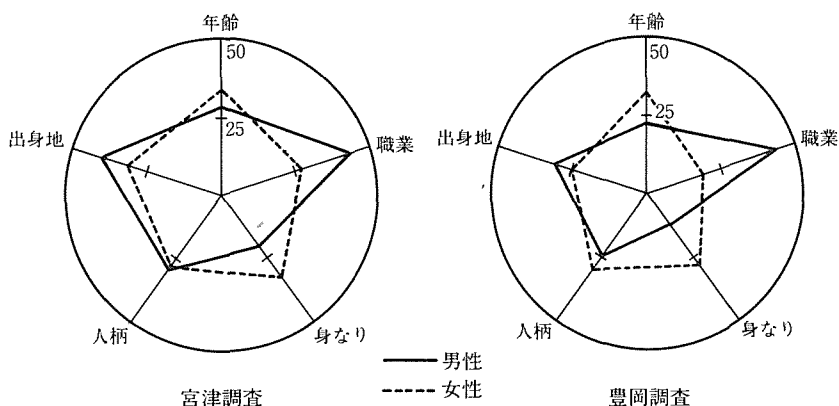


図6-2 同じ年かっこの同性のとき (性別)

年齢について、被調査者の年齢別分布を図示したものが図6-3である。若い者の年齢への関心度は、同じ年かっこうという前提を立てているにもかかわらず相当に高い。ある程度年齢の高い人にとって、少しくらいの年齢のずれはた

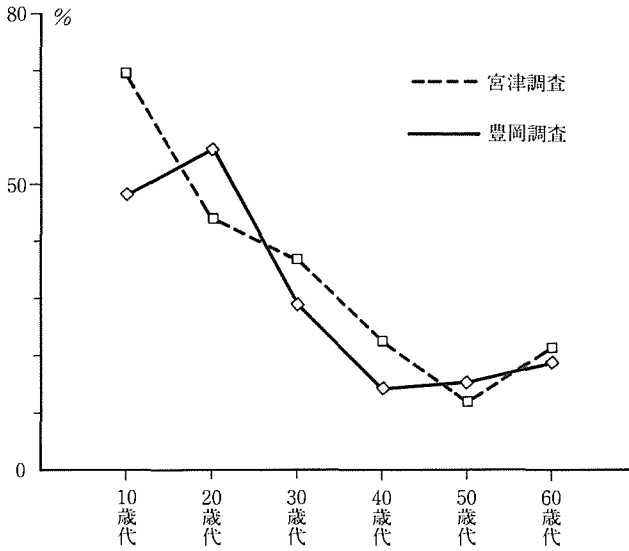


図6-3 年齢への関心 (年齢別)

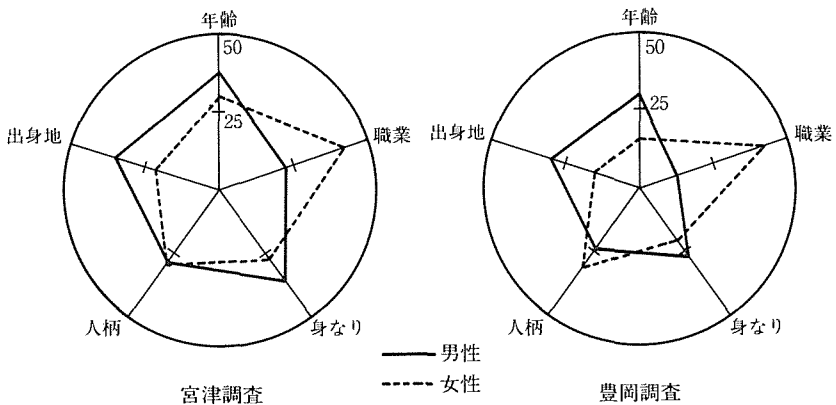


図6-4 同じ年かっこうの異性のとき (性別)

いした問題ではないのであろうが、若い者にとっては自分より上か下かということがことばづかいを決定する大切なポイントになるのであろう。このような現象は次の異性の場合にも見られることである。

(2) 同じ年かつこうの異性のとき

前と同様に、全体に対するパーセントを示すと以下のようなになる。

	宮津調査	豊岡調査
年 齢	97(33.4 %)	72(21.6 %)④
職 業	95(32.8)	99(29.7)①
身なり	91(31.4)	78(23.4)③
人 柄	83(28.6)	95(28.5)②
出身地	81(27.9)	72(21.6)④

また、性別の分布を図示すると、図 6-4 のようになる。両地域共通して職業と出身地の男女差が大きく見える。女性にとって男性の職業は関心の高いものであり、男性にとっては女性の出身地が関心あるものということになる。

6.4. ことばとつきあい

言語生活調査（留置調査）によって調べた項目である。調査票に記載された順に結果を見ていくことにしよう。

6.4.1 近所の人とおしゃべり

最初は、「近所の人と話をするのは好きですか。」という問である。選択肢は、「好き」、「どちらかといえば好き」、「どちらかといえば嫌い」、「嫌い」の4つである。全体の結果は図 6-5 のようになる。

豊中が一番、嫌いの方向に傾いているようであるが、都会という環境と無縁

ではあるまい。「好き」と「どちらかといえば好き」の2つの回答を合わせて、男女別の比較を行ってみるとつぎのようになる。どの調査地域をとってみても、女性のおしゃべり好きは変わらないようである。

	豊中調査	宮津調査	豊岡調査
男 性	80(30.9)	53(38.4)	80(55.9)
女 性	119(48.0)	89(63.6)	119(64.3)

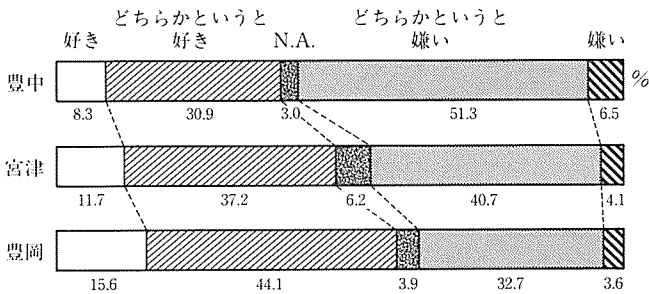


図6-5 近所の人とおしゃべり

6.4.2 集会や会議に出席

次は、「集会や会議などに出席するのは好きですか。」という問である。選択肢は前問と全く同じものである。全体の結果を、図6-6に、「嫌い」という回

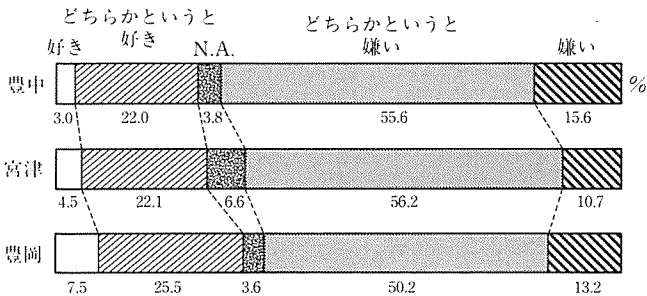


図6-6 集会や会議に出席

答の年齢別分布を図6-7に示す。

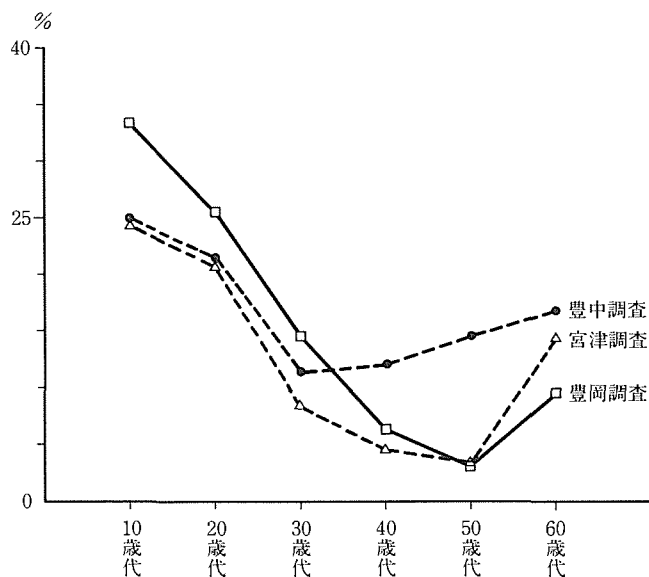


図6-7 集会や会議に出席 〈嫌い〉 (年齢別)

全体として、「あまり好きでない」という人たちが過半数を占めている。性別では差は少ないものの、図6-7でわかるように、年齢の低いほうのグループに会議の嫌いな者が多いようである。

6.4.3 見知らぬ人に話しかけるか

「待合室などで見知らぬ人に話しかけますか。」という問には、「よく話しかける」、「ときどき話しかける」、「ほとんど話しかけない」、「全く話しかけない」の4つの選択肢が準備された。前半の2つを合わせて、「話しかける」として、集計すると次のようになる。

		話しかける	ほとんど話 しかけない	全く話し かけない	人数
豊中調査	男 性	25.1 %	54.4 %	17.4 %	259 人
	女 性	45.1	38.6	14.2	246
宮津調査	男 性	30.4	54.3	13.0	138
	女 性	39.3	48.6	10.0	140
豊岡調査	男 性	37.1	51.7	9.8	143
	女 性	48.1	42.2	9.2	185

女性のほうがよく話しかけるという傾向がはっきりとしている。また、このグループの年齢別分布を見ると、高齢者のほうの比率が高くなっている。

6.4.4 自分のことばが気になるか

「他人と話をするとき、自分のことばが気になるほうですか。」という問に対する全体の結果は以下のとおりである。ここでのパーセントは無回答を除いて計算してある。

	非常に 気になる	少し 気になる	あまり気に ならない	全然気に ならない	人数
豊中調査	4.2 %	28.4 %	48.4 %	19.0 %	496 人
宮津調査	4.8	35.8	45.0	14.4	271
豊岡調査	8.3	51.8	31.9	8.0	326
(大 阪	6.2	31.6	41.8	20.4	354)

豊中と宮津は比較的似た分布をしているが、豊岡はかなり気になるほうへ傾斜しているのがわかる。() 内は、昭和 50 年に国立国語研究所が実施した「大都市における言語生活の実態調査」について大阪の結果を引用したものである。豊中、宮津の結果はこれと良く似ている。同じ関西圏ではあるが、豊岡だけが特異な分布をしているということになる。性別の結果を見ると、気になるほうには女性が多く、気にならないほうには男性が多いという傾向はすべて

の地域に共通している。「気になる」と「少し気になる」を合わせて年齢別の分布を描いたのが図6-8である。年齢が高くなるにつれて、気になる人の率は減少する傾向をみせている。

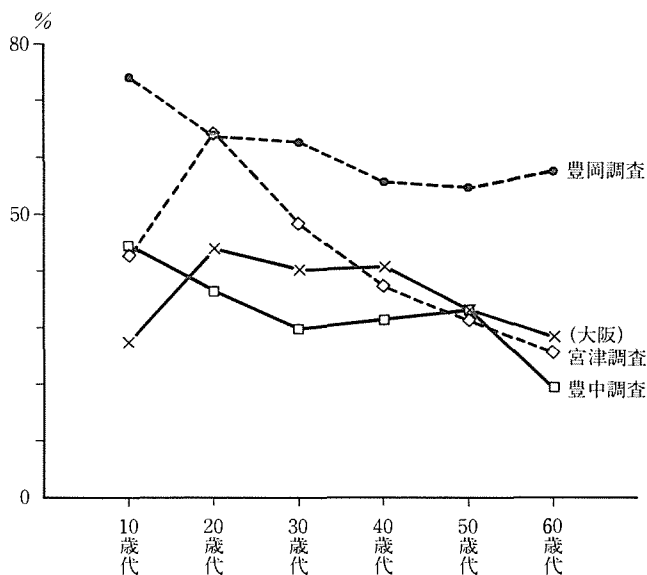


図6-8 自分のことばが気になる (年齢別)

6.4.5 人前で話ができるほうか

表題とほぼ同じ聞きかたで調査が行われている。無回答を除いて集計した結果は次のようなもので、宮津、豊岡がよく似た分布を示しているのに、豊中だけが他と少し違っている。

	できる	どちらかとい えばできる	どちらかとい えばできない	できない	人数
豊中調査	17.6 %	39.8 %	36.2 %	6.5 %	495 人
宮津調査	10.0	40.0	44.4	5.6	270
豊岡調査	9.9	36.0	45.8	5.7	324
(大 阪)	18.5	33.0	39.3	8.2	348)

前出の大阪調査の結果と比べると、豊中の結果と大阪のそれはよく似たものとなっている。性別に見てみると、豊中と宮津は人前で話ができるほうに男性、できないほうに女性が多く分布しているが、豊岡では様子がいくぶん違っている。「できる」には男性、「どちらかといえはできる」には女性が多くなっている、他には性差が見られない。

6.4.6 近所とのつきあい

宮津と豊岡で実施された調査項目で、ことばとの直接の関係は考えにくい。ただ、ことばづかいを決定する外界の1つの条件にはなるだろう。

「あなたは、ご近所の方との程度のおつき合いがありますか。」という設問である。選択肢として次の5つが用意されていた。

1. あいさつをかわす程度の人だけ
2. 世間話をする程度の人だけ
3. 親しくつき合っている人が数人いる
4. 親しくつき合っている人がかなりいる
5. ほとんどつき合いがない

全体および性別の結果は次のようなものであった。豊岡のほうが僅かばかりではあるが、近所づきあいがあるほうに傾いている。豊岡では世間話程度の男性の比率が高いのに対して、宮津ではあいさつ程度の男性が多いなど、宮津と豊岡では近所づきあいパターンがいくらか違うのかも知れない。

	1.	2.	3.	4.	5.	無回答
宮津調査	27.6	22.1	30.7	10.7	2.1	6.9
男性	34.5	22.8	24.8	9.0	2.8	6.2
女性	20.7	21.4	36.6	12.4	1.4	7.6
豊岡調査	18.9	32.1	33.0	11.4	2.7	1.8
男性	17.2	38.6	26.2	11.7	4.1	2.1
女性	20.2	27.1	38.3	11.2	1.6	1.6

6.5. 興味や関心の方向

被調査者の興味や関心が宮津や丹後地方あるいは豊岡や但馬地方にあるのか（地域志向）、それとも全国的なものにあるのか（全国志向）といった観点で、いくつかの項目が調査されている。それぞれの項目に対する集計結果を以下で示すことにしよう。

なお、質問文については、「9. 調査票」の面接調査票（501～503）を参照されたい。

6.5.1 ラジオやテレビのニュース

ラジオやテレビのニュース番組で報道される内容が、宮津市や丹後地方（豊岡市や但馬地方）に関するものの場合と、東京や全国に関するもの場合とではどちらを好むであろうか。

前者を「地域の報道」、後者を「全国の報道」として、その性別分布を表6-9に示す。

表6-9 ラジオやテレビのニュース（性別）

	宮津調査			豊岡調査		
	男	女	全体	男	女	全体
地域の報道	95(65.5)	96(66.2)	191(65.9)	88(60.7)	129(68.6)	217(65.2)
全国の報道	32(22.1)	33(22.8)	65(22.4)	41(28.3)	38(20.2)	79(23.7)
どちらとも	16(11.0)	16(11.0)	32(11.0)	16(11.0)	21(11.2)	37(11.1)
無回答	2 (1.4)	-	2 (0.7)	-	-	-
計	145	145	290	145	188	333

宮津、豊岡とも非常に良く似た分布を示し、性差もほとんど見られないが、豊岡の「全国の報道」にわずかな男女差が現れている。

6.5.2 主購読新聞

主として全国紙を読んでいるのか、それとも地方紙なのかという観点で集計してみた（表 6-10）。

「全国紙」としては、朝日、毎日、読売、産経、日経などがあげられよう。「地方紙」としては、宮津には「京都新聞」、豊岡には「神戸新聞」、「日本海新聞」などがある。全国紙と地方紙の両方を読む人については、多く読むほうに足し込んで集計した。その判定が困難なものだけを、「どちらとも」に含めた。

表6-10 主購読新聞（性別）

	宮津調査			豊岡調査		
	男	女	全体	男	女	全体
全国紙	91(62.8)	111(76.6)	202(69.7)	110(75.9)	153(81.4)	264(79.3)
地方紙	30(20.7)	24(16.6)	54(18.6)	26(17.9)	26(13.8)	52(15.6)
どちらとも	21(14.5)	5 (3.4)	26 (9.0)	8 (5.5)	5 (2.7)	13 (3.9)
読まない	-	2 (1.4)	2 (0.7)	1 (0.7)	2 (1.1)	3 (0.9)
その他・無回答	3 (2.1)	3 (2.1)	6 (2.1)	-	1 (0.5)	1 (0.3)
計	145	145	290	145	188	333

全国紙が圧倒的に多く読まれているようである。

6.5.3 関心のある選挙

いろいろある選挙のうち、どのレベルの選挙に関心があるのかを尋ねた。

ここでは、国政レベル（衆議院、参議院）、県政・府政レベル（県知事／府知事、県会議員／府議会議員）、市政レベル（市長、市議会）のようにまとめ、その性別分布を表 6-11 に示す。両地域とも市政レベルに関心が集中している。とくに、女性の比率が高くなっているのが目立つ。この市政レベルを年齢別に見ると図 6-9 のようになり、年齢が高くなるにつれて関心が高まる傾向がうかがえる。また、この項目は学歴と強い相関を持っているので、その様子を下に示しておく。学歴が高くなるにつれて国政、県政あるいは府政に関心が強くなり、逆に市政への関心が減じているのがわかる。

表6-11 関心のある選挙（性別）

	宮津調査			豊岡調査		
	男	女	全体	男	女	全体
国政の選挙	31(21.4)	14 (9.7)	45(15.5)	34(23.4)	24(12.8)	58(17.4)
府政・県政の選挙	21(14.5)	21(14.5)	42(14.5)	6 (4.1)	14 (7.4)	20 (6.0)
市政の選挙	80(55.2)	91(62.8)	171(59.0)	75(51.7)	132(70.2)	227(68.2)
関心なし	6 (4.1)	15(10.3)	21 (7.2)	6 (4.1)	14 (7.4)	20 (6.0)
その他・無回答	7 (4.8)	4 (2.8)	11 (1.0)	4 (2.8)	4 (2.1)	8 (2.4)
計	145	145	290	145	188	333

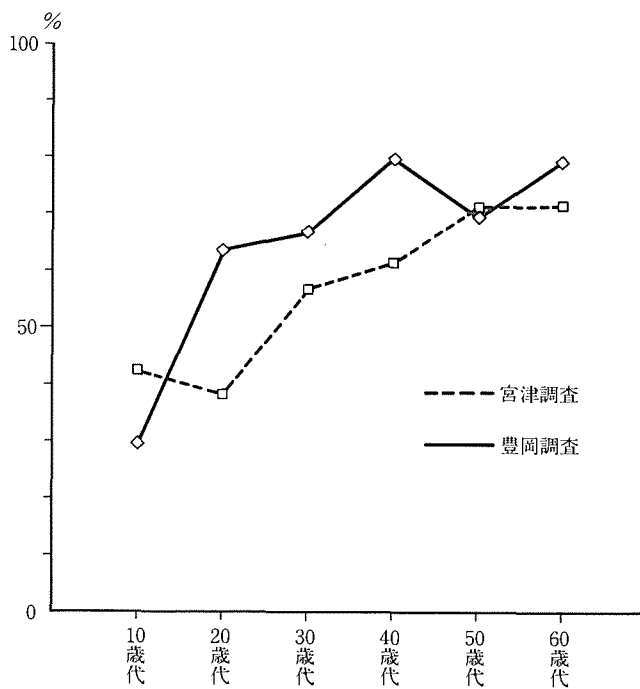


図6-9 関心のある選挙 〈市政〉 (年齢別)

	国政	県政 府政	市政	関心なし	その他 N. A.	人数
宮津調査						
低学歴	12(10.8)	12(10.8)	77(69.4)	7(6.3)	3(0.0)	111
中学歴	25(16.9)	18(12.2)	86(58.1)	12(8.1)	7(0.0)	148
高学歴	8(25.8)	12(38.7)	8(25.8)	2(6.5)	1(2.4)	31
豊岡調査						
低学歴	11(9.2)	4(3.3)	92(76.7)	10(8.3)	3(0.0)	120
中学歴	34(21.4)	9(5.7)	104(65.4)	8(5.0)	4(0.0)	159
高学歴	13(24.1)	7(13.0)	31(57.4)	2(3.7)	1(1.9)	54

7. 語彙

この章で扱うデータは、宮津・豊岡の両調査の中で、面接形式で実施された語彙および語彙的項目に関するものである。

調査対象となった項目の数は比較的多いが、本書のメイン・テーマである「場面」とは直接関係しないような種類のものが少なくない。そこで、ここでは「場面」に係わる項目については詳しく述べ、そうでないものはごく簡単にふれるにとどめることとする。また、後者の類で回答分布が特定のカテゴリーに集中しているようなものは、記述を割愛したことを断っておく。

なお、ここで用いられた設問の大部分は、国立国語研究所（1966～1974）の『日本言語地図』調査で作成されたものによっている。

7.1. 「イクラ」・「ナンボ」

「物の数の尋ね方」と「物の値段の尋ね方」について場面を設定し、それぞれの場面での「イクツ」「イクラ」「ナンボ」の使い分けを調べた。これについては、先行のものとして『日本言語地図』についての検証調査の一環として行われた、熊本県球磨川沿岸地域における地域差と場面差の関係の調査（国立国語研究所，1972 年）がある。

7.1.1 設定場面

今回の調査では、「あらたまり・くつろぎ」という軸をもとに場面設定がなされている。

宮津調査で取り上げた場面は、以下の 5 場面である。

同年輩の宮津の人とくつろいで （「同年」と呼ぶ。以下、同じ。）

宮津の若い人とくつろいで (「若者」)

地域の会合の席などであらたまって (「会合」)

京都市内で初対面の人と (「京都」)

東京で初対面の人と (「東京」)

この宮津での場面は、球磨川の調査にならって設定されたものである。

ただし、球磨川調査では老年層のみを調査対象者としていたのに対し、宮津調査では15～69歳とより広範囲の年齢層を対象としている点で異なっている。そのため、同じく「若者」といっても、この設定場面は、球磨川での被調査者にとっては一律に「年齢差のある年下」の相手を意味していたが、今回の宮津調査では回答者の年齢によって指す相手の立場が異なる。すなわち、高齢者においては球磨川のケースと同じであるが、若年層の場合では「若者」は「同年」とまったく同じ場面になってしまっている。そこで、豊岡調査では、この混乱を避けるために、宮津での「若者」の代わりに、「年上」「年下」という形で場面を設定し直すこととした。

また、宮津では府内の都市として「京都」の場面を設定したが、豊岡では兵庫県内ということで「姫路」にしている。だが、京都市と豊岡市とは交通機関の関係(山陰本線)などでも結びつきがあり、また、宮津調査の場合と共通の場面として比較しようということから、豊岡調査においても「京都」の場面はそのまま調査対象に残すこととした。

以上のいきさつから、豊岡では、次の7場面が設定された。

豊岡の同年輩の人とくつろいで (「同年」と呼ぶ。以下、同じ。)

豊岡の年下の人とくつろいで (「年下」)

豊岡の年上の人とくつろいで (「年上」)

地域の会合の席などであらたまって (「会合」)

姫路市内で初対面の人と (「姫路」)

京都市内で初対面の人と (「京都」)

東京で初対面の人と (「東京」)

なお、宮津・豊岡の両調査とも、くつろいだ場面からあらたまり度が少しずつ増すような順、すなわち下位場面から上位場面へと配列されている。

7.1.2 物の数の尋ね方

「物の数の尋ね方」を質問する項目では、最初に、「箱の中にある物の数を尋ねるとき、この中にまんじゅうが～、それから何といいますか。」と問い、次に7.1.1 の場面リストを呈示して、「これらの人に対してはどのことばを使いますか。」と尋ねて、それぞれの回答を求めた。

全体の回答を見わたしたところ、宮津の例だが「イクツ アルヤロ」、「イクツ カナ」、「イクツ アリマスー」、「イクツ アリマスカ」のように文末の「入ってますか」の部分に気をつけて使い分けをしているものもあった。このことから、「イクツ」の部分についての使い分けは、かなり無意識のうちの自然な反応という印象をもった。

なお、回答を整理する際、「オイクラ」「オイクツ」などは、それぞれ「イクラ」「イクツ」に含めた。

(1) 宮津の場合

宮津調査での被調査者全体の回答状況は、図7-1に示すとおりである。(表中の数値は%。以下、この章の図表での単位はすべて%で記す。)

回答語形ごとにみると、「ナンボ」は同年47.9%、若者45.9%と、くつろいだ場面で多数形となっている。しかし、あらたまった場面では、この語形の使用率は激減しており、会合では13.4%、京都・東京ではわずか4.1%とな

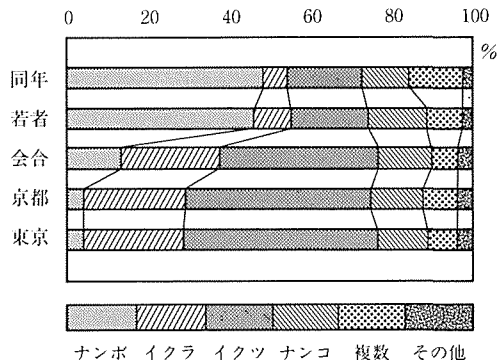


図7-1 物の数の尋ね方 [宮津]

っている。

これに代わって、場面のあらたまり度が増すにつれて多くなっていくのが共通語形の「イクツ」と「イクラ」の両語形である。たとえば、「イクツ」はくつろいだ場面では20%弱（同年19.3%，若者19.7%）であるが，あらたまった場面では会合39.7%，京都46.2%，東京47.9%と高くなっている。

一方、「ナンコ」は，各場面を通じて12～15%くらいであり，場面の違いによる使用率の差がまったくみられない。

しかし，年齢別にみると，表7-1のように，若年層（15～29歳）において特徴的な様相を示している。つまり，10代・20代ともに，「ナンボ」がくつろいだ場面で，「イクラ」「イクツ」があらたまった場面で多く使用されるということでは，全体での結果と変わりはないが，くつろいだ場面での「ナンボ」は，10代21%，20代24%となっており，これは宮津市全体の約47%に比べると半分以下の値にとどまっている。

これを埋める形となっているのが，10代の「ナンコ」であり，これは同年39%，若者46%と他に比べて著しく高率になっている。この語形は10代のみの特徴的な姿をみせているところから考えると，いわゆる「新方言」とみることができよう。

表7-1 物の数の尋ね方 [宮津] (10代・20代)

	10代				20代			
	ナンボ	イクラ	イクツ	ナンコ	ナンボ	イクラ	イクツ	ナンコ
同年	21.2	—	3.0	39.4	23.5	2.9	41.2	11.8
若者	21.2	6.1	3.0	45.5	23.5	—	44.1	14.7
会合	6.1	30.3	30.3	18.2	—	8.8	70.6	5.9
京都	—	27.3	33.3	24.2	—	5.9	76.5	2.9
東京	—	27.3	36.4	21.2	—	2.9	76.5	2.9

(注) 表中の数値は%。なお，複数回答・その他は除外してある。
以下の各図表も同じ。

一方、20代での「ナンボ」の間隙を埋めているものは「イクツ」であるといえる。この「イクツ」の使用率は、各場面にならって、20代が他に比べて非常に高い数値を得ているが、これは特にあらたまった場面では70%以上と非常に目立つ値となっている。

(2) 豊岡の場合

豊岡での、反応は図7-2のとおりである。

全体的な傾向としては宮津調査同様、豊岡でもくつろいだ場面で「ナンボ」の使用率が高く、あらたまった場面では「ナンボ」は低くなり、「イクツ」と「イクラ」が高くなっている。そして、「ナンコ」は、ここでも、場面の違いの影響を受けにくいものとなっている（各場面とも12~13%）。

宮津調査での「若者」場面は、この調査では、先述のように、「年上」「年下」と改定されている。そこで、この2つの場面を宮津のものと同様に46%程度となっており、両者はほぼ平行な場面といえそうである。

一方、「年上」の場面は、くだけた場面である同年・年下と、会合等あらたまった場面との間にあり、どちらかといえば後者よりに位置していることがわかる。「年上の人とくつろいで」という場面は、“くつろいで”と限定してはいるものの、やはり、年長者に対するあらたまった気持ちの反映としてみる人が

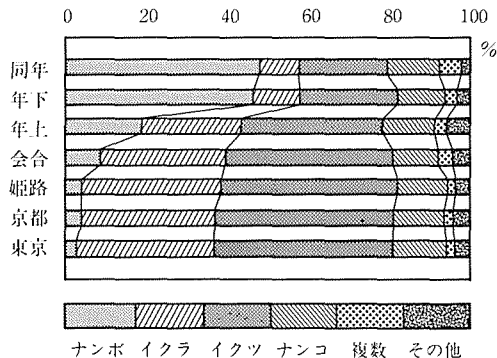


図7-2 物の数の尋ね方 [豊岡]

多いからであろう。

なお、年上との場面では、表 7-2 に示すように、性差が認められている。つまり、この場面での「ナンボ」「イクツ」「イクラ」の使用率は、男性では3者に大差はないが、女性では共通語形の「イクツ」が圧倒的に多く、方言形の「ナンボ」は1割程度となっている。

表7-2 「年上」場面での物の数の尋ね方〔豊岡〕（性別）

	1 位	2 位	3 位
全体	イクツ (35.4)	イクラ (24.0)	ナンボ (18.9)
男	ナンボ (29.7)	イクツ (26.9)	イクラ (22.8)
女	イクツ (42.0)	イクラ (25.5)	ナンボ (10.6)

年齢別にみると、ここでも、若い年代の回答者において「ナンコ」の使用率が高いなど、宮津の場合とほぼ同様の結果が得られている（表 7-3 参照）。ただし、同年場面での「ナンボ」の使用率は、宮津より豊岡のほうがかなり高くなっている。

表7-3 物の数の尋ね方〔豊岡〕（10代・20代）

	10代				20代			
	ナンボ	イクラ	イクツ	ナンコ	ナンボ	イクラ	イクツ	ナンコ
同年	37.0	—	14.8	33.3	38.2	10.9	21.8	23.6
年下	29.6	3.7	22.2	33.3	41.8	7.3	30.9	16.4
年上	11.1	11.1	37.0	25.9	10.9	18.2	45.5	16.4
会合	—	29.6	44.4	14.8	1.8	16.4	63.6	10.9
姫路	—	25.9	44.4	14.8	3.6	16.4	61.8	12.7
京都	—	25.9	44.4	14.8	3.6	16.4	60.0	12.7
東京	—	25.9	44.4	14.8	1.8	18.2	60.0	12.7

7.1.3 物の値段の尋ね方

次に「物の値段の尋ね方」をみてみよう。こちらも、「物の数」同様、「このまんじゅうはひとつ〜、それから何といたしますか」と問い、上記の場面のリストを呈示して、「これらの人に対してはどのことばを使いますか」と尋ねて、それぞれの反応を求めた。

この項目は、「大都市調査」（国立国語研究所 1975）の大阪での調査項目にもある。ただし、そこでは場面設定はしていない。大阪調査の全体の結果では、

	全体	男	女
イクラ	55.4	38.1	75.8
ナンボ	18.7	27.8	7.9
併用	25.9	34.0	16.4

であった。ちなみに、「日本言語地図」の「イクラ」と「ナンボ」の分布を見ると、宮津・豊岡では大阪と同様「ナンボ・ナンプ」使用地域となっている。

なお、今回の宮津・豊岡調査での「イクラ」「ナンボ」以外の反応には、「ドレクライ」「ドノグライ」「ドノクライ」「ドナイクライ」「ドレダケ」「イカホド」などがあつた。

宮津・豊岡の結果は、それぞれ図 7-3、図 7-4 のとおりである。

前項の「物の数の尋ね方」に比べ反応語形の種類が少ないため、そこで出た場面差の傾向は、この項目でより顕著な姿を示しているといえる。

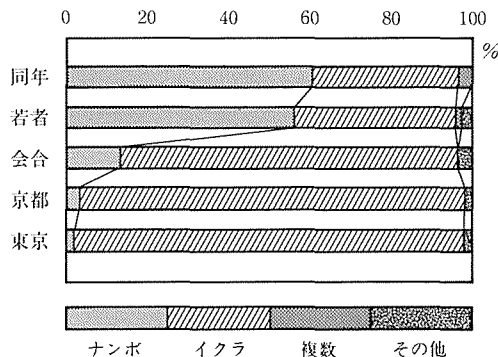


図7-3 物の値段の尋ね方 [宮津]

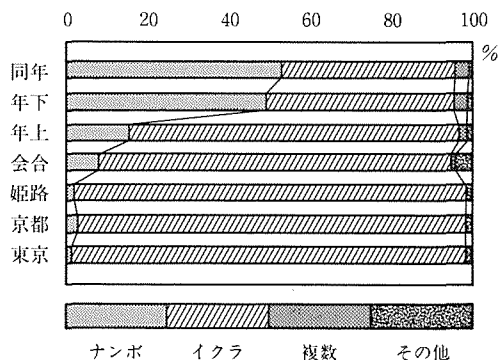


図7-4 物の値段の尋ね方 [豊岡]

さて、この項目においては、両地域ともくつろいだ場面では「ナンボ」と「イクラ」が主に使われているが、「ナンボ」が少し優勢である。また、あらたまった場面では、「イクラ」が8～9割と高い使用率を示している。

属性別にみて特徴的なものは、宮津の20代と、豊岡の女性・30代・60代である。彼らにあっては、くつろいだ場で「ナンボ」もかなり使われているが、「イクラ」の方の使用率が全場面を通して高くなっていることがわかる。(表7-4～表7-6参照。)

表7-4 値段の尋ね方 [宮津]
(20代・60代)

	20代		60代	
	ナンボ	イクラ	ナンボ	イクラ
同年	44.1	52.9	52.4	40.5
若者	44.1	52.9	42.9	52.4
会合	2.9	91.2	7.1	92.9
京都	—	100	2.4	97.6
東京	—	97.1	—	100

表7-5 値段の尋ね方〔豊岡〕
(性別)

	男		女	
	ナンボ	イクラ	ナンボ	イクラ
同年	69.0	26.9	39.9	55.3
年下	61.4	33.1	39.4	56.4
年上	26.2	70.3	6.9	88.8
会合	13.8	78.6	3.2	92.6
姫路	4.1	93.8	—	98.4
京都	4.8	93.1	1.1	97.3
東京	2.8	94.5	—	98.4

表7-6 値段の尋ね方〔豊岡〕
(30代・60代)

	30代		60代	
	ナンボ	イクラ	ナンボ	イクラ
同年	47.8	49.3	47.2	49.1
年下	43.5	52.2	43.4	50.9
年上	15.9	81.2	18.9	73.6
会合	8.7	89.9	17.0	73.6
姫路	1.4	98.6	1.9	94.3
京都	2.9	97.1	1.9	94.3
東京	1.4	98.6	—	100

また、宮津の60代では、くつろいだ場面で同年に対しては「ナンボ」52%、「イクラ」41%と「ナンボ」のほうが多少多いが、若者に対しては逆に「イクラ」52%、「ナンボ」43%と共通語形「イクラ」を使う人が多くなっている。

7.1.4 2項目を通じて

2つの項目を通してみると、くつろいだ場面の中では「同年」と「若者」(豊岡では「年下」が該当する)の間にはほとんど差がなかった。しかし、同年のほうがわずかではあるが常に方言形「ナンボ」の使用率が高いという傾向はみられている。このことから、同年の場面が最もくつろいだ場面であるといえる。

一方、被調査者の京都・東京との接触状態に差があるにもかかわらず(6.2.3 参照), あらたまった場面では、両地域とも「京都」と「東京」とにおける差がほとんどみられなかった。また、豊岡調査における「姫路」の場面もこれらとほぼ一致している。球磨川流域調査では、「東京」と「熊本」とにおいて場面差が認められていたのに対して、今回の調査では調査地域と他の都

市との距離や結びつきの強弱の程度とは無関係に、「他の都市で初対面の相手」という1点に集約されてしまったといえる。

また、この「初対面（姫路・京都・東京）」場面と「（地域で）会合」場面では、予想通り、非共通語形の使用に差があった。同じくあらたまった状況であるといっても、地域社会内のことと、別の都市でのことでは、あらたまりの程度はかなり異なるものである。

なお、「ナンボ」の使われ方からみると、あらたまった場面の「地域で会合」とくつろいだ場面の「豊岡の年上」は、中間的でややあらたまった場面といえる。「宮津（豊岡）で初対面の人と」という場面を設定してみることも一案であったように思う。

以上のことから、「イクツ」「イクラ」「ナンボ」の使い分けは、宮津・豊岡両地域ともくつろいだ場面とあらたまった場面でははっきりと差が出たといえる。つまり、あらたまった場面では共通語形の使用率が高い。他方、くつろいだ場面では非共通語形「ナンボ」の使用率が高くなり、共通語形が低くなるという結果が得られている。

なお、参考までに触れると、前出の球磨川調査の「値段を尋ねる」の部分の調査結果は次のようである。

そこでは、場面差が顕著にあらわれ、上位場面（あらたまった場面）になるほど関西共通語形の「ナンボ」が増加し、全国共通語形の「イクラ」が減少する。（地域差は目立たない。）また、方言形「ドシコ」は最下位場面の「同年」にしか現れず、しかも小比率にとどまっていると、報告されている。

今回の「イクラ」のように上位場面に共通語形、下位場面（くつろいだ場面）に非共通語形が多いものとして、「（ばらなどの）とげ」、『（てんぶらが）食べたい』の「たい」の部分、「暑い」、「蜘蛛」、「かかと」があげられている。球磨川沿岸地域では、近畿方言（関西方言）の地方共通語化（西日本共通語化）が認められており、多少語彙による違いもあるが、非共通語、地方共通語、そしてその上に全国共通語があるというのが実態である。

7.2. 可能表現について

7.2.1 「見レル」

「見ることができる」(可能表現) という意味での「見ラレル」を「見レル」という人が増加していることが、以前から指摘されている。本調査でも、「あなたは『見ることができる』ことを『見れる』と言いますか、『見られる』と言いますか。」という形式での質問が行われている。

結果は、表7-7に掲げるようである。ただし、この設問に対する回答には、「見レル」と「見ラレル」との併用、あるいは「見ル」などの「その他」型の回答など、さまざまなものがみられるが、ここでは中心課題である「見レル」「見ラレル」の単用回答のみのものを取り上げ、これに加えて1割以上の支持を得た別語形「ミエル」を参考的に示してある。したがって、百分率の合計は100%に満たないことがある。

表7-7 可能表現「見レル」(性別)

	宮 津			豊 岡		
	全体	男	女	全体	男	女
ミラレル	19.3	16.6	22.1	17.1	14.5	19.1
ミレル	60.0	66.2	55.2	65.8	66.9	64.9
ミエル	12.1	11.0	13.1	6.0	7.6	4.8

なお、併用形等をそれぞれのカテゴリーに分解して集計し直すと、

	宮 津			豊 岡		
	全体	男	女	全体	男	女
ミレル	67.6	72.4	62.8	73.6	75.2	72.3
ミラレル	24.1	20.7	27.6	23.7	20.7	26.1
ミエル	15.5	13.8	17.2	7.2	7.6	6.9

となる。このように集計すると各項の回答比率は、当然ながら、それぞれ上昇

するが、これによって全体傾向が大きく変化することはない。したがって、以下の分析では、各項目とも表 7-7 のような方針で処理することとする。

それはさておき、単用形のものだけをみても、両都市ともに全体の 6 割以上の人が「見レル」を使用すると答えている。この数値は、1974～1975 年の「大都市調査」（国立国語研究所 1981）の結果の、東京都区内 33.2%，大阪市 48.5% に比べ、非常な高率といえる。

地域間の比較では、問題の「ミレル」は宮津では全体の 60%，また豊岡では 66% と豊岡のほうが若干多くなっている。しかし、正用とされている「ミラレル」についてみると、両都市とも 20% 弱と大差はなく、「ミレル」の差の数% を埋める形で「ミエル」が宮津に多くなっていることが注目される。

次に、年齢別にみてみよう。「ミレル」の年齢別使用率曲線を示すと、図 7-5 のようになる。

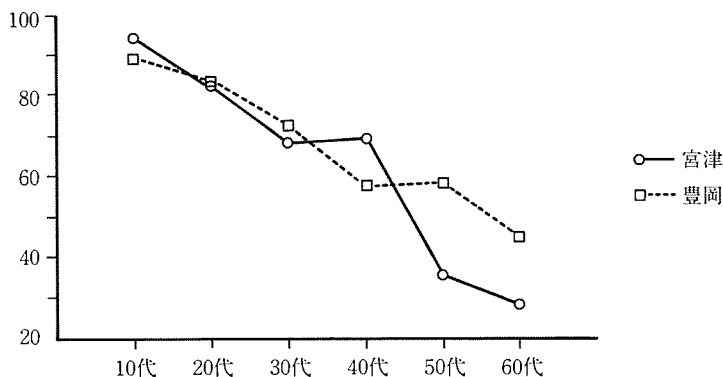


図7-5 「ミレル」（年齢差）

この図から、宮津・豊岡両地域ともに、年齢の若い人ほど「ミレル」使用者が多く、年齢の上昇に伴ってその比率が減少していくさまがはっきりと読みとられる。このような年齢と「ミレル」使用率との相関関係は、本調査だけではなく、諸種の調査で報告されていることである。

なお、50代以上の高齢者において、宮津・豊岡の両曲線の間に差異がみられている。そこで、この年代について回答分布をみると、

	宮 津		豊 岡	
	50代	60代	50代	60代
ミレル	35.6	28.6	58.5	45.3
ミラレル	30.5	26.2	15.4	26.4
ミエル	23.7	28.6	12.3	7.5

となっている。「ミエル」の使用率が宮津で特に高くなっていることが関与しているといえる。(この回答は40代以下では数%を占めるに過ぎない。)

7.2.2 「起キレル」

次に、同様にして行われた「起キラレル」「起キレル」の表現についてみてみよう。結果は、表7-8のとおりである。

「オキレル」は、宮津で64%、豊岡で59%であり、先にみた「ミレル」の結果とよく似た値となっている。また、これらの比率は、先の「大都市調査」の東京17.1%、大阪35.9%に比べて、著しく高いという点でも「ミラレル」における事情と類似しているといえる。

表7-8 可能表現「起キレル」(性別)

	宮 津			豊 岡		
	全体	男	女	全体	男	女
オキラレル	24.5	21.4	27.6	29.1	22.8	34.0
オキレル	64.1	62.8	65.5	58.6	62.1	55.9
併 用	2.8	2.8	2.8	9.6	10.3	9.0

次に、「オキレル」の年齢別の割合を、「ミレル」との対比においてみてみよう。図7-6が宮津市の結果であり、図7-7が豊岡市のそれである。

宮津についてみると、対応する「ミラレル」と「オキラレル」、および「ミレル」と「オキレル」のそれぞれの曲線は、傾向においても、また数値においても非常によく似ているといえる。

これに対して、豊岡の場合には、両者の傾向は一致しているが、「ミレル」と「オキレル」との年齢別の数値には若干の差があり、全般的には「ミレル」のほうが高くなっている。

なお、「大都市調査」では、1音節語の「ミレル」のほうが2音節語の「オ

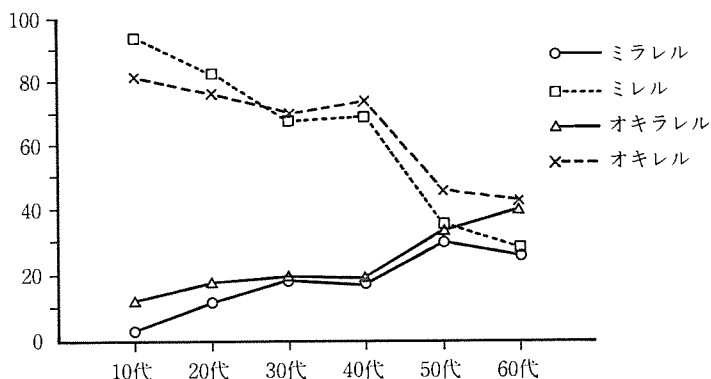


図7-6 可能表現 [宮津] (年齢差)

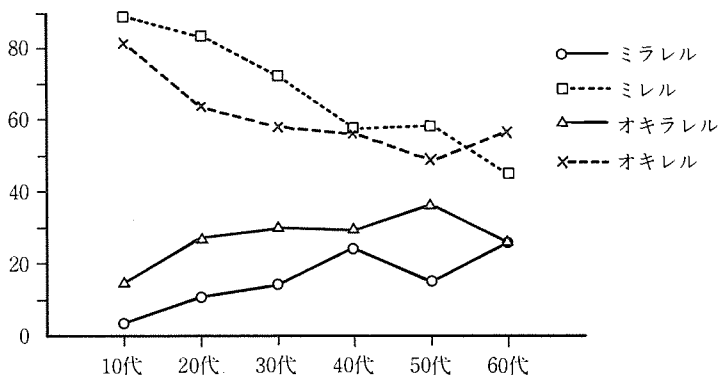


図7-7 可能表現 [豊岡] (年齢差)

キレル」よりも一貫して高率であった。豊岡の結果は、この点で一致しているが、大都市調査の頃よりもその差は縮まっているといえる。

7.2.3 能力可能と状況可能

日本語には、可能表現において、動作者にそうする能力がある場合の表現形式と、そうすることができる事態・状況にある場合の表現を区別している方言がある。その場合、前者を「能力可能」、後者を「状況可能」という。

この調査では、それを知るためのものとして、「読むことができる」ということを取り上げ、その否定表現「読むことができない」についての表現を求める形式で行われた。

具体的な質問は、まず、「『字が読めない』と言う時、ふつう何と言いますか。」と尋ねた上で、

①「暗いさかい字（が）～」それから何と言いますか。

②それでは、「むつかしいさかいこの字（は）～」

と、状況不能、能力不能の順に問が発せられている。

(1) 宮津の結果

表 7-9 が宮津での結果である。

表 7-9 能力不能と状況不能 [宮津] (性別)

	能力不能			状況不能		
	全体	男	女	全体	男	女
ヨメナイ	22.8	22.1	23.4	25.5	23.4	27.6
ヨメヘン	19.3	13.8	24.8	22.4	14.5	30.3
ヨメン	28.6	33.1	24.1	33.4	40.0	26.9

これによると、共通語形「ヨメナイ」は、能力不能と状況不能のいずれにおいても、全体・性別の別なく、2割強と安定していることがわかる。ちなみに、この数値は、大都市調査の大阪出身者の結果とよく似ている。

能力不能では、回答者全体では、「ヨメナイ」が29％で一位であり、「ヨメナイ」と「ヨメヘン」がそれぞれ20％前後で続いている。

しかし、性別でみると、男性は「ヨメナイ」が約3分の1で多数形であるのに対して、女性では「ヨメヘン」「ヨメナイ」「ヨメナイ」がそれぞれ4分の1程度で拮抗している。

また、状況不能においても、全体・性別ともに、能力不能の場合とよく似た傾向になっている。

(2) 豊岡の結果

表7-10は、豊岡での結果である。

表7-10 能力不能と状況不能〔豊岡〕（性別）

	能力不能			状況不能		
	全体	男	女	全体	男	女
ヨメナイ	28.5	26.9	29.8	34.5	30.3	37.8
ヨメナ	7.5	13.1	3.2	12.6	22.1	5.3
ヨメレヘン	25.2	22.8	27.1	31.2	21.4	38.8

能力不能では、「ヨメナイ」と「ヨメレヘン」の両者が上位にあり、他は少数にとどまっている。しかし、上位の2語の比率は、それぞれ4分の1強程度であり、合わせても50数％にしか達していない。これは、この項目において複数回答がかなり多く出現していたという事情によっている。

性別では、ほぼ全体の結果に追随しているといえるが、男性において「ヨメナ」が1割強となっていることが目立っているといえよう。

また、状況不能についてみると、これは能力不能の場合の数値に数％程度上乗せした形になっており、全般的な傾向には差異がないといえる。

なお、表には掲げられていないが、「ヨーヨマン」という回答が能力不能にのみ現れている。（全体5.7，男4.8，女6.4％。）

7.3. 断定の助動詞「ダ」

『日本言語地図』をながめると、本調査の調査地点である宮津（丹後）・豊岡（但馬）の近辺には、断定の助動詞「ダ」「ジャ」「ヤ」の3者が分布している。そこで、両地域の断定の助動詞の使用状況をみるための調査が行われた。

7.3.1 「(いい天気) ダ」

これは、「空が晴れて日が照っている。そんなとき、きょうの天気はどんなだと言いますか。」という質問によっている。

この問に対する回答の助動詞「ダ」の部分についてまとめたものが、表7-11である。

表7-11 「(いい天気) ダ」 (性別)

	宮 津			豊 岡		
	全体	男	女	全体	男	女
ダ	37.6	36.6	38.6	57.4	66.9	50.0
ヤ	48.6	49.0	48.3	9.6	11.7	8.0
デス	6.2	6.9	5.5	17.4	11.7	21.8

これによると、宮津では、「ヤ」が半数近くで優勢であり、これに「ダ」が約10ポイントの差で追っていることがわかる。また、この関係は、男女の別なく一致している。なお、本来この地域に存在するとされている「ジャ」は、本調査ではまったく出現していない。（豊岡でも皆無。）

では、「ヤ」と「ダ」との比率を年齢別に見てみよう。結果は次に示すとおりである。

	10代	20代	30代	40代	50代	60代
ヤ	75.8	38.2	51.7	53.2	39.0	38.1
ダ	21.2	38.2	30.0	35.5	45.8	52.4

ここには、部分的な変動は多少あるものの、大略年齢差がみられている。つまり、関西的な「ヤ」は若年層ほど多く、共通語形または関東的な「ダ」は年齢の上昇につれて増加しているのである。

次に、表7-11の豊岡調査の部分を見てみよう。

豊岡のほうでは、「ダ」が過半数を占め、宮津で優勢であった「ヤ」は1割弱に落ち込んでいる。地域差の著しい項目だといえよう。

また、性別では、「ダ」は男67％、女50％と男性が多くなっている。他方、この差を補うかのように、丁寧な断定の「デス」において、男の11％に対し女22％と、女性のほうが多くなっている。

年齢別では、「ダ」は若いほうに多く、「デス」は高齢者に多いという傾向があるが、宮津ほど顕著なものとはなっていない。

なお、この項目の前部分、すなわち「いい天気だ」の「イイ」に対する反応は、表7-12のようである。

宮津では、「イイ」「エエ」がそれぞれ3分の1前後で、「ヨイ」が25％と、ほぼ3分されている。これに対して豊岡では、「イイ」が62％と圧倒的多数形で、「エエ」が24％でこれに続き、「ヨイ」はわずか7％に過ぎない。ここでも、宮津と豊岡との地域差が著しくなっている。また、両地域とも、男女による差異も相当大きくなっている。

表7-12 「イイ（天気だ）」（性別）

	宮 津			豊 岡		
	全体	男	女	全体	男	女
イイ	38.2	24.1	48.3	61.6	51.0	69.7
エエ	32.1	45.5	18.6	23.7	33.8	16.0
ヨイ	25.5	24.8	28.2	6.9	4.1	9.0

ちなみに、「ヨイ」は北陸・近畿北部に古い方言形の残存として分布しており、『日本言語地図』をみると宮津市の隣接地区にも現れている。これが、宮

津と豊岡での「ヨイ」の出現率の多寡に係わっているとも考えられる。

7.3.2 「(きれい) ダ」

これは、「虹を見て『ああキレイダ (ヤ)』と言いますか。『ああウツクシイ』と言いますか。それとも別の言い方をしますか。」という設問によるものである。

結果は、表 7-13 に示すようであり、本来の調査目的である「キレイ」「ウツクシイ」の対立は、圧倒的に後者に傾いているため、あまり意味をなしていないようである——この傾向は、特に宮津において著しい。

そこで、「キレイ」系の回答のうちの助動詞「ダ」と「ヤ」との関係についてみることにする。

表7-13 「キレイダ」(性別)

	宮 津			豊 岡		
	全体	男	女	全体	男	女
ウツクシイ	2.4	2.8	2.1	11.7	14.5	9.6
キレイダ	43.1	41.4	40.0	66.7	72.4	62.2
キレイヤ	41.4	40.0	42.8	6.3	6.2	6.4

結論的にいえば、この項目の結果は、前項の「(いい天気) ダ」の場合とほとんど変わるところはみられない。つまり、宮津では、「ダ」と「ヤ」との間の差異が小さく、豊岡では「ダ」に偏っているわけである。多少異なる点を上げると、「いい天気だ」の宮津では、「ヤ」が「ダ」を 10 ポイントほどリードしていたのが、この項目では全く差がなくなっているということくらいである。

また、表 7-14 にみられるように、年齢別にみても、「いい天気だ」の場合とよく似た傾向を示しているといえる。

同じ現象をみたものであるので、両項目での結果が一致していることは当然のことであろう。

表7-14 「キレイダ」(年齢別)

		10代	20代	30代	40代	50代	60代
宮	キレイダ	21.2	41.2	45.0	48.4	44.1	50.0
	キレイヤ	66.7	44.1	41.7	32.3	39.0	35.7
津	キレイナ	3.0	5.9	6.7	8.1	10.2	2.4
豊	ウツクシイ	3.7	1.8	8.7	10.9	16.9	24.5
	キレイダ	77.8	63.6	69.6	76.6	64.6	50.9
岡	キレイヤ	—	20.0	4.3	1.6	4.6	5.7

なお、豊岡における年齢分布をみると、高齢者ほど「ウツクシイ」の回答比率が高くなっており、逆に若い人ほど「キレイ」が増加している。このことから、この地域でかつて優勢であった「ウツクシイ」が、次第に「キレイ」に侵食されてきたとみることができようか。

7.4. その他の項目

7.4.1 「(大根を) ニル」

「大根をなべに入れて、みそやしょうゆを入れて火にかける。こうすることを、大根をどうすると言いますか。」という設問である。

結果は、表7-15 のようになっており、地域社会全体としては、豊岡では

表7-15 「(大根を) ニル」(性別)

	宮 津			豊 岡		
	全体	男	女	全体	男	女
ニル	49.0	57.2	40.7	44.1	53.1	37.2
タク	38.3	32.4	44.1	42.3	35.2	47.9

「ニル」「タク」の使用率が変わらないのに対して、宮津では「ニル」が半数で「タク」を1割程度上回っている、という違いがみられる。しかし、性別で見ると、両地域とも男性は「ニル」、女性は「タク」の割合が大きくなっている点では差異はみられない。

年齢別にみると、宮津では、

	10代	20代	30代	40代	50代	60代
ニル	69.7	61.8	41.7	41.9	47.5	45.2
タク	21.2	23.5	41.7	43.5	45.8	40.5

となっており、20代と30代との間に断層がみられ、これを境に若年層では「ニル」が圧倒的であり、30代以上では「ニル」「タク」がほぼ同じ割合を占めている。

また、豊岡の結果は、次のようである。

	10代	20代	30代	40代	50代	60代
ニル	63.0	61.8	46.4	37.5	33.8	34.0
タク	18.5	23.6	39.1	53.1	52.3	52.8

ここでは、宮津でもみられた20代と30代との境界の他に、新たに30代と40代との間にも断層がみられる。

両都市とも「タク」地域であったものが、次第に「ニル」に変化している姿がよくわかる。

なお、「飯をタク」というか「ニル」というかについては、全国的に「タク」が優勢であるが、宮津・豊岡でも99%が「タク」と答えている。

7.4.2 「トゲ」

この項目の質問文は、「竹を割っているときや、よく削っていない板をこすったときなどに何か手に刺さることがあります。何が刺さったと言いますか。」である。

回答状況は、表7-16のように、全体・性別とも、共通語形の「トゲ」が過半数を占め、「ソゲ」が4分の1程度で続き、「スイバラ」は少数派となっている。

表7-16 「トゲ」(性別)

	宮 津			豊 岡		
	全体	男	女	全体	男	女
トゲ	50.7	50.3	51.0	61.0	56.6	64.4
ソゲ	27.6	26.9	28.3	23.1	26.2	20.7
スイバラ	12.1	15.2	9.0	6.9	6.9	6.9

この3語形の盛衰をみるために年齢別のグラフを描いてみたものが、図7-8である。これによって、方言形「スイバラ」の衰退が最も早く、「ソゲ」も40代以上に残存しているに過ぎない状態であることがわかる。

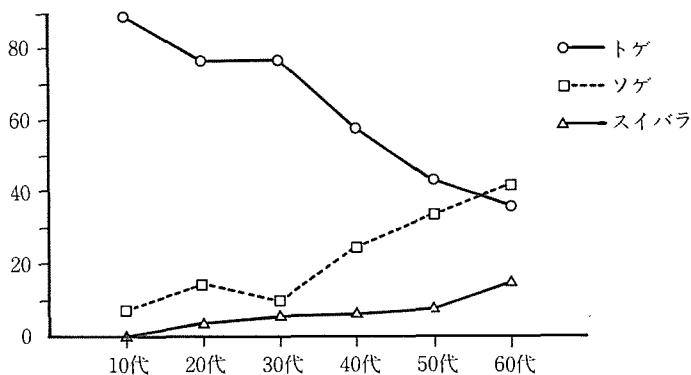


図7-8 「トゲ」[豊岡] (年齢差)

7.4.3 「チイサイ」

これは二つの箱を描いた絵を見せ、小さいほうを指差し、「こちらは、大きいほうよりもどうだと言いますか。」と尋ねたものである。

結果は、表7-17に示されるように、共通語形「チイサイ」が他を圧倒している。

表7-17 「チイサイ」 (性別)

	宮 津			豊 岡		
	全体	男	女	全体	男	女
チイサイ	71.7	68.3	75.2	64.3	62.8	65.4
チッサイ	8.3	5.5	11.0	7.2	5.5	8.5
チサイ	17.2	23.4	11.0	21.6	23.4	20.2

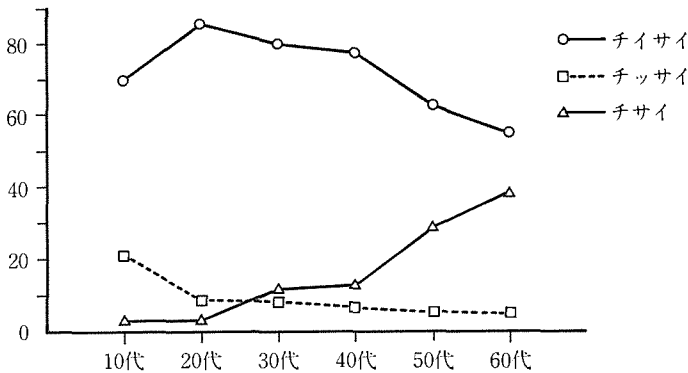


図7-9 「チイサイ」 [宮津] (年齢差)

また、この3語形を年齢別にみても、図7-9のようになっている。

この項目では、共通語形「チイサイ」がどの年代でも非常に高率となっており、他はこれに完全に押されてしまっていることがわかる。

他方、方言形についていえば、「チサイ」は今までみてきたものと同様に、左下がりの典型的な衰退化現象を呈しているといえる。

もう一つの「チッサイ」は、全体の比率は取るに足りないほど少数ではあるが、若い層で上昇するカーブを描いていることに興味が惹かれる。もう少し様子をみる必要があるが、「チッサイ」の勢力が今後増加する可能性も考えられないわけではない。

7.4.4 「借りる」

次に、「借りる」をどう言うかについてみてみよう。質問文は、「くぎを打ちたいが金づちがない。そんなときに隣の家で金づちをどうしますか。どうすると言いますか。」である。

ここでも、表7-18のように、共通語形の「カリル」が6割強で圧倒的多数を占めていることがわかる。（「カル」は両都市とも1% 足らず。）

これを性別にみると、「カリル」では女性のほうが多く、「カレル」では逆に男性のほうが多くなっている。つまり、女性は共通語に向いているのに対して、男性はやや方言よりの傾向にあるといえよう。

表7-18 「カリル」（性別）

	宮 津			豊 岡		
	全体	男	女	全体	男	女
カリル	65.9	55.2	76.6	61.6	57.2	64.9
カレル	14.8	22.1	7.6	20.4	25.5	16.5

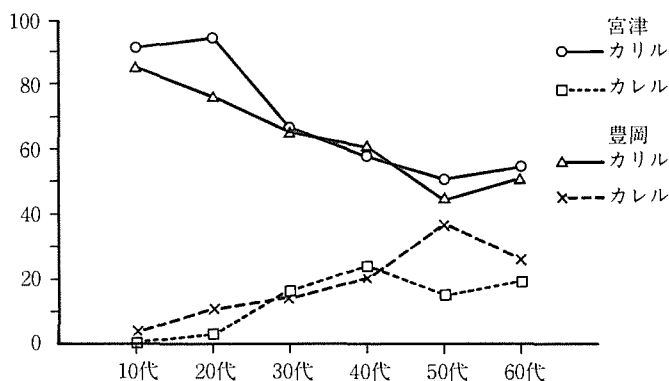


図7-10 「カリル」（年齢差）

また、年齢別では、図 7-10 にみられるように、方言形は左下がり、共通語形は右下がり曲線と、典型的なグラフとなっている。

なお、「借りる」に関連して、豊岡だけで行われた調査項目が 2 点ある。

その第一は、「借りる」の反対のことをどういふか尋ねたものであり、次の結果が得られている。

	全体	男	女
カス	65.5	63.4	67.0
カセル	20.1	22.8	18.1

ここでも、やはり共通語形「カス」が多数形をなしており、方言形「カセル」は少なくなっている。また、これを年齢別にみると、今までみてきたように、方言形が高年層で多くなっている。ただし、その比率は、最高年層においても 28.3 % に過ぎない。

また、もう一つは、「物を『カッテクル』と言うのは、お金を支払って品物を手に入れることですか、それとも、借用してくることですか。」という問である。

結果は、「買う」97.0 %、「借りる」0.6 %、とほぼ全員が「買ってくる」の意で使うと答えている。

近畿地方では、「カッテクル」は「借りてくる」の意味であり、「買ってくる」の場合には「コウテクル」がふつうである。しかし、この調査の対象である豊岡を含む兵庫県北部地域では、「カッテクル」という語形は元来存在していなかった。そこで、このような質問をされたときに、標準語的な反応が出現したものとみられる。

7.4.5 「ナオス」

近畿地方では、「片付ける」「しまう」の意味で、「ナオス」ということばが使われることがある。

そこで、宮津調査では、「『なオス』ということばを、片付けるとか戸だなにしまうことを表わすときに使いますか。」という質問が行われている。

結果は、表 7-19 のようである。

表7-19 「ナオス」を片付けるの意味で使うか〔宮津〕（性・年齢別）

		全体	男	女	10・20代	30・40代	50代	60代
使	う	40.0	33.8	46.2	46.3	36.9	27.1	57.1
使 わ な い	聞いた ことある	41.7	46.9	36.6	34.3	44.3	55.9	26.2
	聞いた ことない	18.3	19.3	17.2	19.4	18.8	16.9	16.7

「使う」人の割合は、全体の4割と比較的高い値となっている。しかし、性別では女性のほうが、また年齢別では若年層と高齢層とに高いなど、属性によって使用率に違いがある。

しかし、「使わないし、聞いたこともない」という回答は、全体・属性別のいずれでも20%弱で、ほぼ一定している。逆にいうと、片付けるの意での「ナオス」の意味・用法は、現在でも8割以上の人々に知られているといえる。

なお、この質問に対して、「ナオス」も使うが、このケースでは「ナツベル」「マツベル」などを用いるといった回答が約1割出現している。

そこで、この項目は、豊岡では別の形に改められている。すなわち、豊岡では最初に、「戸だなの中に物をしまうことを何と言いますか。」というふうに、ナゾナゾ式で該当語形を尋ねるところから始められている。

この問に対する「ナオス」という回答は、表7-20にみられるように、わずか2%にとどまっている。ただし、これは単用回答だけをみたものであり、これに「ナオス」を含んだ複数回答の数値をも加えると、「ナオス」の比率は、

表7-20 「カタヅケル」〔豊岡〕（性別）

	全体	男	女
シマウ・カタヅケル	35.1	31.0	38.3
ナオス	2.1	1.4	2.7
ナツベル・マツベル	18.6	21.4	16.5

21.9%（男 22.1, 女 21.8）とある程度の比率になるが、それでも宮津の 40% に比べると低率でしかない。この差の原因には種々のことが考えられるが、調査法の違いによることが大きいとみられる。すなわち、宮津での調査は語形を提示して尋ねる方式であるのに対して、豊岡でのそれは語形を与えないナゾナゾ式であった、ということである。

なお、「ナオス」という語形を回答しなかった被調査者に、その意味での「ナオス」ということばを聞いたことがあるか否かを尋ねてみると、「聞いたことがない」という回答は 37.8%（男 42.1, 女 34.6）であった。これは、宮津での 2 割弱という数値に比べてかなり高いといえる。してみると、調査法だけの問題ではなく、豊岡のほうが片付ける・しまう意味での「ナオス」の勢力はやはり宮津よりも小さいというべきであろう。

【参考文献】

- 国立国語研究所 1966～1974 『日本言語地図』（報告 30-1～6）大蔵省印刷局
- 国立国語研究所 1981 『大都市の言語生活—分析編』（報告 70-1）三省堂
- 国立国語研究所 1981 『大都市の言語生活—資料編』（報告 70-2）三省堂
- 国立国語研究所 1985 『方言の諸相』（報告 84）三省堂
- 佐藤亮一 1974 「地域差と場面差—熊本県球磨川沿岸地域における—」
『日本方言研究会第 19 回研究発表原稿集』

8. アクセント

宮津市・豊岡市におけるアクセントおよびガ行鼻濁音について報告する。

(1) 調査語彙の選定

調査語彙は宮津調査の際に、下記の諸点に留意し、新田と都染が選定した。

- ①従来の研究・報告から、宮津市周辺には京阪式・垂井式・東京式など様々なアクセントが分布すること。
- ②アクセントの境界線が宮津市あたりを走っているということから、2拍名詞の類の統合を中心に調査する。
- ③垂井式アクセントの特徴である2拍4類の語を他よりも多くする。
- ④調査語彙は各類同数とはしないが、「鼻と花」「橋と箸」「膿と海」のような同音語を含み、母音の広狭にも配慮する。
- ⑤2拍語の他に、「赤い」「白い」(形容詞)、「テレビ」(外来語)、「鏡」(ガ行鼻濁音の調査も兼ねる)の3拍語4語を加える。

なお、豊岡市での調査にも同じ調査語彙を用いた。

(2) 調査方法

調査は次のような方法で行った。調査文例は(4)に示す。

- ①調査員による面接調査。
- ②語彙・待遇表現など、他の調査項目の中に組み込んだ。
- ③文字を読んでもらい、録音する。
- ④語ごとに、語・この～・文(助詞ガを後続)の順に読んでもらう。
- ⑤1枚のカードに数語記しておく。
- ⑥発話は原則として1回。場合によっては、複数回の発話を求める。

(3) アクセント型の聴き取り・記録

録音されたテープによって、アクセント型（および「鏡」のガの音声）の聴き取り・記録を行った。聴き取り・記録は回収されたすべての録音について行い、宮津市については真田と都染が、豊岡市については尾崎が担当した。

アクセント型の聴き取りは各拍の相対的な高低により、次のように表示する。

体言の一拍：●, ○, ①, ② 後続する助詞「が」：▶, ▷

高い拍：●, ▶ 低い拍：○, ▷

下降を伴う拍：① 上昇を伴う拍：②

(4) 調査文例（調査票配列順）

風。1	この風。	風が吹く。
雨。5	この雨。	雨が降る。
海。4	この海。	海が見える。
川。2	この川。	川が流れる。
橋。2	この橋。	橋が見える。
花。3	この花。	花が咲く。
松。4	この松。	松が枯れる。
鳥。1	この鳥。	鳥が鳴く。
虫。1	この虫。	虫がおる。
猿。5	この猿。	猿がおる。
鼻。1	この鼻。	鼻が高い。
声。5	この声。	声がする。
肩。4	この肩。	肩が痛い。
足。3	この足。	足が痛い。
糸。4	この糸。	糸が切れる。
陰。5	この陰。	陰ができる。
箸。4	この箸。	箸が折れる。
膿。3	この膿。	膿が出る。
鏡。4	テレビ。	赤い。1 白い。2

- ・語の右の数字は金田一語彙の類別を表す。
- ・1枚目のカードには「風～虫がおる」, 2枚目には「猿～白い」を書いた（類別は記入せず）。
- ・「おる」は「いる」に置き換えた場合もある。

8.1. 宮津市のアクセント

今回の調査では290人に対して面接調査を行ったが、そのうちの2名についてはアクセント項目を調査できなかったため、288人の録音資料が得られた。その性別・年代の内訳は、次の通りである。

性別	男=144人	年代	10代=33人	20代=33人	30代=59人
	女=144人		40代=62人	50代=59人	60代=42人

男女とも144人で同数になった。一方、年代ごとにみると、10・20代が他の年代に比べ、若干少なくなっている。

なお、特に断らない限り、話者を「移住歴の有無」・「生え抜きか否か」によって区別しない。

調査語彙を金田一語彙の類別によってまとめたものを下に示す。

- 1類：鼻，風，鳥，虫。
- 2類：川，橋。
- 3類：花，足，膿。
- 4類：肩，糸，松，箸，海。
- 5類：雨，陰，声，猿。

8.1.1 宮津市のアクセントの傾向

ここでは、宮津市方言のアクセント体系という観点からではなく、宮津市に

おいてはどのようなアクセントが行われているのか、たとえば、「雨」を●○型で発音する人がどれぐらいいるのか、○●型はどうかというように、宮津市におけるアクセントの実態をまとめることにする。宮津市の生え抜き話者のみのデータによる宮津市方言のアクセント体系とその年代差・地域差については後に8.1.5 で扱う。

表8-1、図8-1-1・図8-1-2は、「各級の語数×人数（＝延べ語数）」を100％とし、1類～5級の類ごとに各アクセント型の占める割合を示すものである。表8-1の左と図8-1-1は語アクセントについて、表8-1の右と図8-1-2は助詞付き（文中における）アクセントについてまとめたものである。これらの表・図をもとに、各級にみられる主な型を次にまとめる。

	語	助詞付き
1類	●●・○●	●●▷・○●▷
2類	●○・○●	●○▷・○●▷
3類	●○・○●	●○▷・○●▷
4類	●○・○●	●○▷・●●▷
5類	●○	●○▷

この結果から、各級の型の傾向に関して、次のような点が注目される。

- 語・助詞付きともに、1類と2～5類の間には異なる傾向が見られる。
- 語・助詞付きともに、4類と5類には異なる傾向が見られる。

表8-1 類ごとの語・助詞付きアクセント型

「語」の場合							「助詞付き」の場合								
	語	●○	○●	●●	○●	その他	計	語	●○	○●	●●	○●	●●	○●	計
1類		29 2.5	312 27.1	783 68.0		28 2.4	1152 100	1類		8 0.7	19 1.6	8 0.7	254 22.1	857 74.4	1152 100
2類		313 54.3	176 30.6	81 14.1		6 1.0	576 100	2類	1 0.2	303 52.6	226 39.3	6 1.0	10 1.7	8 1.4	576 100
3類	2 0.2	479 55.5	257 29.8	117 13.5		9 1.0	864 100	3類	2 0.2	455 52.7	348 40.3	6 0.7	3 0.3	8 0.9	864 100
4類		1068 74.2	188 13.0	173 12.0	1 0.1	10 0.7	1440 100	4類		1054 73.2	59 4.1	54 3.8	84 5.8	182 12.6	1440 100
5類	1 0.1	1081 93.8	23 2.0	7 0.6	33 2.9	7 0.6	1152 100	5類		1081 93.8	62 5.3	3 0.3		1 0.1	1152 100
計	3 0.1	2970 57.2	956 18.4	1161 22.4	34 0.7	60 1.2	5184 100	計	3 0.1	2901 56.0	714 13.7	77 1.5	351 6.8	1056 20.3	5184 100

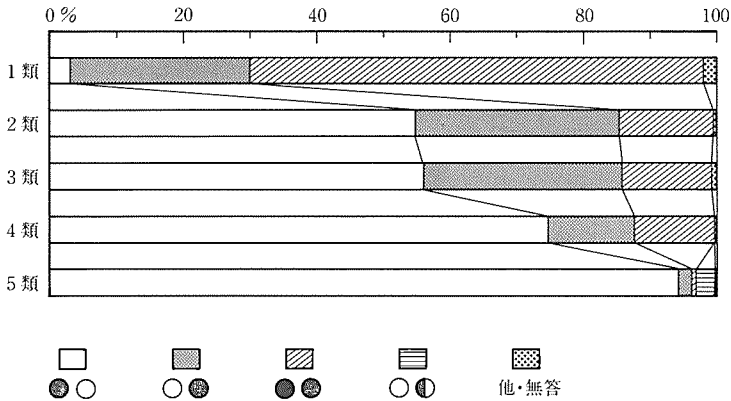


図8-1-1 各類のアクセント型の割合 「語」

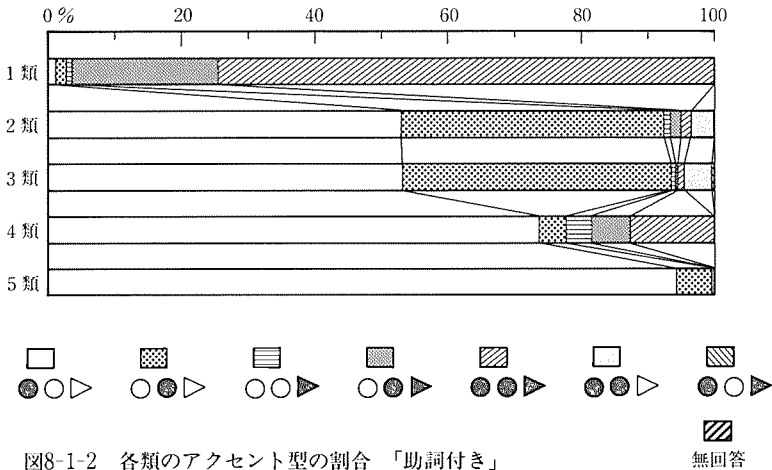


図8-1-2 各類のアクセント型の割合 「助詞付き」

後に詳しく述べるが、aとしてまとめたように、2～4（・5）類が同じ傾向（有核型：頭高型・尾高型）で、1類のみが異なった傾向（無核型：全高型・平板型）を示すということは、京阪式・東京式両アクセントの境界付近に見られる中間的なアクセント（生田早苗氏によるA型アクセント）の特徴と見ることができよう。また、bとしてまとめたように、4類と5類の間に異なる傾向（ここでは5類に無核型が少ないこと）が見られるということは、京阪式ア

クセントの特徴と見ることができよう。

参考までに生田氏による A 型, B 型, C 型各々の類の統合を下に示す。

A 型: 1 類 / 2 3 4 5 類

B 型: 1 4 類 / 2 3 5 類

C 型: 1 4 類 / 2 3 / 5 類

上に述べたことをもとに, 宮津市のアクセントを大局的にまとめてみると,

- ① 1 類と他類が異なる傾向を示す, いわゆる A 型アクセントとされるものがある。(1 類には頭高型●○・●○▷が非常に少ない)
- ② 4 類と 5 類が異なる傾向を示す, いわゆる B 型・C 型アクセントとされるものがある。(5 類には○●・○●▷・●●・●●▷が少なく, ○●・●○▷がある)
- ③ 京都方言のような京阪式アクセントは非常に少ないようである。(5 類の語に○●が 2.9% しかあらわれない)
- ④ 東京方言のような東京式アクセントも見られる。

以上のような 4 つの傾向が明らかになる。先にも記したように, これらの傾向は, アクセントの相違を生じさせるであろうと考えられる様々な要因, たとえば地域差や話者の年齢・性別・居住歴などを考慮せずにまとめたものである。そこで, 以下では, 宮津市のアクセントについて, いくつかの観点からさらに詳しい分析を試みる。話者に関するデータとしては, 父母の出身地, 学歴などもあるが, 2 拍名詞 2・3 類で学歴によるものと思われるアクセント型の異なりがあった以外には顕著な結果が得られなかったので, 本稿では男女差・年代差を中心に考察をすすめて行くことにする。

8.1.2 2 拍名詞のアクセント

ここでは, 調査した 18 語を類ごとにまとめ, 各類の特徴について考察する。1 類～5 類の語について, 単語・助詞付き (文中における), それぞれの場合において, 性別・年代ごとに各アクセント型の占める割合を表 8-2～7 と, 図 8-2-1～7-2 にまとめた。また, 類ごとの「語×助詞付きクロス集計表」を表 8-8 に, 語ごとの「語×助詞付きクロス集計表」を表 8-9 (2 ページ) にまとめた。

(1) 1類のアクセント

1類4語のアクセント型について、性別・年代ごとにまとめたものを表8-2、図8-2-1(語)・図8-2-2(助詞付き)に示す。

語の場合について。性別では女性の○●型が男性より若干(5.6%)多くっており、その分だけ●●型が少なく(5.8%)になっている。しかし、このことからだけでは、女性が共通語の影響を受けやすいことの反映であるとは言いきれない。つまり、8.1.1 で述べたように、○●型の中には男女を問わず東京式アクセントのものや垂井式アクセントのものが混在しており、○●型の話者のアクセント体系を確認したうえでなければ、共通語化云々を論ずることはできない。年代別に見た場合、問題になるのは20代である。助詞付きの場合にもあてはまるが、グラフから、他の年代と大きく異なる傾向を示していることがわかる。特に大きく異なっているのは○●型で、他の年代(平均23.2%)の倍以上の割合(52.3%)を占めている。図8-2-1からわかるように、20代以外の年代では●●型の割合が他を大きく上回っているのに対し、20代では

表8-2 1類4語のアクセント型

「語」の場合						「助詞付き」の場合						
	●○	○●	●●	その他	計	●○	○●	●○	○●	●●	その他	計
男	14 2.4	140 24.3	408 70.9	14 2.4	576 100	5 0.9	10 1.7	2 0.3	120 20.8	435 75.6	4 0.7	576 100
女	15 2.6	172 29.9	375 65.1	14 2.4	576 100	3 0.5	9 1.6	6 1.0	134 23.3	422 73.3	2 0.3	576 100
10代	2 1.5	28 21.2	101 76.6	1 0.7	132 100	1 0.8	1 0.8		18 13.6	111 84.0	1 0.8	132 100
20代	2 1.5	69 52.3	56 42.4	5 3.8	132 100		2 1.5	7 5.3	56 42.4	67 50.8		132 100
30代	7 3.0	60 25.4	167 70.8	2 0.8	236 100	4 1.7	2 0.8		48 20.3	181 76.8	1 0.4	236 100
40代	8 3.2	60 24.2	175 70.6	5 2.0	248 100		10 4.0		52 21.0	183 73.8	3 1.2	248 100
50代	6 2.5	65 27.5	163 69.1	2 0.9	236 100	2 0.8	4 1.7		53 22.5	177 75.0		236 100
60代	4 2.4	30 17.9	121 72.0	13 7.7	168 100	1 0.6		1 0.6	27 16.1	138 82.1	1 0.6	168 100
計	29 2.5	312 27.1	783 68.0	28 2.4	1152 100	8 0.7	19 1.6	8 0.7	254 22.1	857 74.4	6 0.5	1152 100

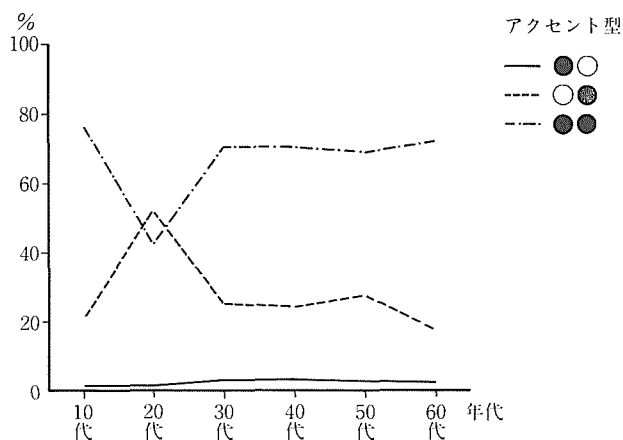


図8-2-1 1類「語」年代別アクセント型の割合

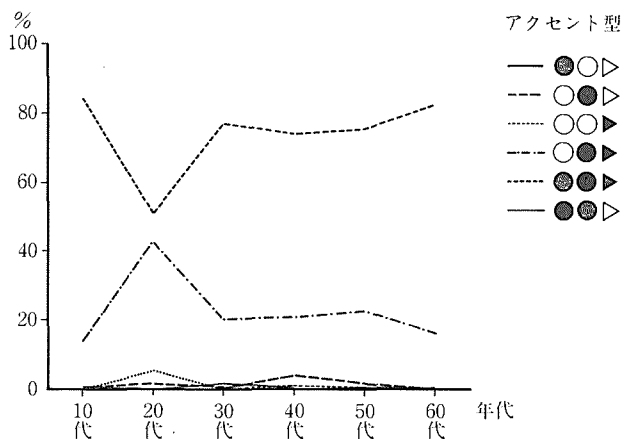


図8-2-2 1類「助詞付き」年代別アクセント型の割合

○●型が●●型を若干ではあるが上回り、他の年代と全く異なった状況になっている。年齢的なことから考えれば共通語アクセントの影響と考えられないこともない。全体的に言うと、約7割が●●型、約3割が○●型となっている。

助詞付きでは男女差はほとんど見られなくなる。一方、年代別では語の場合

と同様に、20代では○●▶型の割合（42.4％）が他の年代（18.7％）の2倍以上となっている。図8-2-2からわかるように、語の場合ほどではないにしても、20代が、他の年代とは異なる傾向を見せる。また、20代には○○▶型が5.3％あることも数の上から言えば他の年代と異なる点であるが、グラフを見る限り、大きな相違点ともいえないようである。顕著な特徴とはいえないが、10代と60代、30代と40代と50代がそれぞれ似たような傾向を見せている。

(2) 2類のアクセント

2類2語のアクセント型について、性別・年代ごとにまとめたものを表8-3、図8-3-1（語）・図8-3-2（助詞付き）に示す。

語の場合、男女差としては、●○型では男性の方が7.3％、○●型では女性の方が7.7％多くなっているものの、大差ないと言えよう。しかし、1類同様、ここでも女性は共通語アクセントに通じる傾向が見られるようである。年代差については図8-3-1からわかるように、10代と60代が似た傾向を示すが、

表8-3 2類2語のアクセント型

「語」の場合						「助詞付き」の場合								
	●○	○●	●●	その他	計		短略	○○▶	○○▶	○○▶	○○▶	○○▶	○○▶	計
男	167 58.0	77 26.7	42 14.6	2 0.7	288 100	男	1 0.3	165 57.3	107 37.2	1 0.3		5 1.7	9 3.2	288 100
女	146 50.7	99 34.4	39 13.5	4 1.4	288 100	女		138 48.0	119 41.3	5 1.7	10 3.5	3 1.0	13 4.5	288 100
10代	46 69.7	13 19.7	7 10.6		66 100	10代		49 74.2	13 19.7				4 6.1	66 100
20代	41 62.1	25 37.9			66 100	20代		40 60.6	18 27.3	2 3.0	6 9.1			66 100
30代	52 44.1	45 38.1	20 17.0	1 0.8	118 100	30代		56 47.5	49 41.5		2 1.7	3 2.5	8 6.8	118 100
40代	59 47.6	43 34.7	21 16.9	1 0.8	124 100	40代	1 0.8	56 45.2	60 48.4	1 0.8		2 1.6	4 3.2	124 100
50代	59 50.0	33 28.0	23 19.5	3 2.5	118 100	50代		53 44.9	54 45.8	3 2.5	2 1.7	1 0.8	5 4.3	118 100
60代	56 66.7	17 20.2	10 11.9	1 1.2	84 100	60代		49 58.3	32 38.1			2 2.4	1 1.2	84 100
計	313 54.3	176 30.6	81 14.1	6 1.0	576 100	計		303 52.6	226 39.3	6 1.0	10 1.8	8 1.4	22 3.9	576 100

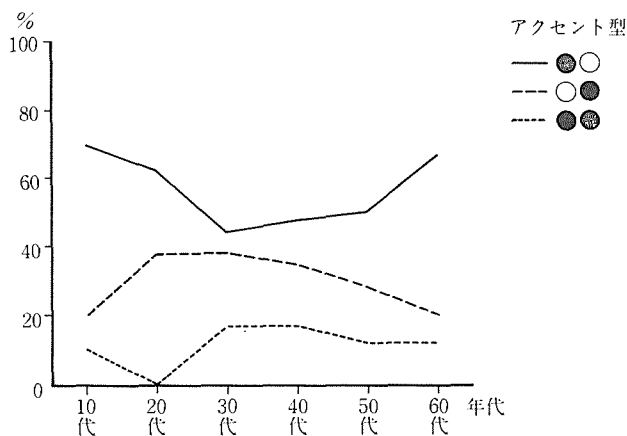


図8-3-1 2類「語」年代別アクセント型の割合

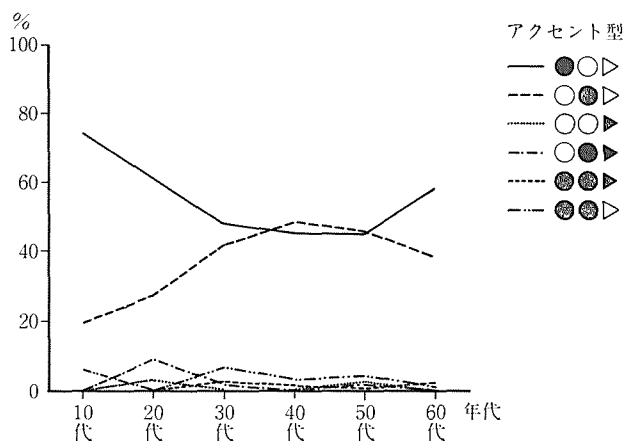


図8-3-2 2類「助詞付き」年代別アクセント型の割合

他の四つの年代は少しずつ異なっている。○●型はゆるい弧を描いており、年代が下がるにつれて徐々に増加していたものが10代で減少傾向に転じたようである。男女差でみた●○・○●という二つの型以外に、1類において高い割合を占めていた●●型が、2類においても各年代で10～20%を占めている

(20代では0%)が、どういうことであろうか。表8-9の「川2」「橋2」からわかるように、語ごとに見てみると「川」では39名、「橋」では42名が●●型であるが、両語とも25名が●●～○●▷となっており、○●型が●●型に近く発音されたものと考えられる。これについては、20代のみに●●型が少ないこと、助詞付きの場合には各年代で●●▷・●●▷ともごくわずかであることなどからも、不安定な発音によるものと思われる(垂井式アクセントにおいては不安定な音調が多く観察されるが、○●と●●の場合は、両者の差が音韻論的区別を有しないために、特に不安定である)。

助詞付きの場合も男女差はあまり顕著ではない。年代差では、30～60代の○●▷型が平均43.5%, 10代・20代では23.5%となり、両者の間には20%ほどの差があること、また、20代のみ○●▷型が9.1%となることなどが目につく。図8-3-2を見るかぎり、1類の20代のように、一つの年代だけが大きく異なるという現象は見られないが、20から10代において○●▷型の減少・●○▷型の増加傾向が読み取れる。ちなみに2類の語は京都方言などでは●○▷型、共通語などでは○●▷型である。若い年代は、他の年代に比べると、○●▷型が少なく、●○▷型が多くなっており、共通語とは異なった方向に変化しつつあると言えるのではなかろうか(ただし、京都方言などの方向に向かっているとも即断できない)。なお、2類・3類の語は、学歴によるアクセント型の異なりに顕著な傾向が現れるので、両類の5語をまとめて(4)で扱うことにする。

(3) 3類のアクセント

3類3語のアクセント型について、性別・年代ごとにまとめたものを表8-4、図8-4-1(語)・図8-4-2(助詞付き)に示す。

3類の語は2類の語と似た傾向を示す。これは京阪式、東京式、垂井式いずれのアクセント体系においても2・3類が統合し、同型になることと関係があるろう。語の場合、●○型では男性の方が11.3%, ○●型では女性の方が10.4%と、それぞれの割合が高くなっている。2類同様、●●型が20代を除く各年代に多く見られる。図8-4-1から、10代と60代は、○●型においては他の

年代よりも割合が低いこと、●○型においては他の年代よりも高い割合になっている。

表8-9の「花3」「足3」「膿3」に示したように、●●型は、「花」が62名、「足」が30名、「膿」が25名である。これらのうち、「花」の34名、「足」の16名、「膿」の11名は○●▷型である。したがって、2類で述べたのと同様に、ここでも多くの場合は○●型が●●型に近く発音されたものと見てよいであろう。一方、同音異義語（花と鼻、膿と海）の区別が明確にできていなかった可能性も否定できない。

助詞付きの場合、性別・年代別ともに語の○●型に比べて、尾高型（○●▷）の割合が高くなっている。これは、上にも述べたように、語では●●型であったものが、助詞付きの場合には○●▷型になったものと考えられる。別の見方をすれば、●○型の割合は語の場合・助詞付きの場合ともにほとんど変わらないことから、助詞付きで○●▷型となったものの一部は、語では●●型として発話されていると考えられよう。年代別の特徴については、10代において○●▷型の割合が特に高くなっている。一方、30・50代では、○●▷型

表8-4 3類3語のアクセント型

「語」の場合							「助詞付き」の場合								
	回答	●○	○●	●●	その他	計		回答	○○▷	○●▷	○○▷	○●▷	○○▷	○○▷	計
男		264 61.1	106 24.5	59 13.7	3 0.7	432 100	男		252 58.3	155 35.9	1 0.2	2 0.5	6 1.4	14 3.2	432 100
女	2 0.5	215 49.8	151 34.9	58 13.4	6 1.4	432 100	女	2 0.5	203 47.0	193 44.7	5 1.1	1 0.2	2 0.5	24 5.5	432 100
10代		71 71.7	16 16.2	11 11.1	1 1.0	99 100	10代		71 71.7	17 17.2	1 1.0	2 2.0	3 3.0	5 5.1	99 100
20代		60 60.6	35 35.4	4 4.0		99 100	20代		58 58.6	32 32.3	3 3.0	1 1.0	1 1.0	4 4.1	99 100
30代	1 0.6	93 52.5	55 31.0	27 15.3	1 0.6	177 100	30代	1 0.6	92 52.0	73 41.2				11 6.2	177 100
40代		88 47.3	65 34.9	29 15.6	4 2.2	186 100	40代		80 43.0	97 52.2				9 4.8	186 100
50代	1 0.6	88 49.7	56 31.6	31 17.5	1 0.6	177 100	50代	1 0.6	83 46.9	80 45.2	2 1.1		2 1.1	9 5.1	177 100
60代		79 62.7	30 23.8	15 11.9	2 1.6	126 100	60代		71 56.3	49 38.9			2 1.6	4 3.2	126 100
計	2 0.2	479 55.4	257 29.8	117 13.6	9 1.0	864 100	計	2 0.2	455 52.7	348 40.2	6 0.7	3 0.4	8 0.9	38 4.4	864 100

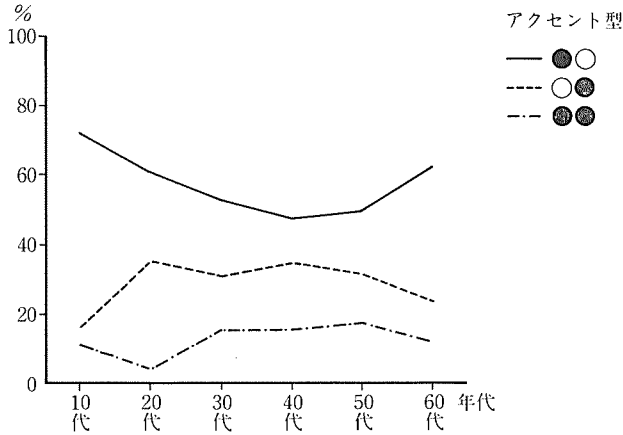


図8-4-1 3類「語」年代別アクセント型の割合

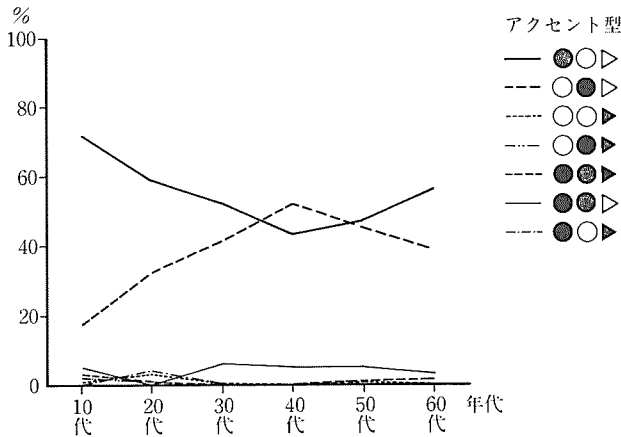


図8-4-2 3類「助詞付き」年代別アクセント型の割合

の割合が増え、●○▷型に接近し、40代では両型の割合が逆転している。

2類・3類の語はともに同じような傾向である。つまり、語においては、10・60代では●○型、20～50代では○●型となる。助詞付きにおいては、50・40代で●○▷型と○●▷型の使用率が一度は接近した後、30代から10代では再び●○▷型が増加し、○●▷型が減少して行く。

(4) 2類・3類の学歴別アクセント

2類2語, 3類3語のアクセント型について, 学歴を低・中・高の3つに分けて比較してみたのが表8-5と図8-5-1・図8-5-2である。図からわかるように, 語の場合, 学歴が高くなるにしたがって●○型の使用率が上昇し, ○●型・●●型が下降する。助詞付きの場合も語の場合と同様に, 学歴が高くなるにしたがって●○▷型の使用率が上昇し, ○●▷型が下降する。一般的な現象として, 学歴が高いほど共通語化の度合いが高くなる傾向がある。しかしながら, 宮津の高学歴層において使用率が高い●○・●○▷型は京都方言と同じ型である。また, 先にみた年代別の結果でも, 若年層では●○・●○▷型の使用が増加する傾向にあり, 共通語化ではなく, 京都方言などの方向（もしくは, いずれでもない第三の方向）への変化が生じつつあるのかも知れない。ただし, 次のような点にも留意しておかなければならない。まず, 宮津周辺には大学などが無いため, 高学歴者は近い所では京都あたりの学校へ行くことが多くなる

表8-5 2類・3類5語のアクセント型

「語」の場合

学歴	無回答	●○	○●	●●	○●	計
低	1 0.2	267 48.1	187 33.7	92 16.6	8 1.4	555 100
中	1 0.1	419 57.4	212 29.1	92 12.6	6 0.8	730 100
高		106 68.4	34 21.9	14 9.1	1 0.6	155 100

「助詞付き」の場合

学歴	無回答	●○▷	○●▷	●●▷	○●▷	●●▷	○●▷	●●▷	計
低	1 0.2	246 44.3	265 47.8	5 0.9		4 0.7	34 6.1		555 100
中	2 0.3	403 55.2	273 37.4	6 0.8	11 1.5	9 1.2	24 3.3	2 0.3	730 100
高		109 70.3	36 23.3	1 0.6	2 1.3	3 1.9	2 1.3	2 1.3	155 100

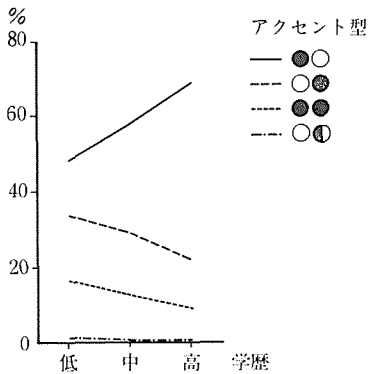


図8-5-1 2・3類「語」

学歴別アクセント型の割合

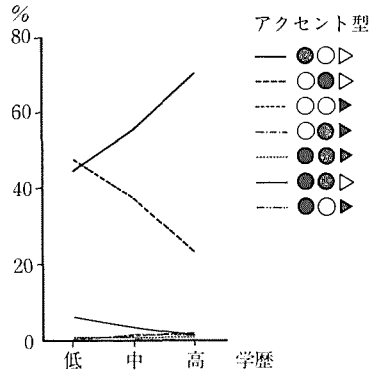


図8-5-2 2・3類「助詞付き」

学歴別アクセント型の割合

はずで、その影響を受けて頭高型化しやすくなること。次に、学歴別とはいうものの、中学歴層には10代の多くを占める高校生が含まれており、若年層の影響が大きく現れているものと思われる。したがって、高校生のデータを削除することによって、特定の年代に左右されない中学歴層の傾向が把握できるのではなかろうか。図には表されていないが、高校生を除いた中学歴層の結果は低学歴層に似たものとなり、頭高型は高学歴層の特徴と言えるであろう。

(5) 4類のアクセント

8.1.1 で示した生田早苗氏の言うところのA型、B型、C型の三種類のアクセント体系のうち、B型・C型は、4類の語が1類の語に統合し、●●～●●●▶になるという特色を持つ。つまり、京阪式アクセントで区別する「高起式無核」と「低起式無核」の区別が無いわけである。

4類5語のアクセント型について、性別・年代ごとにまとめたものを表8-6、図8-6-1(語)・図8-6-2(助詞付き)に示す。

図8-6-1からわかるように、語の場合、全体的に●○型が多く現れ、平均74.1%である。男女別に見ると、●○型では女性が男性を、●●型では男性が女性をそれぞれ上回っており、若干ではあるが、性別によるアクセント型の傾向に異なりが見られる。年代別では、図8-6-1の●○型のグラフが左上がり

になり、年齢が下がるにしたがって●○型化傾向が顕著になる。年代ごとに●○型の割合を見ると、20～50代では平均74.5%であるのに対し、10代が92.7%，60代が56.7%となっており、若干の起伏はあるものの、先に述べたように、低い年代での●○型化傾向を裏付けている。一方、20代と60代では○●型の割合が高く（60代では●●型も）、この二つの年代の共通性が興味深い。

助詞付きの場合も、平均73.2%と全体的に●○▷型が多く、単語の場合とほぼ同傾向である。●○▷型以外にも、様々な型が少しずつではあるが現れる。ところで、4類における●●▶・○●▶型は垂井式アクセント的なもの、○○▶型は京阪式アクセント的なもの（京都などの）と考えられるが、○●▷型はそのいずれでもなく、東京式アクセントのもの（東京などの）でもない。この型は、若い年代のみならず高い年代にも見られるが、京阪式アクセント地域（たとえば大阪市など近畿中央部をはじめとする地域）の若い年代に起こっているような、2拍名詞4類の○○▶型から○●▷型への変化との関連が注目さ

表8-6 4類5語のアクセント型

「語」の場合							「助詞付き」の場合							
	●○	○●	●●	○◇	その他	計		○○▷	○●▷	○○▶	○●▶	●●▶	○○▶	計
男	501 69.6	99 13.8	117 16.3	1 0.1	2 0.2	720 100	男	491 68.2	35 4.9	23 3.2	51 7.0	118 16.4	2 0.3	720 100
女	567 78.8	89 12.4	56 7.8		8 1.0	720 100	女	563 78.2	24 3.3	31 4.3	33 4.6	64 8.9	5 0.7	720 100
10代	153 92.7	8 4.9	3 1.8		1 0.6	165 100	10代	150 90.9	8 4.8	2 1.2	2 1.2	3 1.9		165 100
20代	121 73.3	32 19.4	11 6.7		1 0.6	165 100	20代	125 75.8	2 1.2	12 7.3	8 4.8	13 7.9	5 3.0	165 100
30代	201 68.1	42 14.2	50 17.0		2 0.7	295 100	30代	209 70.8	15 5.1	10 3.4	14 4.7	47 16.0		295 100
40代	253 81.6	24 7.7	33 10.7			310 100	40代	234 75.5	14 4.5	7 2.3	13 4.2	42 13.5		310 100
50代	221 74.9	32 10.8	40 13.6		2 0.7	295 100	50代	218 73.9	10 3.4	5 1.7	23 7.8	37 12.5	2 0.7	295 100
60代	119 56.7	50 23.8	36 17.1	1 0.5	4 1.9	210 100	60代	118 56.2	10 4.8	18 8.6	24 11.4	40 19.0		210 100
計	1068 74.1	188 13.1	173 12.0	1 0.1	10 0.7	1440 100	計	1054 73.2	59 4.1	54 3.8	84 5.8	182 12.6	7 0.5	1440 100

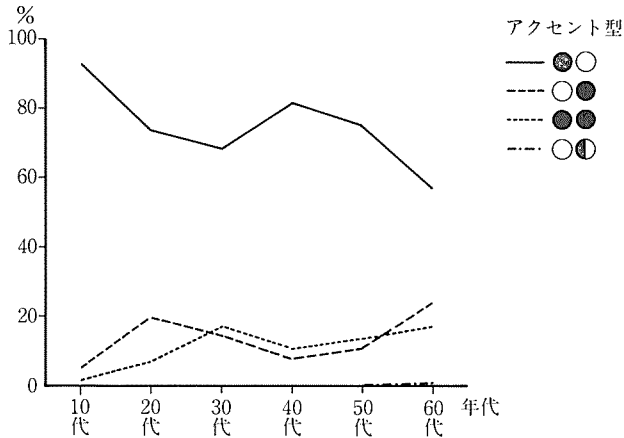


図8-6-1 4類「語」年代別アクセント型の割合

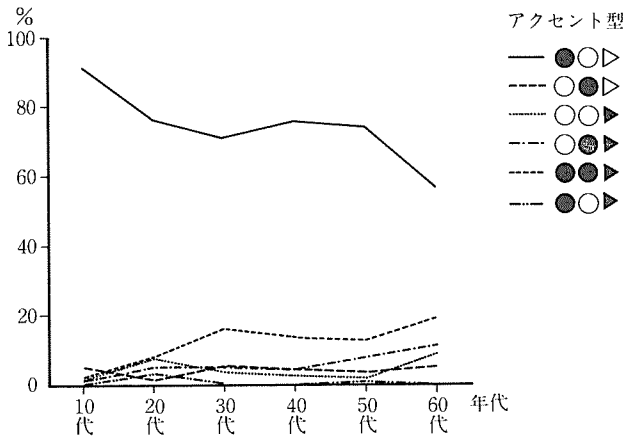


図8-6-2 4類「助詞付き」年代別アクセント型の割合

れる。●○型を中心とする男女差・年代差は、語とほぼ同様の傾向である。また、聴取の際に○○としたものが延べ13例あったが、表8-9の「肩4」「糸4」「松4」からわかるように、その多くが語の場合には○●型(11例)であることから、表8-6と図8-6-1および2では○○に含めて扱うことにした。

(6) 5類のアクセント

5類4語のアクセント型について、性別・年代ごとにまとめたものを表8-7、図8-7-1（語）・図8-7-2（助詞付き）に示す。

1～4類では、語・助詞付きともに、一つの型にまともらず、多くの型が現れる傾向が見られた。しかし、5類では男女・年代を問わず、全体的に頭高型傾向が強く、全体で、語では93.8%，助詞付きでも93.8%が頭高型を占め、他型の割合は極めて低くなっている。また、4類では女性に若干頭高型傾向が見られたのに対し、5類では、ごくわずかではあるが、男性に頭高型傾向が見られる。○●型は、非常に小さな差ではあるが、性別では女性、年代別では20代・60代に多くなっている。○●型は京都などの京阪式アクセントに見られる型であるが、これらの地域の低年層では、今まさに消失しようとしている型である。宮津市においても40代には1例もなく、20代には5例あったものの、年齢が下がるにしたがって減少傾向にあることは間違いない。また、アクセント型の判断に苦しむものを「その他」としてまとめたが、その中には○●型のものが多かった。

表8-7 5類4語のアクセント型

「語」の場合								「助詞付き」の場合							
性別	●○	○●	●●	○●	その他	計		○○	○●	○○	●●	○○	○○	計	
男	558 96.9	7 1.2	1 0.2	9 1.5	1 0.2	576 100		552 95.8	21 3.6		1 0.2		2 0.4	576 100	
女	1 0.2	523 90.8	16 2.8	6 1.0	24 4.2	576 100		529 91.8	41 7.1	3 0.5		1 0.2	2 0.4	576 100	
10代		129 97.6	1 0.8	1 0.8	1 0.8	132 100		132 100						132 100	
20代		119 90.2	4 3.0	4 3.0	5 3.8	132 100		120 90.9	5 3.8	3 2.3			4 3.0	132 100	
30代		228 96.6	5 2.1		3 1.3	236 100		229 97.0	7 3.0					236 100	
40代		243 98.0	4 1.6	1 0.4		248 100		237 95.6	11 4.4					248 100	
50代	1 0.4	226 95.8	4 1.7		4 1.7	236 100		225 95.3	10 4.2		1 0.5			236 100	
60代		136 81.0	5 3.0	1 0.4	6 3.6	168 100		138 82.1	29 17.3			1 0.6		168 100	
計	1 0.1	1081 93.8	23 2.0	7 0.6	33 2.9	1152 100		1081 93.8	62 5.3	3 0.3	1 0.1	1 0.1	4 0.4	1152 100	

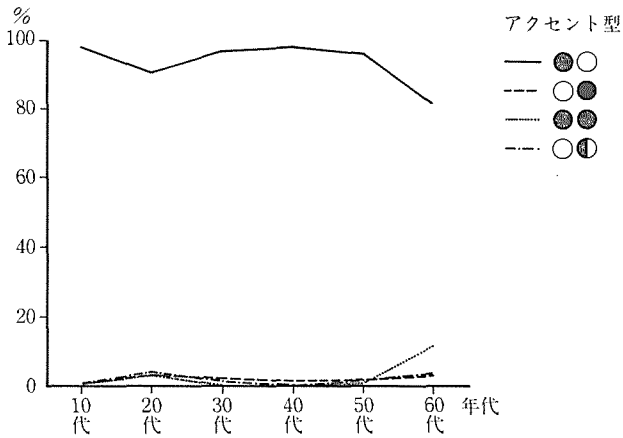


図8-7-1 5類「語」年代別アクセント型の割合

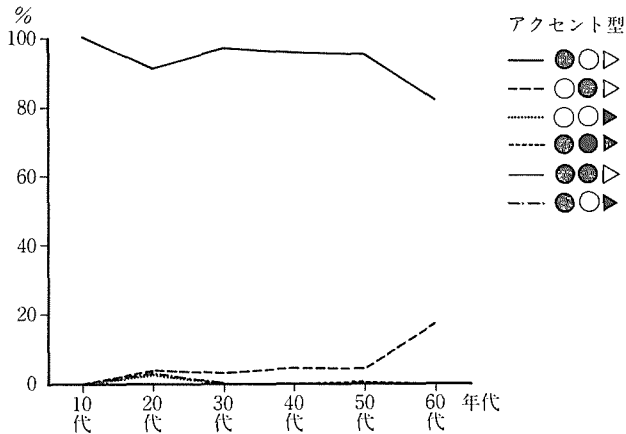


図8-7-2 5類「助詞付き」年代別アクセント型の割合

助詞付きの場合、頭高型（●○▷）の割合が高いことは語の場合とまったく同じであるが、若干○●▷型が見られるほかには他の型はほとんど現れず、語の場合よりもなお一層頭高型傾向が明瞭になる。性別では、男性の頭高型の割合がわずかに高くなっている。年代別では、10代の100%が頭高型で、注目

されるが、年齢が上がるにしたがって非常にゆるやかに減少傾向を見せる。なお、20代に見られる●○▶型は、本来頭高型であるものがこのように発音されたのであって、20代において特別な変化が起きた訳ではないと思われる。図8-7-2からわかるように、60代だけに○●▶型の割合が高い。これは、語のところで述べたように、「その他」としてまとめたものが、本来○●型であって、助詞付きの場合に○●▶型として現れた（京阪式アクセントでは○●～○●▶となる）のではないだろうか。

表8-8 類別 語×助詞付きアクセント型クロス集計表

(各類の総計は語数×発話人数)

1 類	00> 00> 00> 00> 00> 00> 00> 00>	合計人数	2 類	00> 00> 00> 00> 00> 00> 00> 00>	合計人数
●○	8 6 1 3 10 1	29	●○	285 23 3 1	312
○●	6 3 228 74	312	○●	10 149 4 10 3	176
●●	5 3 18 752 5	783	●●	6 50 2 2 21	81
○●			○●		
その他	2 1 5 20	28	その他	2 4 (00 × 無回答 1名)	6
合計人数	8 19 8 254 856 6 1	1152	合計人数	303 226 6 10 8 22	575
3 類	00> 00> 00> 00> 00> 00> 00> 00>	合計人数	4 類	00> 00> 00> 00> 00> 00> 00> 00>	合計人数
●○	428 44 1 1 2 3	479	●○	999 33 6 11 12 7	1068
○●	10 234 3 3 3 3 1	257	○●	26 18 30 64 39 11	188
●●	17 61 2 4 33	117	●●	23 5 5 9 130 1	173
○●			○●	1 1	1
その他	9 (無回答 × 無回答 2名)	9	その他	6 2 1 1	10
合計人数	455 348 6 3 8 38 4	862	合計人数	1054 59 41 84 182 7 13	1440
5 類	00> 00> 00> 00> 00> 00> 00> 00>	合計人数	・ 各類の語数は次の通り。 1 類：4 語、2 類：2 語、3 類：3 語 4 類：5 語、5 類：4 語 ・ 右下の合計人数には無回答の数を含んでいない したがって、2 類の合計人数:576、3 類の合計 人数:864、5 類の合計人数:1152となる。		
●○	1058 19 4	1081			
○●	7 13 2 1	23			
●●	4 1 1 1	7			
○●	5 28	33			
その他	6 1 (00> × 無回答 1名)	7			
合計人数	1080 62 2 1 1 4 1	1151			

・「○○▶型」の扱いについて。

上の表のように1・4・5類に○○▶型がみられるが、表8-1～8-7・図1-1～7-2では、種々の点を考慮し、「1類：●●▶に」「4類：○○▶に」「5類：○○▶に」それぞれ合めて扱う。

表8-9 語×助詞付きアクセント型クロス集計表(語の右の数字は類別を表す)

鼻 1	00> 00> 00> 00> 00> 00> 00> 00>	合計人数	風 1	00> 00> 00> 00> 00> 00> 00>	合計人数
●○	5 3 1 1 10	20	●○	1	1
○●	3 67 18	89	○●	51 20	71
●●	2 1 6 161 2	172	●●	2 5 199 1	207
○●			○●		
その他	1 6	7	その他	2 7	9
合計人数	5 8 2 75 195 2 1	288	合計人数	2 58 226 2	288
鳥 1	00> 00> 00> 00> 00> 00> 00> 00>	合計人数	虫 1	00> 00> 00> 00> 00> 00> 00>	合計人数
●○	1 2	3	●○	2 1 2	5
○●	1 2 53 23	79	○●	2 1 57 13	73
●●	2 5 194 1	202	●●	1 2 198 1	202
○●			○●		
その他	1 1 2	4	その他	1 1 1 5	8
合計人数	1 6 2 59 219 1	288	合計人数	2 5 2 62 216 1	288
川 2	00> 00> 00> 00> 00> 00> 00> 00>	合計人数	橋 2	00> 00> 00> 00> 00> 00> 00>	合計人数
●○	137 10	147	●○	148 13 3 1	165
○●	6 87 3 5 1	102	○●	4 62 1 5 2	74
●●	3 25 1 1 9	39	●●	3 25 1 1 12	42
○●			○●		
その他			その他	2 4 (00 × 無回答 1名)	6
合計人数	146 122 4 5 2 9	288	合計人数	157 104 2 5 6 13	287
花 3	00> 00> 00> 00> 00> 00> 00> 00>	合計人数	足 3	00> 00> 00> 00> 00> 00> 00>	合計人数
●○	131 9	141	●○	130 19 1 1	151
○●	2 73 1 2	78	○●	2 98 2 2 1 1	106
●●	10 34 2 4 12	62	●●	1 16 13	30
○●			○●		
その他	7	7	その他	1	1
合計人数	143 123 3 6 13	288	合計人数	133 134 2 2 1 14 2	288
隠 3	00> 00> 00> 00> 00> 00> 00> 00>	合計人数			
●○	167 16 1 1 2	187			
○●	6 63 1 1 2	73			
●●	6 11 8	25			
○●					
その他	1 (無回答 2名)	1			
合計人数	179 91 1 1 1 11 2	286			

表8-9 語×助詞付きアクセント型クロス集計表(語の右の数字は類別を表す)

肩 4	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	合計人数
●○	194	2	1	3	4		2		206
○●	2	6	2	14	8			7	39
●●	1	1	1	3	35			1	42
○●									
その他	1								1
合計人数	198	9	4	20	47		2	8	288

糸 4	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	合計人数
●○	168	10	1	3	1		2		185
○●	7	4	9	28	14			1	63
●●	4	1	2	2	26				35
○●									
その他	2	2						1	5
合計人数	181	17	12	33	41		2	2	288

松 4	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	合計人数
●○	195	4	1	3	1				204
○●	5	1	5	14	11			3	39
●●	7			1	34				42
○●									
その他	2				1				3
合計人数	209	5	6	18	47			3	288

箸 4	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	合計人数
●○	176	12	2	2	6		2		200
○●	11	5	6	8	6				36
●●	11	2	2	2	35				52
○●									
その他									
合計人数	198	19	10	12	47		2		288

海 4	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	合計人数
●○	266	5	1				1		273
○●	1	2	8						11
●●		1		1					2
○●		1							1
その他	1								1
合計人数	268	9	9	1			1		288

雨 5	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	合計人数
●○	260	7							267
○●	2	5							7
●●	3	1				1			5
○●	2	4							6
その他	1	1				(00 x 無回答 1名)			2
合計人数	268	18				1			287

陰 5	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	合計人数
●○	263	6					2		271
○●	3	3	1						7
●●									
○●	1	8							9
その他	1								1
合計人数	268	17	1				2		288

声 5	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	合計人数
●○	268	3					2		273
○●	2	3							5
●●	1								1
○●	1	7							8
その他	1								1
合計人数	273	13					2		288

猿 5	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	00▷	合計人数
●○	267	3							270
○●		2	1		1				4
●●								1	1
○●	1	9							10
その他	3								3
合計人数	271	14	1		1			1	288

8.1.3 3拍語のアクセント

ここでは3拍名詞「鏡・テレビ」、3拍形容詞「赤い・白い」のアクセント型について考察する。「鏡（3拍名詞4類）」は、本来ガ行鼻濁音の調査のために準備した語であるが、京都の●○○型に対し、京阪式アクセント周縁部では、古い型である●●○型を残しているところが多いので、アクセント項目の対象としても分析した。ガ行鼻濁音については別に8.1.4で扱う。「テレビ」は、外来語アクセントが宮津においてはどのような型で定着しているのかを知るためのものである。形容詞2語は、「赤い」が3拍形容詞1類、「白い」が同じく2類で、古い京都方言アクセントでは、1類●●○型に対して2類●○○型で、異なる型であった（現代の東京方言などでは、1類○○●型、2類○●○型である）ことから、この対立が宮津においても残されているか否かを知るためのものである。

(1) 「鏡」のアクセント

「鏡」のアクセント型について、男女、年代ごとにまとめたものが表8-10、図8-8である。男女差については、ともに○●○型が最も多いが、○●●型では女性が7.7％、●●○型では男性が10.5％多くなっている。図8-8から年

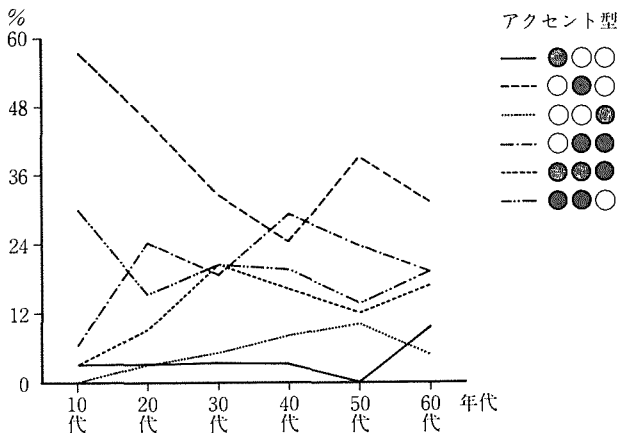


図8-8 「鏡」の年代別アクセント

表8-10 「鏡」のアクセント

	無略	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	計
男		3 2.1	53 36.8	7 4.9	25 17.3	21 14.6	35 24.3	144 100
女	1 0.7	7 4.9	51 35.4	10 6.9	36 25.0	19 13.2	20 13.9	144 100
10代		1 3.0	19 57.6		2 6.1	1 3.0	10 30.1	33 100
20代		1 3.0	15 45.5	1 3.0	8 24.2	3 9.1	5 15.2	33 100
30代		2 3.4	19 32.2	3 5.1	11 18.6	12 20.3	12 20.3	59 100
40代		2 3.2	15 24.2	5 8.1	18 29.0	10 16.1	12 19.4	62 100
50代	1 1.7		23 39.0	6 10.1	14 23.7	7 11.9	8 13.6	59 100
60代		4 9.5	13 31.0	2 4.8	8 19.0	7 16.7	8 19.0	42 100
計	1 0.3	10 3.5	104 36.1	17 5.9	61 21.2	40 13.9	55 19.1	288 100

代差が読み取れるが、20%あたりの様子を分かりやすくするために、60%以上のグラフをカットしてある。すべての年代で最も多く使われているのは〇●〇型であるが、60代から50代へと使用率が上昇したものの、40代で急激に減少し（40代だけは〇●●型が上回っている）、再び10代へと上昇している。〇●●型は10代では6.1%と少ないが、他の五つの年代では、40代をはじめとして平均22.9%と比較的多くなっている。10代で〇●〇型に次いで30.1%と多い●●〇型は、他の年代では平均17.5%と約半分であり、この型が10代から急激に増加し、先に述べた〇●〇型とともに新しい変化の方向の一つであると考えられよう。次に、●●●型は、10代・20代ではそれぞれ3%、9%と少ないが、60代から30代では平均16.3%と多い。30代では●●〇型とともに〇●〇型に次ぐ多さとなっている。全体的に使用率の低い型のうち、●〇〇型は60代に、〇〇●型は50代に使用が見られる。年代ごとに使用率の高い（20%以上）型をまとめると次のようになる。

10代：○●○, ●●○
 20代：○●○, ○●●
 30代：○●○, ●●●, ●●○
 40代：○●●, ○●○
 50代：○●○, ○●●
 60代：○●○

○●○型はすべての年代を通して使用率が高く、1拍目の高低を考慮しないとするならば、2拍目に核があるという点で古い京阪式アクセントに共通するものといえよう。

各年代をとおしてみると、○●●・●●●型から○●○・●●○型へという傾向がみられるが、京都方言と同じ●○○型は全体の3.5%と極めて少ない。

(2) 「テレビ」のアクセント

「テレビ」のアクセント型について、性別・年代ごとにまとめたものが表8-11と図8-9である。

男女差はほとんどないようである。年代差に関しても図8-9から分かるように、●○○型が全年代平均92%と圧倒的に多く、多いことを予想していた○●○型の6%を大きく上回っている。「テレビ」に関しては、年代差と言えるようなものもなく、●○○型で安定していると言えよう。

表8-11 「テレビ」のアクセント

	●○○	○●○	○●●	●●○	●●●	計
男	132 91.7	9 6.3		3 2.0		144 100
女	133 92.4	8 5.5	1 0.7	1 0.7	1 0.7	144 100
10代	30 91.0	2 6.0		1 3.0		33 100
20代	29 87.9	2 6.1	1 3.0		1 3.0	33 100
30代	55 93.2	2 3.4		2 3.4		59 100
40代	58 93.5	4 6.5				62 100
50代	54 91.5	5 8.5				59 100
60代	39 92.8	2 4.8		1 2.4		42 100
計	265 92.0	17 6.0	1 0.3	4 1.4	1 0.3	288 100

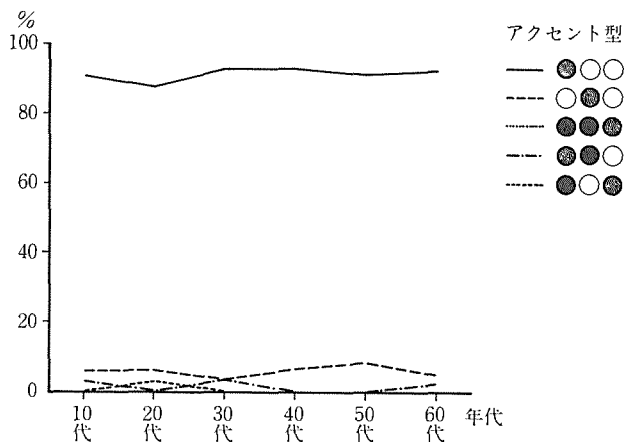


図8-9 「テレビ」の年代別アクセント

(3) 「赤い」のアクセント

3 拍形容詞1類「赤い」のアクセント型について、表8-12と図8-10にまとめた。

図8-10からわかるように、全年代を通して○●○型が多く使われるが、平均78.5%であるが、年齢が下がるにしたがって減少傾向にある。男女差は約7%である。年代差では、○●○型は、緩やかな右上がりのグラフであるが、60代でやや減

表8-12 「赤い」のアクセント

	●●●	●●○	●●○	●●○	●●○	計
男	7 4.9	118 81.9	2 1.4		17 11.8	144 100
女	9 6.3	108 75.0	10 6.9	2 1.4	15 10.4	144 100
10代	4 12.1	22 66.7	1 3.0	1 3.0	5 15.2	33 100
20代	2 6.1	24 72.7	6 18.2		1 3.0	33 100
30代	1 1.7	47 79.6	4 6.8		7 11.9	59 100
40代	2 3.2	52 83.9	1 1.6		7 11.3	62 100
50代	1 1.7	50 84.7		1 1.7	7 11.9	59 100
60代	6 14.3	31 73.8			5 11.9	42 100
計	16 5.6	226 78.5	12 4.1	2 0.7	32 11.1	288 100

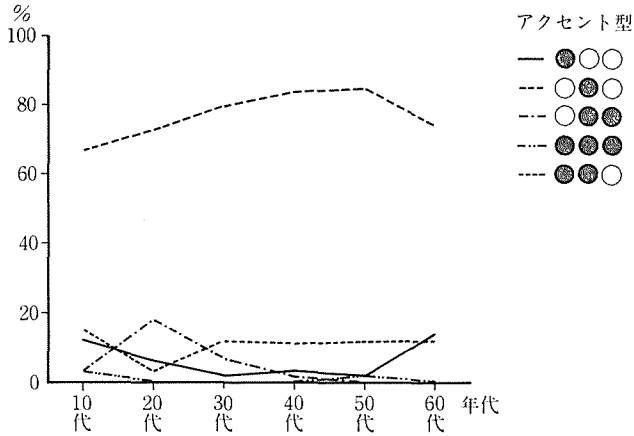


図8-10 「赤い」の年代別アクセント

少している。10代・60代は○●○型の使用率が他の年代よりも低くなる分、●○○型の使用率が（人数では大差ないが）他の型を上回っている。●●○型は20代のみ3%と低い使用率であるが、他の年代では10%近くになっている。20代は他の年代に比べ、○●●型の使用率が特に高くなっている。

(4) 「白い」のアクセント

3拍形容詞2類「白い」のアクセント型を、表8-13と図8-11にまとめた。

図8-11からわかるように、○●○型は全年代を通して高い使用率を示す。男女差はほとんど無いといえ

表8-13 「白い」のアクセント

	●○○	○●○	●●○	○○○	計
男	5 3.5	118 81.9	21 14.6		144 100
女	10 6.9	114 79.2	19 13.2	1 0.7	144 100
10代	3 9.1	25 75.7	5 15.2		33 100
20代	1 3.0	29 88.0	2 6.0	1 3.0	33 100
30代	1 1.7	48 81.3	10 17.0		59 100
40代	2 3.2	50 80.7	10 16.1		62 100
50代	1 1.7	49 83.0	9 15.3		59 100
60代	7 16.7	31 73.8	4 9.5		42 100
計	15 5.2	232 80.6	40 13.9	1 0.3	288 100

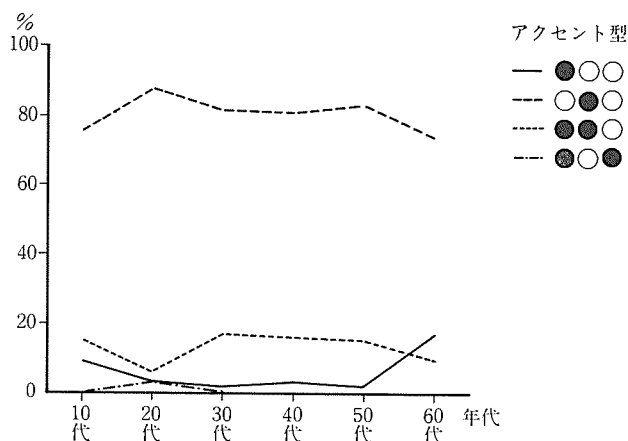


図8-11 「白い」の年代別アクセント

る。年代差では、20代以外の●●○型が平均14.6%であるのに対し、20代はその半分以下になっている。また、60代・10代では若干ではあるが、●○

表8-14 「赤い」・「白い」のアクセント

	●●●	●●○	●○●	○●○	○●●	○○○	計
男	12 4.2	236 81.9	2 0.7		38 13.2		288 100
女	19 6.6	222 77.1	10 3.5	2 0.7	34 11.8	1 0.3	288 100
10代	7 10.6	47 71.2	1 1.5	1 1.5	10 15.2		66 100
20代	3 4.6	53 80.3	6 9.0		3 4.5	1 1.5	66 100
30代	2 1.7	95 80.5	4 3.4		17 14.4		118 100
40代	4 3.0	104 83.0	1 1.0		17 13.0		124 100
50代	2 1.7	99 83.9		1 0.8	16 13.6		118 100
60代	13 15.5	62 73.8			9 10.7		84 100
計	31 5.4	458 79.5	12 2.1	2 0.3	72 12.5	1 0.2	576 100

○型が他の年代よりも高い割合になっている。

(5) 「赤い」「白い」のアクセント

「赤い」「白い」のアクセント型についてまとめたものが表8-14である。

表8-12・13, 図8-10・11からもわかるが, 両語のアクセント型の区別はないと考えられるのではないだろうか。しいて言えば「白い」には○●●型と●●●型が1例も見られなかったことと, ●○●型が見られることが挙げられるが, その他にはこれといって両語を特徴づけるような相違点は見つからない。したがって, 宮津市においては, 「赤い」「白い」のアクセントは同じ型であることが多いと言えるであろう。また, 288人すべてのデータに当たってみたところ, 先に記したように「赤い」が●●○型, 「白い」が●○○型であったのは1名のみであった。また, 共通語と同じように「赤い」が○●●型, 「白い」が○●○型の者は10名で, その多くは2拍名詞の類の統合も共通語と同じであった。

表8-15 鏡の「ガ」の音声

8.1.4 「鏡」のガの音声

「鏡」のガの音声についてまとめたのが表8-15と図8-12である。

表と図から, 宮津においては, ガ行鼻濁音はほとんど使用されず, もっぱらg音であることがわかる。60代から40代にかけて鼻濁音や中間的な音がみられることから, 古くは宮津市にもガ行鼻濁音が行われていたのかもしれない。しかしながら, 10代20代という

	鼻濁	g	り	中間的	計
男		128 88.9	7 4.9	9 6.2	144 100
女	1 0.6	133 92.4	5 3.5	5 3.5	144 100
10代		31 93.9		2 3.1	33 100
20代		32 97.0		1 3.0	33 100
30代		57 96.6	1 1.7	1 1.7	59 100
40代		56 90.3	2 3.2	4 6.5	62 100
50代	1 1.7	52 88.1	4 6.8	2 3.4	59 100
60代		33 78.6	5 11.9	4 9.5	42 100
計	1 0.3	261 90.6	12 4.2	14 4.9	288 100

若い年代においては、中間的な音がごくわずかにみられたものの、鼻濁音は皆無であった。

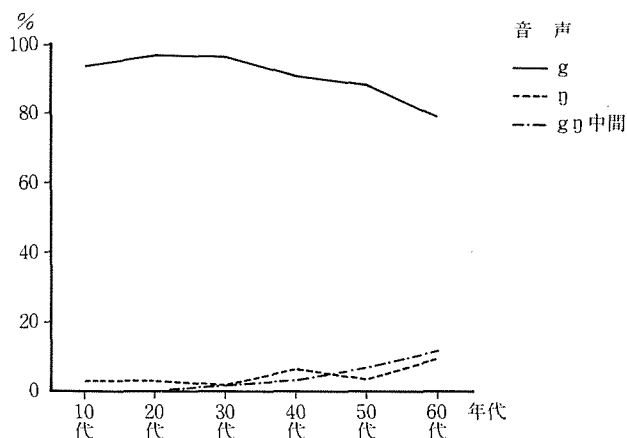


図8-12 「鏡」の「ガ」の音声

8.1.5 宮津市におけるアクセントの地域差・年代差

これまでは宮津市におけるアクセントの実態ということで、宮津市の生え抜きか否かを問わず、一律に扱ってきたが、ここでは、宮津市内各地域の生え抜き話者の調査結果のみを対象とし、宮津市方言のアクセント体系について、地域・年代による変化という観点から考察する。

ここでいう生え抜きとは、宮津市を宮津・上宮津・栗田・吉津・府中の5地区に分類し、各地区の生え抜きとして抽出したものである。生え抜きか否かは現住所・本籍地・出生地・直前地（現住所の前に住んでいた所）・これまでの居住地、以上5項目すべてが同一地区である者ということで判断した。その結果、次のように地区・年代ごとに生え抜き話者が抽出された。

	宮津	上宮津	栗田	吉津	府中	計
10代	15	2	2	7	1	27
20代	1	1	1	0	0	3
30代	8	0	4	1	1	14
40代	8	0	2	0	3	13
50代	3	0	1	1	2	7
60代	2	0	1	2	0	5
計	37	3	11	11	7	合計 69

地域によって話者の数や年代にばらつきがあるが、一応五つの地区すべてから生え抜き話者が得られた。

生え抜き話者の2拍名詞18語のアクセントを表8-16-1・2に示す。アクセント型は数字で示すとともに、表の理解を助けるために、主だった型の組合せ（語と助詞付き）を記号化した（表8-16-1・2の下注を参照）。記号は、有核の頭高型・尾高型などは線によるものを、無核の全高型・平板型などは面積を持つものを用い、それぞれの具体的な型の組合せに | 二 三 四 ▲ ▼ ◆ をあてた。

表からわかることは、宮津市におけるアクセントには、かなり地域差があることである。2類・3類と5類が統合していない（アクセント型が異なっている）のが吉津・府中などに見られる東京式的なアクセントである。一方、2類・3類と5類が統合（アクセント型が同じ）し、1類と4類が統合している（統合の傾向がある）ことから（特に高い年代において）、宮津・上宮津・栗田は垂井式的なアクセントであると言えよう。したがって、宮津市においては、東京式的である吉津地区と、垂井式的である宮津地区の間にアクセント境界線が存在することになる。

吉津・府中地区が東京式的なアクセントとしたが、二つの地域をより詳細に比較すると、1類の型に相違点があることに気づく。すなわち、府中地区では一人の話者と若干の例外を除けば、1類の語は 四 (○●～○●▶) であるのに対し、吉津地区では、ほとんどの話者が ◆ (●●～●●▶) である。つまり、より詳細に見ると、東京方言などに近い東京式アクセントである府中地区と、

表8-16-1 宮津調査生え抜き話者アクセント型

宮津	歳	鼻	風	鳥	虫	川	橋	花	足	膿	肩	糸	松	箸	海	雨	陰	声	猿
15	女	◆	◆	◆	◆														
15	女	◆	◆	◆	◆														
15	女	◆	◆	◆	◆														
15	男	15	◆	◆	◆			31				◆	▲						
15	女	◆	◆	◆	◆														
15	男	◆	◆	◆	◆	31		31											
15	女	◆	◆	◆	◆							42							
15	男	◆	◆	◆	◆	=		=						■					
16	男	◆	◆	◆	◆	31		42			12	12	12						
16	女	■	◆	◆	■														
16	女	◆	◆	◆	◆														
16	女	■	◆	■	▲	21													
17	男	◆	◆	◆	◆														
17	女	◆	▲	◆	◆														
17	女	◆	◆	◆	◆														
24	女	◆	◆	◆	◆														
31	男	◆	◆	◆	◆							◆	31	◆					
33	男	◆	◆	◆	◆						▲		◆						
34	男	◆	◆	◆	◆							14	▼						
34	男	◆	◆	◆	◆	21		31				◆	◆	◆					
36	男	◆	◆	◆	◆						◆	■		◆					
36	男	◆	◆	▲	◆				12		◆	31	31	31					
36	女	15	◆	◆	◆						◆	◆	◆	◆					
39	女	▲	◆	◆	◆				32										
42	男	◆	◆	◆	◆						▲	▲	▲	31					
42	男	◆	45	◆	◆						15	15		◆					
45	男	◆	◆	◆	◆						◆	◆	◆	◆					
45	男	15	◆	■	■	23	10		12			12			13				
48	男	12	≡	◆	32	12	21	12	12	12	12			12	12	32	12	12	12
48	女	◆	◆	◆	◆						◆	◆	◆	▲					
48	男	◆	◆	◆	◆														
49	女	◆	◆	◆	◆						◆	◆	■	15					
50	男	◆	▲	◆	◆						■	■	■	▼					
53	男	◆	◆	◆	◆						▼	▼							
58	男	◆	◆	◆	◆						■	■	■	◆					
68	男	◆	◆	◆	◆						◆	◆	■	■					
69	男	◆	◆	◆	◆				12		▼	◆	■	◆					

語(2桁の左の数字) : 1=00、 2=00、 3=00、 4=その他、 5=00 0=無回答
 助詞付き(2桁の右の数字) : 1=00▷、 2=00▷、 3=00▷、 4=00▷、 5=00▷、 6=00▷、 7=00▷

表8-16-2

		鼻	風	鳥	虫	川	橋	花	足	膿	肩	糸	松	箸	海	雨	陰	声	猿
上宮津																			
16	男	◆	◆	◆	◆														
18	男	◆	◆	◆	◆														
24	女	■	■	■	■	=	=	=	=										
栗田																			
16	女	◆	◆	◆	◆														
19	女	◆	■	◆	◆			=								51			
29	男	◆	45	◆	◆							◆	■	◆	◆				
34	男	▽	■	◆	◆						■	■	◆	▲					
36	男	◆	◆	◆	◆	=	=	=	32	21	32	32	31	=			21		
38	男	■	■	■	■						■	■	■	■					
38	女	◆	◆	◆	◆						◆	▲	■	◆					
49	女	◆	◆	◆	◆				12		◆	◆	◆	15	12	12	12		12
49	女	◆	◆	◆	◆														
53	男	■	◆	◆	◆						◆	◆	◆	◆	12	12			
60	男	◆	◆	◆	◆	=		=	12		■	▲	◆	◆					
吉津																			
15	女	◆	◆	◆	◆	≡	≡	≡	≡										
15	男	◆	◆	▽	◆	32	=	=	32	31				21					
16	男	≡	◆	◆	◆	≡	≡	≡	≡	31									
16	男		▲	=	◆	=	12	12	=		12								
16	男	◆	◆	◆	◆	=	=	=	■	16			31						
16	男	■	■	■	■	=		=	=	12		12		12					
17	男	■	■	▲	■	=		▲	=										
38	男		◆	◆	◆						◆	◆	◆						
57	女	◆	◆	◆	◆	33	33	32	32	≡		17			17				
60	男	◆	◆	◆	◆	=	≡	≡	≡	≡				32					
62	男	45	45	◆	▲	=	=	=	=	=									
府中																			
19	女	■	◆	▽	■	=	=	=	=	=									
30	男	◆	◆	■	■	=	=	=	=					=					
40	男	◆	◆	◆	◆	=	32	32	32	32									
41	女	■	■	■	14	=	=	=	=	=				=					
47	男	■	■	■	■	=	=	=	=	=									
52	女	■	■	■	▽	=	=	=	=	=									
57	男	■	■	■	■	=	=	=	=	=									

| = 11(00~00▷)、= = 22(00~00▷)、≡ = 36(00~00▷)

■ = 24(00~00▷)、▲ = 25(00~00▷)、▽ = 34(00~00▷)、◆ = 35(00~00▷)

東京方言などとは若干異なる（1拍目も高く始まる）準東京式アクセントとも言うべき吉津地区との間にもアクセント境界線を考える必要があろう。

宮津・上宮津・栗田など垂井式的なアクセント地区では、表からわかるように、年代間で大きなアクセント体系の変化が見られる。年齢の高い年代では、1・4類が統合傾向にあつて◆（■もみられる）、2・3・5類が統合して|となる（8.1.1 のB型アクセント）のに対し、年齢の低い年代では1類が◆，2・3・4・5類が統合して|となる（同じくA型アクセント。ただし「海」だけは例外で、全年代を通して|である）。各地区各年代の類の統合傾向（音調は不問）をまとめると次のようになる。

	宮津	上宮津	栗田	吉津	府中	
10代	A	A	A	T	T	T（東京的） 1／2 3／4 5
20代	A	T	B	—	—	A（A型） 1／2 3 4 5
30代	BA	—	B	A	T	B（B型） 1 4／2 3 5
40代	BA	—	BA	—	T	P（前P型） 1／2 3 5／4
50代	P	—	B	T	T	
60代	BP	—	B	T	—	—：生え抜き話者該当無し

アクセント変化の重要な原則として、「一度同じ型に統合した類が、再び分裂し、それぞれ別の型に変化するということはありえない」といわれる。しかし表8-16-1からは、宮津地区の高い年代（60～30代）では1類に統合していた4類が、若い年代では1類から分裂し、2・3・5類に統合したかのような印象を受ける。確かに、30代までに見られるBでは1類と4類が統合しているように思われるが、表8-16-1を詳細に見ると、4類には■が見られ、もしこれが本来の4類の型であるとするなら、1類◆，4類■となり両類は統合せず、上の表のようにP（奥村「近畿諸方言のアクセント」の（B1）青野式に該当）としてまとめることができる。そこで、上述の原則に反しない変化として考えられるのは、P→A、もしくはT→Aということになるが、宮津地区にはTは見られず、前者ということになろう。ただし、類の統合という理論

の観点からは $P \rightarrow B \rightarrow A$ という二段階の変化は考えられず、一旦は $P \rightarrow B$ という変化が生じたものの、何らかの原因（T の影響か）で $P \rightarrow A$ という別の方向への変化に移行したのではないだろうか。

栗田地区でも $B \rightarrow A$ という変化が生じているようであるが、宮津地区で述べたことと同様に、B では1類に統合していた4類が、A では2・3・5類に統合することに関しては、どのように考えればよいのであろうか。

今回の調査では、調査語彙が少ないことや、調査方法などにおいて色々な問題点があるものの、当地域のアクセントは、地理的分布の複雑さのみならず、年代間に大きな変化が生まれていることが明らかになった。このように大きなアクセント体系の変化が、外的要因によるものであるのか、それとも内的な変化であるのか、またその変化のメカニズムの解明など、この結果をもとに、さらに詳しい調査研究が必要である。

【参考文献】

- 井上奥本 1930 「舞鶴地方のアクセント」『音声の研究』3
 玉岡松一郎 1935 「丹後のアクセント」『土の香』15巻2号
 太田武夫 1937 「丹後におけるアクセント境界線」『音声の研究』6
 奥村三雄 1950 「緩衝地帯のアクセント」『近畿方言』1
 生田早苗 1951 「近畿アクセント圏辺境地区の諸アクセントについて」
 『国語アクセント論叢』（法政大学出版局）
 奥村三雄 1961 「京都・滋賀・福井」『方言学講座第3巻』（東京堂）
 奥村三雄 1962 「近畿諸方言のアクセント」『近畿方言の総合的研究』（三省
 堂）
 奥村三雄 1962 「京都府方言」『近畿方言の総合的研究』（三省堂）
 遠藤邦基 1982 「京都府の方言」『講座方言学第7巻』（国書刊行会）
 真田信治 1987 「ことばの変化のダイナミズム——関西圏における neo-
 dialect について」『言語生活』429
 岸江信介 1988 「宮津のアクセント」『音声言語研究会発表原稿集』15

8.2. 豊岡市のアクセント

8.2.1 調査の位置づけ・聴き取り・先行研究

豊岡市を含む但馬地方全般に亘るアクセントについては特に岡田莊之輔による詳細な調査報告がすでに30年ほど前になされており、さらにまた他の研究者らによる報告もいくつかなされてきている。そこで本調査においては、これら先行研究による報告を豊岡市について定量的側面から確認するということが一つの目標となる。とともに、先行研究の主たる目標が但馬地方におけるアクセントの体系研究とその地理的分布の解明という点に置かれてきたため調査対象者はその土地生え抜きの者に限定されてきていたが、本調査では移住者をも含めたこの地域社会全体（のサンプル）であり、この限定されない混合体としての豊岡市のアクセントの状況が一体どのようなものであるのかの解明がもう一つの目標となる。

データの分析に入る前に録音テープの聴き取りについてまず少し述べておく。

豊岡調査のテープの聴き取りは全て尾崎が行った。〈注1〉 聴き取りは1987年11月から翌年2月にかけて行なった。豊岡調査のインフォマントの人数は333人であったが、録音ミスでデータのないものが5人分あり結局聴き取りができデータとして使えるものは328人分であった。以下の分析での百分率はこの328人を母数としてとってある。但し項目によっては部分的な録音不良のために母数がさらに数人分減るケースもある。

調査項目は宮津調査と同じである。すなわち、2拍名詞18語、3拍形容詞2語、および〈鏡〉〈テレビ〉である。2拍名詞については、これも宮津調査と同様単独言い切りのアクセントと、「〇〇が〜。」という文脈でのアクセントを調査した（「この〇〇。」という文脈でも調査したが報告は省略）。

アクセントの判定については、各拍に●・○のいずれかを割り当てる方式をとった。聴き取り票の方にはもう少し細かい高低の差（というよりも厳密には上昇・下降の差）を記録したケースもあるが、この高低の微妙な違いは連続的であり本質的に重要なものとは判断されず、またカテゴリーが増えるとコード

化も煩雑になるので、この細かい違いについては無視して扱った。例えば〈川〉の場合、カワ（○●）もカワ（◎●）も区別なく○●としたのである（なお◎は○と●の中間）。拍内下降・拍内上昇については、3拍語についてはコード化の都合上、拍内下降は●、拍内上昇は○として扱った（但しケース数はわずか）。

インフォマントがアクセントの誤りに気づき自ら読みを訂正した場合にはその訂正した方のアクセントを採った。しかし聴き取り者にとってインフォマントの読みが言い誤りと思われたり、あるいは録音テープから伝わる雰囲気からしてインフォマント自身も自らの読みを変に感じているということが察せられた場合でも、インフォマント自身による訂正がない限りはそのアクセントを採った（〈膿（が）〉にこのケース多し）。

頭高型の2拍名詞は、「○○が〜。」の文脈の中で●○▶と実現されることがしばしばあった。この場合ガには多少なりともストレスが伴われることが多い。こうした現象は標準語の場合にも対比の強調のとき、あるいはまた特に対比の意図がなくとも一種のくせによりしばしば現れるようである。本調査で現れる●○▶もそれと同じもの（特に後者によるもの）と考えられるので、●○▶は◎○▷に含めて一括して扱うことにした。〈注2〉

次に、結果と考察に移る前に先行研究について少しふれておく。

先にも述べたが豊岡市を含む但馬地方全般に亘るアクセントについては、東京文理科大学方言研究会〔但し記述は大原孝道氏〕（1932）・玉岡松一郎（1937）・生田早苗（1951）・岡田荘之輔（1951 a・b, 1957, 1962）・奥村三雄（1962）・鎌田良二（1982）・久野マリ子（1982）などによる報告があり（特に岡田 1957 はオリジナルな報告でありかつまたこの地域については相当詳しい）、また全国的視野から見た分布図としては、新しいものに、金田一春彦（1977）・日本放送協会編（1985）所収の分布図などがある。それら（特に岡田 1957）によると但馬地方では、但馬南端の朝来郡の一部を除き全般的に東京式アクセントが行われているようである。例えば2拍名詞は、1類／2・3類／4・5類と分離統合し、それぞれ○●▶〜●●▶／○●▷〜●●▷／◎○▷というアクセント型を持っているとされている。この東京式のアクセント体系は

但馬西方の中国地方に広く分布する体系に繋がるものであり、さらには東方の奥丹後へと続いているものである。一方但馬の南・南東には京阪式アクセントが広く分布しており、この京阪式アクセントと東京式アクセントが接触する地域には両者の折衷的体系である垂井式アクセントの変種（生田 1951 のいう B 型すなわち 1・4 類●●▶, 2・3・5 類●○▷という型）が存在している。この分布域については報告により多少の違いは見られるが、しかしいづれにしても豊岡市はその分布域から十分遠く離れて東京式アクセントの分布域の中に入っている。すなわち豊岡市はこれまでの体系研究からは東京式アクセントとされており、そしてこの近辺のアクセントの分布状況からして動揺少なくなかり安定して東京式アクセントであることが予想されるのである。それでは以下、東京式・京阪式の区別で特に重要となる 2 拍名詞から順に見ていくことにする。

8.2.2 2 拍名詞のアクセント

結論から先に述べるならば、豊岡市は確かに東京式アクセントの色濃い地域であることが確認された。これは、アクセントの習得に大きな影響を与えると考えられる 5～15 歳の間（すなわち言語形成期）の最長居住地について集計した結果からもうなずけるところである。すなわちインフォマントの 5～15 歳の居住地の分布は次のような比率になっているのである（録音のない 5 人分と無記入の 1 人分を除く）。

- ア. 豊岡市……64.5 % (211 人)
- イ. 兵庫県出石・城崎・朝来・養父・美方郡……19.9 % (65 人)
- ウ. 京都府熊野郡久美浜町……2.4 % (8 人)
- エ. 鳥取・島根・広島県……2.1 % (7 人)
- オ. 兵庫県姫路市・神戸市・加西市・明石市・三木市、大阪府、
京都府〔除久美浜町〕……7.3 % (24 人)
- カ. その他（宮城・茨城・埼玉・新潟・石川・山梨・愛知県、
兵庫県宍粟郡、外国）……3.7 % (12 人)

地点が広域である場合、上の区分とアクセントの区分とは必ずしも完全に一致するとは限らないが、しかしおおそは一致していると考えられる。上記の

うちア・イ・ウ・エが東京式アクセントの分布している地域であり、これらを合わせると 89.0 % (291 人) にのぼる。カにも東京式アクセントの地域がいくつか含まれていることを考えると、結局豊岡市民のうち 90 % 前後の人々は言語形成期を東京式アクセントの地域で過ごしていると言えるのである。

それでは以下、東京式アクセントにおける類の分離統合に従い 1 類, 2・3 類, 4・5 類とまとめて、この順にその結果を見ていくことにする。

(1) 1 類のアクセント

1 類からは〈鼻〉〈風〉〈鳥〉〈虫〉の 4 語を調査した。その結果は表 8-17 のとおりであった (数値は % ; 母数は欠測値を除き右端に表示 ; ●○▷には●○▷を含む)。

いずれの表においても数値は最初の縦の 2 列に集中していることがわかる。

表8-17 1 類名詞のアクセント (単独言い切り)

	●●	○●	○●	●○ ○●	●○	人数
〈鼻〉	26.2	58.2	3.7	0.3	11.6	328
〈風〉	34.8	43.3	5.5	2.7	13.7	328
〈鳥〉	24.4	63.1	5.2	2.1	5.2	328
〈虫〉	20.1	55.2	7.6	2.7	14.3	328

1 類名詞のアクセント (助詞付き)

	●●▷	○●▷	○● ○●▷	●●▷	○●▷	●○▷	人数
〈鼻が〉	34.4	51.5	2.8	4.3	4.9	2.1	326
〈風が〉	64.8	27.8	4.6	0.6	0.6	1.5	327
〈鳥が〉	43.0	47.3	2.7	1.8	2.1	3.0	328
〈虫が〉	56.0	31.2	4.0	3.1	2.8	3.1	327

すなわち1類における主たる型は●●と○●（助詞付きでは●●▶と○●▶）でありこの2つが大きく対立しているのである。少数の○●は○●を、●●は●●をそれぞれやや強調して言い切った型と考えられる。また○●は○●の上昇の遅れたものと考えられる。助詞付きの○○▷は、高さがやや低めであったため●●▶に分類するのが躊躇されたものであるが、本質的には●●▶と変わりないかもしれない。○○▶はこの○○▷の強調された型と考えられる。

●○（▷）については、京阪式アクセント・無アクセント等異体系のアクセントの地域で言語形成期を過ごした者が、その後東京式アクセントである豊岡市に移住したためアクセントに混乱をきたし、その結果偶発的に生じたものが一部含まれていよう。次に示す集計結果は〈鼻〉から〈虫〉までの8項目のうち2項目以上●○（▷）で発音した42人を5～15歳の最長居住地別にまとめたものであるが、先の全体での集計に比べ京阪式アクセント地域（オ）およびその他の地域（カ；特に宮城県、茨城県、兵庫県宍粟郡、外国がそれである点に注目）での比率が高くなっている点からそのことが裏付けられる。

ア. 豊岡市……47.6 % (20 人)

イ. 兵庫県出石・城崎・美方郡……14.3 % (6 人)

ウ. 京都府熊野郡久美浜町……7.1 % (3 人)

エ. 島根県……2.4 % (1 人)

オ. 兵庫県姫路市・三木市、大阪府、京都府〔除久美浜町〕
……19.0 % (8 人)

カ. その他（宮城・茨城県、兵庫県宍粟郡、外国）……9.5 % (4 人)

偶発的という点については東京式アクセントの地域のみで育った者についても多少は言えるように思われる。アクセントの最初の項目である〈風〉に●○が多いのは、偶発性が特にこの最初の位置で高いためであろう。〈注3〉さらに●○（▷）にはまた、インフォマント自身無下降で発音しようとする意図がうかがえるにもかかわらず、語末（というよりも文末）に位置するため2拍目の母音の張りが緩んだり、あるいは特に〈虫〉のシの場合にはさらに加えて母音の無声化傾向も加わるため、結果的に下降を伴った発音になるというケースもあるようであった（この場合には下降は小さめの傾向あり；なおこのような

下降が現れうるには1類に●●という上昇の伴わない最初から高い型が存在していたことも関与していよう。

要するに、真性の頭高型は●○のところに示されているほどには高い数値でなく、せいぜい●○▷の数値あるいはそれ以下かと思われる。事実、●○・●○▷のように一貫して頭高になるケースは〈鼻〉で3/38, 〈風〉で3/45, 〈鳥〉で2/17, 〈虫〉で3/47と非常に少なく(分子は●○▷, 分母は●○), 多くは助詞付きになると●●▶ないしは○●▶になるのである。

このように●○(▷)については真性のものは極めて少ないと考えられ、さらにまた●●・○●・○●も●●・○●の変種と考えられるので、1類は実質的には●●と○●の2つの対立であると言える。この両者の対立をいま少しはつきり浮かび上がらせたのが、●●対○●, ●●▶対○●▶のみの比率についてまとめおした、表8-18である(●●等の変種は含めず)。

表8-18 1類名詞(単独言い切り)
の●●対○●の比率

	●●	○●	人数
〈鼻〉	31.0	69.0	277
〈風〉	44.5	55.5	256
〈鳥〉	27.9	72.1	287
〈虫〉	26.7	73.3	247
平均	32.4	67.6	

1類名詞(助詞付き)
の●●▶対○●▶の比率

	●●▶	○●▶	人数
〈鼻が〉	40.0	60.0	280
〈風が〉	70.0	30.0	303
〈鳥が〉	47.6	52.4	296
〈虫が〉	64.2	35.8	285
平均	55.7	44.3	

単独言い切りについて言えば、●●が平均32.4%, ○●が平均67.6%ということで、ほぼ1対2の割合で○●が優勢ということになる。もっとも助詞付きではむしろ●●▶の方が幾分優勢になる。アクセントは方言によってはその語音、特に母音の広狭にしばしば影響されるが、これら4語を比べてみると、語音と●●(▶)対○●(▶)の比率との間には特に一貫した傾向は認められないようである。なお〈鳥〉〈虫〉には、インフォマントの発音意図としては●●であったが、第2拍の母音の張りの弱まりや無声化のために実際の発音

としては●○になったものもあるようなので、実際は●●はもう少し多いものと考えられる（逆に○●は相対的に少ない）。

さて無核語である1類で●●(▶)と○●(▶)の二つがこの但馬において行われていることについてはすでに玉岡(1937)・岡田(1951b, 1957)も報告しているところである。岡田(1951b, 1957)によればこのゆれは頭高型以外の有核語においても見られるようである。またこういったゆれは、2拍以外の名詞にも(1拍名詞の場合は●▶と○▶として)、さらには他の品詞にも見られるようである。岡田(1951b)によると、地域的には但馬の北西部あたりでは○●がやや強く、但馬の南東部あたりでは●●が強く、そしてその中間地帯は色々であって境界線をひくのはむずかしいということである。また岡田(1957)によると、1類の第1拍が必ず低く始まると断言できる町村は但馬にはなく、豊岡市にも両様あるが低く始める方が多いという(但し調査は助詞付き(の言い切り?)か)。単独言い切りについてならば、移住者をも含めた本調査の結果においてもこれと同じ傾向が見られるようであった。

岡田(1957)は、但馬の東京式アクセントは南からの影響を受けて次第に京阪式アクセントに変わりつつあると述べているが、4半世紀後の本調査の結果から見ると、1類については、京阪式の●●は平均32.4%, ●●▶は平均55.7%であり、この間豊岡市はそれほど京阪式の影響を受けてはいないようである。マスメディアを通じての強力な共通語化がそれを阻止し続けていたのではないかと考えられる。現在でも京阪からの影響はあまり受けていないらしいことは、●●(▶) / {●●(▶) + ○●(▶)} × 100 による数値を年齢別に示した表8-19からもうかがえる(4語の平均を示す)。

●●▶では20-29歳から15-19歳にかけて10%以上の増加が見られるもの

表8-19 年齢別に見た1類名詞の●●(▶)の比率
(●●(▶) + ○●(▶)に対するもの)

	15-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69歳
●●の割合(平均)	22.6	34.4	30.4	39.2	37.3	23.7
●●▶の割合(平均)	63.9	52.4	57.2	54.5	57.3	52.0

の●●ではむしろ減少していて一貫しておらず、京阪式化したとは言い難い。60-69歳と50-59歳の間では多少京阪化があったのかもしれないが、しかし大局的には全年齢層を通じて年齢差は見られず、京阪からの影響はあまりないようである。

さてこの地域に●●(▶)と○●(▶)の両様が行われているということは、個人のレベルで見た時、ある人は専ら●●(▶)を用いまたある人は専ら○●(▶)を用いているという事も考えられるが、この豊岡市においては、同一個人であっても両方を用いるというのがごく普通のことであった。そしてさらに、組織的な確認は今回の調査ではなされていないが、同一文脈における同一の語についても、同一個人が時に●●(▶)で時に○●(▶)で発音することは十分ありうるようであった。このようにこの2つのバリエントは交替が非常に自由なものであるが、このことはさらに、第1拍から第2拍にかけての上昇の幅についても、大幅なものから小幅なものまで連続的にさまざまに存在するということにも繋がってくるが、録音テープを聴いてみると確かにそのようであった。データ処理の都合上●●(▶)か○●(▶)に強制的に振り分けてはいるが、1回の聴き取りではどちらに分類すべきか決定に迷うほど上昇の微妙なケースも少なからずあった(ここでは聴き取り者が耳で確認できる程度の上昇が多少なりとも認められた場合は○●(▶)に分類してある)。極端な場合には、●●(▶)を予想しつつ聴けばそう聞こえるし、○●(▶)を予想しつつ聴けばそう聞こえるというようなものもあった。他方大幅な上昇がはっきりと認められるような場合でも、東京方言に比べれば小幅かと思われるケースもしばしばあった。すなわち豊岡市においては、1類で●●(▶)と○●(▶)の両様が行われているのみならず、その第1拍から第2拍にかけての上昇の幅についても微妙であり、数値としては現れてきていないがこれが豊岡市のアクセントの一つの特徴となっている。このことは、次に述べる頭高型以外についても言えることなのである。

(2) 2・3類のアクセント

2類からは〈川〉〈橋〉を、3類からは〈花〉〈足〉〈膿〉を調査した。結果は、

表 8-20 のとおりであった（数値は %；母数は欠測値を除き右端に表示；●○▷には●○▷を含む）。

数値は、単独言い切りでは●●と○●そして少し下がって●○に、助詞付きでは○●▷そしてずっと下がって●●▷と●○▷にそれぞれ集中していることがわかる。1類との違いは助詞付きにおいて明らかである。すなわち1類は基本的には無核であるのに対して2・3類は、●●▷にしる○●▷にしる基本的には第2拍に核を持つ有核なのである。2・3類での●●対○●の比率は1類の場合と似たようなものであるが、●●▷対○●▷の比率は、1類の●●▷対○●▷の比率と比べてかなり異なっている。この点をもう少しはっきりさせたものが、●●対○●、●●▷対○●▷の比率のみについてまとめなおした表 8-21 である。

表8-20 2・3類名詞のアクセント（単独言い切り）

	●●	○●	○●	●● ○●	●○	人数
<川>	25.1	58.7	3.1	2.4	10.7	327
<花>	21.1	60.6	3.4	2.1	12.8	327
<橋>	21.3	51.8	5.5	2.7	18.6	328
<足>	10.1	69.3	7.4	2.5	10.7	326
<膿>	10.4	56.4	1.2	0.6	31.3	326

2・3類名詞のアクセント（助詞付き）

	●●▷	○●▷	○●▷ ○●▷	●●▷	○●▷	●○▷	人数
<川が>	1.5	0.9	0.0	10.5	76.6	10.5	325
<花が>	0.6	0.0	0.9	9.5	80.9	8.0	325
<橋が>	0.3	1.5	0.9	3.4	80.7	13.1	327
<足が>	0.9	0.6	0.9	3.4	85.1	9.1	328
<膿が>	0.6	0.6	0.9	4.6	71.2	22.1	326

表8-21 2・3類名詞（言い切り）

の●●対○●の比率

	●●	○●	人数
<川>	29.9	70.1	274
<花>	25.8	74.2	267
<橋>	29.2	70.8	240
<足>	12.7	87.3	259
<膿>	15.6	84.4	218
平均	22.9	77.1	

2・3類名詞（助詞付き）

の●●▷対○●▷の比率

	●●▷	○●▷	人数
<川が>	12.0	88.0	283
<花が>	10.5	89.5	294
<橋が>	4.0	96.0	275
<足が>	3.8	96.2	290
<膿が>	6.1	93.9	247
平均	7.3	92.7	

1類においては●●対○●は平均 32.4 対 67.6 であったのに対して 2・3類では平均 22.9 対 77.1 となり、有核の 2・3類の方が無核の 1類よりも上昇を伴う○●を好む傾向が幾分見られる。この傾向は核が顕在化する助詞付きにおいて一層顕著になる。すなわち、1類においては●●▷対○●▷は平均 55.7 対 44.3 とほぼ同率であったのに対し 2・3類では●●▷対○●▷は平均 7.3 対 92.7 であり、2・3類では上昇を伴う○●▷が圧倒的に好まれるのである。東京方言では、同じく上昇を伴う 1・2・3類も、少し詳しく見ると 2・3類の方が 1類よりも上昇が大幅であることがあるが（<鼻（が）>を「下中（中）」・<花（が）>を「下上（中）」と呼ぶことを参照）、豊岡市にもこれと同じ傾向があり、それがカテゴリーカルな分類における比率に反映されているものと考えられる。

さてこの 2・3類には、1類に見られなかった語音による傾向もまた見られるようである。すなわち <川> <花> といった第 2 拍に広母音を持つ語には上昇のない●●（▷）を好む傾向が見られ、逆に <橋> <足> <膿> といった狭母音を持つ語には上昇のある ○●（▷）を好む傾向が見られるのである（特に助詞付きで顕著）。そしてさらに、ともに狭母音を持つ <橋が> <足が> <膿が> を比べてみると、第 1 拍が広母音である <橋が> <足が> においては一層○●▷が好まれるようである（もっともこれについては語例が少ないので一般化は

やや危険かもしれないが)。

以上のように、1類、2・3類両方に上昇・無上昇の両様が見られるのであるが、その割合については違いが見られ、1類に比べて2・3類では上昇を伴うアクセントが好まれるのである。そしてまたこの上昇を伴うアクセントは、2・3類の中でも特に第2拍に狭母音を持つ語に顕著である。これらの点については、この地域の状況に詳しい岡田(1957)にも特に記述は見られず、今回のこの大量調査により初めて明らかになった点である。もっとも第1の点については、玉岡(1937)の出石郡出石町・養父郡西谷村中間(なかま)についてのカテゴリカルな報告、すなわち1類は中中型(助詞付きでは中中中型)で2・3類は下中型(助詞付きでは中上下型；なお西谷村中間では上下型も)との報告もあるが。

2・3類の○●▷は、全体としてもかなり優勢であるが若年層に向けてさらに徹底してきているようである。5語の○●▷の平均を年齢別に示すと表8-22のようである(○●▷/{○●▷+●●▷}×100)。

表8-22 年齢別に見た2・3類名詞の○●▷の比率(●●▷+○●▷に対するもの)

	15-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69歳
○●▷の割合(平均)	95.1	93.7	95.2	93.2	89.3	90.3

さて1類には東京式アクセントでは期待されない●○(▷)が出てきたが、2・3類にもこのアクセントが出てきている。しかも、1類では助詞付きになると●○▷は大幅に減少したのに対し、2・3類では助詞付きでも●○▷はけっこうよく保たれている。すなわち2・3類では、1類と異なり真性の頭高型が少なからず存在しているものと考えられる。表8-23は、単独言い切りで●○であったもののうち助詞付きでも●○▷となったものの割合を示したものであるが、1類(表8-23の上)に比べ2・3類(表8-23の下)では一貫して頭高型である割合が高いことが明らかである。

2・3類におけるこの真性の●○(▷)は、主として京阪式アクセントの地域で生育した移住者によって行われているものと考えられる。表8-24は、

表8-23 1 類名詞の頭高型の一貫率 (カッコ内は実数)

	＜鼻(が)＞	＜風(が)＞	＜鳥(が)＞	＜虫(が)＞	平均
1 類	7.9 (3/38)	6.7 (3/45)	11.8 (2/17)	6.4 (3/47)	7.5

2・3 類名詞の頭高型の一貫率 (カッコ内は実数)

	＜川(が)＞	＜花(が)＞	＜橋(が)＞	＜足(が)＞	＜膿(が)＞	平均
2・3 類	71.4 (25/35)	52.4 (22/42)	59.0 (36/61)	65.7 (23/35)	52.0 (53/102)	57.8

表8-24 5～15歳の最長居住地と●○の比率との相関

	ア・イ・ウ	エ	オ	カ-1	カ-2
＜川＞	5.7	0.0	66.7	27.3	0.0
＜花＞	7.1	0.0	70.8	36.4	50.0
＜橋＞	13.4	0.0	75.0	45.5	0.0
＜足＞	5.7	0.0	58.3	27.3	100.0
＜膿＞	26.6	28.6	79.2	45.5	50.0

5～15歳の最長居住地と●○◇の比率との相関

	ア・イ・ウ	エ	オ	カ-1	カ-2
＜川が＞	5.7	0.0	65.2	27.3	0.0
＜花が＞	3.2	0.0	65.2	18.2	0.0
＜橋が＞	8.1	0.0	66.7	36.4	0.0
＜足が＞	3.5	14.3	62.5	27.3	50.0
＜膿が＞	16.7	14.3	83.3	27.3	50.0

5～15歳の最長居住地と●○(▷)の比率とをクロスしたものである。表のA～カはp. 254の表のものと同じである。ただしカ-1は埼玉・新潟・石川・山梨・愛知県、兵庫県宍粟郡、外国、カ-2は宮城・茨城県である。母数は、アイ・ウが282～284人、エが7人、オが23～24人、カ-1が11人、カ-2が2人である(語により多少の増減がある)。これらのうちオが京阪式アクセントの地域であるが、ここでの数値が他と比べ著しく高い点より先のことが言える。

年齢別に●○(▷)の比率を見ると表8-25のとおりである。どの年齢層にも●○(▷)はほぼ同じ程度見られる。15～19歳で他の年齢層よりも少なめなのはこの年齢層に(京阪式アクセントからの)移住者が少ないためであろう。

表8-25 年齢別に見た2・3類名詞の●○(▷)の比率

	15-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69歳
●○の割合(平均)	10.4	17.4	14.6	18.7	17.7	19.2
●○▽の割合(平均)	7.4	13.4	11.4	13.2	12.7	15.0

語別に見ると〈膿(が)〉は他に比べて●○(▷)の比率が突出している(表8-20)。これは同音異アクセント〈海(が)〉の●○(▷)による干渉が上乘せされているためと思われる。実際インフォマントが〈膿(が)〉を●○(▷)で読みつつ自分の発音の誤り・おかしさに気付いた(と察せられる)ケースがしばしばあった。

(3) 4・5類のアクセント

4類からは〈肩〉〈糸〉〈松〉〈箸〉〈海〉を、5類からは〈雨〉〈陰〉〈声〉〈猿〉を調査した。京阪式アクセントでは4類と5類は区別されているので一応分けて示すと、結果は表8-26・27のとおりであった(数値は%; 母数は欠測値を除き右端に表示; ●○▷には●○▶を含む)。

4・5類ともに、単独言い切りでは●○, 助詞付きでは●○▷が圧倒的な比率を占めておりこれ以外は実に微々たるものである。先に見た2・3類では京阪式の●○(▷)もある程度見られたが、4・5類では京阪式の○●・○①,

○○▶・○●▶の比率はそれに比べてずっと落ちる。東京式の○●(▶)の受容には抵抗を示して●○(▶)で押し通す京阪式地域からの移住者も、東京式の●○(▶)は容易に受容するという傾向がここに見られる。異体系のアクセ

表8-26 4 類名詞のアクセント (単独言い切り)

	●●	○●	○▶	●▶ ○▶	●○	人数
<肩>	1.5	2.4	0.0	0.0	96.0	328
<糸>	0.3	3.4	0.3	0.3	95.7	327
<松>	0.6	2.1	0.0	0.3	97.0	328
<箸>	5.5	11.9	0.3	1.8	80.4	327
<海>	0.9	0.9	0.3	0.3	97.6	328

4 類名詞のアクセント (助詞付き)

	●●▶	○●▶	○○▶ ○○▶	●●▶	○●▶	●○▶	人数
<肩が>	1.5	0.9	0.9	0.3	0.9	95.4	327
<糸が>	0.0	0.9	2.1	0.0	0.6	96.3	327
<松が>	0.6	0.3	1.5	0.3	1.8	95.4	327
<箸が>	0.6	0.3	1.8	1.2	7.6	88.4	327
<海が>	0.3	0.0	1.5	0.3	1.2	96.6	328

表8-27 5 類名詞のアクセント (単独言い切り)

	●●	○●	○▶	●▶ ○▶	●○	人数
<雨>	0.3	0.3	2.1	0.3	97.0	328
<陰>	0.3	0.9	1.2	0.3	97.2	327
<声>	0.3	1.2	1.8	0.3	96.3	328
<猿>	0.0	0.6	1.5	0.0	97.9	328

5 類名詞のアクセント (助詞付き)

	●●▶	○●▶	○○▶ ○○▶	●●▶	○●▶	●○▶	人数
<雨が>	0.0	0.0	0.0	0.0	2.7	97.3	328
<陰が>	0.0	0.9	0.9	0.0	2.1	96.0	327
<声が>	0.0	0.0	0.0	0.0	2.4	97.6	328
<猿が>	0.0	0.0	0.0	0.0	1.8	98.2	327

ントが接触する時には、どちらか一方に頭高型がある場合にはその頭高型を採用するという傾向がしばしば見られるようであるが、これもその例と言えよう。これを類の分離統合の観点から見るならば、地域社会全体としては1類(●●(▶) ~ ○●(▶)) / 2・3・4・5類(●○(▶))という体系がわずかではあるが存在していると言える(個人のレベルにおいてもこの体系を持っている者は実際にいる)。

この表のうち、<箸(が)>は他と趣が少し異なっている。これは同音異アクセント語<橋(が)>の干渉を受けたためであり偶発的なものと考えられる。

さて4・5類は以上に見たとおり●○(▶)以外の型は微々たるものであったが、しかしその中でも4類と5類の間には若干異なった傾向が見られる。すなわち4類では、<箸>を除けば○●, ○○▶・○○▶(およびそれと本質的には同じ可能性のある●●▶・○●▶)に幾分片寄りが見られる。これに対して5類では○●, ○●▶に幾分片寄りが見られるのである。ここに、京阪式アクセントの地域からの移住者のアクセントがわずかながらも反映されているのが伺える。

8.2.3 3拍形容詞のアクセント

3拍形容詞は、京阪式アクセントでは1・2類とも●○○で統合し、東京式アクセントでは1類は○●●, 2類は○●○で分離している。先に見た2拍名詞では豊岡市は基本的には東京方言と同じであったのだが、3拍形容詞については、岡田(1951b, 1957)によると、東京方言とは異なり1・2類とも○●

○ないしは●●○で統一されているという（但馬の大部分も同様；なお4拍形容詞についても同じ）。一方玉岡（1937）によると、豊岡市のすぐ南の出石郡出石町魚屋町では、1類 中上下型、2類 上下下型という傾向が見られるとのことである。また久野（1982）によると、但馬の南・南東部から京阪式アクセントの地域までの間には1・2類ともに○●○とする地域があるが、これより少し北・北西の但馬（豊岡市はここに入る）では、1類○●●、2類○●○という体系が分布しているという（もっとも低年層では1類も○●○となり2類に統合されているらしい）。本調査では1類から〈赤い〉、2類からは〈白い〉をとり調査した。結果は表8-28のとおりであった（数値は％；母数は欠測値を除き右端に表示；●○●には●●●を含む）。

表8-28 形容詞のアクセント

	●●●	○●●	○●○ ○●○	●●○	○●○	●○●	人数
〈赤い〉	0.6	1.5	0.3	4.6	85.9	7.0	327
〈白い〉	0.3	0.0	0.0	22.3	60.9	16.5	327

1類の〈赤い〉では○●○が圧倒的な比率を占めている。2類の〈白い〉についても、1類の〈赤い〉ほどではないにしろやはり○●○が優に過半数を占めている。豊岡市では●●○は○●○と自由変異の関係にあると考えられるので○●○に●●○を加えて見てみると、〈白い〉においても○●○ないしは●●○は80％を超え、〈赤い〉とほぼ同じ状況になる。すなわち3拍形容詞は、1・2類区別せず○●○ないしは●●○で統一する傾向が豊岡市には強いのである。表8-29は〈赤い〉と〈白い〉をクロスしたものであるが、これより今のことは一層はっきりとわかる。この表のうち最初の4列が今述べたものに該当するものであるが、合わせて79.8％にのぼるのである。但馬の南・南東部にまで分布している1・2類○●○の体系が、すでにかなり強く豊岡市にまで及んできているようである。

なお●●○と○●○については、●●○は〈白い〉でより好まれ○●○は〈赤い〉でより好まれるという傾向が見られるが、語例がこれだけなので

表8-29 <赤い> と <白い> のアクセントの組み合わせとその比率

<赤い> <白い>	○●○○	○●○○	●●○○	●●○○	○●○○	●●○○	○●○○	●●○○
%	57.8	19.9	1.2	0.9	8.3	2.4	0.6	0.9

<赤い> <白い>	●●○○	○●●●	○●●●	○●●●	●●●●	●●●●	人数
%	5.5	1.2	0.3	0.3	0.3	0.3	327

これが類によるものなのか語音によるものなのかあるいはまた別の原因によるものなのか判断が難しい。

さて●●○○・○●○○には遥かに及ばないものの、京阪式の●●○○も<赤い> <白い> ともにある程度は見られる。●○○○は<白い> の方により多く見られるがこれは、両者をクロスした表8-29からわかるように、アカイ (●○○○) / シロイ (●○○○) という京阪式の体系が5.5% 占めている他に、アカイ (○●○○ (・●●○○)) / シロイ (●○○○) という体系が10.7% 占めていることによる (なおこの逆のアカイ (●○○○) / シロイ (○●○○ (・●●○○)) も1.5%)。これは玉岡 (1937) が出石郡出石町魚屋町について報告している体系であるが、豊岡市にも少数ながら存在していることが確認された。このアカイ (○●○○ (・●●○○)) / シロイ (●○○○) の体系を持つ35名の5~15歳の最長居住地を見てみると次のとおりであった。

ア. 豊岡市……77.1% (27人)

イ. 兵庫県出石・城崎・養父・美方郡……11.4% (4人)

ウ. 京都府熊野郡久美浜町……2.9% (1人)

エ. 島根県……2.9% (1人)

オ. 京都府 [除久美浜町] ……5.7% (2人)

すなわち豊岡市 (ア) ないしはその近辺の地域 (イ) がそのほとんどを占めているのである。つまりこの体系はどこか他所から持ち込まれたものではなくこの地域に固有のものであり、少数ではあるが1・2類ともに●●○○ないしは○●○○という体系と並行して行われているものなのである。さてこの1類●●

○・○●○／2類●○○という体系は、近世初期の京都アクセントの継承として高知・和歌山等に残っているのであるが、豊岡市は2拍名詞の体系からして京阪式アクセントの地域とは考えられないので、ここに見られるこの体系はそれらとは別系統のものと考えられる。

表8-30はこの体系を持つ者を年齢別に見たものであるが、高年層に特に比率が高いというような事実もないことからそのことは言えよう。むしろこの体系は若年層に多いようである（特に20-29歳ではこの体系の者は22.2%にのぼる）。ひとたび1・2類が○●○に統合し再びもとの類に従って分離するという可能性は低いことから考えると、この体系は1・2類がまだ分離している体系すなわち1類●●●（・○●●）／2類●●○（・○●○）という東京式の体系から、1・2類を○●○に統合する方向とはまた別の方向に変化した体系と考えられる。

表8-30 年齢別に見た形容詞の1類●●○（・○●○）／2類●○○
という体系の比率（カッコ内は実数）

15-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69歳	人数
11.1	22.2	10.3	7.9	6.3	7.7	
(3)	(12)	(7)	(5)	(4)	(4)	35

なお東京式のアカイ（○●●）／シロイ（○●○（・●●○））という体系は豊岡市ではごくわずかであった（これに近いものを含めても1.8%）。

結局豊岡市においては、3拍形容詞は8割方が1・2類●●○ないしは○●○に統合された体系であり、これに加えて1類●●○（・○●○）／2類●○○という体系、1・2類ともに●○○という体系がさらに少しある、ということになる。

8.2.4 「鏡」のアクセント

〈鏡〉等の3拍名詞4類は、大阪・神戸・和歌山等で●●○、京都・奈良・彦根・津等で●○○であり京阪式アクセント内での地域差が注目される項目である。その意味で東京式アクセントである豊岡市ではそれほど注目される項目

ではなかったが、宮津調査に合わせて調査項目に含めた。その結果は表 8-31 のとおりであった（数値は %；母数は欠測値を除き右端に表示；●○○には ●○○●を含む）。

表8-31 <鏡> のアクセント

	●●●●	○●●●	○○○○●	●●●○	○●●○	●○○○	人数
<鏡>	45.1	28.8	7.4	2.5	5.8	10.4	326

●●●●と○●●●とですでに 73.9 % を占め、さらにこれらと本質的には同じ可能性のある○○●●ないしは○○○○を加えると 81.3 % にのぼる。これは、豊岡市を含む但馬で広く●●●●▷・○●●●▷が行われているという岡田（1957）の報告、出石郡出石町では 中中中型（但し助詞付きでは 中中中中型）であるという玉岡（1937）の報告を、現在においても再確認する結果となった。

●○○○も 10.4 % と多少出てきているが、この 34 名の 5～15 歳の最長居住地について見てみると次のとおりであった。

ア. 豊岡市……52.9 %（18 人）

イ. 兵庫県出石・城崎・養父郡……26.5 %（9 人）

ウ. 京都府熊野郡久美浜町……5.9 %（2 人）

オ. 大阪府，京都府〔除久美浜町〕……14.7 %（5 人）

これによると、京阪式アクセントの地域（オ）での生育者がこのアクセントの多くを占めているというようなことはないようである。少数派ではあるがこの地域固有のアクセントとして●●●●と共存しているもののようである。

○●●○・●●●○については、次の集計結果から見られるとおり京阪式アクセントの地域（オ）での生育が幾分効いているようである。ただしこのカテゴリーに入る人数が少なくなるため信頼度は落ちてくるが。

○●●○ ア. 豊岡市……31.6 %（6 人）

イ. 兵庫県城崎・朝来・美方郡……15.8 %（3 人）

オ. 兵庫県神戸市・三木市，大阪府，京都府〔除久美浜町〕

……36.8 %（7 人）

カ. その他（兵庫県宍粟郡，外国）……15.8 %（3人）

●●○ ア. 豊岡市……37.5 %（3人）

エ. 広島県……12.5 %（1人）

オ. 兵庫県姫路市・加西市，大阪府……50.0 %（4人）

なおこの〈鏡〉についてはガの子音についてもチェックしたが，鼻音 2.8 %，非鼻音 97.2 %であり（合計は 323 人），豊岡市では非鼻音が圧倒的であった。

8.2.5 「テレビ」のアクセント

この項目は，外来語が新語として各地の方言に受容されていく時どのようなアクセントで受容されていくか，という点で注目される項目である。全く知らない語といえどもひとたびそれを口に出す場合には何らかのアクセントを伴って発音されるわけであるが，〈テレビ〉のような比較的新しい語のアクセントを調べることによってその方言の持っている基本アクセントといったものを探ることができるのである。さてこの〈テレビ〉のアクセントについては，真田信治（1981）による全国の分布についての報告がなされている。それによると，東京式アクセントの地域では●○○，京阪式アクセントの地域（さらには北奥地域でも）では○●○という傾向が見られるようである。本調査での結果は表 8-32 のとおりであった（数値は %；母数は欠測値を除き右端に表示；●○○には●○●を含む）。

表8-32 〈テレビ〉のアクセント

	●●●	○●●	○○● ○○○	●●○	○●○	●○○	人数
〈テレビ〉	0.0	0.0	0.0	0.6	1.2	98.2	327

豊岡市では●○○がほとんど 100 % 行われていることがわかる。京阪式アクセントの地域で言語形成期をすごした者も 7.3 % いることを考えると，かなりな統一ぶりである。豊岡市においては 3 拍名詞の基本アクセントは●○○であって，これでかなり安定していると言える。なおわずかに見られた○●○ 4 人の 5～15 歳の最長居住地は石川県・京都府・大阪府・神戸市の京阪式の地

域であった。また●●○の2人は宮城県・出石郡であった。

8.2.6 ま と め

結局本調査においては、岡田らによる先行研究の結論を、移住者をも含めた30年ほど後の定量的側面からの調査においてもほぼ再確認する結果となった。すなわち2拍名詞について言えば、豊岡市民の大多数は1類(●●(▷)~○●(▷))/2・3類(●●(▷)~○●(▷))/4・5類(●○(▷))という東京式の体系を持っており、年層差に反映されるアクセントの変化もあまり見られずよく安定していた。

このように、移住者をも含めた豊岡市全体を調査対象とした場合にも東京式アクセントが色濃く出てきたことについては、移住者を含むとは言いながらも、実際のところは豊岡市ないしはそれと同じアクセント体系・語の所属を持つ近隣地域で言語形成期を過ごし移住してきた者が多いという事実からもうなずけるところである。

1・2・3類において語頭が●●…であるか○●…であるかは自由変異であると考えられるが、助詞付きの場合には、無核の1類に比べて有核の2・3類で○●…が好まれる、とりわけ第2拍が狭母音の場合には一層その傾向が見られることが本調査で明らかになった(すなわち1類の●●▶:○●▶=55.7:44.3に対して2・3類の●●▷:○●▷=7.3:92.7)。

豊岡市において東京式アクセントの例外となるものは少数派であった。しかしその例外の中では、●○(▷)というアクセントをとることにより例外となるケースが多かった。1類の●○(▷)は偶発的なものである疑いがあるが、2・3類の●○(▷)は主として京阪式アクセントの地域からの移住者によるもののようであった。4・5類で東京式の例外となるもの(すなわち●○(▷)にならないもの)の割合は2・3類で例外となるものの割合に比べてさらに小さい(ここに頭高型の影響力の強さが伺われる)。これを類の分離統合の観点から見ると、1類(●●(▷)~○●(▷))/2・3・4・5類(●○(▷))という体系が、わずかではあるが豊岡市に存在するということになる。

3拍形容詞については、1・2類の分離統合については先行研究により報告に違いが見られたが、本調査によると1・2類が●●●ないしは○●○で統合されている比率が79.8%とかなり高いことがわかった。この他には1類(●●○～○●○)/2類(●○○)という体系も10.7%見られた。この体系は一見近世初期の京都アクセントを伝えているもののように見えるが、実はそうではなく、かつて存在していた東京式アクセントの体系から変化して生じたものと考えられる。

〈鏡〉は●●●ないしは○●●が多数を占めていた。なお〈鏡〉のガの子音については、鼻音2.8%、非鼻音97.2%でありほとんど非鼻音であった。

〈テレビ〉はほぼ100%近く●○○であった。全国的に見て、東京式アクセントの地域では〈テレビ〉を●○○で受け入れる傾向が見られるが、近くに京阪式アクセントが分布しているものの豊岡市でも●○○で受け入れる傾向は極めて強く、豊岡市の3拍名詞の基本アクセントは●○○であると言える。

〈注1〉 聴き取り者である筆者尾崎の言語的バックグラウンドについて記しておく(聴き取り当時まで)。筆者は1958年に長野県上田市で生まれ18歳までそこで暮した。その後、埼玉県戸田市に1年間、札幌市に8年間、兵庫県川西市に2年間暮した。筆者自身の持つアクセント体系・句音調は東京式であり、各アクセント素への所属語彙も基本的には東京方言と同じである。考察の部分で述べるように、豊岡市では第1拍から第2拍にかけての句頭の上昇が微妙なケースが少なからず見られた。客観的な聴き取りに十分努めはしたものの、上昇が微妙な場合、筆者の言語的バックグラウンドゆえに●●(…)よりも○●(…)に聴き取る傾向が全く無かったとは言い切れないかもしれない。

〈注2〉 なお岡田(1957:p.151)によると、自然の発音では、頭高型や平板型(但し全低)にガが後接する場合、そのガを高めるアクセントが美夫君東部やさらにその周辺そしてある場合には全但馬にも見られるということである。本調査で出てきた●○▶とこのアクセント(特に●○

(…) ▶) とが同じに聞こえるものであるのかどうか定かではないが、少なくとも本調査で聞かれた●○▶は、強調ないしは癖によるものであろうと判断された。

〈注3〉 筆者のこれまでの調査経験を通して考えるに、アクセントが安定している方言・話者といえども、調査の間では本来のものでないと考えられるアクセントが偶発的に現れるということは、そうめずらしいことではないように思われる。そしてその時現れる偶発的アクセントは、例えば2拍語の場合●○であることが多いようである。それゆえ本論で述べる4・5類の●○(・●○▶)についても、実はこれに由来する●○(・●○▶)も含まれている疑いがあるのである。

【参考文献】

- 生田早苗 1951 「近畿アクセント圏辺境地区の諸アクセントについて」『国語アクセント論叢』（法政大学出版局）
- 岡田荘之輔 1951 a 「但馬南境アクセント境界線」『近畿方言』8
- 岡田荘之輔 1951 b 「たじまことば」『国語学』7
- 岡田荘之輔 1957 『たじまアクセント』（私家版）
- 岡田荘之輔 1962 「兵庫県方言（北部）」『近畿方言の総合的研究』（三省堂）
- 奥村三雄 1962 「近畿諸方言のアクセント」『近畿方言の総合的研究』（三省堂）
- 鎌田良二 1982 「兵庫県の方言」『講座方言学第7巻 近畿地方の方言』（国書刊行会）
- 金田一春彦 1977 「アクセントの分布と変遷」『岩波講座 日本語 11 方言』（岩波書店）
- 久野マリ子 1982 「接触地帯のアクセント」『講座方言学第7巻 近畿地方の方言』（国書刊行会）
- 真田信治 1981 「地域とのかかわり——交通と通信の外来語——」『英米外来語の世界』（南雲堂）

玉岡松一郎 1937 「但馬のアクセント」『音声学協定会報』45

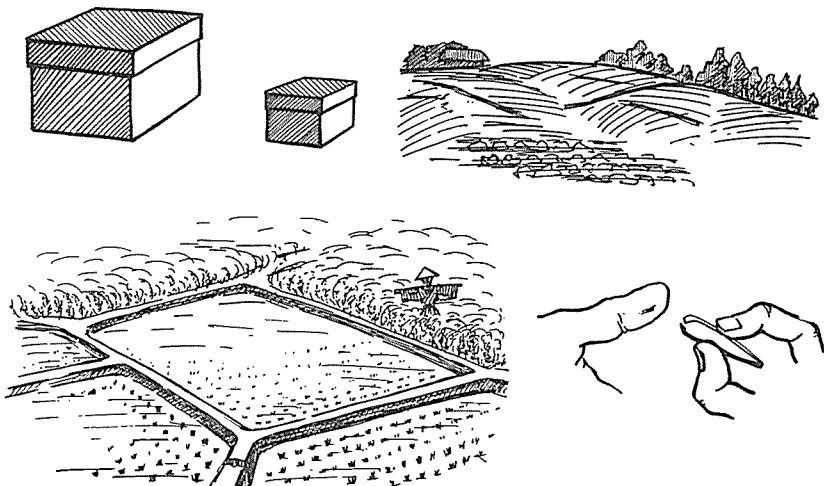
東京文理科大学方言研究会 1932 「中国・近畿両アクセントの境界線」『方言』2-3 [なお記述は大原孝道氏]

日本放送協会編 1985 『日本語発音アクセント辞典 改訂新版』（日本放送出版協会）

9. 調査票

本章では各地域で使用された調査票の具体的イメージを示す。調査票は「面接調査票」と「言語生活調査票」の2種類から成るが、地域によって微妙に内容が異なるため、ここにはすべての実例を示すこととした（「面接調査票」はB5判、「言語生活調査票」はA4判である）。「調査員記録簿」は、被調査者宅への訪問状況と調査票の回収状況などを記録するためのものであるが、被調査者リストに記載された氏名、性などの事項に誤りが発見されたときや被調査者に接したときの印象なども記入するようにした。この種の記録は、他の調査員に引き継ぐときの情報の受け渡し役として機能するばかりでなく、調査の進捗状況などを分析する上でも有効な資料となるものである。

また、下の刺激図は、語彙項目の質問に際して補助的に用いられたものである（面接調査票 宮津 201-1, -8, -9, -11, 豊岡 201-3, -10, -11, -13 参照）。



調査員記録簿

特定(83 官津)

被調査者

No.	氏名
-----	----

訪問状況

	日	曜日	時刻	接触の相手	調査員
1			前・後 時 分	本人・家人・他()/不在	
2			前・後 時 分	本人・家人・他()/不在	
3			前・後 時 分	本人・家人・他()/不在	
4			前・後 時 分	本人・家人・他()/不在	
5			前・後 時 分	本人・家人・他()/不在	
6			前・後 時 分	本人・家人・他()/不在	
7			前・後 時 分	本人・家人・他()/不在	
8			前・後 時 分	本人・家人・他()/不在	
9			前・後 時 分	本人・家人・他()/不在	
10			前・後 時 分	本人・家人・他()/不在	

調査票回収状況

A. 言語生活調査票

イ. 回収(7月____日) ロ. 未回収 (回収予定日: 7月____日)
ハ. 回収不能 (回収予定者: _____)

理由 { 拒否→具体的に_____
 その他→具体的に_____

B. 面接調査票

イ. 回収(7月____日)
ロ. 回収不能と決定した日(7月____日)

理由 { 転出・転居→転出先_____
 長期不在・期間中一度も接触できず・病気・障害・難聴
 拒否→具体的に_____
 その他→具体的に_____

備考(原簿の誤り・その他)

留 面

--	--

特定(83 宮津)

面接調査票

調査員氏名

101. 氏 名

	¹ 男・ ² 女	
--	--------------------------------	--

102. 生年月日

¹大正
²昭和 年 月 日 ⇒ ¹大正
²昭和 ____ 年 ____ 月 ____ 日

103. 現住所

宮津市字 (町) 番地 電話()

104. 本 籍

現住所に同じ	都道府県	区市郡
--------	------	-----

105. <言語生活調査の回収後>どうもありがとうございました。
 これは御自身でお書きになりましたか。それとも、ほかの人に書いてもらいましたか。

_____ だれに書いてもらいましたか。

1. 自 身
2. 他 人()
3. 調査員 _____
4. 回収できなかった
(理由 _____)

106. 調査月日

1 回 ____ 月 ____ 日

3 回 ____ 月 ____ 日

2 回 ____ 月 ____ 日

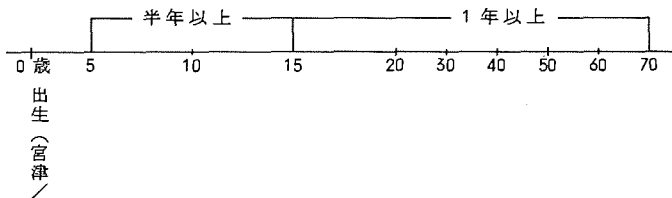
4 回 ____ 月 ____ 日

107. 開始時刻

午前

午後 ____ 時 ____ 分

108. ずっとここにお住いですか。お生まれは? そこからすぐこちらへいらっシャったのですか?



280 9. 調査票

109. 失礼ですが、学校はどこまでおいでになりましたか。

¹なし ²小 ³高小・新中 ⁴旧中・新高 ⁵旧高・短大・高専・大
⁶その他() / ⁷卒 ⁸中 ⁹在 ⁰N.A.

その学校は何市にありましたか。

¹宮津 ²京都府 _____ 市・町 _____ 県 _____ 市・町

110. 《白リスト》あなたの今のお仕事は、このうち、どれに当てはまりますか。

¹¹農 ¹²林 ¹³漁 / ²¹鉱 ²²建 ²³製造 / ³¹卸・小売 ³²運・通
³³電・ガ ³⁴金融 ³⁵公務 ³⁶サービス / ⁴¹主婦 ⁴²学生 ⁴³無職
⁹⁰その他() ⁰⁰N.A.

(学生のみ) 学校では、どんなクラブに入っていますか。

¹なし ²運動部 ³文化部 ⁹その他() ⁰N.A.

111. 《白リスト》宮津市は観光客の多い所ですが、あなたは観光客との程度接触しますか。

¹仕事でしょっちゅう ²仕事でときどき ³仕事でたまに
⁴仕事外で " ⁵仕事外で " ⁶仕事外で "
⁷ほとんどない ⁸全くない ⁹N.A.



テープ収録 はじめる前にインフォマント番号と
名前を録音すること。



201. これから、いくつかのことばについてお尋ねします。あなたがふだん話すときのことばをお聞かせ下さい。

ー1 《絵》二つの箱を比べて(小さい方をさし)こちらは(大きい方をさし)こちらよりも
どうだと言いますか。

¹チイサイ ²テッサイ ³テサイ ⁴コマイ ⁵コンマイ ⁹() ⁰N.A.

ー2 太陽を見るとあまり明かるいので目をあけていられないような感じがします。その感じをどんなだと言いますか。

¹マブシイ ²マバユイ ⁹() ⁰N.A.

- －3 大根をなべに入れて、みそやしょうゆを入れて火にかける。こうすることを、大根をどうすると言いますか。

¹ニル ²タク ⁹() ⁰N.A.

- －4 米をおかまに入れてから飯にする。こういうことを、飯をどうすると言いますか。

¹ニル ²タク ⁹() ⁰N.A.

- －5 くぎを打ちたいが金づちがない。そんなときに隣の家で金づちをどうしますか。どうすると言いますか。

¹カリル ²カル ³カレル ⁹() ⁰N.A.

- －6 空が晴れて日が照っている。そんなとき、きょうの天気はどんな天気だと言いますか。

(いい天気だ)

¹イイ ²エエ ³ヨイ ⁹() ⁰N.A.

¹ダ ²ヤ ³ジャ ⁹() ⁰N.A.

- －7 虹を見て「ああキレイダ(ヤ)」と言いますか。「ああウツクシイ」と言いますか。それとも別の言い方をしますか。

¹ウツクシイ ²キレイダ ³キレイヤ ⁴キレイナ ⁹() ⁰N.A.

- －8 《絵》 こういう田の境のことを何と言いますか。小さな土手のようになっています。

¹アゼ ²アジェ ³ワチ ⁹() ⁰N.A.

- －9 《絵》 田に対して大根や芋などを作る、こういう場所のことを何と言いますか。

¹ハタ ²ハタク ³サエン ⁹() ⁰N.A.

- －10 《絵》 (赤紙をさし) こんな色の紙をどんなだと言いますか。

¹アカイ ²アケー ³アカー ⁹() ⁰N.A.

—11 《絵》竹を割っているときや、よく削ってない板をこすったときなどに何か手に刺さることがあります。何が刺さったと言いますか。

$$^1\text{トゲ} \quad ^2\text{ソゲ} \quad ^3\text{スイバラ} \quad ^9(\quad) \quad ^0\text{N.A.}$$

202. 「字が読めない」と言う時、ふつう何と言いますか。

ー1 「暗いさかい字(が)～」それから何と言いますか。

$$^1\text{ヨメナイ} \quad ^2\text{ヨマシマヘン} \quad ^3\text{ヨメヘン} \quad ^4\text{ヨマヘン} \quad ^5\text{ヨマレヘン}$$

$$^0(\quad) \quad ^0\text{N.A.}$$

—2 それでは「むつかしきかいこの字（は）～」

$$^1\text{ヨメナイ} \quad ^2\text{ヨマシマヘン} \quad ^3\text{ヨメヘン} \quad ^4\text{ヨマヘン} \quad ^5\text{ヨマレヘン}$$

$$^0(\quad) \quad ^0\text{N.A.}$$

203. あなたは「見ることができる」ことを「見れる」と言いますか、「見られる」と言いますか。

¹見ラレル ²見レル ³両方 ⁹() ⁰N.A.

204. それでは「起きることができる」ではどうですか。「起きれる」ですか、「起きられる」ですか。

$${}^1\text{起ラレル} \quad {}^2\text{起レル} \quad {}^3\text{両方} \quad {}^9(\quad) \quad {}^0\text{N.A.}$$

205. 「なおす」ということばを、片付けるとか戸だなの中にしまうことを表わすときに使いますか。

¹使う 使わない (²聞いたことある ³聞いたことない) ⁰ N.A.

301 《赤リスト》今から単語や文をお見せします。できるだけ普段お読みになるのと同じように読んで下さい。〔読んだ文をチェックすること〕

1 風 2 雨 3 海 4 川 5 橋 6 花 7 松 8 鳥 9 虫 10 猿
11 鼻 12 声 13 肩 14 足 15 米 16 陰 17 箸 18 鏡 19 テレビ
20 赤い、 21 白い、

400. これから、あなたが普段どんなことばをお使いになっているかをお尋ねします。話す相手いろいろ変わりますが、その人を具体的に思い浮べてお答え下さい。

401. 《黄リスト》まず次の場合を考えて下さい。バスの停留所に1本の傘が置いてありました。

ー1. そこで、そばに居た小学校の校長先生にその傘を指して「これはあなたの傘か」と尋ねるとします。その場合はどのように言いますか。

ー1' では反対に、小学校の校長先生から「これはあなたの傘か」と尋ねられて、「私の傘だ」と答えるるとします。その場合はどのように言いますか。

ー2. 相手の人が校長先生ではなく、あなたが親しくしている友人の場合「これはあなたの傘か」と尋ねるときはどう言いますか。

ー2' 同じく親しくしている友人からそう尋ねられて、「私の傘だ」と答える場合はどう言いますか。

〔以下同様に順次質問する〕

ー3. 見知らぬ紳士 「あなたの傘か」 「私の傘だ」

ー4. 自分の父親 「あなたの傘か」 「私の傘だ」

402. 場面は変わって、今度はあなたが天の橋立を散歩していたところ偶然観光客と親しくなるとします。

284 9. 調査票

－1. 《緑リスト》相手の人があなたと同じ年頃の同性の場合、その人に「どこから来たのか」と尋ねるとしたらどう言いますか。

－2. では相手の人があなたより10歳くらい年上の同性の観光客の場合にはどう言って尋ねますか。

〔以下同様に質問——全て観光客であることに注意〕

－3. 10歳くらい年下の同性

－4. 同じ年頃の異性

－5. 10歳くらい年上の異性

－6. 10歳くらい年下の異性

403. また場面が変わります。次はこの宮津市に住んでいる、あなたと親しい人と話す場合のことです。

－1. 《茶リスト》駅の待合室で列車を待っていると、あなたと同じ年頃の同性の友人と偶然出会いました。そこで、その人に「どこへ行くのか」と尋ねるとしたらどのように言いますか。

〔以下同様に質問—— 全て宮津の親しい人であることに注意〕

ー2. 年上の同性

ー3. 年下の同性

ー4. 同じ年頃の異性

ー5. 年上の異性

ー6. 年下の異性

ー7. 同じ状況ですが、今度はあまり親しくない年上の異性に「どこへ行くのか」と尋ねる場合はどう言いますか。

404. 今までの場面と反対に、相手の人（宮津の人）から「どこへ行くのか」と尋ねられて、
「京都へ行く」と答えるとして。

ー1. まず、相手が同じ年頃の同性の親しい人の場合にはどう言いますか。

ー2. 《青リスト》以下は全てあまり親しくない人の場合を考えて下さい。同じ年頃の同性の人に「京都へ行く」と答えるとしたらどう言いますか。

〔以下同様に質問—— 全て宮津のあまり親しくない人〕

-3. 年上の同性

-4. 年下の同性

-5. 同じ年頃の異性

-6. 年上の異性

-7. 年下の異性

405. 《登リスト》物の数を尋ねるとき、何と言いますか。箱の中にある物の数を尋ねるとき
「この中にまんじゅうが〜」それから何と言いますか。(次にリストを示し)これらの
の人に対してはどのことばを使いますか。

-1 (同年)	¹ イクツ	² イクラ	³ ナンボ	⁰ ()	⁰ N.A.
-2 (若者)	"	"	"	()	N.A.
-3 (会合)	"	"	"	()	N.A.
-4 (京都)	"	"	"	()	N.A.
-5 (東京)	"	"	"	()	N.A.

406. 《リスト》物の値段を尋ねるときには何と言いますか。「このまんじゅうはひとつ〜」
それから何と言いますか。(リストを示して)これらの人に対してはどのことばを使いま
すか。

-1 (同年)	¹ イクラ	² ナンボ	⁰ ()	⁰ N.A.
-2 (若者)	"	"	()	N.A.
-3 (会合)	"	"	()	N.A.
-4 (京都)	"	"	()	N.A.
-5 (東京)	"	"	()	N.A.

	宮津市	都道府県	区市郡	区町	〇 D.K.
父方のおばあさんは？	〃	〃	〃	〃	〃
母方のおばあさんは？	〃	〃	〃	〃	〃
配偶者は？ なし	〃	〃	〃	〃	〃

505. 宮津市の中でも、宮津、由良、半島部ではことばがちがうと言う人がいますが、あなたは
どう感じておられますか。

¹全く違う ²少し違う ³ほとんど同じ ⁴全く同じ ⁵分らない⁰ N.A.

(違うと答えた人に)こことことばが違っていると感じておられる地区はどこですか。

宮津 上宮津 栗田（くんだ） 吉津 / 由良 /
府中 日置 世屋（せや） 日ヶ谷 養老 //

その他()

これで終了です。長い時間ご協力ありがとうございました。

601. 調査全般の被調査者のことば〔調査員判定〕

正しい 共通語	共通語だがど となくちがう	共通語が 混ざる	共通語を 話さない	共通語が 通じない
1	2 ← 3 → 4 ← 5 → 6	7	8	

602. 調査に対する態度

〔調査員判定〕

1	2	3	4
積極的	ふつう	消極的	拒否的

603. その他

—1 調査した場所	¹ 自 宅	² 勤務先	⁹ ()
—2 “	¹ 部屋の中	² 玄関先	³ 店 先 ⁹ ()
—3 同 席 者	¹ 本人のみ	² 配偶者	³ 子ども ⁹ ()
—4 反応までの時間	¹ 長いほう	² 普 通	³ 短いほう
—5 質問に対する 問いかえし	¹ 多いほう	² 普 通	³ 少ないほう

604. 終了時間 午前 _____ 時 _____ 分
午後 _____ 時 _____ 分

所要時間 =

分

使用錄音器番号二

テーブル $N_0 =$

A 

B

特定 (84 豊岡)

面 接 調 査 票

調査員No.

101. 氏 名

	¹ 男・ ² 女	No.
--	--------------------------------	-----

102. 生年月日

¹大正 年 日 → ²昭和 ____ 年 ____ 月 ____ 日

103. 現 住 所

豊岡市	(町)	番地	電話 ()
-----	-----	----	--------

104. 本 籍

現住所に同じ	都 道 府 県	区 市 郡
--------	------------	----------

105. 調査月日 ____ 月 ____ 日

106. 開始時刻

午前
午後 ____ 時 ____ 分

テープ収録 はじめる前にインフォーマント番号と
名前を録音すること。

201. これから、いくつかのことばについてお尋ねします。あなたがふだん話すときのことばをお聞かせ下さい。

ー1 米をおかまに入れてから飯にする。こういうことを、飯をどうすると言いますか。

¹ニル ²タク ³() ⁰N.A.

ー2 大根をなべに入れて、みそやしょうゆを入れて火にかける。こうすることを、大根をどうすると言いますか。

¹ニル ²タク ³() ⁰N.A.

ー3 《絵》二つの箱を比べて (小さい方をさし) こちらは (大きい方をさし) こちらよりもどうだと言いますか。

¹チイサイ ²チッサイ ³チサイ ⁴チセエ ⁵コマイ ⁹()
⁰N.A.

290 9. 調査票

- －4 太陽を見るとあまり明かるいので目をあけていられないような感じがします。その感じをどんなだと言いますか。

¹マブシイ ²マボシイ ³マバユイ ⁹() ⁰N.A.

- －5 くぎを打ちたいが金づちがない。そんなときに隣の家で金づちをどうしますか。どうすると言いますか。

¹カリル ²カル ³カレル ⁹() ⁰N.A.

- －6 それでは、借りるの反対は何と言いますか。

¹カセル ²カス ⁹() ⁰N.A.

- －7 物を「カッチクル」と言うのは、お金を支払って品物を手に入れてくることですか。それとも、借用してくることですか。

¹買う ²借りる ³両方 ⁴どちらも使わない ⁹() ⁰N.A.

- －8 空が晴れて日が照っている。そんなとき、きょうの天気はどんな天気だと言いますか。

(いい天気だ)

¹イイ ²エエ ³ヨイ ⁹() ⁰N.A.

¹ダ ²ヤ ³ジャ ⁹() ⁰N.A.

- －9 虹を見て「ああキレイダ(ヤ)」と言いますか。「ああウツクシイ」と言いますか。それとも別の言い方をしますか。

¹ウツクシイ ²キレイダ ³キレイヤ ⁴キレイナ ⁹()
⁰N.A.

- －10 《絵》 こういう田の境のことを何と言いますか。小さな土手のようになっています。

¹アゼ ²アジェ ³ワチ ⁹() ⁰N.A.

- －11 《絵》 田に対して大根や芋などを作る、こういう場所のことを何と言いますか。

¹ハタ ²ハタケ ³サエン ⁹() ⁰N.A.

- －12 《絵》 (赤紙をさし) こんな色の紙をどんなだと言いますか。

¹アカイ ²アケー ³アカー ⁹() ⁰N.A.

－13 《絵》 竹を割っているときや、よく削ってない板をこすったときなどに何か手に刺さることがあります。何が刺さったと言いますか。

¹トゲ ²ソゲ ³スイバラ ⁹() ⁰N.A.

－14 戸だなの中に物をしまうことを何と言いますか。

¹ナオス ²ナツベル ³ナツメル ⁴カタツケル ⁹() ⁰N.A.

└使わない場合：¹聞いたことがある ²聞いたことがない

202. 「字が読めない」と言う時、ふつう何と言いますか。

－1 「暗いシケー字（が）～」それから何と言いますか。

¹ヨメナイ ²ヨメヘン ³ヨマヘン ⁴ヨメレヘン ⁵ヨマレヘン

⁹() ⁰N.A.

－2 それでは「むつかしいシケーこの字（は）～」

¹ヨメナイ ²ヨメヘン ³ヨマヘン ⁴ヨメレヘン ⁵ヨマレヘン

⁵ヨーヨマン ⁹() ⁰N.A.

203. あなたは「見ることができる」ことを「見れる」と言いますか、「見られる」と言いますか。

¹見ラレル ²見レル ³両方 ⁹() ⁰N.A.

204. それでは「起きることができる」ではどうですか。「起きれる」ですか、「起きられる」ですか。

¹起キラレル ²起キレル ³両方 ⁹() ⁰N.A.

304. 《赤リスト》今から単語や文をお見せします。できるだけ普段お読みになるのと同じように読んで下さい。〔読んだ文をチェックすること〕

¹風 ²雨 ³海 ⁴川 ⁵橋 ⁶花 ⁷松 ⁸鳥 ⁹虫 ¹⁰猿

¹¹鼻 ¹²声 ¹³肩 ¹⁴足 ¹⁵糸 ¹⁶陰 ¹⁷箸 ¹⁸腰

¹⁹鏡 ²⁰テレビ ²¹赤い ²²白い

292 9. 調査票

400. これから、あなたが普段どんなことばをお使いになっているかをお尋ねします。話す相手がい
ろいろ変わりますが、その人を具体的に思い浮べてお答え下さい。

401. 《橙リスト》物の値段を尋ねるとき、何と言いますか。「このまんじゅうはひとつ〜」それから
何と言いますか。(リストを示して) これらの人に対してはどのことばを使いますか。

- | | | | | |
|---------|------------------|------------------|------------------|-------------------|
| -1 (同年) | ¹ イクラ | ² ナンボ | ⁹ () | ⁰ N.A. |
| -2 (年上) | 〃 | 〃 | () | 〃 |
| -3 (年下) | 〃 | 〃 | () | 〃 |
| -4 (会合) | 〃 | 〃 | () | 〃 |
| -5 (姫路) | 〃 | 〃 | () | 〃 |
| -6 (京都) | 〃 | 〃 | () | 〃 |
| -7 (東京) | 〃 | 〃 | () | 〃 |

402. 《橙リスト》物の数を尋ねるとき、何と言いますか。箱の中にある物の数を尋ねるとき「この中
にまんじゅうが〜」それから何と言いますか。(次にリストを示し) これらの人に対してはどの
ことばを使いますか。

- | | | | | | | |
|---------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|-------------------|
| -1 (同年) | ¹ イクツ | ² イクラ | ³ ナンボ | ⁴ ナンコ | ⁹ () | ⁰ N.A. |
| -2 (年上) | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | () | 〃 |
| -3 (年下) | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | () | 〃 |
| -4 (会合) | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | () | 〃 |
| -5 (姫路) | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | () | 〃 |
| -6 (京都) | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | () | 〃 |
| -7 (東京) | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | () | 〃 |

403. 《黄リスト》まず次の場合を考えて下さい。バスの停留所に1本の傘が置いてありました。

-1 そこで、そばに居た小学校の校長先生にその傘を指して「これはあなたの傘か」と尋ねるとし
ます。その場合はどのように言いますか。

-1' では反対に、小学校の校長先生から「これはあなたの傘か」と尋ねられて、「私の傘だ」と答え
るとします。その場合はどのように言いますか。

ー2 相手の人が校長先生ではなく、あなたが親しくしている友人の場合「これはあなたの傘か」と尋ねるときはどう言いますか。

ー2' 同じく親しくしている友人からそう尋ねられて、「私の傘だ」と答える場合はどう言いますか。

〔以下同様に順次質問する〕

ー3 見知らぬ紳士 「あなたの傘か」 「私の傘だ」

ー4 自分の父親 「あなたの傘か」 「私の傘だ」

404. また、場面と相手の人が変わります。今度はすべてこの豊岡市に住んでいる、あなたと親しい人と話す場合のことです。《茶リスト》

ー1 同じ年頃の同性の人を1人想い浮かべて下さい。その人はどんな人ですか。

A()さん

駅の待合室で列車を待っていると偶然Aさんに会いました。そこでAさんに「どこへ行くのか」と尋ねるとしたらどの様に言いますか。

逆に、Aさんからそう聞かれて「京都へ行く」と答える場合どう言いますか。

ー2 では、相手の人が同じ年頃の異性の場合を考えて下さい。その人はどんな人ですか。

B()さん

Bさんに「どこへ行くのか」と尋ねる場合どう言いますか。

Bさんからそう聞かれて「京都へ行く」と答える場合どう言いますか。

294 9. 調査票

〔以下同様に順次質問する〕

－3 年上の同性

どんな人 _____ C(_____)さん

「行くか」 _____

「行く」 _____

－4 年上の異性

どんな人 _____ D(_____)さん

「行くか」 _____

「行く」 _____

－5 年下の同性

どんな人 _____ E(_____)さん

「行くか」 _____

「行く」 _____

－6 年下の異性

どんな人 _____ F(_____)さん

「行くか」 _____

「行く」 _____

－7 あまり親しくない年上の異性（どんな人かは尋ねない）

「行くか」 _____

「行く」 _____

405. あなたは、ことばづかいに注意をはらう場合、どんな点に注意しますか。(選択肢を与えずに質問。回答が出ない場合は《緑リスト》を提示)

¹方言 ²敬語 ³アクセント ⁴発音の明瞭さ ⁵その他()
⁶注意しない ⁰N.A.

406. 家の中では豊岡のことばと違ったことばを使うことがありますか。

¹使う ²使わない

↳ どの人に、どんなことばを使いますか。

相手	使う	こ と ば	
		標準語	方言
祖父			
祖母			
父			
母			
配偶者			
子ども			

407. 《青リスト》では、次にあげる人には豊岡弁で話しますか。それとも標準語で話しますか。

- 1 近所(親) ¹豊岡弁 ²_____方言 ³標準語 ⁹() ⁰N.A.
 -2 近所(非親) ¹豊岡弁 ²_____方言 ³標準語 ⁹() ⁰N.A.
 -3 見知らぬ人 ¹豊岡弁 ²_____方言 ³標準語 ⁹() ⁰N.A.
 -4 東京の人 ¹豊岡弁 ²_____方言 ³標準語 ⁹() ⁰N.A.
 -5 東京で ¹豊岡弁 ²_____方言 ³標準語 ⁹() ⁰N.A.
 -6 店の人 ¹豊岡弁 ²_____方言 ³標準語 ⁹() ⁰N.A.
 -7 町内会 ¹豊岡弁 ²_____方言 ³標準語 ⁹() ⁰N.A.
 -8 友人 ¹豊岡弁 ²_____方言 ³標準語 ⁹() ⁰N.A.

801. ずっとここにお住まいですか。お生まれは？ そこからすぐこちらへいらっしゃったのですか。

年 齢	居 住 地		理 由
	豊 岡 市	県・市 郡・町	
0 歳	現住所		
～	〃		
～	〃		
～	〃		

802. 失礼ですが、学校はどこまでおいでになりましたか。

¹なし ²小 ⁸高小・新中 ⁴旧中・新高 ⁵旧高・短大・高専・大

⁶その他() / ¹卒・²中・⁸在 ⁰N.A.

その学校は何市にありましたか。

¹豊岡 ²兵庫県 _____ 市・町 ³ _____ 県 _____ 市・町

803. あなたの今のお仕事は。

具体的に _____

(職務内容：事務・技術・接客・())

《白リスト》そのお仕事は、このうちどれに当てはまりますか。

¹¹農 ¹²林 ¹³漁 / ²¹鉱 ²²建 ²³製造 / ³¹卸・小売 ³²運・通

³³電・ガ ³⁴金融 ³⁵公務 ³⁶サービス / ⁴¹主婦 ⁴²学生 ⁴³無職

⁹⁰その他() ⁰⁰N.A.

(学生のみ) 学校では、どんなクラブに入っていますか。

¹なし ²運動部 ³文化部 ⁹その他() ⁰N.A.

298 9. 調査票

804. あなたのお父さんの出身地はどちらですか。

			都道 府県	区市 郡	区 町	°D.K.
	¹ 豊岡市					
それではお母さんは?	"		都道 府県	区市 郡	区 町	"
父方のおじいさんは?	"		都道 府県	区市 郡	区 町	"
母方のおじいさんは?	"		都道 府県	区市 郡	区 町	"
父方のおばあさんは?	"		都道 府県	区市 郡	区 町	"
母方のおばあさんは?	"		都道 府県	区市 郡	区 町	"
配偶者は?	なし	"	都道 府県	区市 郡	区 町	"

これで終了です。長い時間ご協力ありがとうございました。

901. 調査全般の被調査者のことば〔調査員判定〕

正しい 共通語	共通語だがどこ となくちがう	共通語が 混ざる	共通語を 話さない	共通語が 通じない
1	2 ← 3	→ 4 ← 5	6	7
			8	

902. 調査に対する態度

〔調査員判定〕

1	2	3	4
積極的	ふつう	消極的	拒否的

903. そ の 他

- 1 調査した場所 ¹自 宅 ²勤務先 ⁹()
 -2 " ¹部屋の中 ²玄関先 ³店先 ⁹()
 -3 同 席 者 ¹本人のみ ²配偶者 ³子ども ⁹()
 -4 反応までの時間 ¹長いほう ²普 通 ³短いほう
 -5 質問に対する ¹多いほう ²普 通 ³少ないほう
 問いかえし

904. 終了時間 午前 _____ 時 _____ 分
午後 _____ 時 _____ 分

所要時間=

分

使用録音器番号= _____

テープNo.= _____

A
B 面

特定(83登中)

言語生活調査

※

記入上のお願い

日常のことばづかいなどについていくつかの質問をします。それぞれの質問で、該当するものの番号には○印をつけて下さい。また、_____の部分には適切なことばや数字を書き入れて下さい。

1. 男 2. 女

年齢 _____ 歳

最後に行った学校は次のどの段階のものでしたか。 1.義務教育終了程度 2.高校終了程度 3.大学終了程度

小・中学生ぐらい(5歳～15歳)のとき、一番長く暮したのはどこですか。 _____ 都道府県

I 家庭や職場(学校)などで出会う、いろいろな「話す」場面があります。平均すると1週間にどのくらい以下の場面を経験しますか。()の中に1週間に平均何回ぐらいかを書いて下さい。

a [家庭で]

用事の話(____回) 客と応対(____回) 注意・こごと(____回) 相談(____回)

さしずした(____回) 言い争い(____回) さしずされた(____回)

朝食どきの雑談(____回) 昼食どきの雑談(____回) 夕食どきの雑談(____回)

夕食後のお茶や夜食どきの雑談(____回) 食事どき以外の雑談(____回)

電話をうける(____回) 電話をかける(____回)

b [近所の親しい人と]

雑談(____回) 知人などのうわさばなし(____回) 私事の相談・打合せ(____回)

町内会・自治会などの連絡(____回) 交渉・話合い(____回)

物を貸す(____回) 物を借りる(____回)

朝のあいさつ(____回) 昼のあいさつ(____回) 夕方のあいさつ(____回)

電話をうける(____回) 電話をかける(____回)

c [近所のあまり親しくない人と]

雑談(____回) 知人などのうわさ話(____回) 私事の相談・打合せ(____回)

町内会・自治会などの連絡(____回) 交渉・話合い(____回)

物を貸す(____回) 物を借りる(____回)

朝のあいさつ(____回) 昼のあいさつ(____回) 夕方のあいさつ(____回)

電話をうける(____回) 電話をかける(____回)

300 9. 調査票

d [レストラン・喫茶店で]

目上の人と(____回) 目下の人と(____回) 同年輩の人と(____回)
家族と(____回) 親しい人と(____回) あまり親しくない人と(____回)

e [電車やバスの中で]

目上の人と(____回) 目下の人と(____回) 同年輩の人と(____回)
家族と(____回) 親しい人と(____回) あまり親しくない人と(____回)

f [その他の場所で]

買物で店の人と(____回) 連れと歩きながら(____回) 受付や窓口で(____回)
医者や看護婦と(____回) 立ち話(____回) 人の家を訪ねて(____回)
道などを教えた(____回) 道などを聞いた(____回)

次の質問は職業をもつ人だけが答えて下さい。なお、学生はその次のhについて答えて下さい。

g [職場で] — 勤めをもっている人だけが答えて下さい。

雑談(____回) 私事の相談・打合せ(____回) 交渉・話し合い(____回)
仕事上の相談・打合せ(____回) さしずした(____回) 質問(____回)
さしずされた(____回) 会議(____回)
友達・同僚(____回) 上役(____回) 部下(____回)
初めての人(____回) 心安くない人(____回) 客(____回)
電話をうける(____回) 電話をかける(____回)

h [学校で] — 学生だけが答えて下さい。

雑談(____回) 私事の相談・打合せ(____回) 交渉・話し合い(____回)
勉強のための相談・打合せ(____回) さしずした(____回) 質問(____回)
さしずされた(____回)
友達・同級生(____回) 先生(____回) 上級生(____回) 下級生(____回)
初めての人(____回) 心安くない人(____回)

II 次は、旅行についてお尋ねします。

(1) 観光などで旅行に出かけるのは好きですか

1. 好き 2. どちらかといえば好き 3. どちらかといえば嫌い 4. 嫌い

(2) 1年間に何回ぐらい旅行に出かけますか

私用の旅行(____回/年) 公用の旅行(____回/年)

(3) 東京へは年に何回ぐらい行きますか (____回/年)

(4) 東京には親戚がありますか 1. ある 2. ない

(5) 旅先で、あなたは見知らぬ人に気軽に話しかけるほうですか 1. はい 2. いいえ

Ⅲ ふだん話をするとき、ざくばらんに話せる相手がいる一方、ことばづかいに注意をはらう相手もあると思います。

次にあげる相手や場面では、どの程度ことばづかいに注意しますか。その程度を下の選択肢から選んで()内に

A～Eの記号を記入して下さい。

- | | | |
|--|--------------|---------------|
| <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; padding: 0 10px;"> A 非常に気をつけて話す
D あまり気にせずに話す </div> | B かなり気をつけて話す | C ある程度気をつけて話す |
| | E 全然気にせずに話す | |

a 〔家庭の中で〕

目上の家族() 同年輩の家族() 目下の家族() 夫または妻()
 目上の親戚() 同年輩の親戚() 目下の親戚() 親戚の子ども()
 御用聞き() セールスマン() その他の訪問者()

b 〔店で買物や食事をするとき〕

行きつけの店の人() 顔くらはいは知っている店員() 顔見知りでない店員()
 高級レストラン() デパート() スーパー() 大衆食堂()

c 〔近所の人と〕

親しくつき合っている人() 世間話をする程度の人()
 あいさつを交わす程度の人() 顔を知っている程度の人()

d 〔道などを尋ねるとき〕

交番の警官() 駅員() タバコ屋などの店員() 近所の子ども()
 通行中の同性() 通行中の異性() 通行中の年上の人() 通行中の年下の人()

e 〔一般的に〕

学生時代の恩師() 医者() 看護婦() 心安い人() 初対面の人()
 乗り物で隣り合せた人() 待合室で隣り合せた人() 食堂や酒場で隣り合せた人()
 テレビやラジオに出演するとき() 会合などで発言するとき() 結婚式などのスピーチ()
 役所で書類をもらうとき() 心安くない人()

f 〔職場で〕— 勤めをもっている人だけが答えて下さい。

直接の上司() 所属の異なる上司() 同性の親しい同僚() 同性の親しくない同僚()
 異性の親しい同僚() 異性の親しくない同僚() 同性の親しい部下()
 同性の親しくない部下() 異性の親しい同僚() 異性の親しくない部下()
 出入りの業者() 得意先の客() 初対面の訪問者()
 公的な会議() 公的な相談・打合せ() 私的な相談・打合せ() 雑談()

g 〔学校で〕— 学生だけが答えて下さい。

校長・学長() 担任の先生() 担任以外の先生() 初対面の訪問者()
 同性の級友() 異性の級友() 同性の親友() 異性の親友()
 同性の上級生() 異性の上級生() 同性の下級生() 異性の下級生()

302 9. 調査票

N ふだん話をするときのことばですが、あなたはどの程度標準語で話しますか。次のうちから適切なものを選んで

○印をつけて下さい。

1. いつも標準語で話す 2. いつも方言で話す 3. 標準語と方言の混ざったことばで話す
 4. 相手や場合によって、標準語で話したり方言で話したりする
- (1) 上の間で1に○印をつけた方は、このページの(4)以降の質問にお答え下さい。
2～4に○印をつけた方にお尋ねします。あなたの話す方言は次のうちのどれですか。
1. 豊中弁 2. 大阪弁 3. 関西弁 4. その他(具体的に_____)
- (2) あなたの話す方言は、標準語と違うと思いますか、似ていると思いますか。
1. ほとんど違いがない 2. 少し違う 3. かなり違う 4. 非常に違っている
- (3) 次にあげる相手や場面では、どの程度方言を使いますか。
- | | | | |
|---------------------|--------|-------|---------------|
| イ. 家族同士で | 1. 標準語 | 2. 方言 | 3. 標準語と方言が混ざる |
| ロ. 近所の親しい人と | 1. 標準語 | 2. 方言 | 3. 標準語と方言が混ざる |
| ハ. 近所のあまり親しくない人と | 1. 標準語 | 2. 方言 | 3. 標準語と方言が混ざる |
| ニ. 豊中市の見知らぬ人と | 1. 標準語 | 2. 方言 | 3. 標準語と方言が混ざる |
| ホ. 豊中市で東京の人と | 1. 標準語 | 2. 方言 | 3. 標準語と方言が混ざる |
| ヘ. 東京で東京の人と | 1. 標準語 | 2. 方言 | 3. 標準語と方言が混ざる |
| ト. 近所で店の人と | 1. 標準語 | 2. 方言 | 3. 標準語と方言が混ざる |
| チ. 町内会などで | 1. 標準語 | 2. 方言 | 3. 標準語と方言が混ざる |
| リ. 久しぶりに会った中学時代の友人と | 1. 標準語 | 2. 方言 | 3. 標準語と方言が混ざる |
- (4) 方言はあなたにとってどういう感じのことばですか。いくつでも結構ですから○印をつけて下さい。
1. ふだんのことば 2. よそゆきのことば 3. 話すことば 4. 書くことば 5. 感情を表すことば
 6. 考えを表すことば 7. 議論することば 8. 仲間とうちとけるためのことば 9. なつかしいことば
 10. 郷土意識が高まることば 11. きれいなことば 12. きたないことば 13. 子供をあやすことば
 14. 悪口を言うことば 15. ほめることば 16. 本音を言うことば 17. たてまえを言うことば
- (5) 標準語はあなたにとってどういう感じのことばですか。いくつでも結構ですから○印をつけて下さい。
1. ふだんのことば 2. よそゆきのことば 3. 話すことば 4. 書くことば 5. 感情を表すことば
 6. 考えを表すことば 7. 議論することば 8. 他郷の人と話すときや都会生活で使うことば
 9. 仕事のことば 10. 勉強するためのことば 11. きれいなことば 12. きたないことば
 13. 教養を示すことば 14. 悪口を言うことば 15. ほめることば 16. 本音を言うことば
 17. たてまえを言うことば
- (6) 「標準語で話す」と語の真実味が少ない」という人がいます。あなたはこの意見に賛成ですか。
1. 全く賛成 2. どちらかといえば賛成 3. どちらかといえば反対 4. 全く反対
- (7) 「方言まるだしでも話が通じればよい」という人がいます。あなたはこの意見に賛成ですか。
1. 全く賛成 2. どちらかといえば賛成 3. どちらかといえば反対 4. 全く反対

V 下の各問に対して、それぞれの選択肢の中から適切なものを選び、番号に○印をつけて下さい。また、____の部分には適切な数字などを記入して下さい。

(1) 毎日平均してどのくらい新聞を読みますか。

1. 全く読まない 2. 10分未満 3. 10～20分 4. 20～30分 5. 30～60分 6. 1時間以上

(2) 毎日平均してどのくらいテレビを見ますか。

1. 全く見ない 2. 30分未満 3. 30～60分 4. 1～2時間 5. 2～3時間
6. 3～4時間 7. 4～5時間 8. 5時間以上

(3) この1か月間に本（教科書は除く）や雑誌は何冊読みましたか。

イ 本（単行本） _____ 冊 （書名 _____）

ロ 月刊雑誌 _____ 冊 （誌名 _____）

ハ 週刊誌 _____ 冊 （誌名 _____）

(4) 年賀ハガキや暑中見舞などを除いて、1か月平均、どのくらい手紙やハガキを書きますか。

イ 個人的な用件の手紙 _____ 通 ロ 個人的な用件のハガキ _____ 通

ハ 公的な用件の手紙 _____ 通 ニ 公的な用件のハガキ _____ 通

(5) 手紙やハガキその他の文章を書くとき、国語辞典や漢和辞典をどのくらい利用しますか。

1. いつも利用する 2. しばしば利用する 3. 利用することが多い 4. たまに利用する
5. 全然利用しない 6. 辞書は持っていない

(6) 上の質問で1～4の選択肢のいずれかに○印をつけた人だけが答えて下さい。

それでは、辞書を利用するのはどんな場合ですか。該当するもの全てに○印をつけて下さい。

1. 漢字を確かめる 2. 送りがなを確かめる 3. ことばの意味を確かめる 4. 慣用句などを確かめる
5. そのことばが標準語かどうかを確かめる 6. その他（具体的に _____）

(7) 近所の人とおしゃべりをするのは好きですか。

1. 好き 2. どちらかといえば好き 3. どちらかといえば嫌い 4. 嫌い

(8) 集会や会議などに出席するのは好きですか。

1. 好き 2. どちらかといえば好き 3. どちらかといえば嫌い 4. 嫌い

(9) 待合室などで見知らぬ人に話しかけますか。

1. よく話しかける 2. ときどき話しかける 3. ほとんど話しかけない 4. 全く話しかけない

00 他人と話をするとき、自分のことばが気になるほうですか。

1. 非常に気になる 2. 少し気になる 3. あまり気にならない 4. 全然気にならない

00 人前で話ができるほうですか。

1. できる 2. どちらかといえば、できる 3. どちらかといえば、できない 4. できない

ご協力ありがとうございました。

お手数ですが、同封の返信用封筒（切手は不要）にてご返送下さるよう

お願い申し上げます。

国立国語研究所

言 語 生 活 調 査

特定 (83 宮津)

No.

記入上のお願い

日常のことばづかいなどについていくつかの質問をします。それぞれの質問で、該当するものの番号には○印をつけて下さい。また、_____の部分には適切なことばや数字を書き入れて下さい。

I 家庭や職場(学校)などで出会う、いろいろな「話す」場面があります。平均すると1週間にどのくらい以下の場面を経験しますか。()の中に1週間に平均何回ぐらいかを書いて下さい。

a 〔家庭で〕

用事の話(____回) 客と応対(____回) 注意・ことごと(____回) 相談(____回)
 さしずした(____回) 言い争い(____回) さしずされた(____回)
 朝食どきの雑談(____回) 昼食どきの雑談(____回) 夕食どきの雑談(____回)
 夕食後のお茶や夜食どきの雑談(____回) 食事どき以外の雑談(____回)
 配偶者との雑談(____回) 親との雑談(____回) 自分の子どもの雑談(____回)
 電話をうける(____回) 電話をかける(____回)

b 〔近所の親しい人と〕

雑談(____回) 知人などのうわさばなし(____回) 私事の相談・打合せ(____回)
 町内会・自治会などの連絡(____回) 交渉・話し合い(____回)
 相手の家で話す(____回) 自分の家で話す(____回) 路上その他で話す(____回)
 物を貸す(____回) 物を借りる(____回)
 朝のあいさつ(____回) 昼のあいさつ(____回) 夕方のあいさつ(____回)
 電話をうける(____回) 電話をかける(____回)

c 〔近所のあまり親しくない人と〕

雑談(____回) 知人などのうわさ話(____回) 私事の相談・打合せ(____回)
 町内会・自治会などの連絡(____回) 交渉・話し合い(____回)
 物を貸す(____回) 物を借りる(____回)
 朝のあいさつ(____回) 昼のあいさつ(____回) 夕方のあいさつ(____回)
 電話をうける(____回) 電話をかける(____回)

306 9. 調査票

d [レストラン・喫茶店で]

目上の人と(____回) 目下の人と(____回) 同年輩の人と(____回)
 家族と(____回) 親しい人と(____回) あまり親しくない人と(____回)
 職場の人と(____回) 近所の人と(____回) サークルの友人と(____回)

e [電車やバスの中で]

目上の人と(____回) 目下の人と(____回) 同年輩の人と(____回)
 家族と(____回) 親しい人と(____回) あまり親しくない人と(____回)

f [その他の場所で]

買物で店の人と(____回) 連れと歩きながら(____回) 受付や窓口で(____回)
 医者や看護婦と(____回) 観光客と(____回) 立ち話(____回)
 人の家を訪ねて(____回) 酒を飲みながら(____回) 道などを教えた(____回)
 道などを聞いた(____回)

次の質問は職業をもつ人だけが答えて下さい。なお、学生はその次のhについて答えて下さい。

g [職場で] — 勤めをもっている人だけが答えて下さい。(自営業の人も含む)

雑談(____回) 私事の相談・打合せ(____回) 交渉・話し合い(____回)
 仕事上の相談・打合せ(____回) さしずした(____回) 質問(____回)
 さしずされた(____回) 会議(____回)
 友達・同僚(____回) 上役(____回) 部下(____回)
 会社のサークルで(____回) 初めての人(____回) 心安くない人(____回)
 商売上の客(____回) 個人的な客(____回)
 私用の電話をうける(____回) 公用の電話をうける(____回)
 私用の電話をかける(____回) 公用の電話をかける(____回)

h [学校で] — 学生だけが答えて下さい。

雑談(____回) 私事の相談・打合せ(____回) 交渉・話し合い(____回)
 勉強のための相談・打合せ(____回) さしずした(____回) 質問(____回)
 さしずされた(____回) クラス討議(____回)
 友達・同級生(____回) 先生(____回) 上級生(____回) 下級生(____回)
 クラブの先輩(____回) クラブの後輩(____回) 初めての人(____回)
 心安くない人(____回)

Ⅱ 次は、旅行についてお尋ねします。

(1) 観光などで旅行に出かけるのは好きですか。

1. 好き 2. どちらかといえば好き 3. どちらかといえば嫌い 4. 嫌い

(2) 1年間に何回ぐらい旅行に出かけますか。

私用の旅行(____回/年) 公用の旅行(出張など)(____回/年)

↳ 誰と行きますか。

1. ひとりで 2. 家族と 3. 友人と 4. 団体旅行で 5. その他(____)

(3) 東京へは年に何回ぐらい行きますか。(____回/年)

(4) 京都市へは、年に何回ぐらい行きますか。(____回/年)

(5) 東京には親戚^{ついで}がありますか。 1. ある 2. ない

(6) 旅先で、あなたは見知らぬ人に気軽に話しかけるほうですか。 1. はい 2. いいえ

(7) 旅先で、あなたは見知らぬ人に話しかけられたら気軽に応ずるほうですか。 1. はい 2. いいえ

Ⅲ ふだん話をするとき、ざっくばらんに話せる相手がいる一方、ことばづかいに注意をはらう相手もあると思います。次あげる相手や場面では、どの程度ことばづかいに注意しますか。その程度を下の選択肢から選んで()内にA～Eの記号を記入して下さい。

{ A 非常に気をつけて話す B かなり気をつけて話す C ある程度気をつけて話す }
 { D あまり気にせずに話す E 全然気にせずに話す }

a [家庭の中で]

目上の家族() 同年輩の家族() 目下の家族() 夫または妻()

目上の親戚() 同年輩の親戚() 目下の親戚() 親戚の子ども()

御用聞き() セールスマン() その他の訪問者()

b [店で買物や食事をするとき]

行きつけの店の人() 顔くらは知っている店員() 顔見知りでない店員()

高級レストラン() デパート() スーパー() 大衆食堂()

c [一般的に]

学生時代の恩師() 医者() 看護婦() 心安い人()

初対面の人() 乗り物で隣り合せた人() 待合室で隣り合せた人()

食堂や酒場で隣り合せた人() テレビやラジオに出演するとき()

会合などで発言するとき() 結婚式などのスピーチ() 観光客()

役所で書類をもらうとき() 心安くない人() 目上() 目下()

近所の親しい人() 近所のあまり親しくない人() 近所の子ども()

308 9. 調査票

N ふだん話をする時のことですが、あなたはどの程度標準語で話しますか。次のうちから適切なものを選んで○印をつけて下さい。

1. いつも標準語で話す 2. いつも方言で話す 3. 標準語と方言の混ざったことばで話す
4. 相手や場合によって、標準語で話したり方言で話したりする

(1) 上の問で1に○印をつけた方は、このページの(4)以降の質問にお答え下さい。

2～4に○印をつけた方にお尋ねします。あなたの話す方言は次のうちのどれですか。

1. 宮津弁 2. 京都弁 3. 関西弁 4. その他(具体的に _____)

(2) あなたの話す方言は、標準語と違うと思いますか、似ていると思いますか。

1. ほとんど違くない 2. 少し違う 3. かなり違う 4. 非常に違っている

(3) 次にあげる相手や場面では、どの程度方言を使いますか。

- | | | | |
|---------------------|--------|-------|---------------|
| イ. 家族同士で | 1. 標準語 | 2. 方言 | 3. 標準語と方言が混ざる |
| ロ. 近所の親しい人と | 1. 標準語 | 2. 方言 | 3. 標準語と方言が混ざる |
| ハ. 近所のあまり親しくない人と | 1. 標準語 | 2. 方言 | 3. 標準語と方言が混ざる |
| ニ. 宮津市の見知らぬ人と | 1. 標準語 | 2. 方言 | 3. 標準語と方言が混ざる |
| ホ. 京都市の見知らぬ人と | 1. 標準語 | 2. 方言 | 3. 標準語と方言が混ざる |
| ヘ. 宮津市で東京の人と | 1. 標準語 | 2. 方言 | 3. 標準語と方言が混ざる |
| ト. 宮津市で京都市の人と | 1. 標準語 | 2. 方言 | 3. 標準語と方言が混ざる |
| チ. 東京で東京の人と | 1. 標準語 | 2. 方言 | 3. 標準語と方言が混ざる |
| リ. 近所で店の人と | 1. 標準語 | 2. 方言 | 3. 標準語と方言が混ざる |
| ヌ. 町内会などで | 1. 標準語 | 2. 方言 | 3. 標準語と方言が混ざる |
| ル. 久しぶりに会った中学時代の友人と | 1. 標準語 | 2. 方言 | 3. 標準語と方言が混ざる |

(4) 「標準語で話す」と話の真実味が少ない」という人がいます。あなたはこの意見に賛成ですか。

1. 全く賛成 2. どちらかといえば賛成 3. どちらかといえば反対 4. 全く反対

(5) 「方言まるだしでも話が通じればよい」という人がいます。あなたはこの意見に賛成ですか。

1. 全く賛成 2. どちらかといえば賛成 3. どちらかといえば反対 4. 全く反対

(6) 「小中学校で、方言のよさを見直す教育をすべきだ」という人がいます。あなたはこの意見に賛成ですか。

1. 全く賛成 2. どちらかといえば賛成 3. どちらかといえば反対 4. 全く反対

V 下の各問に対して、それぞれの選択肢の中から適切なものを選び、番号に○印をつけて下さい。また、
_____の部分には適切な数字などを記入して下さい。

(1) 毎日平均してどのくらい新聞を読みますか。

1. 全く読まない 2. 10分未満 3. 10～20分 4. 20～30分
5. 30～60分 6. 1時間以上

(2) 毎日平均してどのくらいテレビを見ますか。

1. 全く見ない 2. 30分未満 3. 30～60分 4. 1～2時間 5. 2～3時間
6. 3～4時間 7. 4～5時間 8. 5時間以上

(3) この1か月間に本(教科書は除く)や雑誌は何冊読みましたか。

- イ. 本(単行本) _____ 冊 (書名 _____)
ロ. 月刊雑誌 _____ 冊 (誌名 _____)
ハ. 週刊誌 _____ 冊 (誌名 _____)

(4) 年賀ハガキや暑中見舞などを除いて、1か月平均、どのくらい手紙やハガキを書きますか。

- イ. 個人的な用件の手紙 _____ 通 ロ. 個人的な用件のハガキ _____ 通
ハ. 公的な用件の手紙 _____ 通 ハ. 公的な用件のハガキ _____ 通

(5) 友人に出す手紙とか日記を書くときに、方言が混ざることがあります。

1. ほとんど方言で書く場合がある 2. 方言がかなり混ざることがある
3. 方言と標準語がほぼ半々の場合がある 4. 方言がすこしは混ざることがある
5. 方言が混ざることとはまったくない

(6) 手紙やハガキその他の文章を書くとき、国語辞典や漢和字典をどのくらい利用しますか。

1. いつも利用する 2. しばしば利用する 3. 利用することが多い 4. たまに利用する
5. 全然利用しない 6. 辞書は持っていない

(7) 上の質問で1～4の選択肢のいずれかに○印をつけた人だけが答えて下さい。

それでは、辞書を利用するのはどんな場合ですか。該当するもの全てに○印をつけて下さい。

1. 漢字を確かめる 2. 送りかなを確かめる 3. ことばの意味を確かめる
4. 慣用句などを確かめる 5. そのことばが標準語かどうかを確かめる
6. その他(具体的に _____)

(8) 近所の人とおしゃべりをするのは好きですか。

1. 好き 2. どちらかといえば好き 3. どちらかといえば嫌い 4. 嫌い

(9) 集会や会議などに出席するのは好きですか。

1. 好き 2. どちらかといえば好き 3. どちらかといえば嫌い 4. 嫌い

(10) 待合室などで見知らぬ人に話しかけますか。

1. よく話しかける 2. ときどき話しかける 3. ほとんど話しかけない
4. 全く話しかけない

310 9. 調査票

01 他人と話をするとき、自分のことばが気になるほうですか。

1. 非常に気になる 2. 少し気になる 3. あまり気にならない 4. 全然気にならない

02 人前で話ができるほうですか。

1. できる 2. どちらかといえば、できる 3. どちらかといえば、できない
4. できない

03 あなたは、ご近所の方との程度のおつき合いがありますか。

1. あいさつをかわす程度の人だけ 2. 世間話をする程度の人だけ
3. 親しくつき合っている人が数人いる 4. 親しくつきあっている人がかなりいる
5. ほとんどつき合いがない

04 ひと口にいて、最近の日本語は乱れていると思いますか。

1. 非常に乱れている 2. 多少乱れている 3. あまり乱れていない
4. 全く乱れていない

ご協力ありがとうございました。このアンケートにご記入下さったのはいつですか。

1月 日の 朝・昼・夕方・夜 ころ

なお、このアンケート票は調査員がお伺いしましたときにお渡し下さい。

国立国語研究所

言語生活調査

特定(84 豊岡)

66

日常生活の中でふだん使っておられることばやことばに対するお考えをお尋ねします。むずかしく考えないでお答え下さい。

I あなたは、きのう、どんなことをしましたか。つきの中から思い出して番号に○印をつけて下さい。

いくつつけてもかまいません。

〔家で話をしましたか〕

- ☐ 相談 ☐ 言い争い ☐ 家人に注意やことごと ☐ 用事の話 ☐ さしずした ☐ さしずされた
☐ 御用聞き・集金人・セールスマン等と応対 ☐ その他お客と応対
☐ 朝食ときの雑談 ☐ 昼食ときの雑談 ☐ 夕食ときの雑談 ☐ 夕食後のお茶や夜食ときの雑談
☐ 食事とき以外の雑談
☐ 配偶者との雑談 ☐ 親との雑談 ☐ 自分の子どもとの雑談
☐ 電話をうける ☐ 電話をかける

〔近所の親しい人と話をしましたか〕

- ☐ 雑談 ☐ 知人などのうわさ話 ☐ 私事の相談・打合せ ☐ 町内会・自治会などの連絡
☐ 交渉・話合い
☐ 相手の家で話す ☐ 自分の家で話す ☐ 路上その他で話す
☐ 物を貸す ☐ 物を借りる
☐ 朝のあいさつ ☐ 昼のあいさつ ☐ 夕方のあいさつ
☐ 電話をうける ☐ 電話をかける

〔近所のあまり親しくない人と話をしましたか〕

- ☐ 雑談 ☐ 知人などのうわさ話 ☐ 私事の相談・打合せ ☐ 町内会・自治会などの連絡
☐ 交渉・話合い
☐ 物を貸す ☐ 物を借りる
☐ 朝のあいさつ ☐ 昼のあいさつ ☐ 夕方のあいさつ
☐ 電話をうける ☐ 電話をかける

〔職場や学校や会合で話をしましたか〕

- ☐ 先生や上役の人と ☐ 先輩や上級生と ☐ 友だちや同僚と ☐ 部下や下級生と ☐ 客と
☐ あまり心安くない人と ☐ はじめての人と ☐ サークル・クラブの人と
☐ 質問 ☐ 私事の相談・打合せ ☐ 公事の相談・打合せ ☐ 交渉・話合い ☐ 会議 ☐ さしずした
☐ さしずされた ☐ 雑談 ☐ 電話をうける ☐ 電話をかける

〔レストラン・喫茶店で話をしましたか〕

- ☐ 目上の人と ☐ 目下の人と ☐ 同年輩の人と ☐ 家族と ☐ 親しい人と ☐ あまり親しくない人と
☐ 職場の人と ☐ 近所の人と ☐ サークルの友人と

312 9. 調査票

〔電車やバスの中で話しましたか〕

1 目上の人と 2 目下の人と 3 同年輩の人と 4 家族と 5 親しい人と 6 あまり親しくない人と

〔その他の場所で話しましたか〕

1 買物で店の人と 2 迷れと歩きながら 3 受付や窓口で 4 待合室で 5 医者や看護婦と
6 観光客と 7 大勢の人の前で
8 道などを教えた 9 道などを聞いた
10 立ち話 11 人の家を訪ねて 12 酒を飲みながら

〔聞きましたか〕

1 ラジオ 2 テレビ 3 宣伝カーの放送 4 その他の街頭放送 5 外国語
6 演説 7 講義・訓話・説教 8 駅などの案内・お知らせ 9 放送のニュース

〔読みましたか〕

1 新聞 2 週刊誌 3 その他の雑誌 4 教科書・参考書 5 辞書 6 外国語 7 小説 8 漫画
9 その他の本

〔書きましたか〕

1 日記 2 はがき 3 手紙 4 ポスター・掲示板 5 職場での書き物 6 署名 7 その他の文章
8 伝票 9 帳簿 10 家計簿 11 メモ 12 ノート 13 届、申込みその他の書類

- Ⅱ ふだん話をするとき、ざっくばらんに話せる相手がいる一方、ことばづかいに注意をはらう相手もあると思います。次にあげる相手や場面では、どの程度ことばづかいに注意しますか。その程度を下の選択肢から選んで()内にA～Eの記号を記入して下さい。

(A 非常に気をつけて話す B かなり気をつけて話す C ある程度気をつけて話す)
 (D あまり気にせずに話す E 全然気にせずに話す)

a 〔家庭の中で〕

目上の家族() 同年輩の家族() 目下の家族() 夫または妻()
目上の親戚() 同年輩の親戚() 目下の親戚() 親戚の子ども()
御用聞き() セールスマン() その他の訪問者()

b 〔店で買物や食事をするとき〕

行きつけの店の人() 顔くらいは知っている店員() 顔見知りでない店員()
高級レストラン() デパート() スーパー() 大衆食堂()

c 〔一般的に〕

学生時代の恩師() 医者() 看護婦() 心安い人()
初対面の人() 乗り物で隣り合せた人() 待合室で隣り合せた人()
食堂や酒場で隣り合せた人() テレビやラジオに出演するとき()
会合などで発言するとき() 結婚式などのスピーチ() 観光客()
役所で書類をもらうとき() 心安くない人() 目上() 目下()
近所の親しい人() 近所のあまり親しくない人() 近所の子ども()

Ⅲ 下の各問に対して、それぞれの選択肢の中から適切なものを選び、番号に○印をつけて下さい。また、
 _____の部分には適切な数字などを記入して下さい。

(1) 毎日平均してどのくらい新聞を読みますか。

- 1 全く読まない 2 10分未満 3 10～20分 4 20～30分
 5 30～60分 6 1時間以上

(2) 毎日平均してどのくらいテレビを見ますか。

- 1 全く見ない 2 30分未満 3 30～60分 4 1～2時間 5 2～3時間
 6 3～4時間 7 4～5時間 8 5時間以上

(3) 観光などで旅行に出かけるのは好きですか。

- 1 好き 2 どちらかといえば好き 3 どちらかといえば嫌い 4 嫌い

(4) 1年間に何回くらい旅行に出かけますか。

私用の旅行(____回/年) 公用の旅行(出張など)(____回/年)

↳ 誰と行きますか。

- 1 ひとりで 2 家族と 3 友人と 4 団体旅行で 5 その他(_____)

(5) 東京へは年に何回くらい行きますか。(____回/年)

(6) 京都市へは、年に何回くらい行きますか。(____回/年)

(7) 姫路には、年に何回くらい行きますか。(____回/年)

(8) 東京には親戚がありますか。 1 ある 2 ない

(9) 旅先で、あなたは見知らぬ人に気軽に話しかけるほうですか。 1 はい 2 いいえ

(10) 旅先で、あなたは見知らぬ人に話しかけられたら気軽に応ずるほうですか。 1 はい 2 いいえ

(11) 「標準語で話す」と話の真実味が少ない」という人がいます。あなたはこの意見に賛成ですか。

- 1 全く賛成 2 どちらかといえば賛成 3 どちらかといえば反対 4 全く反対

(12) 「方言まるだしても話が通じればよい」という人がいます。あなたはこの意見に賛成ですか。

- 1 全く賛成 2 どちらかといえば賛成 3 どちらかといえば反対 4 全く反対

(13) 「小中学校で、方言のよさを見直す教育をすべきだ」という人がいます。この意見に賛成ですか。

- 1 全く賛成 2 どちらかといえば賛成 3 どちらかといえば反対 4 全く反対

(14) 友人に出す手紙とか日記を書くときに、方言が混ざることがありますか。

- 1 ほとんど方言で書くことが多い 2 方言がかなり混ざることがある
 3 方言と標準語がほぼ半々のことがある 4 方言がすこしは混ざることがある
 5 方言が混ざることばまったくない

(15) 近所の人とおしゃべりをするのは好きですか。

- 1 好き 2 どちらかといえば好き 3 どちらかといえば嫌い 4 嫌い

(16) 集会や会議などに出席するのは好きですか。

- 1 好き 2 どちらかといえば好き 3 どちらかといえば嫌い 4 嫌い

(17) 待合室などで見知らぬ人に話しかけますか。

- 1 よく話しかける 2 ときどき話しかける 3 ほとんど話しかけない
 4 全く話しかけない

314 9. 調査票

- ⑧ 他人と話をするとき、自分のことばが気になるほうですか。
- 1 非常に気になる 2 少し気になる 3 あまり気にならない 4 全然気にならない
- ⑨ 人前で話ができるほうですか。
- 1 できる 2 どちらかといえば、できる 3 どちらかといえば、できない
4 できない
- ⑩ あなたは、ご近所の方との程度のおつき合いがありますか。
- 1 あいさつをかわす程度の人だけ 2 世間話をする程度の人だけ
3 親しくつき合っている人が数人いる 4 親しくつきあっている人がかなりいる
5 ほとんどつき合いがない
- ⑪ ひと口にいて、最近の日本語は乱れていると思いますか。
- 1 非常に乱れている 2 多少乱れている 3 あまり乱れていない
4 全く乱れていない

Ⅳ 年齢や数をあらわすことばについてお尋ねします。

- (1) 「数回」といったら大体何回くらいのことだと思いますか。
- 1 1～2回 2 2～3回 3 3～4回 4 4～5回
5 5～6回 6 6～7回 7 7～8回 8 その他(____～____回)
- (2) では、「数日後」といったら何日後のことですか。
- 1 1～2日後 2 2～3日後 3 3～4日後 4 4～5日後
5 5～6日後 6 6～7日後 7 7～8日後 8 その他(____～____日後)
- (3) 下にあげたそれぞれの人はおよそ何歳くらいの人だと思いますか。具体的な数字を記入して下さい。
- | | |
|-------------------|-------------------|
| 青年(____～____歳くらい) | 熟年(____～____歳くらい) |
| 老年(____～____歳くらい) | 中年(____～____歳くらい) |
| 少年(____～____歳くらい) | 壮年(____～____歳くらい) |
| 老人(____～____歳くらい) | 若者(____～____歳くらい) |

Ⅴ ふだん話をするとき、あなたはどの程度標準語で話しますか。

- 1 いつも標準語で話す 2 いつも方言で話す 3 標準語と方言とが混ざる
4 相手や場合によって、標準語で話したり方言で話したりする
- (1) 上の問で、2～4に○印をつけた方にお尋ねします。あなたの話す方言は次のうちどれですか。
(1に○印をつけた方は、5ページの質問に進んで下さい)
- 1 豊岡弁 2 但馬弁 3 関西弁 4 その他(具体的に____)
- (2) あなたの話す方言は、標準語と違うと思いますか、似ていると思いますか。
- 1 ほとんど違いがない 2 少し違う 3 かなり違う 4 非常に違っている

Ⅴ 郵便のあて名や文章についてうかがいます。

1. 県庁や市役所などから郵便が届いたとします。なかみは、役所がひらく「文化講演会」などの案内書です。

- (1) こういう郵便のあて名につける敬称は、「様(さま)」と「殿(どの)」の2種類がよく使われますが、あなたが受け取るとして、どちらを使ってほしいですか? 使ってほしいほうに○印をつけて下さい。

1. 様 (例:加藤太郎様, カトウタロウサマ……)

2. 殿 (例:加藤太郎殿, カトウタロウドノ……)

- (2) この種類の案内の文章として、次の二つのどちらがお好きかを選んでください。内容は同じですが、下線部分がある場合(1)とない場合(2)を比べて下さい。

1. 「○月○日に文化講演会を開催しますのでお知らせいたします。みなさんおそろいでお出かけ下さいますようご案内申し上げます。」

2. 「○月○日に文化講演会を開催します。みなさんおそろいでお出かけ下さい。」

2. あなたと同年配の知り合いから、転居したことを知らせる印刷したハガキが届きました。

- (1) そのハガキのあて名として「様」と「殿」のどちらを使ってほしいですか? 相手(転居した人)の性別を考えながら、使ってほしいほうに○印をつけて下さい。

転居した人が 男性 の場合 — [1. 様 2. 殿]

転居した人が 女性 の場合 — [1. 様 2. 殿]

- (2) 逆に、もしあなた自身が転居して通知を出すとしたら、どちらを使うでしょうか?

相手が 男性 の場合 — [1. 様 2. 殿]

相手が 女性 の場合 — [1. 様 2. 殿]

- (3) 転居通知の文章として、次の二つのどちらがお好きですか? 下線部分がある場合(1)とない場合(2)とを比べて選んで下さい。

1. 「拝啓……このたび、左記の住所へ転居いたしましたのでお知らせ申し上げます。当地へお越しのときには、どうぞお気軽にお立寄り下さいませようお願い申し上げます(お待ち申上げております)。……敬具」

2. 「拝啓……このたび、左記の住所へ転居いたしました。当地へお越しのときには、どうぞお気軽にお立寄り下さい。……敬具」

ご協力ありがとうございました。このアンケートにご記入下さったのはいつですか。

7月 日(曜日)の 朝・昼・夕方・夜 ころ

なお、このアンケート票は調査員がお伺いしましたときにお渡し下さい。

10. まとめと今後の課題

本報告書は、「日本人の言語行動の類型」という課題名のもとに文部省科学研究費補助金（特定研究 1）を受けて実施した調査研究のうちから、豊中・宮津・豊岡の 3 都市の市民を対象とした調査の結果をまとめたものである。

この調査は、本書の表題である「場面と場面意識」を中心テーマとしたものである。そこでは、言語行動場面そのものへの接触頻度（4.）、場面への接触態度意識（3.と 6.の一部）、場面における共通語と方言使い分け意識（5.）、各場面での言語形式の選択（2.と 7.の一部）など、場面に関する諸問題を各種の観点から取り上げた。（他に、地域言語の実態をみるための、語彙・文法項目、またアクセント項目に関する調査も含まれている。）

この調査で得られた結果については、章ごとにそれぞれ論じてきたので、ここでそれらをいちいち繰り返すことは避けて、「場面」の問題に直接関係する事項に限定して若干の整理をすることとしよう。

10.1. 場面について

場面对する結果は、上記に掲げた観点ごとに異なる面があり、また調査地域の違いによる差異もみられているが、共通点も少なくない。そこで、個々の違いには目をつぶって、場面要素の共通項を示しておこう。

(1) 上下関係

これには、年上一年下の年齢関係、上司一部下などの地位関係、目上一目下といった身分関係など、さまざまな要因（軸）が含まれている。それぞれの軸において若干の相違はみられるが、概観的にいえば、本人より上の関係にある人に対する言語行動（意識）と、同等または下の人に対するものとの間に非常

に大きな断層が認められている。なお、同等と下の者に対する意識は、本人の年齢や性別などによって様相を異にしている面が大きいようである。

ちなみに、地域社会においては校長や住職など特定の職業の人が高く待遇されることがあるが、これもこの枠組みの一種とみなすことができよう。

(2) 性別関係

他の条件が等しいなら、一般に異性に対するほうが同性相手よりも丁寧な言語行動を取る傾向がみられる。ただし、相手が目上であるような場合では性別の要因による差異はきわめて小さいこと、また妻に対する夫の行動（意識）など、ケースバイケースといった側面が強く、他の要因ほどは大きく関与しないとも考えられる。

(3) 親疎関係

相手と親しいかそうでないかという親疎関係の軸、とくにミウチとして遇するか否かの影響はきわめて大きいといえる。これと(1)の上下関係の要因とのどちらが強く働くかは、本人の性別・位置あるいは特定の言語行動を営む状況的側面によって左右される面があり、一概にはいえない。なお、親疎の区別は相手が子どもの場合はほとんど無関係といえる。

(4) 空間的距離

空間的距離には種々の現象が含まれるが、ここでは、地元の人と話すかよその土地の人と話すかといったことを意味することとする。一般的にいえば、家庭より近隣、それよりも離れた市内、といった具合に、やはり空間的な隔たりが大きくなるにつれて「よそいき」の言語行動が増加する傾向がある。しかし、当然のことながら言語行動の距離と空間的な距離とが正比例するわけではなく、一定以上離れた場合には「よそ社会」として一括してくられることになる。ただし、その境界線がどこにあるかは、その人の住む環境や個人的要素によって多少の違いがある。

(5) 場所・環境

公の席での行動と私的な場での行動とでは、当然ながら前者のほうが緊張を強いられて丁寧な言語行動が実現される。この種のものとしては、高級レストランと大衆食堂といった場所の違い、相手の人数といった要素なども関係して

いる。上記の空間的距離の問題もここに含めてみるができる。

(6) 話題・用件

雑談をするか政治向きの話をするかといった話題、また依頼・交渉といったことによって言語行動に影響がみられる。

以上は、この調査で直接・間接に取り上げた場面要素の一部である。これらの多くの面は、従来からの指摘の確認にとどまったきらいがなくもない。しかし、各章で記された分析結果、とりわけ属性差・地域差等の分析を通じて場面要素の関与の程度が明らかになった部分も少なくない。

なお、本調査は場面について多角的な方面からアプローチしたわけであるが、結果として章ごとの分析に終始してしまった。章ごとの枠を超えた各種のクロス分析を行い、場面間の関連性を浮彫りにさせるようにすべきであったと反省している。また、各人の場面把握の類型に迫るための解析を行うことも必要であったと考えている。これらの点については、できるだけ近い機会に資料の再整理を行い、さらに深い考察を加えたいと思っている。

10.2. 調査法について

本研究には、場面調査法の検討を行おうという目的も一部含まれている。これについて簡単に記しておく。

(1) 「前日行動チェック方式」と「平均頻度回答方式」

人々が一定の時間をどのように消費したかを調べることを「タイム・バゼット」という。その調査法としては、一般に「日記法」「昨日面接法」「観察法」の3種が存在しており、とりわけ被調査者の前日の行動を尋ねて記録する「昨日面接法」が多用されている。ここでは人々が日常各場面に接触する度合いを測定するための方法として、「昨日面接法」の変形としての2通りの方法を試みた。すなわち、豊岡で実施した「前日行動チェック方式」と、豊中・宮津で行った「(1週間の)平均頻度回答方式」とである。両調査法を比較検討した

ところ、両者には高い相関関係が認められた。このことから、被調査者の負担が比較的軽い「前日行動チェック方式」のほうが調査法として優れていると目される。(4.8. 参照。)

(2) 自記式調査と面接調査

同じ内容のことを尋ねるにしても、被調査者が自ら読んで答える自記式のアンケート調査と調査員が面談して行う面接調査では、結果の数値にいくらかの差が生じるケースが少なからずみられる。本調査でも、調査地点によって調査法を変えて実施してみたものがある。すなわち、場面による方言と標準語の使い分け意識を尋ねる項目において、豊中・宮津では自記式調査の中で、豊岡では面接調査の中で質問を行ってみた。都市の性格・規模等からみて、宮津と豊岡とはこの項目に関してはほぼ類似していると考えたからである。その結果、予想通り、調査法に基づくとみられる差異が生じているようである。しかし、この資料だけでは、もともと両地域での事情が異なっていたからだという疑いも残されている。今後は、同質の2集団を構成するなどした上で、改めて比較調査を行う必要があろう。(5.1.3 参照。)

以上の他にも、場面提示順序、関連項目の調査票での配置など、調査法上での問題についていくつかの試みを行ったが、いずれも小規模なものであったため、明確な結論を得ることはできなかった。

10.3. 調査の反省

この報告書を終えるにあたって、上記に述べたこと以外の、この調査に対する反省点をあげておく。

(1) 本調査では、豊中・宮津および豊岡の3都市において、サンプリングによる比較的多数の被調査者を対象とする調査を実施した。これは、それで大きな意味があったと思っている。しかし、場面については未だに未解決の問題が多々あることを考慮すると、問題点を少しずつ吟味するための小規模調査の積

み上げ方式もあったかと思われる。

(2) 場面に関する調査法についていえば、この調査では従来方式に準拠する面が多かった。しかし今振り返ってみると、より新しい方法をもっと積極的に摸索する必要があったと思っている。そのためには、多少不満足ではあったとしても一定の理論モデルを強く打ち出すべきであったかも知れない。

(3) 調査項目の中には、各地域社会の言語状況などをみようとしたためもあって、場面とは直接関係のないものがある程度含まれている。しかし、この種のものも場面と何らかの形で関係づけるような形で調査票の中に組み込むべきであったと思う。少なくとも、被調査者の場面意識等との関連での分析を試みってみることは必要であったといえる。

(4) 本書の執筆には合計7名の者があたった。この人数は、この種のものとしては多すぎるとはいえないが、諸般の事情もあって、結果として論文集のような記述となってしまった。これはある程度しかたのないことではあるが、少なくとも各章の調整をもっとはかるべきであったろう。

(5) いずれにしろ、この調査の結果を再吟味した上で、場面研究の次のステップへ進むことを考えなければならないであろう。

国立国語研究所報告 102

場面と場面意識

平成 2 年 3 月

国 立 国 語 研 究 所

東京都北区西が丘三丁目 9 番 14 号

電話 (03) 900-3 1 1 1 (代表)

© The National Language Research Institute 1990
Printed in Japan

本 書 の 市 販 品 発 行 所

〒 101 東京都千代田区三崎町二丁目 22 番 14 号

(03) 230-9 4 1 2

株式会社 三 省 堂

国立国語研究所の《社会言語学研究》報告書概要

○八丈島の言語調査（報告 1, 1950 年）

創立後、最初の共通語化の調査。共通語化の程度は共通語使用場面の量に比例することが示されている。

○言語生活の実態（報告 2, 1951 年）

福島県白河市で行った共通語化の調査。日本での社会言語学的調査研究の先駆として注目されている。学歴、生育地、両親の出身地の 3 要因が共通語化に強く関与する等の結果が得られた。

○地域社会の言語生活（報告 5, 1953 年。報告 52, 1974 年）

山形県鶴岡市における約 20 年を隔てた 2 度の共通語化調査。2 回の調査から、共通語化の要因は時勢により異なること、共通語化には 4 つの段階が考えられる等が明らかになった。

○敬語と敬語意識（報告 11, 1957 年。報告 77, 1983 年）

上記同様、同一地域社会（愛知県岡崎市）で約 20 年間を隔てて行った調査。敬語使用の判断基準は 2 回の調査でほとんど変わらなかった。使い分けに関しては、現在の方がうまくなった等のことが明らかになった。

○共通語化の過程（報告 27, 1965 年）

北海道入植者を対象に行われた世代差の調査。語彙は 1・2 世間で、文法や音韻は 2・3 世間で、共通語化の程度に落差がある等が指摘された。

○待遇表現の実態（報告 41, 1971 年）

島根県松江市の 1 家庭での 24 時間録音調査に基づく。日常会話における待遇表現の表れ方には、会話の種類・機能・話題が関与することを、話しことば資料の電子計算機処理を通じて解明する。

○言語使用の変遷(1)（報告 53, 1974 年）

福島県北部の農・山村での調査。年齢と学歴の 2 要因が共通語化に強く関与し、音声・語彙は共通語化しやすいが、文法は比較的地方形式が残りやすい等の結果が得られている。

○大都市の言語生活—分析編—（報告 70-1, 1981 年）

東京・大阪での大規模な調査。調査は、語彙・文法・アクセント・敬語などの言語的側面のほか、住民意識・ふるさと意識など多岐にわたる。「見ラレル」より「見レル」という語形が優勢であることをはじめとして、大都市住民の言語状況について多くの知見を示す。

○大都市の言語生活—資料編—（報告 70-2, 1981 年）

上記の「分析編」では繁雑を避けて示さなかった各種統計結果を網羅する。

○企業の中の敬語（報告 73, 1982 年）

日立製作所・日鐵建材という一般企業の従業員各層が、日常の勤務生活の中で敬語をどう意識し、どう使っているかを解明しようとした調査。敬語行動に関わる要因を、職階を軸としつつ在社歴・職種など種々の観点から分析する。

○言語行動における日独比較（報告 80, 1984 年）

日本とドイツ、それに在日外国人の三者間における言語行動の相違について、対照言語学的に比較分析を試みた報告書。さまざまな生活場面における、それぞれの違いを実態調査によって明らかにしていく。

○方言の諸相（報告 84, 1985 年）

全国的な方言地図である『日本言語地図』（国立国語研究所編・全 6 巻）の記載内容をめぐって、年齢差・場面差などの社会言語学的観点や調査法の点から検証を加えた 8 種類の調査研究の報告。

○社会変化と敬語行動の標準（報告 86, 1986 年）

民主化・都市化・産業化という戦後日本の社会変化が、国民の敬語意識や敬語使用にどのような影響を与えたかについて、統計資料や秋田県・富山県での臨地調査に基づいて実証的に検討する。

○談話行動の諸相（報告 92, 1987 年）

座談場面におけるコミュニケーション要素としての言語と非言語との関連性を総合的に研究するための方法論の確立を目指した探索的・実験的調査報告。理論編・分析編・資料編の 3 部で構成。